毎月一回

女學世界



第六巻
第十五號

博文館發行

高等化粧用

美顔水

美顔水は天下唯一の美白光艶剤なり……

化粧用美顔水は品質最もよろしく方今滿天下の貴婦人令孃佳人爭ふて之を用ひ賞賛の聲囂すし

色を白くしきめをこまかに光艶をだしうつくしくなる殊に化粧に用ゆればおしろい意のまゝにのりむらにならず常に用ふれば…花の顔せ雪の肌となり眞に玉を欺く美しき顔となるべし

化粧用美顔水は最新の材料を以て製せり故に從來の化粧水とは全く其性質を異にす論より證據實地に用ゆれば如何に優等品なるかを知り玉ふべし

●本品御購求の節は化粧用美顔水と御指名を乞ふ

東京市内は勿論日本全國各地いたる處有名なる小間物店に販賣す

紀州粉河

桃谷順天館


越
季節向き新柄物漏れなく取揃へ店内一面に陳列致し置候間御來觀被成下候樣奉希上候
地方よりの御註文は御書面にて御申付被下度く即日小包郵便を以て御届け可申上候尚ほ註文御案内書は御一報次第呈上可仕候
電話本局
五二五番
一二一七番
一八五六番
一八六〇番
二三三二番
三越呉服店
東京日本橋區駿河町

女學世界 目次

第六巻 第拾五號

文藝

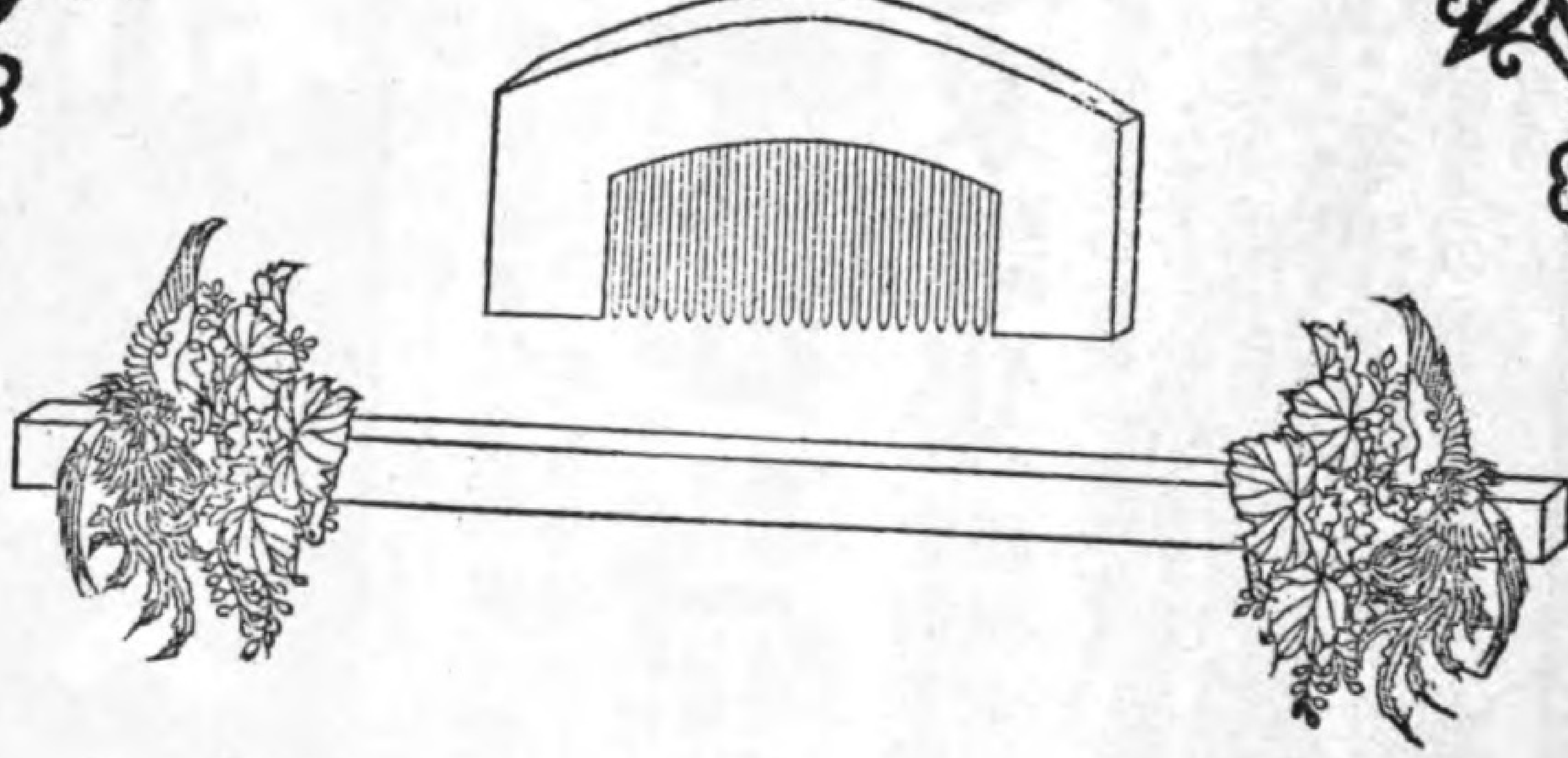
科學

詞藻

小說

口繪

寫眞版



儀式用鼈甲御櫛笄

四方張製兩花付一組十二圓より廿五圓迄
本鼈甲製兩花付一組五十圓より以上各種

東京市京橋區南傳馬町二丁目

貴金屬宝石
美術携帯品
婦人粧飾品
商 大西白牡丹

特 電話本局三十番

令嬢向御祝ひざし

並に箱世古るい種々取揃候間十一月一日
より階上へ陳列致候間御高覧の程願上候

女(いの一)

女(いの二)

女(いの三)

アメミルク

AMEMILK

最良煉乳

普通の煉乳より稠度濃厚なり

▲本品は醫科大學教授藥學博士下山順一郎醫學博士高橋順太郎兩先生の指導製品なり

▲本品は乳の蛋白性滋養成分と水飴の抱水炭素とを抱合せる無比の理想的煉乳なり

▲本品は普通コンデンスミルクの如く多量の砂糖を含有せず又澱を粉混せざる稠度濃厚の最良煉乳にして防腐殺菌せるものなり

▲從つて本品の滋養價値は價の低きを競ふ外國製煉乳の比にあらず本品は各地有名藥舖及食料品店にあり

▲發賣元　東京市南茅場町　三共商店藥品部

ヘモグロビン錠

HAEMOGLOBIN

補血新劑

▲肺病患者!!

▲貧血病者!!

▲適應症　本劑は肺病、貧血、神經衰弱の恢復期に最も賞用す用量は一回四錠以上一日三回每食二時間後に服用すべし本劑は百分中鐵〇、四二を含有するが故に茶と共に服用すべからず

▲注意　本劑は醫科大學に於て試驗の結果ヘモグロビン製劑中最優等品なりと認定せられたるものなり各瓶百錠入として各地有名藥舖にて販賣す必ず弊店名義のヘモグロビン錠と乞御指定

▲發賣元　東京市南茅場町　三共商店藥品部

（いの四）

落葉



蘭香女史筆

伯爵東久世通禧卿監修
三省堂編輯所編纂

全一册

聖德餘聞

橫六寸三分縱八寸七分
紙數　三百餘頁

（洋裝）舶來紙●背革クロース綴金マーブル付●ボール函入
金貳圓七拾錢（郵税二十錢）

（和裝）美濃判●絹表紙 大和綴●布張帙入
金參圓五拾錢（郵税十五錢）

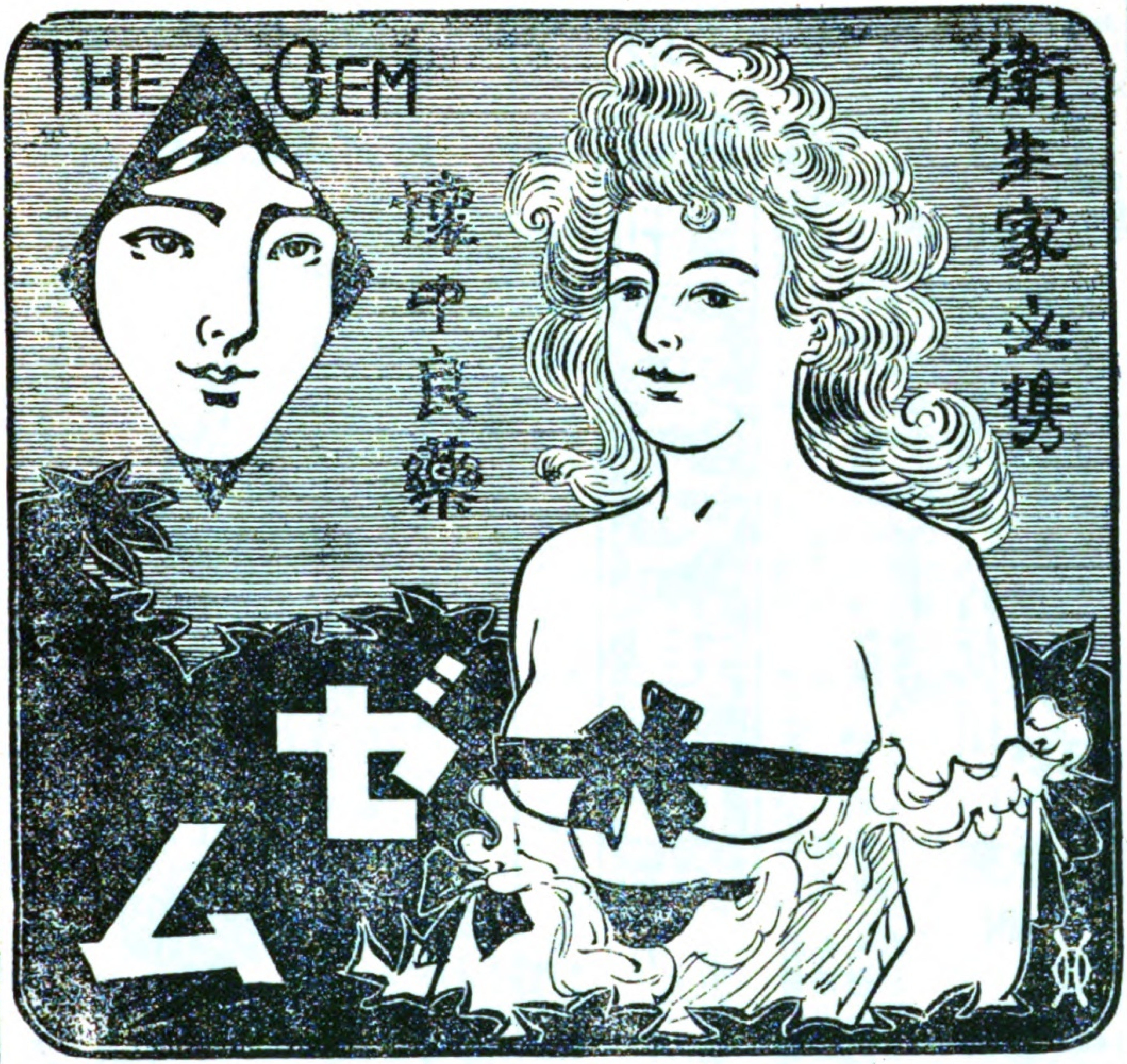
之を古今に徴し、之を東西に求むるも、允文允武なる我
今上天皇陛下のごとき偉大なる君主はおはさざるなり。その大業は宇内を蓋ひ、その洪德は炳として日月の如し。天下誰か之を仰がざらん。しかれども九重の御事は、雲いと深くして、世人の知らざる聖德の餘瀝、なほ下流に及ばざるもの少からず、志あるもの、そを傳へ奉らずして可ならんや。弊堂深く思ふ所あり、畏きあたりの御事に通せる人々に圖り、かの七卿の一人たりし東久世伯に請うてその監修の下に、聖德のはしぐ〵漏れ承る事を叙し奉り幷に
皇后陛下、皇太子及同妃兩殿下、各內親王殿下の御事をも併錄し、題して「聖德餘聞」といふ。輯むる所固より洪德の萬一に過ぎざるも、出所皆正確にして、寸毫を苟もせず。行文亦流麗にして莊重、啻に今世の珍たるのみならず、之を後昆に傳へ、以て明治聖代の史編を補ふに足るべし。切に望むらくは、各學校、協會、其他の團體に在りては、須らく
御眞影と共に、此書を安置し、祝祭日には卷中の一節を講話し奉りて、忠君の情操を興起せしめ、又個人に在りては一卷を其家に藏め、よりく〵家族と共に之を繙きて、聖恩の有りがたきを仰ぐの資料に供せられんことを。今や梓漸く成り弊堂之を刊行するの光榮を辱うす。乃ち實費を以て廣くこれを天下に頒つ。願くは大方の君子、弊堂の微意を察し、好評を賜はらんことを。

發行所（東京市神田區裏神保町一番地 電話本局七二四 本局三三一六）（郵便振替貯金口座第壹五九七番）三省堂書店

女（ろの一）

女（ろの二）

女(ろの三)



ゼム一粒の馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用て終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣く萬人に愛用せらる

ゼム二粒は煙草の味を美にし心神を爽快にし疲勞を減じ息切れを防ぎ渴を醫す故にゼムは外遊學生に愛用せらる

ゼム三粒は音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる

ゼム五粒を食前食後に用ふれば食慾を増進し消化を助くる故にゼムは衛生を重んずる士の常用劑として愛用せらる

ゼム十粒は異境に於ける風土病疾癘食當り水傷りを治して神効あり舟車の醉を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及び旅行家の必携劑として愛用せらる

ゼム定價	
七十五粒入	十錢
百六十粒入	廿錢
四百卅粒入	五十錢
九百粒入	一圓
容器入ゼム	二十錢

日本一手發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎

支舖 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會

其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

黄菊白菊



杉浦朝武筆

本書は斯道の大家として世に識られたる小出先生が一世一代の事業として筆を採られたるものにして啻に材料の豊富なるのみならず其説明の親切にして正鵠なる斯道の參考書としては古今無比の良書であります

●豫約申込期限は十二月二十日限りの事

女子裁縫高等學院校長小出先生著

和洋裁縫大全

本編貳拾七册
續編參册
計參拾册

●豫約金は十二ケ月間に割附拂の事

●豫約方法幷に主要項目入用の向は申込次第進呈す

豫約申込所
東京神田 東京堂
大阪久寶寺 前川書店
廣島鹽屋町 積善館
仙臺大町 木文書店
京都佛光寺 東枝律書房
金澤片町 宇都宮書店
福島本町 博向堂
東京神田 久保田商店

發行所
豫約申込所 女子裁縫高等學院出版部
東京市青山原宿貳百九番地(振替貯金口座番號壹貳九五)

女(其の一)

作文練習唯一雜誌

低廉無比

每號　皇太子妃殿下賜上覽

女子文壇

毎月一日發行（外に増刊四回）壹册大判百三十頁 挿畫數十個入

毎號三宅氏水彩畫密刷と美麗繪端書、寫眞版口繪挿入

定價 一册金拾錢〇八册（増刊共半年分）前金七拾六錢 〇郵税凡て不要

○二卷第拾四號 十一月一日發兌

本號には新年以後の大懸賞品の豫告あり就て精讀あれ

四十年一月の新年號分の投稿〆切は十一月二十日迄です

菊花月

女子文壇定期増刊

十一月十五日發行

例號に掲載漏の懸賞作文は皆「菊花月」に滿載

發兌元 東京京橋區大鋸町十一 女子文壇社 ●賣捌全國雜誌店

（郵便振替貯金口座は第壹七貳九番です）

（はの二）

新發明

声の出るくすり

美音錠

將校軍人 教師 僧侶 演舌家 音曲家 謡曲家

定價 十錢 廿錢 五十錢 壹圓

右は從來內藤家の製劑に有之所今回弊店に讓受候間猶引續御川命給り度此段奉希望候定價廿錢以上のものへは引續御披露のため極めて美麗なる丸藥及楊枝入を封入進呈仕度各地有名藥店に差出し有之候得共若し品切の場合には直接御註文被下度全國は無遞送料にて御郵送申上候

東京日本橋區兩國米澤町二丁目一番地
稀翁丸本舗
萬珠堂藥局
美音錠發賣所 吉田安五郎

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇藥發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井村 川名助次郎

眼科專門

診察時間 午前七時より十二時 午後三時より五時迄

神田區連雀町十八番地郵便局前

ドクトル 宇良田唯子

▲毎月第一日ハ診料藥價共無料

近頃本館專賣藥の高評を羨み類名無効の僞藥販賣するもの有り購客館名に御注意あれ

色を白くする藥

男女成美劑

此藥はアンダルソン大博士の秘方劑なれば効能の確實なる事世上雜多の賣藥化粧劑の類にあらず

●定價 小瓶三十錢 大瓶五十錢 特別製壹圓

毛のはへる藥

多年實驗の生毛劑にして特効驚くべき奇藥なり

定價 小瓶 壹圓 大瓶 壹圓五十錢 濃厚 二圓五十錢 特別濃厚 三圓半

子宮神藥 女宮丸

●ちの道●産前産後●ヒステリー●子宮痙攣●寸白●しらち●ながち●つわり●のぼせ●づつう●めまひ●きのふさぎ●顔色あしく手足だるく食すゝまざる等に用ひて奇効あり特に身體强健となりて子なき婦人に一日も缺くべからざる特効藥なり

定價 七日分五十五錢 ●十四日分壹圓 ●卅日分貳圓 ●五十日分參圓 ●百日分五圓半 ●小包送料拾錢

美容散 やせる藥

●定價 (一週)七十錢 (三週)二圓 (五週)三圓廿錢

血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總て肥胖質の人用ひて害なく身體美容となる保證藥なり

專賣 東京本鄉區本鄉三丁目 新宮藥館

女(はの三)

ふかしパン發明者法學士上野貞正君夫人清子述　定價一册郵税共九錢（郵券一割增）

道具不要　手輕　食パン製法

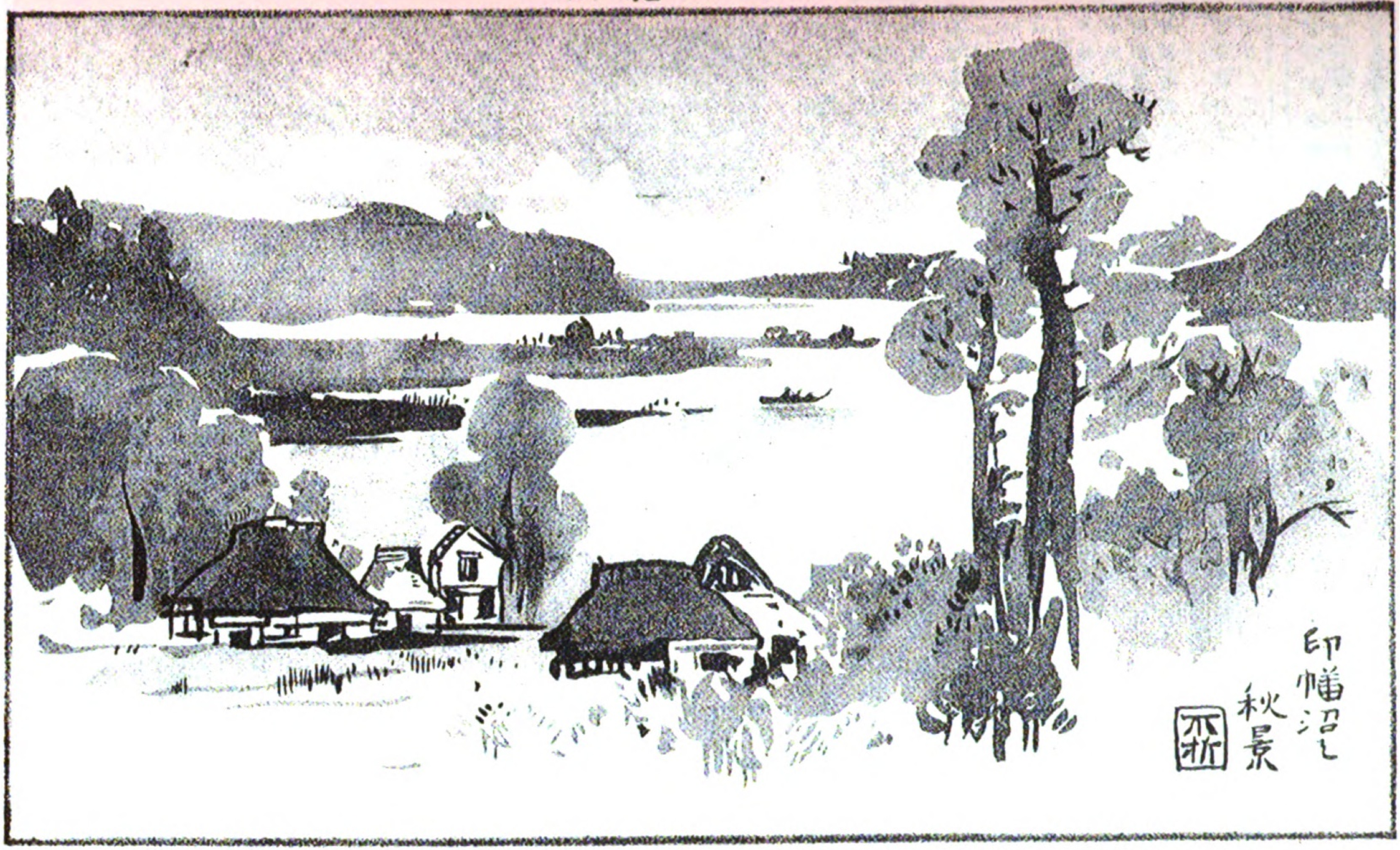
廿二版



本年八月初頃の諸新聞に「ふかしパンの發明婦人」其他之に似た題で詳しく出て居つた通り、目下全國到る處の家庭で大流行のふかしパンは、其發明者として有名なる上野法學士夫人が、五年程前から其家庭の常食に充てられた一種の食パンにて、道具も熟練も要らず手輕にどんな山の中の小家庭でも直ぐ拵へることが出來て米よりは費用も安く、出來たパンは頗る日本人の口に適し特に小兒や老人の好くと一通りでない、故に常食として其儘食しても又切つて附燒き若はバタを附て燒パンにしても至極結構、加之一度に十日分も出來るから毎朝米を炊ぐ世話もない、又砂糖卵を加ふれば粕テラとなり、餡を包めば餡パンが出來、切つて肉を挾めばサンドウイツチとなり、ジャムを挾めば此上もなき結構な菓子が出來る、其他色々の造り代へも出來るから、此辨當茶菓子又は小兒の間食として安く美味く且つ衞生上安心の品を得ることが出來る、此本は即ち此ふかしパンの拵へ方を、發明者清子夫人自身が書かれたのであつて其説明が親切丁寧で且つ總振假名付見れば誰でも讀めるし、讀めば誰でも出來るものであるから、弊堂が昨春始めて之を公にした以來大に世の歡迎を受け、版數は廿二版に達し發行部數は實に十三萬册以上に及び、胃腸病院長長與博士からは推薦の辭を受け、一般の御方からは非常に美味で便利だとの賛狀や胃病又は脚氣のお方から永年の持病が、其爲めに平癒したとの禮狀を辱ふしたとも幾千通にも上れり、なんと此本が世に行はるゝ勢は大した者ではありませぬか目下全國到る處の家庭に**かような大流行を極め**て居るのであるから兎に角一度は讀んで御覧なさい郵券ならば一割增で十錢御送りになれば直ぐ發送します

東京市神田區裏神保町二　**大生堂**　電話本局三一六〇番

秋晩の村江



中村不折筆

家づと



島崎柳塢筆

謹告

弊店一手販賣の山葉風琴及鈴木ヴワイオリンは本年十月一日より定價を下記の通り改定し一層品質を精選し博く御需用に應じ可申此段謹告候也



山葉風琴改正定價表

品名	定價
第壹號	一八、〇〇
第貳號	二八、〇〇
第參號	三五、〇〇
第四號	三五、〇〇
第五號	二七、〇〇
第六號	三八、〇〇
第七號	四五、〇〇
第八號	五〇、〇〇
第九號	五八、〇〇
第拾號	六八、〇〇
第拾壹號	八〇、〇〇
第拾貳號	一〇〇、〇〇
第拾參號	一二五、〇〇
第拾四號	一三〇、〇〇
第拾五號	一五〇、〇〇
第拾六號	二〇〇、〇〇
第拾七號	三〇〇、〇〇
第拾八號	三五〇、〇〇
大和オルガン壹號	四八、〇〇
同貳號	八五、〇〇
座敷用オルガン壹號	二一〇、〇〇
同貳號	二七〇、〇〇

鈴木ヴワイオリン改正定價表

品名	定價
號外A品	二、〇〇
同B品	三、〇〇
同C品	四、〇〇
壹號品	五、〇〇
貳號品	六、〇〇
參號品	七、〇〇
四號品	八、〇〇
五號品	一〇、〇〇
六號品	一二、〇〇
七號品	一五、〇〇
八號品	一八、〇〇
九號品	二三、〇〇
拾號品	二六、〇〇
拾壹號品	三〇、〇〇
拾貳號品	三五、〇〇
拾參號品	四〇、〇〇
特製壹號品	五〇、〇〇
同貳號品	六〇、〇〇
同參號品	七〇、〇〇
同四號品	八〇、〇〇
同五號品	一〇〇、〇〇
同六號品	一三〇、〇〇

弓	定價
號外品	[illegible]
壹號品	一、〇〇
貳號品	一、五〇
參號品	二、〇〇
四號品	二、五〇
五號品	三、〇〇
六號品	三、五〇
七號品	六、〇〇
八號品	八、〇〇
九號品	一〇、〇〇

箱	定價
壹號品	一、五〇
貳號品	二、〇〇
參號品	二、五〇
四號品	三、〇〇
五號品	三、五〇
六號品	四、〇〇
七號品	七、〇〇
八號品	八、〇〇

東京市京橋區竹川町三十番地
合資會社 共益商社樂器店
電話新橋五二九
電信略號〔ヨキ〕

（その一）

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈薬

胃病根治劑

従来世に胃病薬頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸剤（即ち重曹、マグ子シヤ、苦味剤の如き一時おさゑムスカシ的姑式賣薬のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を断つ良薬あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効薬を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新薬にして數年難治の頑固なる慢性胃病にても根本より誓って根治し胃腸を健全に強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新薬なれば従来種々雜多の胃病薬を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を断絶し無病強健の大幸を得られよ輕症に壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（薬價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割増し

新輸入 美容料 肉體

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體純白色に變化し驚嘆の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白薬を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ實に奇効顯著の確な新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓七拾錢

以上貳薬 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館薬房

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち快通流下する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ケ月間滞りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び血塊にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滞りの古血及惡血毒血を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試薬あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効なる類似偽薬顯はる用薬者は深く注意ありて「專賣元日新館薬房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證 新發見薬

醫療賣薬百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても誓て根治し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新薬なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢 着金即刻送薬す郵券代用必ず二割増の事

以上貳薬 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館薬房（電話下谷五四六番）

（にの二）

天長節を祝ふ婦人は必ず婦人世界を讀まれよ

妻君必讀

婦人世界

令孃必讀

十一月三日發行 毎月一回 第十一號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共九拾錢 一年分壹圓七拾五錢

口繪
◎三皇孫殿下最近の御影◎名家新婚寫眞◎有栖川宮妃宮殿下◎閨秀書家とその書◎高木博士の家庭 悉く皆本誌獨特の珍品

彩色石版
川端玉章 跡見花蹊 小泉勝爾

弦齋夫人料理談
△菜は如何に漬けるべきか…
△豆腐の天麩羅は如何に造るか…
△鯖は如何に料理するか……
△大豆は如何に料理するか……
△豆腐汁は如何に製するか

◉夫妻の選擇法…坪井博士
▲男子は如何なる婦人を選ぶか……
▲女子は如何なる男子を選ぶか……

◉如何なる家庭經濟法が
◉五萬圓の財産を成したるか……
…月給取りの妻君は此實驗談を聽け！
…貯金を望む妻君は此實驗談を讀め！

◉小兒胎毒の話 ドクトル 加藤照麿
▲胎毒は如何にして生ずるか……
▲胎毒は如何にして治療すべきか……
▲母體は如何に注意すべきか……
▲分娩後は如何に注意すべきか……

◉新式の月經帶 醫學士 伊庭秀榮
月經の手當に苦む婦人は御覽なさい

婦人と寫眞
△古寫眞は如何に複寫すべきか
△婦人は如何に寫眞を學ぶべきか
△寫眞は如何に保存すべきか
△寫眞は婦人の職業に適するか

◉結婚前の準備は如何にすべきか……
◉三輪田女史の面影……
◉音聲を美しくする法…佐藤ドクトル

婦人の日常生活法……◉村井弦齋
▲臥床は如何に敷くべきか
▲夜具は如何に造るべきか
▲枕は如何に造るべきか
▲寝巻は如何に造るべきか
▲湯たんぽは如何に用ゆべきか
▲燈火は如何に用ゆべきか
▲身體は如何に臥すべきか
▲寝臺は如何に用ゆべきか
▲不眠症は如何に治すべきか

家庭の平和と幸福を望む婦人は是非讀んでごらんなさい……

發行所 東京京橋南紺屋町二十番地 實業之日本社（郵便振替貯金口座參貳六番） 全國賣捌書店

女(にの三)

小春



柴崎美方筆

さを鹿



跡見玉枝筆

ヒゲタ印醬油

医科大學藥學專攻　藥學得業士金澤凝著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也◉郵劵二錢封入申込者に無代施本

東京市下谷區上根岸町　衛生書院

正二位伯爵東久世閣下題
弘業社長與田勝山著

りん病患者の福音

著者痳病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の良法詳述しせる書也郵劵三錢封入申込者へ進呈

東京新橋新肴町弘業社

空前の新藥

シピリス丸

一名掃毒丸

正價
三日分　金參拾錢
七日分　金六拾五錢
十四日分　金壹圓廿錢

◉黴毒◉そう毒◉りんどく等◉黴毒性より來るふきでもの其他毒氣多き人服用するときは毒を大小兩便にとり輕きは七日分重きは十四日分服すれば奏効顯著健全の身となる黴毒患者は早く試み給へ

◉專賣　東京神田錦町一丁目十四番地　博藥館

子宮病

自宅療法

妾嫁きてより七年此方子宮病ちの道の難病をわづらい色々と藥療を盡せしも更に効なく一家悲歎の折柄ふと試みたる療法にて忽ち全快妊娠の身となり今や安すノ\と健兒を擧げゝれば嬉しさの餘りこれを弘く傳へたし望む人は返信料三錢と容躰書を添へ遠慮なく問合せあれ

奈良縣宇陀郡榛原町　笹岡りん

優美高尚極薄手形

米國形實用時計



◉本品は小店特約に於て一手販賣の精品にして其の形狀及機械の構造、側の銀質等總て米國ウオールサム製に殆ど遜色なき良品なり價廉にして正確、堅牢優美なる時計は本品の右に出るものなし

價十三圓半（銀側斜子兩蓋中蓋付16 17 18形 機械金梨地二枚車內天府二重鰐子 向爪石入アンクル龍頭引出針廻し）

價十二圓　右同品片硝子

極薄手形　太文字　鐵針

◉保險三十年◉送料內地十錢臺清韓卅錢◉代金引換は卅錢前金◉戰地發送の便宜あり送料凡卅錢ニ專爲替到着即日出荷

東京銀座一丁目　伊勢伊時計店
特電新二三三一

女（ほの三）

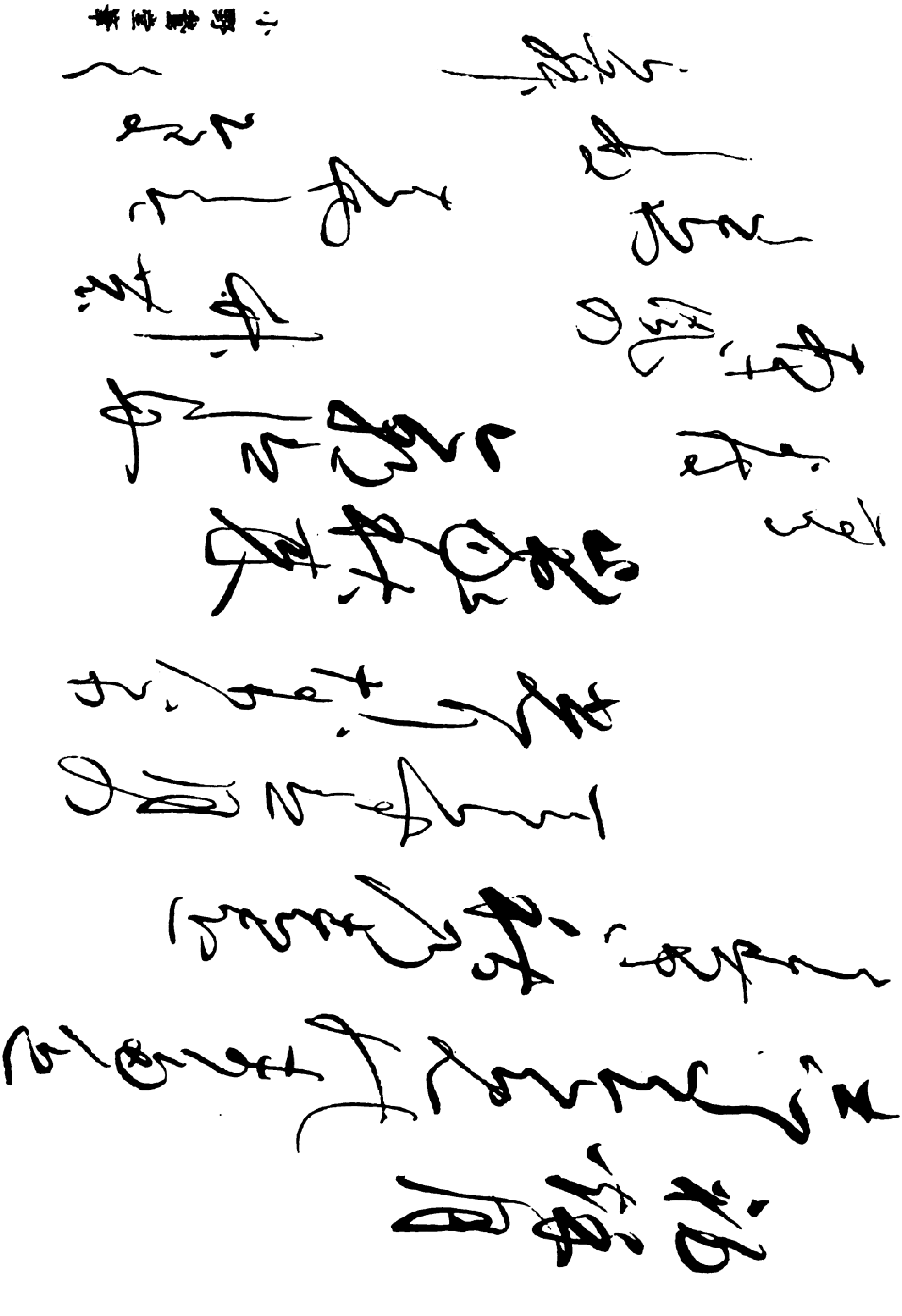
（その四）

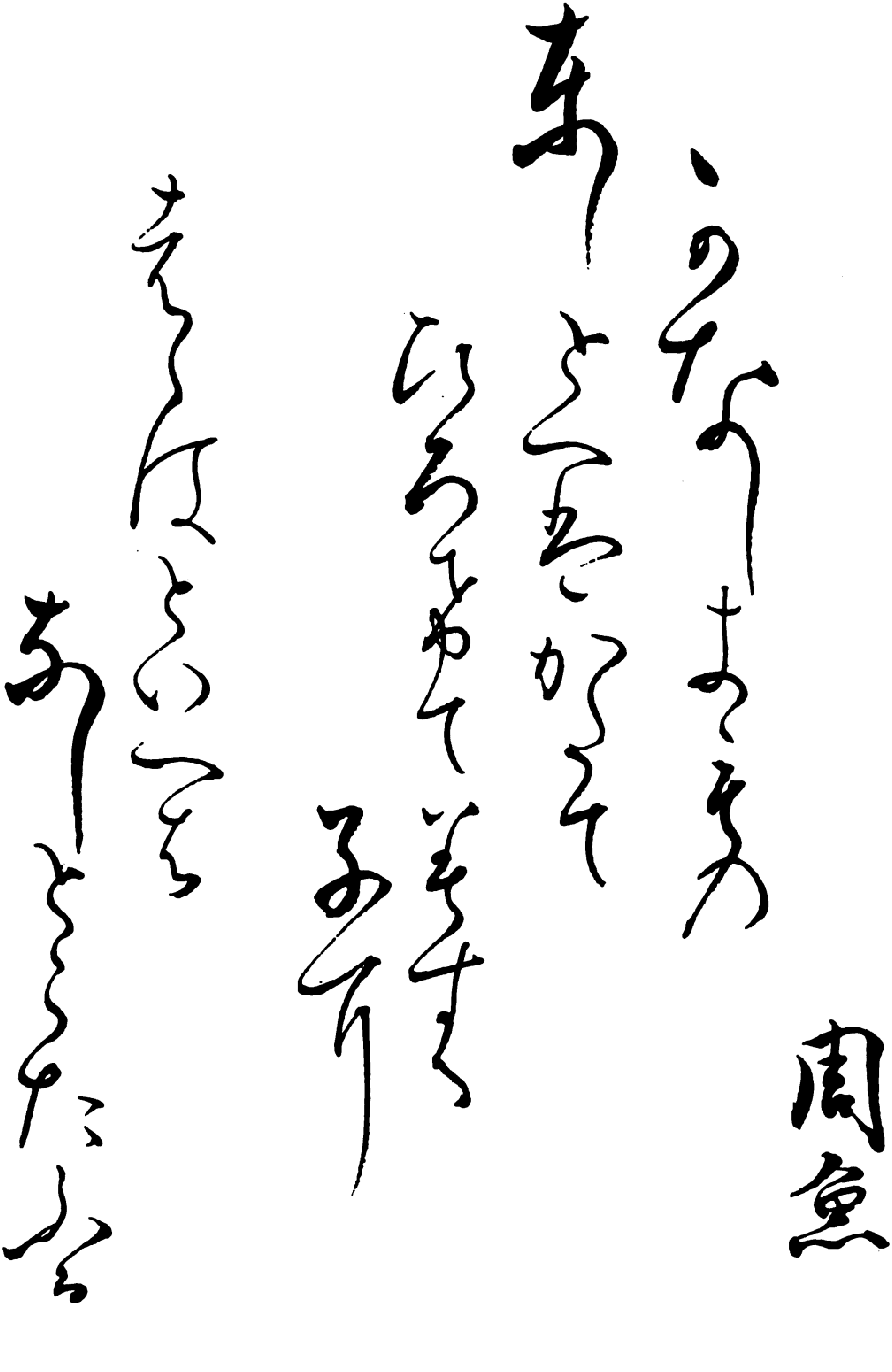
●一圓の舶來石鹼よりもクラブ洗粉は衛生美身術に適合す
●千種以上ある洗粉の中にもクラブ洗粉のみは石鹼に優れる特點あり



總代理店
總輸出入雜貨化粧品問屋 中山太陽堂 神戸本店 大阪支店

●内外各地の信用ある小間物化粧品店及呉服店にて販賣せられつゝ有之候御便宜御用命相成度候





大口鯛二筆


大學目藥
『世の進むに從ひ目藥にもこんな立派な物が出來ました
登録
商標
大學目藥は帝國醫科大學醫院の處方に基きし貴重の製劑也世に有古し賣藥の類に非す
●定價金十錢(郵税二錢) 中瓶三十錢(郵税四錢) 大瓶五十錢(郵税八錢) ▲各地藥店に在
日本大阪北濱(ヘブリン丸元祖本家)
田口參天堂發行
効能の概略
▲はやり目
▲トラホーム目
▲星目
▲のぼせ目
▲かすみ目
▲たゞれ目
▲血目
▲打撲目
▲疲勞目
其外眼病一切に驚くべき奇効あり
◉又この藥は目力を強くするの確効あり故に無病の人にても毎日少し宛此藥を用れば眼病一切を豫防するを得べし

(への一)

博文館

博文館出版當用懐中日記の實用正確たるや多年世人の認容する所今玆に喋々を要せず而して今回發行の四十年度日記より更に一層の特點を添えて日記の眞價を倍せり即ち**陰曆の記入**是なり以前印刷局に發行せられし頃は陰曆も記入ありしが事民業に屬して以來絶て之を記入せず是れ陰曆の必要を知れども陰曆計算の至難なるに由つて余儀なく之を略す弊館久しく之を遺憾とし研究の結果其精確を得て今回より記入を實行せり是れ他の日記になくして弊館日記のみにあるの一大特點にあらずや請ふ續々御愛顧あらんことを。

明治四十年 當用日記

四種

◎卷頭　皇室皇族の御繁榮歷代の天皇大祭祝日日曜表等を色刷とし掲ぐ

大形(菊判)**上製**(舶來洋紙總クロース金字入)　▲正價金五拾錢　郵税拾四錢

中形(四六判)**特製**(舶來洋紙脊皮美製金文字入)　▲正價金五拾錢　郵税拾貳錢

中形(四六判)**上製**(舶來洋紙總クロース金字入)　▲正價金三拾五錢　郵税拾錢

小形(菊判半截)**上製**(舶來洋紙總クロース金字入)　▲正價金三拾錢　郵税八錢

◎**紙數**　大判中形共五百四拾餘頁　小形五百三拾餘頁

▶賣捌所は全國各地の書籍雜誌店

▶取次望の方は御申込次第

女(への二)

日記類

明治四十年 懷中日記

三種

新形（舶來洋紙頗美本總クロース 金文字入細長形携帶至便）
▲正價金貳拾錢　郵稅貳錢

上製（舶來洋紙頗美本總クロース 金文字入紙數三百餘頁）
▲正價金拾八錢　郵稅貳錢

並製（舶來洋紙總クロース表紙 金文字入紙數三百餘頁）
▲正價金拾貳錢　郵稅貳錢

右三種共卷頭には皇室皇族の御繁榮歷代の天皇大祭祝日日曜表を色刷として掲げ新形は脊面に他の二種は腹部に鉛筆挾みを設く

博文館日記の特色

用紙　印刷　製本　趣向　體裁

何れも海外製紙會社へ特に注文漉製せし特別上等紙を用ゆ
日記印刷の爲新鑄せし活字を以て注意印刷す頗る鮮明なり
弊館が特に英國より輸入せし新機械を以て堅牢美麗に製本す

（當用日記）日々欄には舊暦對照過去同月日の重要歷史、日露戰役重要紀念、七曜、干支等を錄し天氣、寒暖、發信欄の外往訪及起床時就蓐時の記入欄を新設す尚各月の初めには、其月中に行ふべき事項を豫記すべき欄を新作し、毎日の記入欄には細罫を附し秩序ある記錄たらしむるに適せり。附錄としては紙數十二頁の補遺金錢出納表、收支一覽表、友人住所錄、農家年中行事、露伴先生旅行の心得、某醫學士の衞生心得及び最新重要統計及日常必須の諸規則を網羅せり。

（懷中日記）毎月の初に當月の行事、食品月令、遊覽案内、陰暦氣節等を掲げ日々欄に過去同月日の歷史、七曜、干支、天氣、寒暖、起床、就蓐時欄等當用日記の如く卷末には日記補遺錄日常有用の事項諸稅則及最新重要の統計表等百頁を附す。

及紙類文具店等到る所にあり◀
精々御便利に御相談可仕候◀

女(への三)

松平侯爵(舊越前侯)家の庭



右より(一)長子康昌君侯爵に抱かれるは四男康龜君次は二男康邦君長女錶子三男康信君次は夫人節子

瑞西ツーリッヒ湖畔の眺矚



春日の神鹿



岩倉子爵邸に於ける貴婦人の小集



前列右より跡見老刀自、岩倉子夫人、中島男夫人、平松誠信廓、岩倉子母堂、九條公夫人、
酒井伯夫人、三井男夫人、石川子母堂、

千葉縣野田町
釀造元 茂木佐平治

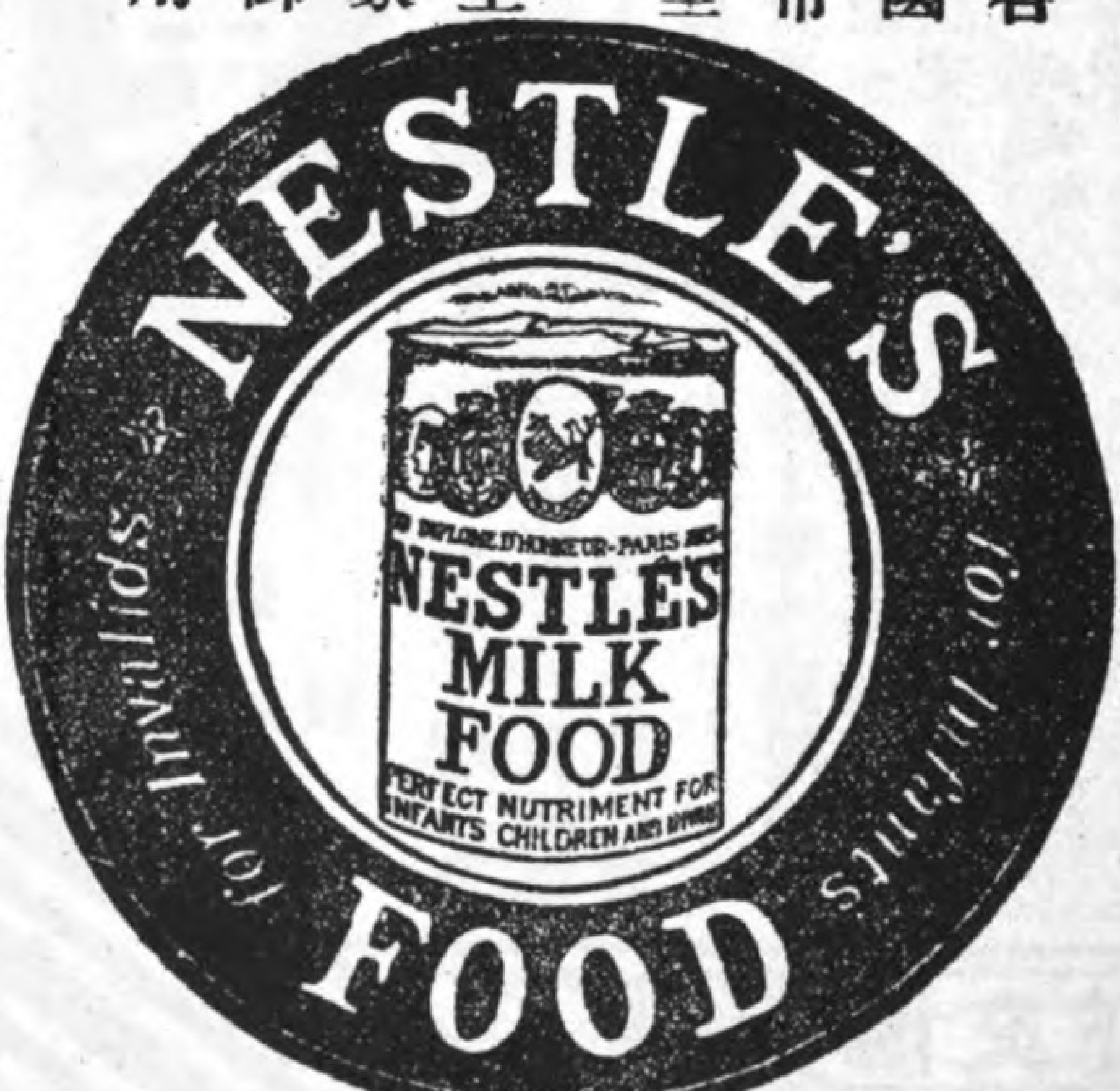
天下一品
最上醬油

萬

賣捌所は各地とも有名なる酒醬油店に有之候

各國帝室及王家御用

ネッスレス
ミルクフウド



歐洲諸國及ビ本邦名醫ノ讃辭ヲ辱フセル者ナリ小兒病者又タ平素不消化ニ苦ム者ニ適當ノ最良食物ナリ○最モ盛カンニ薬舖洋酒食料品店ニ販賣ス

女へとの一)

太陽 第十二卷第十五號 定期增刊（十一月廿日發行）

明治史第五編

交通發達史。

全一册 洋裝大判
紙數二百五十餘頁
正價 參拾錢
郵稅 三錢

鐵道の延長今や五千哩汽船百萬噸郵便電信電話線路の延長亦數千哩に及ぶ而して恰かも鐵道國有主義の確立あり海を隔てゝ滿韓の野又た我鐵路の縱横を見る交通政策の是非を云爲するもの近時の如きは稀なり豈に偉ならずとせむや本篇の此際に出づる偶然に非らざるなり

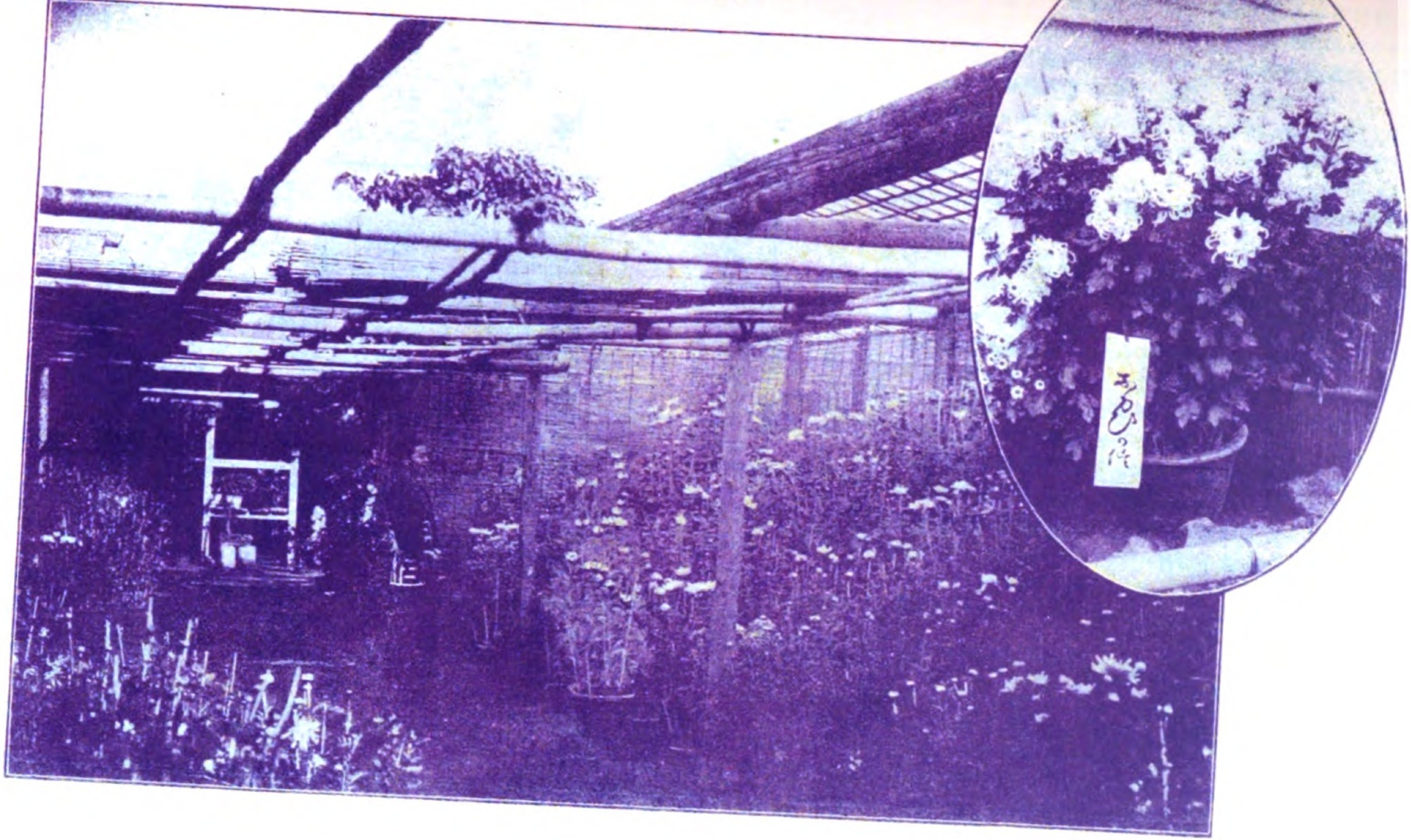
鐵道を以て陸蒸氣と呼び電信を以て切支丹波天連の魔法と唱へ郵便函を舶來の便所と見たる時代より南滿洲鐵道が第一回の株式募集に千倍以上の超募を算するに至る明治四十年間交通發達の迹は宛ながら一篇の奇蹟にも似たり此沿革を語るもの本篇の外になし本篇は斯種の編著に於て其權輿たるべきものなり

本篇は又た明治文明の先驅史ともいふべく將た財政經濟の側面史とも見るべし其叙事は飽くまで精確を期し行文は明快を努めたり

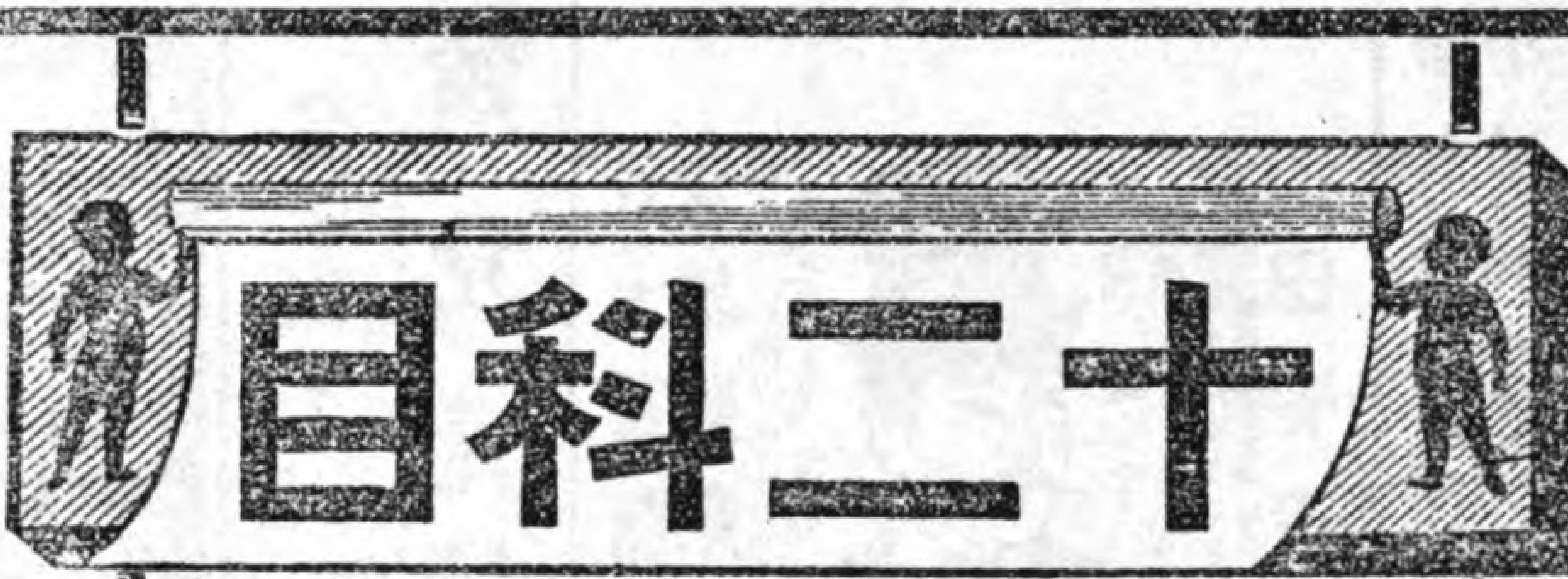
東京 博文館 本町

女（との二）

菊花壇



女(ちの一)



少年世界 第十二巻第十五號 定期增刊

時は之青燈親むべきの節、正に少年諸君が讀書の好時機にはあらずや、本誌今や第十二巻を終らんとするに際し、其掉尾の光彩たらしめん爲に、冬期定期增刊一編を出し、題して十二科目と云ふ、記す所は何ぞ乞ふ下の目次を一瞥せよ

表紙……織田東禹君
口繪……水野年方君
寫眞版……名和永年君 織田東禹君

記事

▲催眠術(學校芝居)……巖谷小波君

●地理學の研究
●文題の撰み方
●金剛石
●運動する植物
●太古の日本
●化學の實驗
●空氣界
●洞窟の成因
●恐るべき害蟲
●生存競爭
●太陽の年齢
●趣味ある算術

◎鼇頭 遊戯百法……
◎特別懸賞文披露……

全一册洋裝大判 正價拾錢 郵稅壹錢五厘 十一月十五日發行

東京 博文館 本町

(ちの二)

文學博士 小杉榲邨先生序文 飯田永夫先生註釋

標註參考 新古今和歌集

新古今集は古今の歌界に一新機軸を出したるものなり古今の歌集中に嶄然として傑出せるものなりその格調は雄偉瑰麗にその詞華は優艶雅美にその着想は清新幽邃にしてしかも餘韻嫋々たり實に脩辭の美技巧の妙掬すべしされば昔よりこの書の註釋も多かれど或は繁に過ぎ或は簡に失し尚全部にわたり通釋完結したるもの尠し本書は夙に古今集に標注を加へ好評を博し普く世に流行せる著者の註釋を爲したるものなれば彼の標注古今集の如くこの標注新古今集も初學者の自修によろしくまた教科書にも適すべきものなれば江湖の諸賢精鑑あらんことを乞ふ

洋紙刷和綴 全壹册
定價金四拾錢
郵稅金拾錢

（郵便振替貯金口座番號第二三七一番）

飯田武卿先生校閲
飯田永夫先生標註

標註參考 古今和歌集

洋紙刷和綴全一册
定價金廿五錢
郵稅金六錢

村雨莊司先生編
小野鵞堂先生書

實用女子書翰文

和裝 全一册
和紙刷價金六拾錢
洋紙刷價金卅五錢
郵稅金六錢

小野鵞堂先生書

朗詠帖

折本美製全四册
定價各一册卅五錢
郵稅各一册金貳錢

發兌元
東京市日本橋區數寄屋町九番地
六合館

女(ちの四)

女子大學秋季運動會（其一）



アマゾン舞ひ



弓弭の響

自活の道を求めらるゝ婦人方に告ぐ……

本院の卒業生を家庭教師、學校教師として雇聘したしとの申込を受けたる向多けれど、本院創業已來日尚淺く、現在の卒業生のみにては四方の望みに應じ難し、此際當院へ入學せられ、來年四五月頃に至り本院の高等科を卒業せらるべき方にして、自活の道を求めらるゝ方は、本院は之を家庭教師に採用し或は本人の望に依り自宅の職業を授くるの勞を採るべし、仍て左に當院在學の費用を記すべし



普通科　三ヶ月　月謝壹圓ヅヽ、

高等科　三ヶ月　月謝壹圓五十錢宛

入學料　壹圓　材料自辨

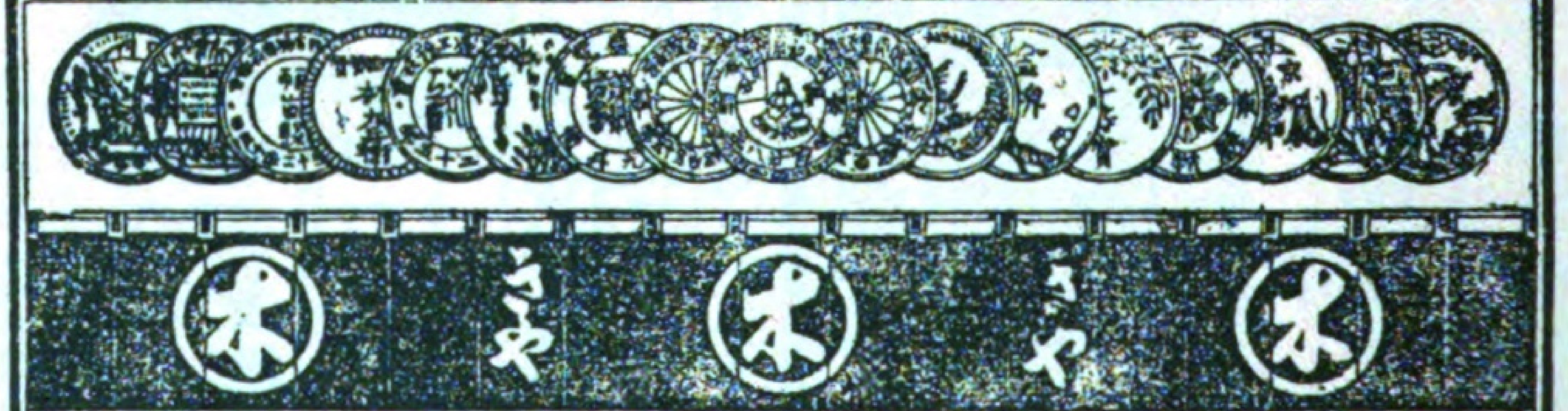
規則書進呈す、郵券封入御申込あれ……

當院は今回前圖の如き校舍を新築したるに付き、尚百名斗りの入學を許可し得べし、寄宿舍はあれども既に滿員にして當分入舍を許し難し、地方の人は其用意して上京せられたし

目下家庭及學校教師として申込を受けたるもの凡そ五十口、來年四五月頃迄には凡そ百五十口に達すべし

東京市麴町區有樂町一丁目五番地

シンガーミシン裁縫女學院



美術

漆器

御婚禮道具　ぜんわん　家具　其他

蒔繪　さかづき　花杯　製造

めづらしき品の陳列場設置有之候間御隨意に御縱覽多少ニ不拘御用向被仰付度偏ニ奉希上候敬白

東京市日本橋區室町貳丁目

木屋本店

林九兵衛

電話本局（九百九十六番 千七百十番）

電信略名（キ九）

東京府立職工學校長　今景彦君著



曩に水の研究として五行讀本の第一册を出版せり今回は木の研究として今校長の著述に成れり木の世界の如何に森羅萬象に關係あるかは大に研究を要すべきなり、今氏先づ一本の木からして説開き**林の木、伐りたる木、加工したる木**に及ぼし終りに**百種**の木を羅列して**其特質應用**を細說せり挿圖數多讀者の趣味を得る鮮少にあらざるべし

全一册洋装美麗書
表紙紙數百六十頁
正價金貳拾五錢
郵税六錢

醫學博士 井上通泰君監修

家庭衛生叢書

十一編

目次

口繪＝呉博士　楠田謙藏先生

全部拾貳册　洋装大本
毎月一回發行
正價（●壹册貳拾錢●參册五拾七錢●六册壹圓拾錢●拾貳册貳圓拾錢）△郵税一册六錢宛

◎十一編近日發行

（りの二）

振替貯金口座第二百四十番　東京本町博文館　販賣用電話本局二六二〇番

(りの三)

（四の二）

女子大學秋季運動會（其二）



紅霓の舞



花の神

◎秋夜燈下の好讀物△上巻再版出來　下巻再版中

田口掬汀著

クロース製定價各七拾錢送費上巻拾錢下巻六錢



口繪平幅百穗畫　鏑木清方畫

▲萬朝報評曰●●●●● 蓋に是が上巻を繙きたる吾人は女主人公の純潔なる心性が所謂浮世の義理に拘束され物慾の僂署に壓迫されて多大の變化をなす處に人爲と自然の事を觀じ浸ろに下巻の出づるを待望しけるが此巻を見るに及びて愛情の醇潔なるものは何者をも征服す可してふ一の教訓を得たるが如き心地せり而も之れ方今多數作家の爭ふて寫す兩性の愛にあらずして人生に於ける共通廣汎なる愛の一發現なり娘鶴江を愛する事度に過ぎて却て是を危うせる親嘉之助、父の愛と戀人の愛と痴漢の愛との的となり、而して物慾の壓迫に抗せんとする鶴江の心裡、己が愛情を拋ちて愛人の運命を護れる紳士櫓島、夫に驕慢なる後妻睦子の機謀加はりて、錯雜限りなき中に一貫の理路見ゆる處、實に當代社會一部の反射鏡にして且一箇の戯曲なりと稱するを得可し、要するに「心の波」は丙午文壇創作界に於ける一光彩たる可きものなり。

小說 伯爵夫人

前編八版
後編六版

クロース製美本
定價一册八拾錢
小包料一册拾錢 二册拾五錢

此書は人間の光明史にして女性内心の解剖圖なり。人生の理想を向上せんとする詩想の結晶にして且つ現代社會の一大活書なり。

發賣元　東京神田表神保町　東京堂
同區裏神保町　上田屋

關西大賣捌　大阪東區備後町四　吉岡
同區南渡邊町　杉本

女(めの一)

女(ぬの四)

秋穂割烹會の小集



根治確證

わきが

新治療藥

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脱せよ丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を溶消驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ひよ

毛のはへる

毛髮生養液 原名ペグネス

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をペグネスと稱する現今最賞用せらるゝ有力なる最新液にして毛をはやしたき人早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止め●はへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髮增生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

化學製品

色の白くなる

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十三錢本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝を盛にし皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

月やくをとる

メソルビン此藥は子宮を痛ず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は效能極て烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る又月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製分貳圓參拾錢小包料拾錢

東京本郷湯島四丁目十四 專賣 オリエンタル藥舘

根治確證 新治療藥

梅毒

輕症は半劑惡症重症も二劑用ゐて奏效す世間種々雜多の無效なる賣藥の比に非ず藥價半劑八十五錢一劑一圓六十錢二劑三圓郵券代用一割增

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる一種稀有の新劑にして忽ち全身の毒を大小便にとりて如何なる劇烈のばい毒●そう毒●かさ●ふきでもの●よこねかんそ骨うづき其他如何なる惡性の梅毒も必根治す

らい病

新治療藥 ダービン

本劑は最近歐洲諸大家の最良藥と認めたる有力藥品の成劑にして何人にも容易に服藥し得る樣繁館幾多の調劑の實驗に鑑み丸藥となしたる者にて其有效確實なる本劑に優る者なし試に一劑分丈けも用ひ見よ必ず大效あり一劑廿日分三圓二劑四十日分五圓特別製九十日拾圓●郵券三錢送り說明書進呈す

獨逸撰方 效驗一夜に顯る

りん病

新治療藥 キーロン

本劑は最新の文明的有力藥にして如何程頑固劇烈なる淋病しようかちも一夜に輕快を覺え膿血速に止り痛を止め輕きは一劑分重きは二劑分

如何なる惡性の頑固慢性病も特製を用ひよ忽ち根治の目的を達す本劑は內服すれば一種の化學的變化を起し淋菌強度の殺菌防腐液となりて便と共に排泄せられ自然の洗滌法となり淋菌を根底より驅逐し人に知られず居ながら文明的新治療を受るを得速に用ひて病根を絕し苦惱を脫せよ

日本一手發賣本舖 藥價一劑輕症用六十五錢二劑重症用一圓廿錢特製惡性頑固症用二圓卅錢

東京本郷湯島四丁目十四 專賣 オリエンタル藥舘

（るの一）

女子高等師範學校教授 横山榮次君外九名補助
報知新聞家庭記者 中村千代松君編

實驗問答 日本家庭節用

全一冊洋裝總クロース三六版
美本紙數千二百七拾餘頁
正價壹圓參拾錢　郵稅拾貳錢

女子師範學校教授 佐方鎭子女史序文
近藤正一君著

女子職業案內

口繪＝女子職業圖（寫眞銅版畫四枚挿入）織田東禹君筆

全一冊
洋裝三六判美本
紙數四百七十頁
正價四十五錢
郵稅六錢

目次

東京 博文館 本町

女(その二)

第二回新學期開始

◎會員大募集＝目下入會の最好機なり

▲事情があつて高等女學校に入る事の出來ぬ人の爲めに『女學講義錄』を發行し僅に二ケ年間に高等女學校程度の教育を完全に正則に授けます

▲世間の講義錄は乾燥無味で面白味がありません。本會講義錄は此點に注意し、諸學科の講義何れも面白く極めて分り易いようにし、且つ有趣有益なる數十頁の雜錄の外に、美くしい家庭小說を每號附錄とします。

▲本會の講師は皆な斯道專門の大家で且つ教育に充分經驗のある方のみです、講義は只親切と云ふ事を主とし丁寧懇篤に說いてありますから本會々員は親しく講師の膝下に在りて講義を聞かれると同じ事です。

▲本會講義錄は右に述べた通り最も完全したものでありますが、會費は極めて少額で都會一ヶ月の遊學費で、優に全期を終はる事ができます。

(その四)

大日本淑女學會

高等女學校程度の講義錄發行

批評一斑

▲中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也

▲每日新聞評　米國の通信教授法を參酌せるもの文字平易說明懇篤を盡くせり

▲二六新聞評　高等女學校の全課程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり

▲日々新聞評　講義はすべて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり

▲都　新聞評　講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し

▲報知新聞評　講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也

上掲の批評を御覽にならば本會講義錄の眞價がお分りになりませう

▲規則書▼ 端書にて申込あれば直に郵送す可し

◎東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）

大日本淑女學會



女學世界

第六卷第拾五號

十一月五日發行

家庭暦

休日｛日曜　四日、十一日、十八日、廿五日
　　　祭日　三日　天長節　廿三日　新嘗祭｝

●行事＝季節は立冬より初冬に入り紅葉は四月の花よりも紅なり○天長節には觀兵式あり朝野の貴紳は夜會の祝宴を張る○十五日は小兒の祝日にて美服を着け産土神に詣で祝宴を張る○新嘗祭には　陛下新穀をもて神祇に奉りたまふ式あり○此月酉の日東京にては酉の町と稱し一日十三日廿五日鷲神社の祭典あり熊手を買ひ延喜とし大に賑ふ

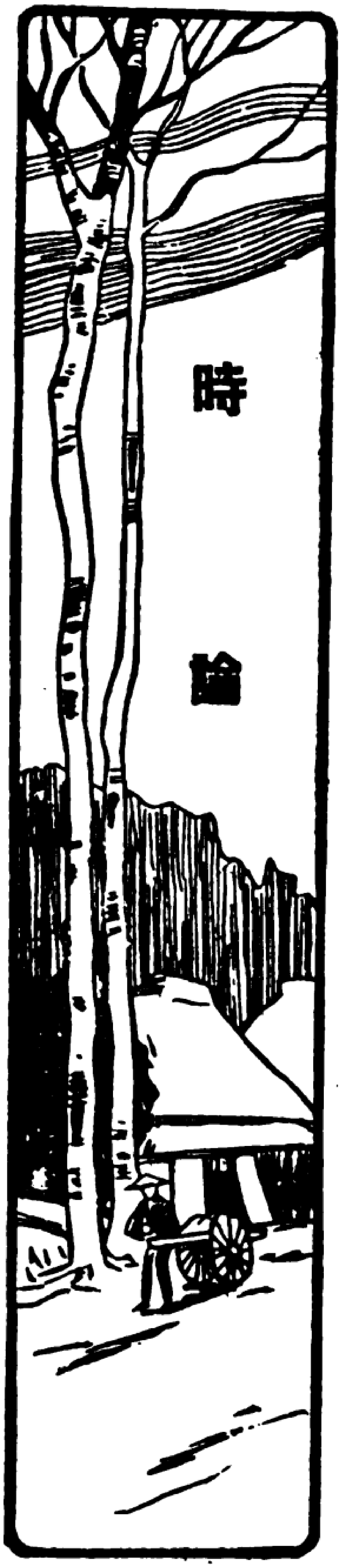
●遊覧＝紅葉狩行はれ遠くは日光山、碓氷峠、近くは高尾○都下にては瀧野川海晏寺○京都の箕尾通天橋嵐山○攝津の箕面山○銃獵は山野ともによろしく獲物又多かるべし

●節物＝立冬○初冬○酉の市○初時雨○木からし○殘菊○落葉○敗荷○水仙○茶の花○山茶花○大根引○足袋○外套○神樂○冬の月○鞴祭

●料理＝目鯛○むつ○伊勢ゑび○たいらぎ○松露○大根○はうれん草○黑くわゐ○生海苔

女性の墮落てふ聲を聞て

明治女學校學監　福迫龜太郎



△墮落果して眞か

近來女學生墮落の風評が世間に高まりつゝある結果として、地方の父兄等も女子の遊學を危むやうな傾向が見えて來たのは自分は甚だ遺憾に思ふ。全體女學生に對する世間の風評は餘りに誇張に失して居る。實際の有樣と云ふものは決して世人の想像してゐるやうに紊れて居らない。蓋し男學生墮落の甚だしき反映として直ちに女學生の墮落に論及する人もあるらしいが、之れは女學生の實際を知らざる者の一時の放言で、決して事の正鵠を得たものとは言へぬ。

最も余輩は女學生に墮落の事なしとは言はぬが、若し墮落ありとすれば开は女學生增加に伴ふ自然の結果で、女學生全體が墮落に陷つたものと見るのは餘りに輕卒の推斷なりと考へるのである。今假りに十數年前は一萬人の學生中に十人の墮落生を出せるものとして今日增加して五萬人の學生より五十人の墮落生を出だすとあるも、世人の前には如何に見ゆるにせよ、之を以て女學生が十年前よりも墮落せりと云ふことは言へぬではないか。

今日女學生墮落の聲高きは、往日十人の墮落に意を留めずして、五十人の墮落に吃驚仰天してゐるもので

はなきか。若し然りとせば余は女學生の堕落を言ふ前に女子教育の隆盛を祝するが順序であらうと思ふ。又新聞紙に報導せらるゝ女學生の堕落云々は果して眞の女學生であるかと云ふに彼の外面ばかりを女學生に装ふてゐる似非女學生が六七分を占めてゐるので、其の實際を調べ來ると幽靈のやうに消えて仕舞ふ。之を以て新聞紙上に出づる女學生を以て總べて純粹の女學生なりとするのは大なる誤解であると信ずる。加之、女子の心理狀態を考へると、女學生は却々堕落の出來ぬやうな事情がある。其れは女子自身に固有せる嫉妬心である。

△女學生相互の關係と嫉妬心

女子の嫉妬心なるものは、余輩男子の想像にだも及ばざる微妙の作用を示してゐる。學校の試驗の成蹟が發表された時などを見ると、男子ならば首席か末席の方に注意して、首席を占めなかつたのが殘念であるとか、或は何々君は落第でなければ好いが位の考で成蹟表を見るが、女子となると其れとは反對で、首席や末席に重きを置かず、自己と學力の似た者のみに注意を拂ふ、自分の隣席或は其の又隣り位の三四人が注意の焦點である。即ち男子は首席を爭ふに反して、女子は烈しく其の近傍を爭ふのである。何所に男女に此の區別あるかと言へば女子の嫉妬心が原因で競爭の眼を以て絶えず相手を陷れやうとするから、とまア觀察に依つては觀ることが出來る。

戀愛に關しては此の嫉妬心は一層陸離たる光彩を放つ。例へば一人の寄宿生の許へ一本の手紙が舞ひ込んだとする。其れと知つた生徒は忽ち嫉妬心を起して、其の手紙は何人より來たのであらうと探偵眼を注ぎ、父か、兄か、伯父か、保證人か、幷も出所を突き止めねば安心しない。若し單身外出するとあれば、何處を如何曲つて何處に立ち寄つたかと言ふことを詮索するのである。のみならず女子は寛容に乏しく、互に其の缺點を詮索するが爲に、若し或者に不品行の事あれば直に秘密が露はれて舍監に知れるのである。故に寄宿舍には嚴密なる監督者あると同時に、女學生自身も互

に心理的に監督して其の品行を取締つてゐるので、世間の思惑とは異りて、女學生自身は却々墮落の餘地が無い。

△舍監の選擇と墮落問題

併しながら余輩は女學生自身に此の特長(缺點)あればとて之を寛慢に附すべしと言ふのではない。特に寄宿舍は女學生の風儀と密切なる關係を有するが故に、其の監理は餘程の注意を要する。

而して墮落問題の喧傳するのも、舍監其の人が宜しきを得ざるより、今日の如く有らぬ風説が起るのではあるまいかとも思はれる。前述の如く女子は嫉妬心深くして、美貌の生徒を見ては嫉み、淑女と譽めらるゝ者あれば妬み、學問の出來る生徒があるとしても、「成程出來る」とは如何も言ひたくないらしい。であるから若し年若き婦人を以て舍監に充つるときは、例の嫉妬心から眼を圓くして生徒の非を摘發かうとするので生徒は却つて反對に拗くれて、世間に墮落の聲がいよいよ高くなつて來る。故に余輩は智識や學問は兎も角も、品性が生徒の尊敬を博する年齢高き婦人を以て舍監とすべしと主張したい。軍人の未亡人などには、家庭や世間に通じて思遣りの好い品性の高い婦人が幾らもあらうと思ふ。

△杓子定規は戀愛問題に効果なし

女學生の墮落問題と關連して一考を要するのは、戀愛問題、煩悶問題である。戀愛や煩悶は青春時代には何人にも起る心理狀態で、恐るべきでもなければ又惡いとすべきものでもない。併しながら若し之れに處するの道を誤れば、遂に墮落と云ふことに爲つて來る。然らば如何に之に處すべきかと言ふに、父兄及び教育家は能く這の間の消息を諒得して、彼等の注意點を他に轉せしむるやうな手段を取つて欲しいのである。或は墮落問題解決の方法として、卑猥なる小説や不健全なる新聞雜誌を嚴禁すると云ふやうな、外部より強制的に其の性情を抑壓せんとする人もあるらしいが、此の變通自在なる世の中に、彼は惡いこれは善いと一々八釜しく言つたところで防ぎ得られやう筈もなく、却つ

て其の好奇心を刺激して藪を突いて蛇を出だすやうな不結果に陥るから、余輩は斯くの如き外部の抑壓は實際には何等の効果なしと考へる。

蓋し小説なくとも新聞の艶種なくとも、戀愛や煩悶は靑春時代の附物として現はれるのであるから、女學生の一部に戀愛或は煩悶の問題が起るも之を寛眼に見て宜しい。即ち余輩は世の教育家たる者は斯かる事に戰々恟々せず今少しく大膽に構へて學生の根本思想を改善するに力められんことを望むのである。

△墮落豫防の一策

男子は二十四五歳、女子は十七八歳の頃は監督も必要である。併し乍ら餘りに學生を不信認して徒らに監督を嚴重にするのは不得策の骨頂で、或る程度迄は學生を信任して十分寛裕の餘地を存しなければならぬ。余輩は墮落を豫防するの第一要義は此の「信認する」と云ふことであると信する。曾て或る地方の中學で、寄宿生が所ろ嫌はず落書するので大に持て餘したことがあつたので、校長は一策を案出して「落書板」と云ふを作つて寄宿舎に掲げ、「此處に勝手に落書せよ」と宣告した。すると落書癖の寄宿生等も、其の落書板の出た日からぱツたりと止んで仕舞つた。――墮落問題に對しても其の監督者は此の中學校長に等しき寛容が有つて欲しいのである。監督者が被監督者に信任と温情とを置かざる限りは、到底墮落問題の聲は絶へぬであらう。監督者が學生を信じて温情あれば、學生も監督者を信じて尊敬を拂ひ、其の間は微妙なる感應力に依つて學生の風儀も自然に向上することゝなる。余輩は之を以つて我が學生に對せんと心掛けて居たのである。（蝸象生筆記）

懺悔より得たる教訓

某女史

某女史は廿年前彼の有名なる大阪事件に關係せし某女史の後身なり今は身世共に閑なる角筈村にありて女子教育に從事さるゝ人

頃日或人の書かれた小說の中に恁云ふ句が厶いまし

た。『智に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ、兎角に人の世は住みにくい。』唯だこれだけの言葉で厶いますが妾には非常に趣味ある文字と感じました。誠に人の世は住みにくい、海へ行かうが山に住まうが、茲ぞ住みよいと思ふ處は全く無いと云つて宜しい位でせうか、併し人間は心の持やう一つでドウにでも諦めがつくものと存じます。妾が過去の半生を回顧しますれば、殆んど數奇落魄の紀念のみで一片の光明すら見出すとは出來ませんですが、唯一つ其久しい間に於て、經驗と申す苦い賜物を得ました。素より暗黒の方面ばかり觀て來た妾の事ですから何の面目あつて一代の潮流たる婦人問題を喋々するの資格がありませう。けれども今申す永年の經驗に照しまして、向後の若い婦女諸君が、可成人生の行路を踏過まらぬやう、幸福の生涯を送らるゝやうとの老婆心から御参考までに思寄つたまゝをお話し致します。勿論婦人問題に就いては、既に諸大家の意見も發表せられ且つ種々なる方面から研究せられて今新らしく之を云々するにも及びませんが、然し男性の觀たる女性と、女性の看たる女性とは、其間に或は相違した點がありはせまいかと存じますから、妾は女性として女性の心裡を解剖して見やうと思ひます、其方が女子を分外に買被つたり、又は極端に罵倒したりするやうな片手落な事がなからうと信じますから。

身を刺す刄は女子の虚榮心

それに就いて妾が茲に告白しておかねばならぬ一事は、最初社會の表面に立つて男子と同じ樣な活動をして見やうといふ虚榮心の爲に全く半生を過つたとであります。勿論其動機は單に虚榮心の爲ばかりでなく、一面には女子が男子に侮蔑され、壓迫され切つて居るからそれに對する反抗心も伴つて、ナニ女だからとて男に劣る道理はないと云ふ間違つた考からツヒ國事にも從さはる樣になつたのですが、それが抑々失敗の序幕で、今から回顧しますれば丸で夢のやうで、嗚呼自分ながら馬鹿らしい眞似をしたものだとつく〴〵思ひます、尤も其當時(明治二十年前後)は非常に政黨熱が

旺で、勞働社會の人々までが在野の志士を以て任じて居た位ですから、男子が政治に奔走する有樣は實に一種の殺氣を含んで居りましたが、まだ女子の身で國事に奔走する程の向ふ見ずはありませんでした。其處へ以て妾の樣な謂はゞ跳っ反り者が大阪事件の如きに參加したものですから忽ち天下の謀反人のやうに思はれ甚麼に世間からは目立つたでせう、自分でも亦それを非常に華々しい事業と心得、所謂天下の女丈夫を氣取つて居りましたが併し、それはホンの一時の夢で、再後蹉跌に蹉跌を重ねるに隨つて、全く前日の行動の非なるを悟り、設令一時の血氣に任せたものにせよ、女心の淺墓にも男子と拮抗しやうなどゝは以ての外の不料簡と熟々後悔致しました。それにしても女子の虛榮心といふものが如何に一身を害する凶器であるかを知らねばなりませぬ。

夫を苦める女性

女子の虛榮心も或程度までは致方がないと致しても當今の樣に婦人の見榮坊が嵩じては誠に困つたものです、此頃も一寸新聞に見えましたが、某海軍士官の細君が夫の出征中に突然離婚を申込んだと云ふ其原因を聞いて、妾は呆れて仕舞ひました。其細君は元華族女學校の出身で、頗る當世風である丈け一寸出掛けるにも縮緬づくめ金づくめでお手車といふ素晴しい外見坊の處へもつて、夫は一向構はない素朴一片の武骨漢で平生貧乏書生のやうな身裝である、全く性質が反對して居るので、細君はそれが面白からず遂に二人の子まで置去りにして離婚して了つたと云ふ、而も其女は社交界の花と呼ばれたい志望から茲に至つたのだそうです。恁那例は妾共の知つて居る人の中にも隨分少なくありませんが、それが悉く新らしい教育をうけた學校出の婦人だから尚更驚くの外はありません、夫は僅か三四十圓の收入で隨分苦しい生活であるのに、下女でも置かなければ、外聞が悪いと心得、僅かずとも濟む處ろを自分は何にもせずに奥樣と云はれたいのが今の女性の通弊ですが、つまり虛榮心のさせる業でせう。

男女性質の相違

女子が智力の競爭に於て男子に打勝つ事は到底不可能であると、妾の實驗上感じた處ですが、近來は又再び女權說が盛になつて一部の教育者間には女子に最高の學問を授けて男子と競爭せしむるも可、更に一定の職業によつて獨身生活を送るも可、と半ば煽てるやうな說もありますが、之は實際に於て如何なものでせう妾も前申した如く政治家にならうとさへ志した時代もありましたが、それが却て失敗の基となつたとから考へますと、女子が男子と同じ舞臺で活動しやうと云ふのは、寧ろ危險な事で、又無理な注文かと存じます。既に先頃獨逸で開かれた萬國婦人運動會の席上では『女子は家庭を中心として男子と異なる方面に活動せざるべからず』と議決された位ですから、極端な女權說は、自然消滅するでせう。尤も我邦でも追々女子の職業範圍が擴くなつて、判任官なり遞信省雇なり鐵道事務員なり其他銀行會社、出來るだけ女子の爲に新職業を授けられたのはよい事ですが、然し實際に就いて其成績を聞いて見ますと、簿記や錢勘定のやうな單純な一定した仕事なら女子の方が緻密で、間違も少ないが、少し複雜つた頭腦の要る事務になると全く役に立ちませぬばかりでなく、最初の一年位は良いやうに見えても、永い間には生理上の關係ですか知らぬ矢張り男子に劣つて參るさうで、實際の競爭上、到底男子に及ばぬ事が種々なる實驗上から證據立てられて來るそうです。それにも拘はらず女子が競ふて男子的の職業を求めるのは、性に合はぬ事をして自ら好んで劣敗者の位置に立つものと見做さねばなりません。

隱れた偉人は家庭に

職業と申せば、過日も或職業紹介業者の申した詞に昨今女子として最も割の好い職業は、和洋料理法を習得た人で、此等は岩崎とか三井とかいふ様な富豪の家庭へ割烹手として這入て行けば、中々よい待遇が與へられる、（賄付きで二十五圓から三十圓）そこで料理學校を修業した人に之を勸めると、大抵の婦人は容易に應じません、何故かといふと、袴を穿いて毎日通勤するのなら五圓でも七圓でも結構だが、先方へ雇はれ切

りに住込むのは厭だ、時によつては前垂をかけて下婢と同じやうに扱はれるのが如何にも厭だといふのだそうです。成程これでは女子の職業難も無理はないが、こんな事が女子に言へる間はまだ〳〵天下泰平で理窟も何もいつた事ではありません。しかし此樣な詰らぬ外見から臺所に這入るのを恥辱と思ふやうではとても完全な婦人社會の發達は望まれません。又現時の若い女性が如何なる理想を抱いて居るかと云ふ事を知るに足るの一例は、東北地方の女學校で、生徒に『理想の婦人』を投票せしめたら、下田歌子さんが最高點であつたさうです。此等は素より實世間の眞相も御存じない極めて單純な頭腦に描かれた空想にすぎませんから婦人全體の標準とはなりますまいが、兎に角若い人達が名聞的の榮華に憧憬れきつて居るのは掩はれぬ事實です。そこで妾が年若い女子の爲に、是非共猛省して頂きたい一事は、社會の表面に立つて華々しい活動をする人ばかりが偉いのではなく、寧ろ其裡面にあつて夫を補け、子女を教育し圓滿なる家庭を作つて行くのが女の天職であり且つ敬すべく尊むべき婦人であると云ふ事を自覺して欲しいのです。

男女共職務に優劣なし

人間の弱點はいろ〳〵ですが人の活動が眼に見えなければ偉い者に思はぬのもその一つで併し永遠に在ます神樣は何事も御存じです、家庭に隱れた賢婦人と、外面に現はれた社交的婦人と何れが社會の爲に貢獻する處が多いかは眼識のある人はチャンと心得て居ます彼の耶蘇は聖人であるがその聖人を生み育てた母のマリヤは、更に一段偉い婦人として尊敬されて居るぢやありませんかそれを思ふと妾は、夢のやうな虚榮心は斷然去つて仕舞たいと考へます、加之妾の半生の經驗に照しまして、婦人の天職は社交的活動でもなく、物質上の競爭でもなく、唯だ家庭を中心とした女子教育である、と熟々感じたのであります。

既に男子が事業に成功して尊敬を博するならば、女子が子を育て臺所を整理して行くのも、矢張り充分の尊敬に價するものと信じます。唯だ社會と家庭と其活

動の舞臺が違ふだけで、人間として盡すべき職務の力は男女とも同じ事です。

女子を輕視する勿れ

女子に對する苦言はそれとしてこゝに男子の側から申上ると從來の樣に婦人を見縊つて玩弄物視するのはよろしくない、その反動としてこれが遂には女子の虚榮心となつて現はれるのです、女子が新に男子の職業範圍にまで手を暢べたのは取も直さず男子に對する一種の挑戰狀で、彼等を輕蔑した當然の結果に外ありません、何故と申せば從來の男子は自分の腕次第でドンな我儘をしても關はぬが女などは臺所の隅につくなんで居れば可いと云ふやうに侮つて居たからつい少し學問でもすると生意氣になつてさわぎ出す樣になつたのです、此傾向を矯めんとするには、女子にも相當の尊敬を拂ふと共に、決して臺所は卑しい處ではない、家庭は女子の神聖なる舞臺であることを充分に知らしめて名譽の門違ひをせぬやうに注意してやらねばなりますまい。

蒙古事情

蒙古に在る鳥居女史が過日喀喇沁發にて通信したる書信の趣によるに喀喇沁附近即ち東蒙古部の商品は重に北京より輸入せらるゝものにて北部に入るに從ひ庫倫より來る露國品多し同國民の中購買力あるは中流以上及び喇嘛僧等にて之には衣服地の需用も尠なからず但し夫とても孰れかと云へば高價のものよりも華やかなる方が向き色合は喇嘛黃教の色として黃色が第一夫れに次いでは赤、桃色、紫、淺黃、藍等あり、地は更紗形、紋毛繻子、色きやらこ、色毛繻子、メリンス等なるが其他には色々の小切れ類ハンカチーフ、糸取、洗粉、石鹸、白粉、簪の類賣行きあり蒙古婦人の高襟なるものなどになれば襟、袖口、裾等の廻りにリボンを附けることが流行し殊に模様ありて幅一寸位のものが尤も歡迎され居れり雜用品としては玩具、種物、駄菓子廉價なる麥藁帽、醬油、日本酒なども好かるべく蒙古人の用ゆる酒は燒酎なれば安價にて强烈なる飲料が歡迎さるべし、次に醫藥品なるが喇嘛が製する資生丸なる黃色の小丸藥を萬病に投じつゝあるのみにて其外に藥と云ふもの一もなければ我國人の賣藥行商は尤も望みあるべし病氣中最も多きものは第一に雪瘧第二は肉食の結果として蟯蟲及腸胃病第三は沙漠にて日光の反射强きがため眼病第四は毒蟲の侵害なるが元來が醫藥のなき所なればにや一滴の苦味丁幾も非常の功能あるは不思議といふべきなりと。



呪はれたる女子教育

女學生出身の妻と娘上がりの主婦

拔衣紋

窮屈相に莞爾

ハツ左樣で……能うく承り置きまして……では、歸家りましたら良人にも慥かに然う申し聞けませうで御座いますと、ついと澄ました庇髮の横顏、態とにはあるまじけれど切り口上の虛飾〳〵しさ、心ばかり反り身になつて可笑しらしくも無く窮屈相に莞爾、まあ、善いじや御座いませんかと口にばかり饒舌らせて置いて、後先見廻しながら急に思ひ附いた樣に、左樣ならば御免遊ばしませ、又お通り掛かりの折には是非にとばかり、然りとては自ら具はる威嚴の無けれど懷かし氣の更に無ければ、怎うせ門の戸𨵦と締め切りなば、女子の身の省愼みも無う、ぺろりと舌なるべしと見解る門の黃昏を、飛んだ時間潰しめがと強ち邪推のみにてはあるまじき、當て附けがましう大急ぎの小刻み走り。

正直云へば、此方こそ飛んだ事、もう〳〵二度とは參りませぬから大丈夫御安心遊ばしまして御緩るりとなされませと、流石の口の中にも呟き兼ねて、本鄕は

片側通りの淋しい家並みを添うて、五年振りで新婚の友を訪問れたのが之れであつた。

大一番の元祿形

矢つ張り善いのね、私遠慮なしに澤山戴きますわと菓子皿のビスケット飾り氣も無く無造作に二つ三つ撮みて直ぐに食べるでも無く、眩し相に俯きながら、彼の私、之れで御暇する事に致しませうと、下目使ひの挨拶序用に、紅入り友禪の襦袢の裾さつと捌いて二歩三歩、あら私厭な事つた、と後向いて、一寸貴女、私に似合は無か無い事と心元なさ相に聞く、何なのと問ひ返せば、彼の髪ですの、變でせうか、私這麼大きな形なんか眞箇に厭なんだけれど……だつて仕様が無いんですものと、諦めた樣に何處か悄然て、其れでも先刻から得意の大一番の元祿形を美いとも醜いとも何とも評してやらぬを、詰らなさ相に催促がましう。

高が髪の一つ位什麼出來て居つた處でとは思つたけれど、美しいんですよ、能く出來てます事と、心にも無く口から出任せに慰めて遣れば、然う、彼の眞箇!?と嬉し狀に元氣附いて、而して其麼に餘り大きくも無いわねと、今度は至極大量に沈着き拂つて、左樣なら…………。

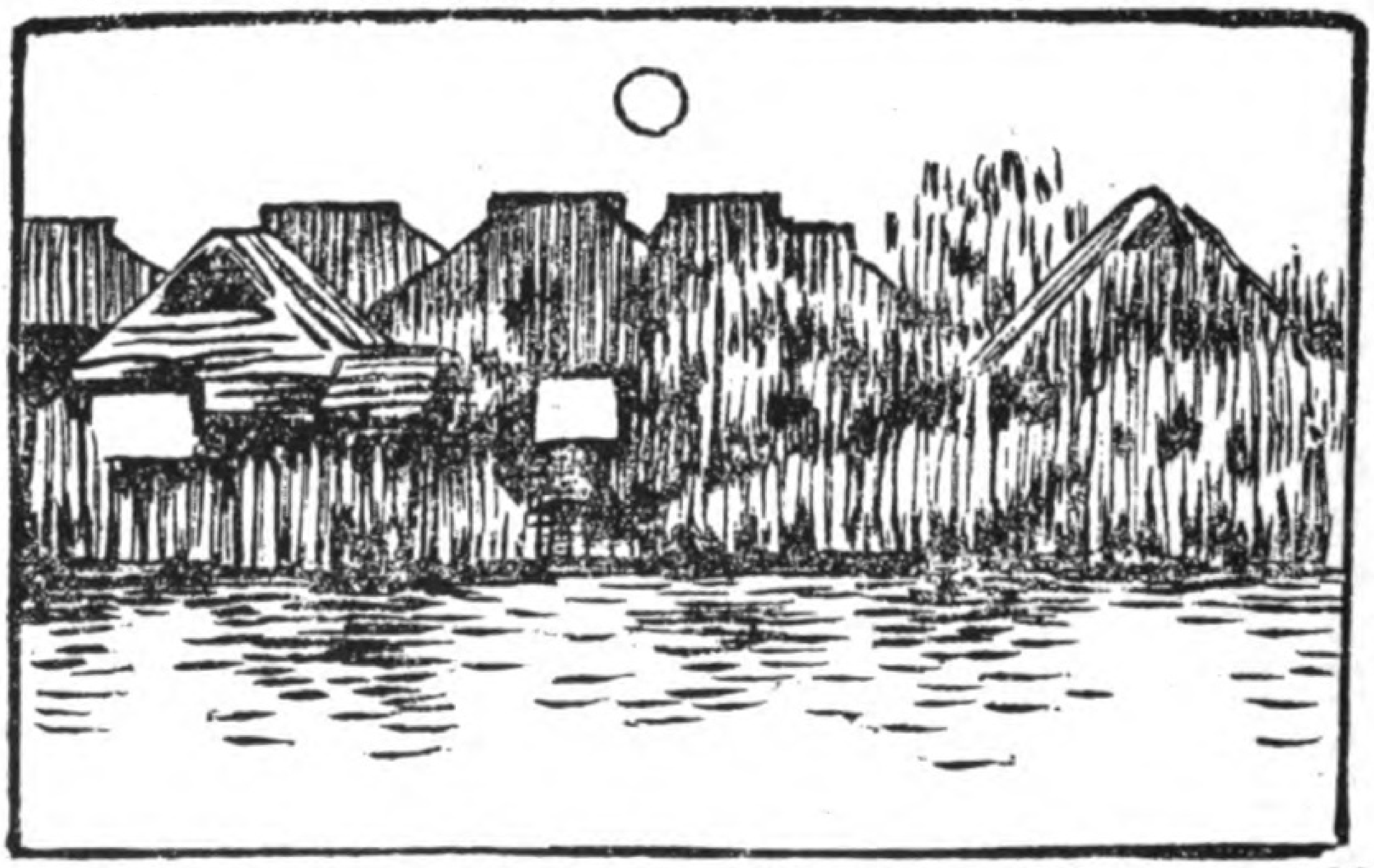
三人三色

自分が始めて上京した時、懷かしい昔の幼な友達の三人へ、此の度自分も上京したから御閑暇の折には些とお遊びに來て賜はれとて、夫れ〴〵手紙を出したのでありました、處が小學校卒業後緣あつて然る商家へ嫁して居る友の一人で、翌る日早速俥を飛ばして訪ねて來て呉れたのが、此の大一番の元祿形であつた、其れから小石川邊りの女學校へ通學して居る友の一人は丁度三日目と云ふに、御目に掛かり度いは山々だけれど、今は折惡しく些と障る節ありて甚だ殘念ながら參上致しかぬれど、何れ近き程には必ず等と優しう長々とした手紙を送つて呉れた、すると最後に然る師範出の、暫時地方の高等女學校で教鞭を執つて居つた友の一人は、其の後十日も二十日も經つてもう悉皆忘れて居つた頃、やれお懷かしいの戀ひしいの、分袖後幾星

霜をや經ぬらん彼の時の月は丸かつて此の時の紅葉は赤かつたのに等と、何だか一向私共には要領を得かぬる葉書の端に、御序でもあらば御來車を乞ふとの文意があつたので、正直構へて態々出掛けたのが、即ち彼の始末窮屈相な笑顔を見て來た丈が、損でも無かつたと云へばまあ其麽もの。

彗　星　で　す

併しながら、自分は之れを以て直ちに女學生上がりの妻と娘育ちの主婦との相違を、早計にも判斷しやうと云ふのでは御座いませんが、嘗つて、湯島詣とか云ふ小説の中に、男主人公神月某が、德の高い學問の出來る美しい怜悧な新妻を捨てゝ、蝶吉と云ふ可憐な醜業婦と握手して終に、人世の最大悲劇を演じたと云ふ事があつた樣です、美しい敎育のある新妻を捨てる迄には種々の原因があ



つたで御座いませうけれど、一日新婚旅行の途次、良人が青空をすつと流れて行つた星を見て、人魂〳〵と叫んだ處が、言下に彼れの妻は、彼れは人魂ではありません彗星ですと遣り込めたと云ふ事があつた樣に記臆して居ります、私は之れが即ち其の原因であつたとは申しませぬけれど、憖ひ學問等と云ふものは、這麽場合にまでも差し出がましくちよい〳〵と出しや張つて、可惜敎育ある淑女の品位を下落さして仕舞ふ事を、返す〳〵も遺憾に思ふのであります。

五月の鯉の吹き流し

否やもう御婦人方と云ふものは御口前の惡いもので御身分の高下敎育のある無しに關はらず、饒舌らして置けば感心に何でも饒舌る、議論もする、人をも遣り

込める、有る事も無い樣に無い事も有る樣に、一度御婦人のお口に掛かつたら最後、人間一疋位、からきし意氣地の無いものでと誰れやらが仰つしやつた。

成程、下は井戸側の連中が御向ふの魚屋の妻さんが近頃新調の帶を品評する處から、上は止ん事無き際の貴婦人方まで、其れは勿論御身分柄然のみ、他無うは御意遊ばさねど、然りとて却々御念の入つた罪の深い皮肉を仰せらるゝ邊り、早い話しが斯う言ふ私共から始め、同病相憐むの一人だから何と云はれたつて情け無い次第である、況して敎育があればある丈に、種々と外界の刺戟を享くる機會が多くなりますから、隨つて自分の抱負も高まつて來て多少は自己と云ふ觀念をも自覺する樣になつて參りますので、幾ら親だと云つて良人だと云つて然う／＼盲從はして居られなくなるのである、お轉婆と惡口され樣が生意氣と笑はれ樣が時に取つて自分の立場を明かにする爲めには、大に衝突もし大に議論もしなければならぬのも、無理の無い事であると思ふのであります。

自ら別問題

けれど、私は斯う申せばとて、一家の主婦として人の妻として女子の敎育は不必要であると云ふ事を意味して申すのではありません。

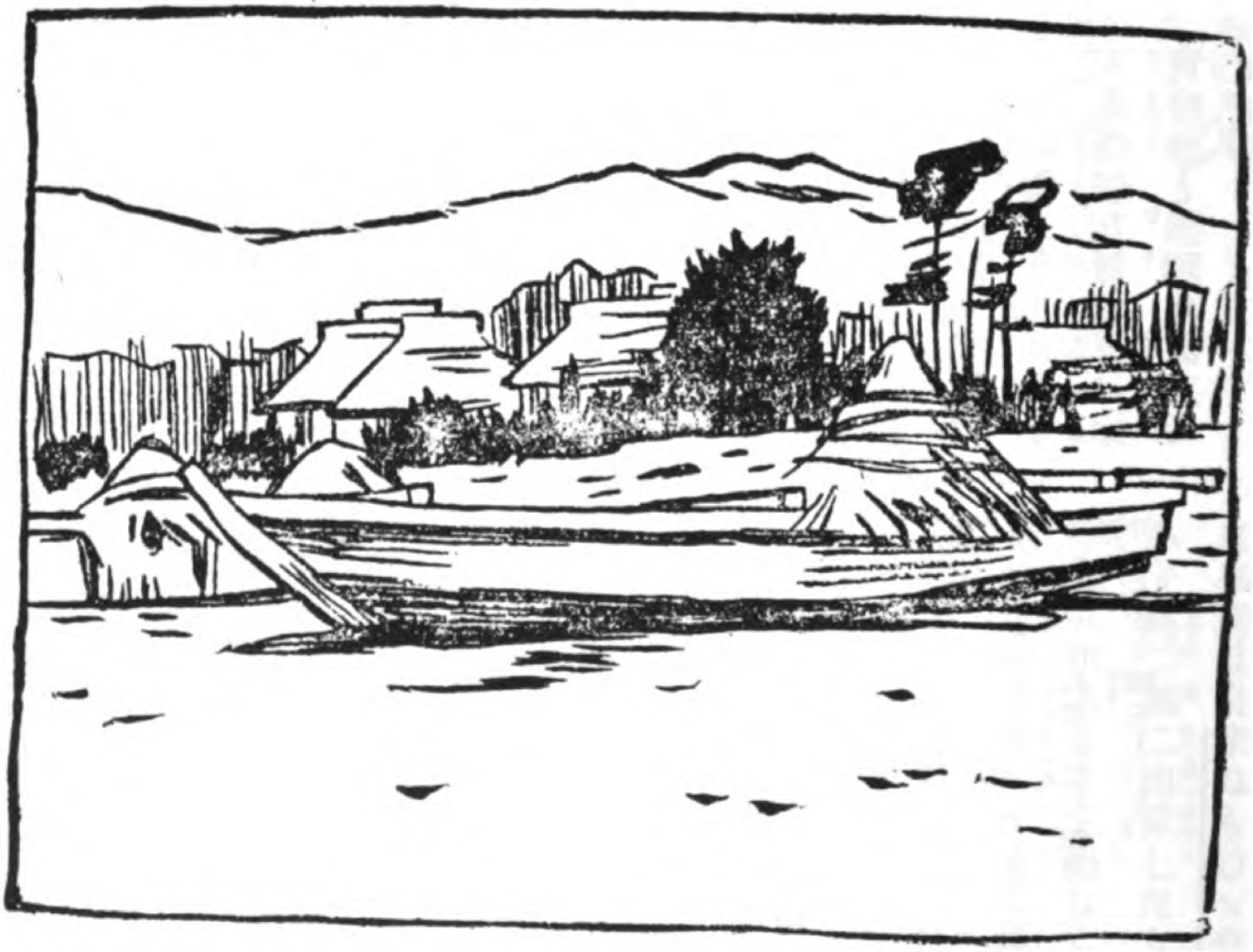
よしや、御飯の炊き方がお三どんより下手であつても、衞生法に適した水の分量温度の加減、食物の質實迄ちやんとノートブックには記しつけてある筈であるよしや洗ひ張りした縫ひ直しの單物が昔者の阿母樣より下手であつても、服裝改良案に嘴を容れる丈の資格はちやんと具へて居る筈です、だから其れは出來ないのでは無くてしないのでございます。

妻として主婦として若しくは婦人としての日常の仕事は、敎育のある女子に在つては、餘りに平凡で餘りに簡單で、餘りに無趣味で餘りに不高尙であると、然う信じて居るから其れで自分自ら進んで遣る氣にはなれないのだらうと思ひます、だから、女學生上がりの細君に兎角の惡評を加へるのは、頗る事情に迂遠い不公平な同情心の無い必竟皮相上の觀察に基く攻擊で、

娘育ちの妻の方が用に立つの學校出身の主婦の方が駄目だのと云ふは、自ら別問題であらうと私は考へられるので御座います。

不思議な謎

妙なもので、或る人は斯う云ふ事を申して居りました、同じ頭腦を使ふにしても、或る一事を思考する爲めとか記臆する爲めとかに過度に腦力を費して、其れが爲めに腦を害する度よりも、無爲にして苦しむ一種の空想程心身を勞し腦を損ふものはないと云ふ事であります、其れは丁度空臼を永く積けて碾く樣なもので



終には、臼と臼とが磨り減らされて仕舞ふのと同一の理由であると云ふ事で御座います。

誰れの罪か存じませぬけれど、女子の教育が盛んに進歩するに連れて、此處の理由に起因する精神上一種の老朽者が、女學生中に漸次多く生ずると云ふ事は、所謂蛇の道は蛇で、甚だ遺憾ながら私は此處で自白するの止むを得ないのであります、今日都下有數の二三の女學校内の寄宿舍に行はるゝ不潔な汚風等は、將に明らかに此の好一例證に違ひは御座いませぬが、更に

其れが爲めに多少身心の健康を害して居るものが、半數以上もあると云ふに至つては實に寒心すべき事だらうと思ひます。

目擊した人の話しでは御座いますが、實際悲慘な寧しろ憐れむ可きものだ狀で、可惜、無邪氣な花の樣な妙齡の女子をして、文明とか開化とかと云ふ名ばかり美しい幻影の虛榮に餘儀なく憬がれしめて時代の風潮の犧牲に供する二十世紀の文明の眞意が解せぬとて、大に嘆息されたのを聞いた事がある。

無理な註文

だから這麼工合に、うら若い半生を冷い學窓の下に送つて、不自然極まる本能の要求に煽動されながら、什麼して靑春の溫い血液が磨り減らされずに居られませうか、女學校出身の婦人に何のかんのと種々の惡評を加へますけれど、人の母として人の妻として此のか弱い人等に、總べての點に於て天眞爛熳な無邪氣は娘上がりの主婦の樣にあれとは、實際些と無理な註文ではあるまいかと思はれるのであります。

一片の老婆心

さればと云つて、私は前にも申しました通り、女子敎育其のものを呪ふのでも無ければ、女學校出の主婦が却つて娘育ちの主婦に劣ると申すのでもありません唯私は先に云つて置いた所謂「別問題」と云ふ事に就いて、極めて平易に成る可く露骨に「不思議な謎」を解決しやうと試みた迄なのである。

一片の老婆心は之れにも止まらで、南枝に巢ふ越鳥は北風に嘶く胡馬の眞意(!)を解し難いものである事を忠告して、之れで筆を擱く事にする。

△**深刻なる諺**　「貧乏神が戶口より入るときは戀は窓より逃走す」と。

△**境遇と運命**　同一種の草花にても、日向と日陰との育ちによつて、非常の相違あるは、尙は同じ學校の出身ながら、一は高貴の令夫人となり、一は長屋住居の細君となるが如く、凡て境遇の支配する運命に外ならずと諦らむべし。

女學生の上京を戒むるの文

成女學校主幹　水谷直孝

御手紙慥に拜見いたしまゐらせ候。御申越の趣逐一了承、好學の御精神はさることながら、東京を以て唯一の學問地と思召され、父上の御許可のなきにも拘らず、無理にも御上京なされ候はんとは、乍憚大なる御心得違ひと存じ候。凡そ學問はその人の心懸け如何によるものにて、その東京たり地方たるに關らぬ事に御座候。尤も學問の種類により、若くは最高等の學術にも候はゞ、或は東京ならでは修め難き事情もおはし候はんかなれども、普通中等の教育即ち中學程度以下の學問ならば、地方なりとて決して不便不足はこれなき事に候。否、寧ろ地方のかた却て東京より利益多からんかとも存じ候。そは地方は東京ほど進歩せざる代りに、少年少女を襲ひ誑かす誘惑の魔鬼も少く、平和に安靜に勉學し得る故に御座候。さるを東京ならでは學問は出來ぬものゝやうに心得、父母の心配をも顧みず遮二無二出京したりとて、學資十分ならねば善き學校には入ること得ならず、苦學に初志を貫かんか、是れ決して尋常一樣の事には候はず。されば世なれぬ御身には、時折新聞紙上に苦學生の成功談の登載せられて、多くの稱讚と同情とを博するを見て、我もと思ひたゝるゝは決して無理ならぬ事に候へども、彼等は勤苦勞働せざれば生活する能はざる徒輩にて、御身等とは全く生活の事情を異にし、好んで苦學するものにはこれなく候。それですら千艱萬難と健鬪して能くこれに克ち、成功の桂冠を戴き得る者は、蓋千百中の一二に過ぎずして、大抵は生活難に得堪へずして、中途に挫折するもの尠なからぬ事を御承知相成りたく候。

然るに御身は尙父母覆翼の下に頼るべき幼弱なる婦人の身を以て、徒らに虛名に醉ひ、空想に驅られて、父母の許可をも俟たず、依頼るべき保護者もなきに、ゆきさへすればどうにかなる、といふ樣な空漠たる考にて、漫然一人輦轂の地に到らんとするは、薪を抱い

て火に入るてふ喩よりも今一層危險にして、又實に不心得の骨頂無謀の極みに御座候。今日新聞紙上に囂しき青年男女の墮落が、東京在住の者に多きか、地方より單獨來學する者に多きかを吟味するときは、蓋し思ひ半に過ぐる者あるならんと存じ候。聞說く、我邦有志の青年の、彼の太平洋の對岸なる北米の地に渡航するもの、いづれも皆年少氣鋭の人々にて、足一とたび彼の地を踏まば、功名手に唾して成るべしてふ意氣組にて、徒手空拳、殊風異俗の地に赴き、非常なる困苦と闘ひ、慘憺なる境遇に耐へて、不屈不撓、遂に克くその初志を遂せし者も、往々これなきには候はねども、其の大部分は矢張り墮落の淵に沈淪して、我が同胞の臉面に汚泥を塗るの徒と相成り候て、具眼者をして夙に顰蹙せしめ候次第に御座候。是れと申すも畢竟は、一時の客氣に任せて後の事を慮らざると、人生の樂處たるべき家庭的生活を缺けるとより、不知不識、惡魔の張れる誘惑の網にかゝり、脫れんと欲して脫るゝに路なく、遂にこの極に至るものと存せられ候。東京にも此の誘惑の魔鬼は中々に多く候て、彼等は到る處に鵜の眼鷹の眼、世なれぬ地方の少年少女を見張り居り申し候。何ぼう恐しきことに候はずや。されば御地によしや學ぶべき學校なきとても尙再考を要すべき事なるに、況して立派なる縣立高等女學校の在るありて、父君にはそれに入學することを希望し給ふといふに於てをや。

其の地旣に學ぶべき恰當の學校ありて而も父母の望み給ふところなるに、それを强ひて背乖して遠く異鄕に奔らんとするは、甚しき心得違ひにて不順不孝の罪は決して免かるべからず候。夫れ穴隙を鑽つて相覗ひ墻を越えて奔るもの、之を不義淫奔の徒と申し候て道德の罪人に候。御身縱令淫奔にあらずとも、今若し父母に背いて奔らば、その罪亦これに等しかるべく候。大凡學問と申すことは、勅語にも宣らせらるゝ通り、智能を啓發し德器を成就するをこそ期し候へ。德器を成就すること能はずして、いかほど智能に秀で候ても、眞の學問の人とは申され間敷候。古人も、君に事へて

能く其の身を致し、親に事へて能く其の力を竭し、朋友と交り、言つて信あらば、未だ學ばずといへども、我はこれを學びたりといはむ。」と申されて候。さるを徒に學問の末に走りてその本を忘れ、德性の涵養を勉めずして、強ひて智能の啓發をのみこれ事とするは、謬まれるの最も甚しき者にて、正しき人の與せざるところに御座候。されば御身この度の御思ひ



立ちは、ふつに思ひ止まられ候て、父君の仰に従ひその地の學校にて、一意專心、御勉強なされ候が、人の子たるの道にして、勅語の御主意にも相副ひ候事と存じ候。むかし藤原惺窩先生（名は肅といひ豐臣時代の人にて、德川氏の儒宗林羅山先生の師なり。）は支那に赴いて宋學（程朱學又は理氣學ともいふ。）を研究せんと思ひ立たゝれて、九州まで下られしに、事故

ありて彼の地に到ること能はず、いと殘念に思はれしが、懊惱の末豁然として大悟すらく、『學を爲すの要は心にあり。豈地の彼我を問はんや。』とて遂に渡航を思ひ止り、刻苦研鑽、斯學の蘊奥を極めて、遂に我邦儒學の基を開かれて候。この人素より不世出の偉人にて、常人の得て企及すべき所にはこれなく候へども、亦以て爲學の心にありて土地に在らざる事の明徴となすに足るべく候。

併しながら、東京は輦下の地、文化の淵藪に候へば、其の耳聞目視するところ、開智達識の資をなすこと、亦甚だ尠からず候て、善く之に處しなば、その利益は極めて多大なること勿論に候。されば嚴にして慈愛に富み、寛にして放肆を容さゞる保人の下に其の身を託し、若くは、規則正しくして校風揚り、熱誠と恩信とを以て塾生を監督する學校の寄宿舍に入り、克北なる意力と不撓なる自治心とにて、熱心勉厲致し候はゞ、啻に墮落の虞なきのみならず、その進歩發達の地方に於けるより、更に著るしきもののあるべきは、勿論の事に候。去りながら、斯樣な學校は東京とても極めて多からず候。かゝる保人も亦容易には得られ申すまじく候。父君の輙く御身の上京を許容し給はぬも、畢竟こゝに懸念せられての儀と存じ候へば、此の際は只何もいはずに、其の地の學校に御入學ありて、さて改めて切なる願意を父君に聞え上げられ、そのみゆるしを得て如上の人と學校とを索め、之を得て後徐に上京の途に就かれ候も、亦決して遲かるまじく候。好個の學校、信賴すべきの人、僅少にこそ候へ、絶無には候はず、誠實に索め給はゞ之を得るに於て何かあらむ。既に其の學校と其の人とを得られ候はゞ、父君も亦安んじて御身の遊學を准さるべく候。斯くても尙ゆるさじとはよも宣ふまじく候。これ一案に候。切なる御志の默止し難さに、御參考までに申添へ候。機會を待ちて御試み候べくもや。

さりながら年少子女を遠き他鄕に遊學致させ候には、前述の如き手續の外、愼密なる用心を要し候事は申すまでもなくこの用心を斷きて、濟ひ難き奇禍に

陥らせながら、己が不注意を棚にあげて徒らに人を怨みその子を咎め候は、世間多數の父兄が常に演じつゝある呆劇に御座候。世なれぬ少年少女が父母の膝下を去り候は、譬へば籠鳥の籠中よりいで候如きものに候。籠中の窮屈なりしに引きかへて、物めづらしき自由の林に心のまゝに飛び回り、ゆきたき處にゆき、食ひたきものを喰ひ、恐るるものも候はねば、憚る處もこれなく候。されど〳〵世の中は常に斯く太平無事にはこれなく候て、時々は鷹鸇の恐ろしき襲撃も候べく、風雨に食餌をあさり得ぬ苦痛も候べし。野鳥ならば之を避くる術にも老け、之に處する道も心得居り候はめ、籠中に生ひ立ちし悲さは、いかでかこの窮厄より脱れ得べき。鷹鸇の餌食となり候はずば、飢渇に斃れ申すべく候。さるを世の父兄たちが、漫然として何等の用心もなく、乞ふがまに〳〵放ちやりて恬如なるは、いかにも無責任の極みにて、只惘るゝ外は無之候。一向に思ひ込み候切角の志望を抑へ候て、その進取の氣を挫き候は、素より同意の限りにこれなく候へども、かゝる無責任極まる行爲も斷然(擯斥致すべく候。否、寧ろ大に攻撃を加へざる可らざる儀と存じ候。今や墮落のバチルスは到る處に蔓延候て、その害毒は不健全なるまゝ開けの土地に甚しく、帝都よりは寧ろ二流三流の都市に危險なる處も多かるべく候。されば子女を手放して他郷に去らしめ候場合には、その地の東京たると否とに拘らず、譬へ一歩たりとも膝下を離れ候はゞ、殊に深く心を用ゐ候て、努めそ



の間接の保護監督を怠るまじく候。これ父兄たるものの義務にして又權利にて候。故福澤先生はその二愛子の米國に留學中は、毎週一回必手紙を贈られ候由に候。子を懷ふ親の情はさる事ながら、常人には一寸眞似の出來ぬ事に候。好箇の學校に學び、信頼すべき人の許に家庭的生活を遂げ候上に、毎週一回必慈親の消息に接し候て、その音容を彷彿する事を得候はゞ、その精神の慰安奮勵はいかばかりにか候べき。由來靑年男女の墮落の多くが、精神的慰安の缺乏に原由することは、蓋爭ふべからざる事實に御座候。されば屢手紙を贈りて滾々たる愛の泉をそゝぎ、絕えずその心を培ひ候て非違の芽を發生する餘地なからしめ、又返書によりてその動靜を知り狀態を察し、更に新しき注意用心の資に供し候はゞ、千里の遠きに居り候ても、尙その膝下に在るに等しく候て、墮落の憂は萬に一もこれあるまじく候。さすがは大偉人の大用心、感服の外は御座なく候。この用心候て始めて子女を遊學せしむべく候。試みに此のことを父君に御申し候へ。必首肯し給ふべく候。

御志の餘儀なくは聞え候ものから、そを承りかね候事のいと心苦うはおはし候へども、よしと思ひ候はぬことは、どこまでもよしとは申すまじき頑なる心より、耳に逆ふてふ言の葉をさへ書きつゞけて、斯くも永々しき御返り事をなむ。あなかしこ〳〵。

學校と家庭

江原素六氏曰く昨秋予の中學は甲州地方へ修學旅行に赴きたることありしが當時同地方には少許の赤痢病者ありたれ生ば徒の之に感染すること無からんを注意する爲め一般に水筒を携へしめ初の宿に着ける夜萬一不良の水を入れ居ることもやと試みに各學生の水筒より少許宛の水を貰ひ見しに意外にも一二年級生徒にして既に水に代ふるに酒を入れ居るもの少からざる事實を發見せり是れ學校に於て斯程迄に衞生上の注意をなすにも拘らず家庭が之を放意し居る結果に外ならず又曾て修學旅行の時數十百の學生か旅宿にて就床消燈の後約三十分間も互に親密なる同士相囁けるを聞くに平生品行方正にして成績も良好なりと認むる者迄が淫猥耳を蔽はざる可らざるの語を交えて語り合へるにて茲に良家の子弟も遂にかゝる學生にあるまじき醜事を覺え不知不識の間に墮落するに至る是等は學校に於て何とか嚴重に取締らざる可らず如此學校にも缺點あれば家庭にも不備の箇所多ければ相依り相待つて改良せざる可からざるに學校が家庭の不秩序を愼み家庭が學校の不親切を攻むるが如きは敎育の實擧らずして益々學校と家庭の間を遠ざくるものたり注意すべき事なり云々

冬の美＝十一月之巻

▲小春＝海の音一日遠き小春哉　さらでも吹きし木枯の、こゝ四五日は音を竊みて、日朗かに、鳥も唄ひつ、春にや擬ふ温さ、巣籠りの裝蟲ちゝと啼く夜さりを、歸り咲きせし櫻花の憫れさ、水繪の傘を野面に染むるも、われまた水繪の人となるも、今日を日南の慰みなり。

▲祝ひ着＝七五三の祝ひ着とて、乙女は帶の華やかに男兒は袴雄々しうこそ。さるは緋桃の洋裝に華美を競ひ、水兵服に靴踏鳴らして、宮詣でするいたいけ盛り神もおかしとみそなはすらん、御鈴の響いや冴えたり。

▲冬仕度＝袷も寒く冬仕度の、綿入の小袖取出して、いゝつけの糸をとりぐ＼に、わが子の丈の延びしも可笑しく、去年得し汚點をかこちては、思はぬ袖の綻びも、縫ふに忙はしき頃とはなりぬ。

▲足袋＝素足に下駄の冷たくて、皸に惱める婢女も足袋つぐ年元覺束なし、蹴出に誇りの隼人さへ、紺足袋いかつう穿き古して、四目垣に島田髷の俤見するも興なからずや。

▲初時雨＝さッさ時雨の一しきり、ひき裂く絹の香に通ふて、香爐の煙直にも立つべし、初時雨眉に烏帽子の雫かな、それは昔の風情なり。眉に高帽の雫と云はゞ鳥羽繪に似たる今樣の、おかしの詩ともなりぬべし。要意賢き下駄傘も、時雨に古きを命とせん。

▲蛭子講＝今年の富の庫に盈ちては、また來ん年も幸好かれとぞ、氣のあふた列に並ぶや蛭子講の、ざんざめきたる宴いみじき。荷造りの某が由良之助絶句すれば、飯炊きの權助がお輕、九つ階子の段踏外して、興ある落ちをとるもこれなり。

▲天長節＝おほけなき日の朗かさよ、地に清淨の氣は凝りて、天に五塵の曇りなしとや。實に公けの官司達今日を晴と裝ひかけて、朝に參ずる勢は更なり、百萬の武人が、廣き大野に馬なめて、目出度き砲の響きも、昭代こゝに長かれとこそ。

▲炬燵開＝寒きは霜の屋根に凍てゝ、埋火欲しき此頃

ぞ、老ひに行く夜の肌寒み、寢られで明かすも憂きことなり。未だ溫き日もあらんを、俄かに納戸の爐開きして、塵と掃かるゝ梅もどきの、一つを炭の上に置くも、隱れ住むなる人のわざくれ。

▲落　葉＝ほろ〳〵と落つる木の葉や。繁りし樹々は裸かとなりて、庭に婆婆たる響絶えせず、懊惱さきものと掃き寄せて、焚木の火一つ焚り寄すれば、煙は雲と湧き上りて、土に白きは雪かとばかり、寒き風情の一つなり。

▲木　枯＝あなうたての木枯や、萩も桔梗も吹き盡して、磯馴の松の梢にも、沖の小島の岩にまで、とゝろの響きを聞かせんとや。思ひ〳〵の小鳥が、鐘に散り行く夕間暮を、から尻馬の躍り行くも、またなき憫れをさそふにこそ、秋の餘波の一つ柿が、僅かに殘る板庇に人の氣あひのなきもうたてし。

▲燒　芋＝貧しき町の夕暮を、燒芋の香の高く立てば近きは嗅の前垂に、遠きは絹の小服紗に、包むに餘る賑ひなり。芋は河越の栗よりうまく、鹽は赤穂の雪より白し、戀に背きし憂き人も、これが淡きを賞づればこそ、藁に炊く火の敢果なくもあれ。

▲冬木立＝ありとある葉をふるひ落して、すツくと立ちし冬木立の、二王もさこそ寒くや思さめ、茶店の赤き毛布も眼立ちて、そこに火ありと誰か告ぐべき、天落實、地落實、たゞ凩の吹詫びて、山もあらはの空のみ高し。

▲納豆賣＝霜や降りけん朝の白さよ、橋の此方を納豆賣る聲、いづくの人の妻と知るべき、三歲ばかりの兒を背に負ふて、小籠に納豆の苞淋しう、辛き憂世を辛子入れの、椽も缺けしが身の業とぞ、納豆汁だに啜れぬを、何に生きよのわざくれ憫れ！

▲霜＝初霜の土によごれつ草の色、道に轉びし捨草鞋の、上にも白きものを置きて、橋の欄干いくところか、指もて描きし文字あらはなり。麥蒔く土の裏表にも、掃溜りせる藁の上にも、さては苔にも、燈籠にもわいだめもなく置き亘して、沃野十里の白粉も、今日を寒しの謎を懸けたり。解けや朝日の映す頃を、くるりと反りし病葉もあり。

（完　結）

立志

寫眞版製造を企てたる一女子

翠柳

女子職業の必要は、社會全體から云へば國力發展、女子自身から云へば結婚の準備、或は婚後不幸の豫備其他種々の理由の下に近來大に唱導されつゝありますが、又一方には内助に障礙あり、家庭の平和を破るものなりとて、非女子職業論が唱へられて居ります、ソコで結婚後に婦人が家政以外の職業を致すと致さぬとは、其家庭の事情次第都合次第なので、夫婦の間に小兒も無く、臺所や洗濯物は雇女がする家ならば、細君が資本など讀んで貴重な光陰を過すより何か職業を致すが好都合なるべく、小兒があつても職業を致さねばならぬ事情の家では、勿論雇女を増しても致すの外ないのです。特に資産の裕かでない家で、早く良人を失ふ如き不幸あらば、親類の厄介になつたり茶屋女に成り下つたりするより職業を致して一家を立てゝ參る方が、社會全體から觀ても、女子自身から觀ても宜しいでせう。若し女子自身が職業を致すからと申して、何時離婚されても困らないと力み、良人に對し舅姑に對し我儘を致すなどは、其女子の品性が劣等なので御坐います。品性の劣等な女子が職業を有たない爲に、厭や／＼ながら良人と舅姑の御機嫌を取りますならばそれは茶屋女と異つた點がないのです。斯様な卑屈な

劣等な女を家庭の重なる一人と致す家は、我國には多く無いでせうか。支那や朝鮮には隨分多いさうで御坐います。敢て婦人職業の模範と申す次第では御坐いませんが、未亡人の獨力で寫眞製版業を營み、自己の體面と亡夫の體面を立てゝ居る臼井辰子女史を紹介致しませう。女史は今茲芳紀三十九ですが、良人なる西洋木版彫刻の先輩者臼井仁三郎氏に六年前永訣されて以來、修業せられた寫眞業を執るの傍ら、亡夫の遺志を繼いで、活版挿入の寫眞製版に從事されたのですが、寫眞版の需用日に月に増して頗る繁昌するので、唯今では客寫を止めて專ら此業を執り今川小路に工塲を設けて職工を督勵して居られます。斯くまで意志の鞏固なる女丈夫でありながら、心情は實に優しく温かで、良人の生前には善く仕へられ、昨年高齡を以て永眠せられたる老姑を善く介抱せられた事は、知人の誰もが深く感歎する所であります。女史が家庭と職業との間に苦心された御話は――。

△良人の病身

私は十八歳の時に郷國(尾張)で臼井に片付きましたので、良人は夙に西洋木版彫刻に從事致し、天性器用な上に熱心でしたから、愛知縣下では可なり評判が宜しう御坐いました。丁度明治十九年頃印刷局で試驗の上技手を募ると云ふ事を聞き、製作品を出しましたところ、直ぐに採用されましたので。本人大滿足で出京致す途端に、政府で技手登用を廢止されたので、印刷局からは氣之毒ながらと斷られました、良人は心中大に憤りましたけれども致方が御坐いませんので、折角出京した上は踏み止まつて技術を磨かうと決心致し半年ばかり獨住して居りました。私も長らく良人に獨住の不便をさせては濟まぬと存じ、姑と共に出京致して、四谷に小さな家を借りて住みましたが、私は其時丁度二十歳で御坐いました。良人は家事に少しも頓着なく、又世俗の交際にも疎く、只管技術を磨くのでしたが、元來西洋木版は彫刻に非常な時間を費しますので、これを簡便にする方法を發明したいと、日夜工夫を凝した結果、遂に寫眞を利用して、彫刻上の手數

を省く事を考へ出したので御坐います。斯様な風で技術には熱心でしたが、不幸にして身體が弱く、喘息やら腦病やら種々の持病の爲に一個月間に十日位しか仕事に就き得ないと云ふ工合でして、收入も至つて僅少でした。併し少々の貯へが有りましたので、如何にか生計を立てゝ居たのです。

▲女史の立志

明治二十年頃の東京婦人の事を考へますと、唯今の進歩は實に驚歎の外御坐いません

私の幼少の頃、藩地では割合に女子教育が盛で、年頃の女子をブラ〳〵遊ばせては置



きませず、私の兩親なども至極熱心の方で、身分相應に私を仕込んで呉れましたので、幼い時から無駄に時間を費さぬ習慣が付いて居りました。所が大都會の東京へ參つて見ますと、十三四の娘子が學問するでも無く、御針の稽古に通ふでも無く、遊藝を少し稽古する位で、ブラ〳〵遊んで居るのが多う御坐いました。

私は之を見ます毎に、勿體なくて堪りませんから、餘計な御世話だと思ひつゝも、其娘子の親御に向つて『今のうち何か仕込みなすつては如何です。若し私の様な者で差支なくば、及ばすながら漢學の

片端、裁縫の緒端ぐらゐは御教へ致しませう」と頻りに勧めましたけれども、未だ年の若い私の申す事ゆゑ却つて馬鹿にされると云ふ工合でありました。其時分私も衣食には格別不自由せぬと申すものゝ、前申し上げます通り虚弱な良人が職業に身體を疲らすのが氣の毒ではあり、且つ何時不幸に遭遇するかも計り難いと存じ、今の内何か一の職業を見付け出して、他日良人に別れても自分と姑の生計を立て得る様に致したいと種々考へましたが、子供を集めて教授する事などは良人が五月蠅がりますし、家を明けて出歩く職業も不便であると存じ、不圖思ひ付きましたのは寫眞術で御坐います。これは良人の技術上にも幾分か利益しませうと信じ、矢張り四谷に住へる寫眞師の許へ練習に參ることに定めました。

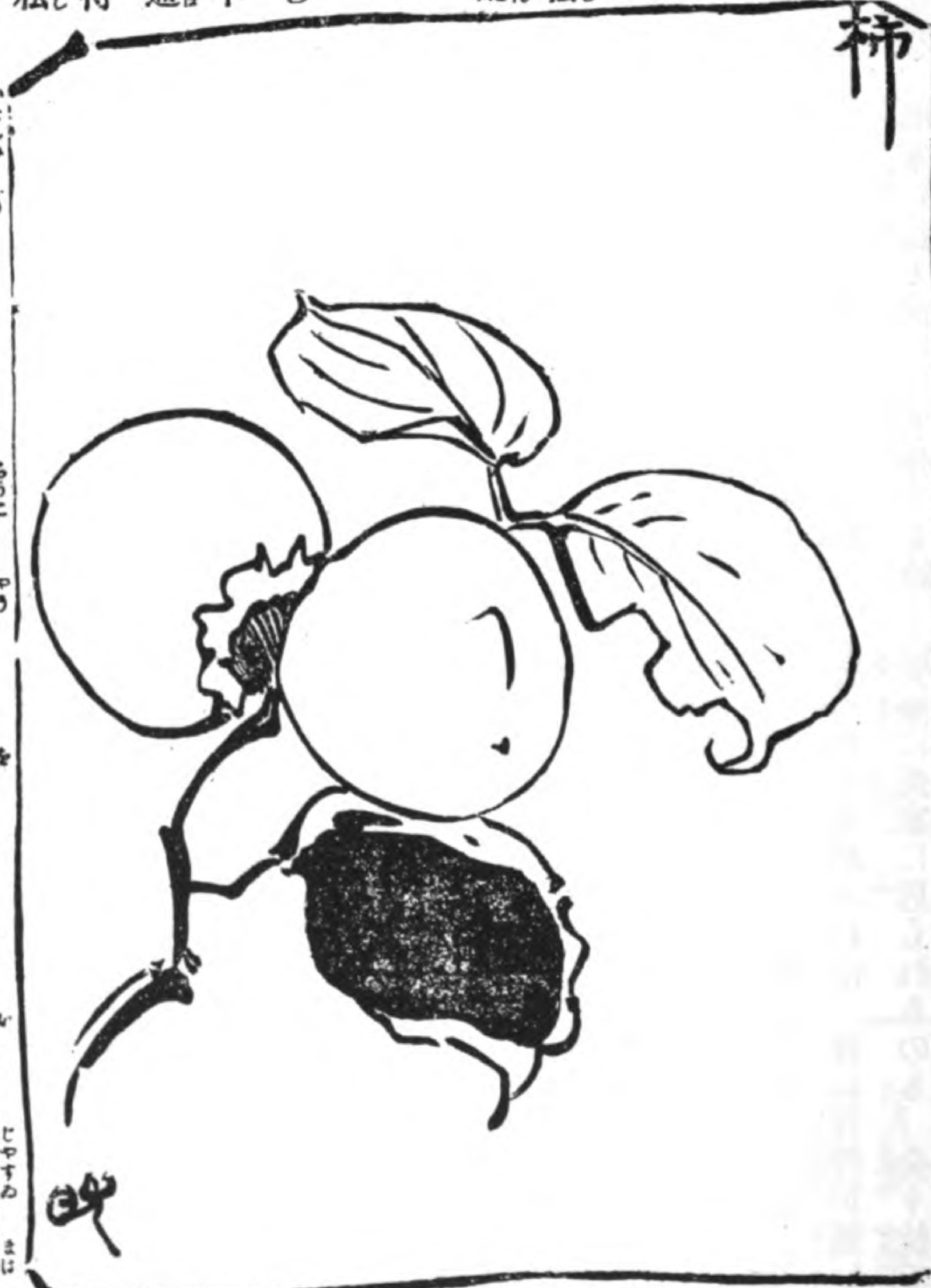
▲家族の反對

寫眞術は容易なやうですが、却々面倒なもので御坐います。單に寫すだけの事は、一週間でも覺えられますが、藥品の加減を呑み込むには、少くとも一年間經驗して、四季の氣候に關する藥品の變化を研究せねばならず。又た師匠方の藥品を用つて稽古すると致せば三年位の年期を入れねばなりません。所で私は一身一家の事情から速成の必要がありますから、藥品は自分持に致し、半箇年程で一通り覺えて了ひました。其代り隨分思ひ切つて、高價な種板や藥品を無駄に致し半箇年間に凡そ百五拾圓ばかりを費したのです。良人は「貴様に何が出來るものか位で先づ不機嫌の方ですし、第一姑が大不平で「一家の妻が斯様な事をするのは間違つて居る、全體汝の示しが惡いからである」などゝ小言は良人にも飛び、私は針の筵に坐つた心地でしたが、此處が辛抱の仕處と存じ、家の用事をば平常より一層氣を付けて働き、詫る様にして良人と姑とを宥め、唯今は無益に金を費つて濟みませぬけれども、成業の曉には必ず生計の一斑を助け得る職業と信じますから、何卒今少し堪へて下さい、必ず善い時が參りませうから……」と何時も此態度で受け流し、人一倍の苦勞で漸く獨り歩きが出來る樣になつたので、試に

質素な寫眞店を開いて客寫を初めました處、幸に顧客も追々殖ゑて、修業費ぐらゐは取り戻し、多い月には生活費の總額ぐらゐ樂に出るやうに爲つて參るに連れ、良人も姑も次第に贊同して呉れると云ふ風で、私の素志も漸く識認されたのです。

▲寡婦の感

良人に別れましたのは六年前、不幸にも私の杞憂通り良人は長命し得ないのでした、私は實に言ふに言はれぬ悲哀に打たれました。老姑と養子との少人數ですから、自分の職業を以て生活するには苦痛もない次第ですが、寡婦となれば様々の侮蔑も受け、言葉にされぬ苦痛が生ずるもので、今日まで切り拔けますには私如き脆弱い女の身に取つては隨分骨が折れました。此苦痛は實際寡婦となられた御方の御胸に宜く御判りでありませう。自然人に對して用心の墻壁を設くる様に爲り、彼の人の言葉は辱侮の意を含んでは居らぬかなぞと入らぬ邪推を廻して負けぬ氣を出すと共に、亡き良人を偲ばれるばかりで御座います。



併し私は不束ながら兎に角職業に就いて居つた御蔭で波風を凌ぐに何程利益があつたか知れぬと存じます。兩夫に見えぬと云ふ節操を曲げねばならぬ境遇となるのも、財產ある方は格別、先づ生活上の關係が主なるものかと考へますから、寡婦となつて益々職業の必要であることを感じたのです。

▲職業と家政の關係

婦人の職業は有益でありますが、既に主婦となつた者が致すには、主婦でない女子より何倍かの心勞と精勵とを要すると存じます。己れの收入ある爲に權利も得られ氣樂も出來ると云ふ考へで致すと、職業ある爲に却つて家庭の不和合不經濟を來しませう。私は至らぬ癖に生意氣を申す樣ですが、前申し上げた通り、非難の中心となつた關係もあり、良人や姑には充分獻身的に盡す精神で居りましたから、隨分兩刀使ひに働きました。朝飯の準備後、職業に掛る前に三十分でも餘裕があれば針を持ち、夜分も、遲くまで針仕事を致して人手に掛けず、出寫しに參る間際になつて午と晩の御菜も拵へると云ふ具合で、却々氣の休まる暇はありません。姑は堅いだけに、先づ嚴ましい側の人で、其歡心を得る爲に私も餘程苦心致しましたが、其代り嫁姑間の調和に就て多大の發明を致したので御座ます。

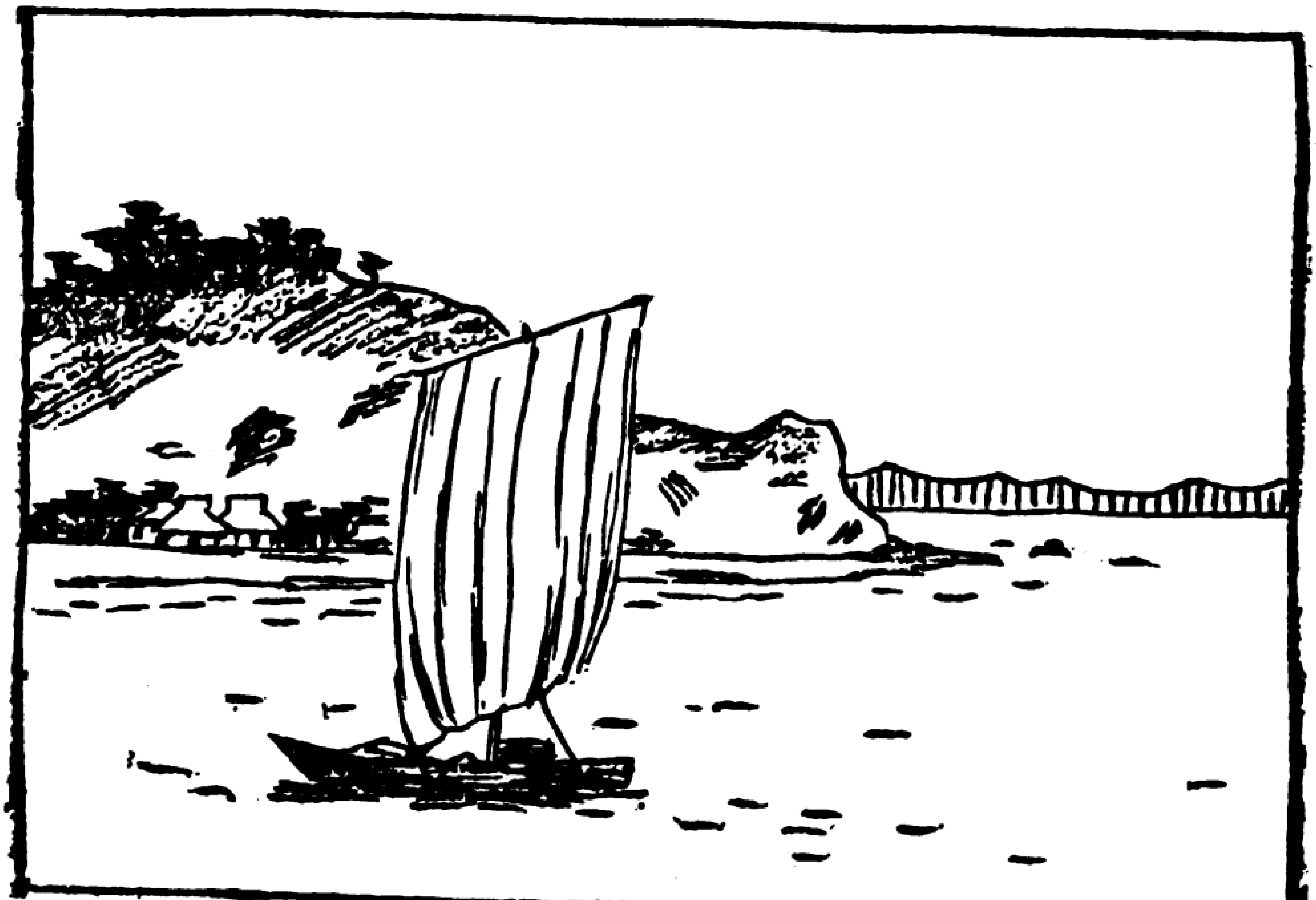
▲老姑の懺悔

愛を以て仕へれば必ず成功すると云ふ信念で、姑に奉仕致した爲め、追々と圓滑になつた處へ、不幸に遭ふて賴み少くなつたから、姑は非常に私を愛する樣に爲りました。良人死去の際、良人の兄弟共が姑を引き取らうと申し出ましたけれども、私は緣あつて一旦親子の契を結び、永の年月介抱したのを、今更他人に世話を賴んでは、折角の心盡しも水の泡となると存じ力の及ぶ限り奉養することを誓ひました。それで近年は姑が私を杖柱と賴りに致し、『昔し汝の職業に苦情を言つたことを顧みれば、實に言譯が無い、今日斯樣して安樂に此家に居られるのも、全く汝の骨折に因るのだ何卒以前の事は免して呉れ』と淚を零して懺悔することもあり、私が外出致す時には何卒早く歸つて呉れと

頼むと云ふ風で、私も一層愛敬の情が深くなり。情交は日一日と密になりましたが、昨年から老病に罹り、手足も利かぬ身體を私に看護されるのを喜びつゝ、今年の春永眠致したのです。私は自分の實驗上、姑と嫁の間柄は、全く嫁の愛敬に依つて善くなると存じます。

▲良人の遺志を續ぐ

私は客寫の方を勵みます傍ら、良人の苦心したゼラチン版即ち寫眞製版を研究致し、聊か熟練しましたので、方々の書店から注文を受ける樣に爲り、此方が繁忙になりましたので、當節は客寫を止め、



專ら製版に從事して居ります此製版業の需要が廣まりましたのも、全く良人の苦心が今日に現はれた事と感謝しますので、不肖ながら良人の遺志を續ぎ得られましたのは、皆樣の御蔭と喜んで居ります。

▲弟子養成に就て

女子で寫眞業御希望の御方も大分御座いまして、屢々依頼致されますが、私は最初御當人に向つて充分氣長に御修業になる事を御勸め致し、若し一二箇月でと仰しやる方は慰み半分で無益ですから、教授を御斷り申し上げるのです前申し上げた通り、藥品の取扱ひ即ち化學上の實驗が短か

い時日では出來ません。餘程會得した樣でも、一本立になるとマゴ〳〵するものですから、御世話致すには期限を一箇年と定め、束脩拾五圓と三箇月分の食料實費だけ申し受け、無月謝で教へます、其代り職業の手傳ひをして貰ひますが、これが修業なさる方に大層實驗になるのです。

▲開業の栞

開業資金で御座いますか、これは室內の裝飾等を奢りましたら限りの無いものですが、畢竟床が疊でさへ無ければ地べたでも宜しく、窓が三尺ほど高ければ用が足りますから、つましくすれば百圓でも開業が出來るのです、玉もエルヂかエルマヂーなら二三十圓で求められ、カビチ位までは是れで充分です、最初から四つ寫しは、滅多に無いものですから、一時これでも間に合ひ臺其他の附屬品が二十五圓か三十圓と見れば宜しいでせう。彼の淺草奧山の寫眞店など、極手輕の實例で御座いますが、最初から大掛りに致すより、手輕にした方が却つて客足の多いものです。私共が開業致した時は、此家の表格子を取つて緣側に直し、上草履五六足も列べて玄關の見付に致し、緣側の階子段から直ぐに二階へ上ることにして、間口二間、奧行六間半の二階をチョット改造致しました。先づ二間に四間半を板の間にして寫眞場と致し、其內一疊だけを暗室に作り、あと六疊敷を應接室として疊を敷き、卓上には花瓶と見本帖、卓子の周圍に椅子四五脚、他に柱掛や姿見など備へました。左樣ですネー、悉皆の諸入費は凡そ三百五拾圓程でしたと存じます。商買は妙なもので、直ぐ向ふの坂上に御承知の鈴木と云ふ大寫眞店がありましたから、如何かと心配しましたが、チョット入り難い處へ、私共のやうな手頃な入り易い店が出來たのですから、開店の當日から一日でも客の無い日はありませんでした。併し收入は誠に定りませんで、何箇月目に資金を取り返したと云ふ明瞭な計算も出來兼ねますが、兎に角生計上の融通は好く爲りまして、追々に絨緞を取換へるとか、一二の裝飾品を增加するとか、僅かづゝ擴張し得られたので御座います。素より

手傳つて呉れる者なく、客の應對から會計まで一切一人で致したので、隨分困る場合も御座いました。最初の内は撮影より應接の方が骨が折れて、兎角客に呑まれて了ひました。女客は左程でもありませんが、少し傲慢な男客に『如何だ女の手で巧く寫るか』などゝ言はれますと、最早ドキマキ致しまして『ハ、大丈夫で御座います、何卒御安心なすつて御寫し下さい、若し不出來でしたら、何度でも寫し直しを致して、御氣に召す樣に致しませう』と口頭では強いことを申しても、



何ですか怖氣が立つので御座いました。追々大勢の客に接するに隨ひ、自然に呼吸を呑み込んで自信力も強く爲り、客を呑んで掛るやうに爲りました。斯うなれば、最早占めたもので、必ず良いものが出來るのですハイ出寫しは報酬も高い代りに氣骨も折れ、且大抵多人數の集合寫しですから、位置取りの爲めに助手が一人は必要なので御座います。私は軍隊などから頼まれます時には、懇意の同業者を助手に頼んで出掛けたので御座いました。

芋粥より成功したる名産婆

婦人記者

飯田町六丁目十六番地に名法官寺島直氏の御住居があつて、其隣に助産婦界の泰斗とも申すべき西尾恭子刀自が住まつて居られます。刀自は天性賢實敏捷にして頗る活動力に富まるゝ方で、上はやんごとなき方様より、下は洗ふ如き貧窮者に至るまで、一視同仁丁寧懇篤に産婦を待遇せられますから、地位ある方は刀自の柔和謙遜と注意周到なのを認識せられ、貧窮者は刀自の義侠心と同情の深いのに感激し名聲と人望は日に月に隆盛に赴き、現に十名の助手を擁して居らるゝに關らず、未だ花見や汐干狩の暇が無いのみか、新聞紙を優然讀むことさへ出來ぬほど忙しいとて、深く喜んで居られます。頃日刀自を御尋ね致して、親しく閑歴談を伺ひましたが、六十三歳と仰しやるに關らず、御顏色から御擧動が矍鑠として壯者を凌がれ、未だ五十四五歳にしか見えないので、其謙遜な快活な御話し振りに、記者の膝は幾度か前みました。刀自の御話は——

▲刀自の結婚と離婚

私は天保十四年八月三日の朝卯の刻と云ふに飯田町六丁目で生れました。父は西尾寛一郎と申し新地奉行を勤めて居り、維新後は昌平堂(開成所)の教授と爲りましたが、昔の武士風で家計の整理と云ふ風な事には、極疎い方でしたから、家計一切の事は嫂の實家で構ふ事になつて居りました。私の縁付いた家は矢張り飯田町でして、鳥商の公債證書賣買の周旋とを兼ねて居りましたが、私の良人は身體が虚弱で商法も思ふやうに出來ず、家計は追々不如意となり行くので、女ながらも何か働いて家計の足しにもと思ひ立ち、産婆に成らうと決心して勉強を始め、漸く東京府の免状を取つたのが明治十七年でありました。私は斯くまで考へましたが、此家を出る事になりました其原因は、良人

が私を嫌つたからで……、私は御覧の通り武骨な人間で、良人に仕へ方が行屆きませんのみならず、最初良人の少々遊びましたのを、私も若氣の際で嫉妬の素振りを致したのが良人の感情を害したので御座いませう。それから後は此惡感情と私に子のないとで益々嫌惡の度が高まりましたけれども、私は自分の不束故と後悔いたし、且つ



昔しの風習で此處を自分の死處と飽迄もかぢり付く決心で、何をされても默從して居るのを、目の上の瘤と倘更厭ひつけ〳〵言はれる事も度々なので『そんなに厭はれる貴所の側に居るのも却つて此家の不利益だから私は身を退きませう。併し假令身は退いても一念は始終貴所に附添ひ、何處までも產婆の修

業を致して、貴方が困窮した場合には及ばずながら御相談に與りませう、今此家屋敷を賣つた金を人手に渡すやうな事があれば私は承知しませんと申して遂に此家を立ち去りましたが、此際は既に衣類も道具も賣り盡くして了ひ、殘つた家屋敷を三百五十圓に賣却し、之れを携へて良人は他に移轉すると云ふ場合でした、去るに臨んで良人は私の辛抱強かりしを褒め、金子も分與しやうと申すのを謝辭して、米櫃に古蠅帳、茶碗に箸、蒲團蚊帳だけを貰つて出たので御座いました。左様ですネ此時は確か四十二歳でしたらう。

▲芋粥の生活

私の離婚は良人に嫌はれた爲めとは申せ、つまる所は私の勝手ですから親戚の厄介になるのも心苦しく、且つ爾後一勉強しやうと云ふ產婆業は其頃誰も輕蔑して居る商賣で、親戚が皆止めて居る際ですから如何しても自活勉學いたさねばならぬ次第でした。尤も東京府の免狀は既に取つたのてすが、私は進んで内務省の免狀を得たい希望なので……。丁度其頃他人の手に渡つて居つた良人舊家の物置を一箇月三十錢で借り受、此二疊敷へ立籠ることと致しました。着替への衣類もない位ですから融通に用ゐる品はなし、命を繫ぐ方法は賃仕事や洗濯でしたが、是れも勉學の餘暇でホンの僅かな收入でした。夫れで日々の食料は引割一錢に薩摩芋の切屑を一錢交へて粥と致し、二食で濟せました。（尤も私は朝飯を食べぬ良人の側に在つて二食の習慣が附いて居つたのです）副食物は唯鹽計り醬油は一滴も買はず、來る日も〳〵甘藷と引割の粥ばかりでしたが、氣の張つて居る所爲か、身體も弱らず勉強も割合によく出來たのです。或時新澤庵を一本もらつた所、珍らしくて旨いのと、暇を惜むのとで、粥も拵へず澤庵をぼり〳〵噛つては水を呑み、二日斗り机にかゝりきりで居つたので腸加答兒を起した事もありました。又或る方から鹽引の鮭を一切れ貰つた其嬉れしさは非常で、毎日ポッチリづゝ樂しみに食べて居た所、團子ほどの大きさになつた際鼠に引かれて了ひました、其折の悔しさと落膽加減も實に非常なものでした。此鹽

引の事は餘程頭腦に沁み込んで居ると見えまして、唯今でも御祝儀の席で結構な御料理を頂く時も、直ぐに鹽引を思ひ出して勿體ないと感じ、偶々魚に飽きた時鳥肉を買つて薩摩汁を拵へイザ食べやうとすると例の鹽引を思ひ出し、嗚呼今日皆様の御引立てゝ斯樣になり、食物の好き嫌ひを申しては勿體ないと心で詫びつゝ食べるので御座います。



▲三日の絶食

物置住居の年の暮に針仕事の種も盡き、一錢の貯へもなくなつた際、絹物の三枚重ねを大急ぎで賴まれたので、出來ぬ腕で無理とは存じながら苦しまぎれに受合ひ三日三晩一生懸命で縫ひ了り、先方へ持つて參るのに三日絶食の揚句

で足元がヒヨロ〳〵致し、門前の石段二つ三つ登るのに如何しても足が持上らなくなりました。一心に縋て居る間は格別こたへなかつたのが、ヤレ嬉しやと思つた心の弛みで俄かに力が拔けたものと見えます。唯今でも其家の前を通ると當時の境遇を思ひ出し、大に鑑るので御座います。宅の弟子を連れて此處を通る時は『貴女達は親御から不自由なく學資を送られて斯樣な味ひを知るまいが、私は此石段に向つて多大の感があるのです』なぞとツイ昔話を致したくなるので御座います。

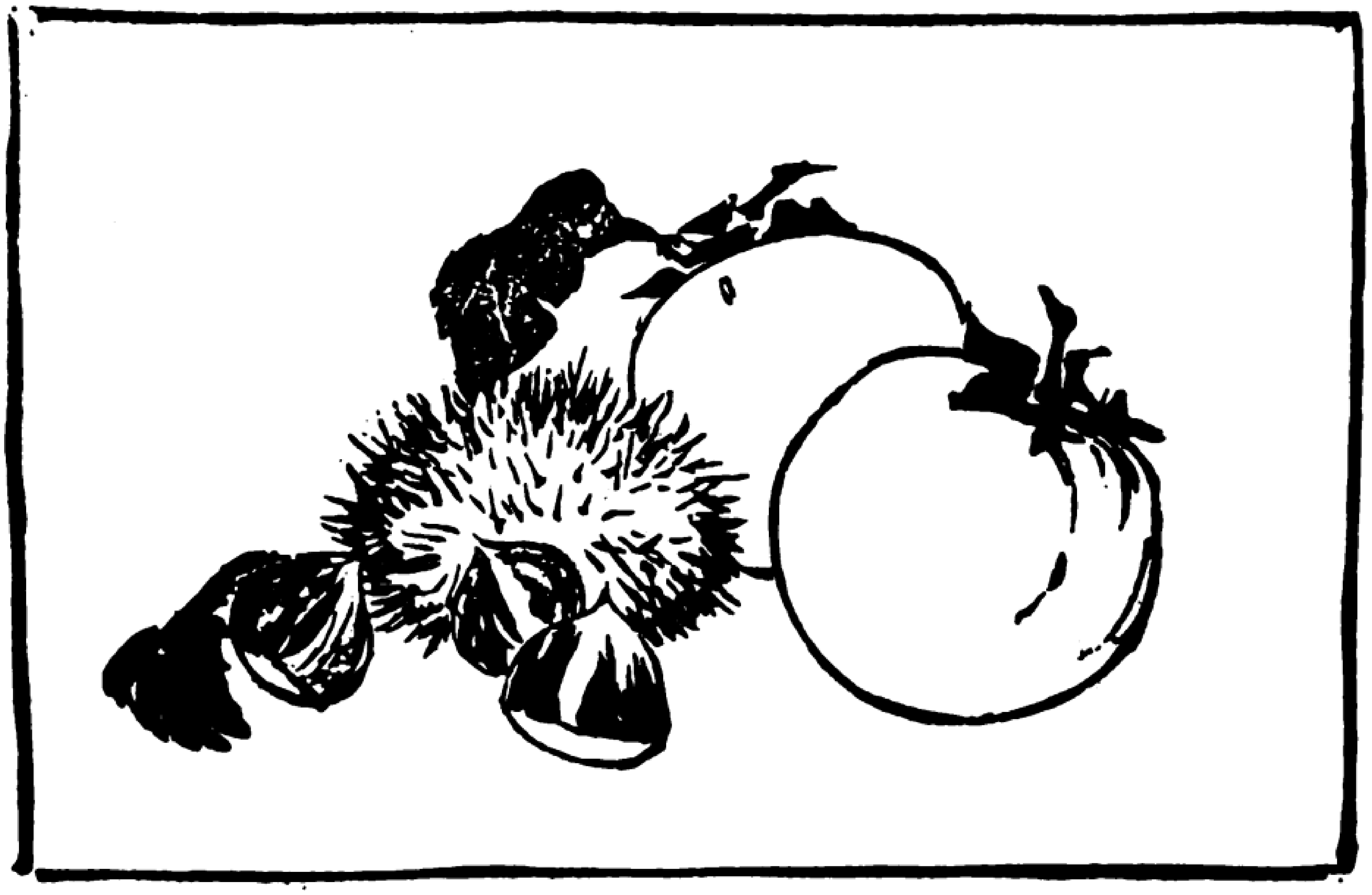
▲七夜着の遣繰

甘藷粥生活の內も東京府免許產婆の看板を揭げて置いたので、偶には賴まれる事もありました。素より中以下の家ばかりですから平常の見廻りには破ぶれた衣服でも濟みますが七夜の祝儀には眞逆膝の拔けた着物でも參り兼ね之れには困りました、生活は例の甘藷粥で僅かの掛りではありますが、聽神器に溫度計、一寸した下げ鞄位は求めねばならず、內職の收入も此方へ注ぎ込むと云ふ工合で一枚の木綿着物も却々買ふ餘裕がなかつたのです、去ればとて親戚へ借りに參るのも嫌だと存じ、母屋の主人から少々金を借りて求めた一枚の木綿着も七夜が濟と直ぐ質入れして金を返し、又七夜が來ると金を借りて受け出し、產家で貰つた禮金で返濟するか、禮金が少ければ又質入して返す。實にせゝくるしい事……僅かの時間に雙方へ拂ふ利子が隨分大きいものでした。其後追々紳士の御家へ上るやうになりましても、衣服の新調は却々困難で始終古着を買つたり、月賦で拵へたり種々遣繰算段したので御座います。私は如何程困つた際にも人の前では愉快氣に致して居ますので、兄弟達も左程の困窮とも心付かず、妹なぞが芝居見物に誘つたり致しますから『私や芝居へ連れて往かれる代りに產婆學の本を買つて貰ひたいナ』と申しましたので、二圓六十錢で此れを買つて與れた事が御座います。

▲刀自の開業當時

甘藷粥の生活も半年許で漸く內務省の免狀を貰ひ、

飯田町の山崎と申す下宿屋の一間を借りて開業致しましたが、依頼者も直ぐには澤山ありませんから、矢張り内職を續けました。併し試驗を終つて差當り勉學の重荷を卸したので、内職の時間もたつぷりに爲り、ハンケチの縫取や、仕立物を致して少しは樂になりました。其内師匠の世話で、ボツ〱産家も出來て參つたので、其頃から醤油を食べる樣になつたので御座います。左樣で御座いますね、私の御得意は極地道に殖えたので却々急に殖えませんでした。始めた年は一人だけ、翌年は二人でしたかと覺えて居ります。先づ斯樣なもので實に微な職業で御座いました。其頃大學で濱田先生が、日本に完全な産婆を養成したいと主唱されて、養成所を大學に置かれたと聞き、負けぬ氣ですから、年老いたのも顧みず、若い御方と列んで大學へ通ひ、此研究科も漸く踏み終りましたので御座います。



▲良人との交際

私が離縁となりました後、良人は然るべき後妻がないので私に周旋を頼んで寄越しました。私も精々詮索致して倉と申す婦人を世話致しましたが、唯今以て之れと睦しく暮して居ります。私は家を去る時誓つた事もあり、良人とは行末普通の交際を續けるつもりですから、先方からは一度も參りませんが私は折々良人の家を訪問して安否を尋ねて居ります。後妻は何時も歡迎して與れますし、良人

とて惡い顏も致さず、營業上の話しを致したりなぞして快く歸るので『此頃は大分忙しいさうだネ、倉や御茶を入れかへて上げな』などと云ふ鹽梅で御座います。左樣ですネー無地の他人とも思へません、マア遠い親類位な感じが致しますネ。唯身體の健康が如何かなぞと始終心に掛りますから、時々訪問致すので、關係を離れて昔話を致しますのも興味があると存じます。

▲刀自の悔悟

方々樣へ上りますと、自然我身の上を顧みることも御座います。或る產家の御主人は、御產を見るのが厭だと仰しやつて、遊廓へ御出掛けでしたが、御產が濟んで三日目に私が伺つた時まで未だ歸られず、加之產婦も赤子さんも產蓐に居られないので、マア如何なすつたのだらうと思ふと、奧樣は手がないからとて便所へ行かれたのでしたが、其跡で三歲になる御兒が、赤子さんを緣側へ抱き出し、緣側からコロリと庭へ落された處、幸ひ巧く平らに落ちたと見えて、赤子さんは泣きもせず、眼をパチ〳〵して庭に臥て居られたのでした。御自分の拵へた御子の產れるのを厭がつて、遊び步かれる良人を少しも怨み怒る御容子なく、忍耐して居られるのを見まして、私はホト〳〵感心致し、自分の良人は眞逆斯くまで冷淡では無かつたのに、離婚を申し出たのは全く自分の我儘であると、熟々悔悟致すことが御座いました。

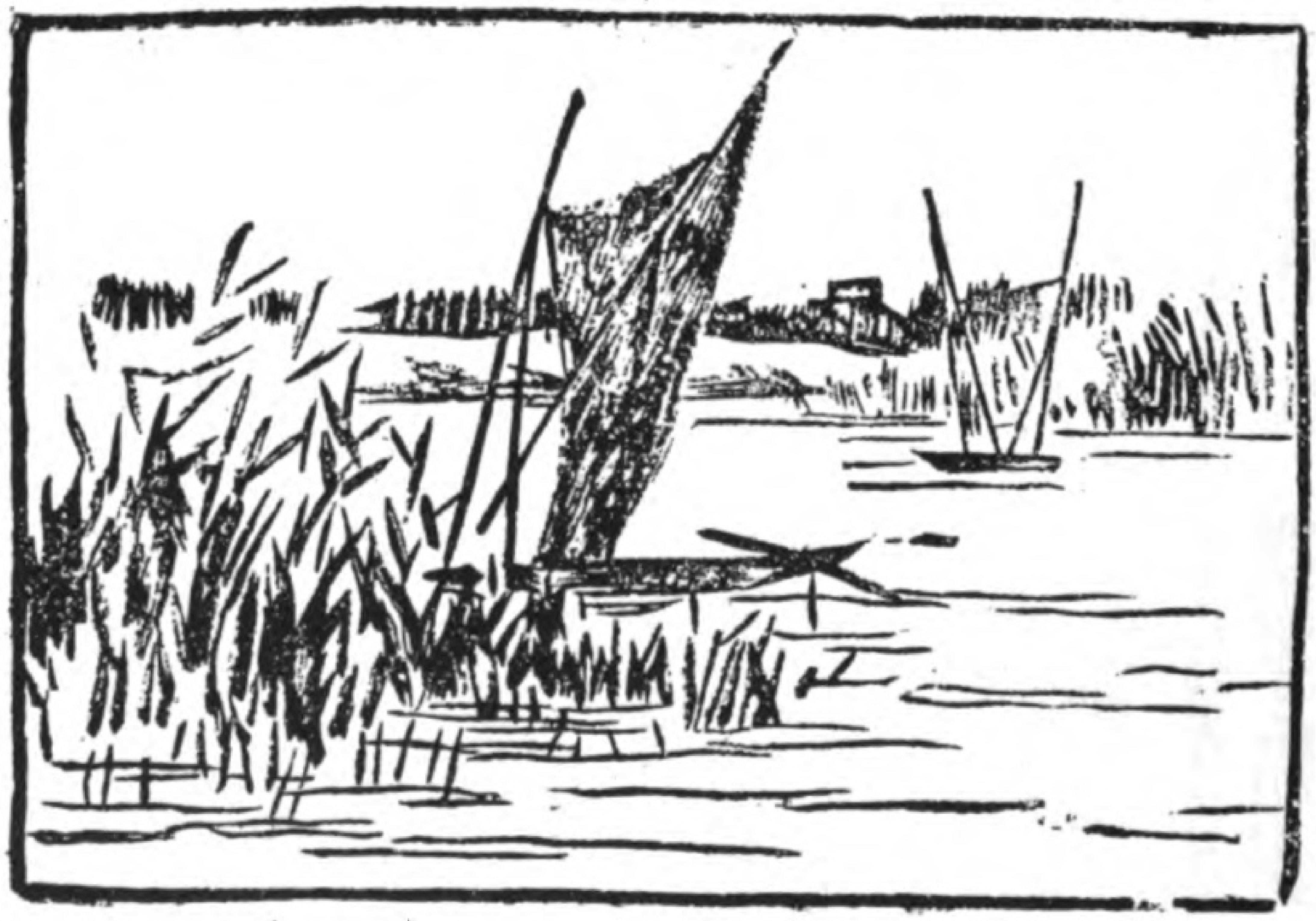
▲貴婦人の忍耐

御產の苦しい事は、上下貴賤の差別なく同じですが、產婦の性質と地位に因つて、其辛抱加減が餘程違ひますネ。裏店の主婦さん達の中には、大聲を揚げて苦み悶え、『腹が引裂るなんて怒鳴る人が在りますが、貴顯の奧方になりますと、それは〳〵御辛抱强いもので、聲を御立てに成る方は御座いません。或る御華族の奧方は可なり難儀な長い御產の間に一言も苦しいと仰しやらず、私の方では御痛みの具合で御模樣を知る爲めに時々御尋ねしても、左程でないとばかり、唯だ御顏を見て御容子を伺つて居つたところ、終にはハンカチ

ーフで御顔を隠されました。私の方では産婦の苦痛の鹽梅で進行の度合が分るのですから、辛抱強い御方には却つて困るくらゐで御座いますが、平生御不自由なく暮して居らつしやるから、御産の塲合には嘸御側の方に御むづかり遊ばすだらうと想像致したのと全然反對で、少しも動せぬ御立派さは、流石に品位の高い沈勇な御氣象と感服致すので御座います。

▲貧しい産家

唯今私の産家は、中流の處が多く、又大きい華族方へも上りますので、私如き者が御貴顯の御愛顧に預りますのは、誠に忝い次第で御座いますが、斯様になりましたのは、全く貧しい方に引立てられたのであります。開業當時の産家は大抵貧困者でありまして、或る車夫の家へ呼ばれました時、窮狀を見兼ねて報酬は要らぬと申しましたけれども、『それでは困る幾ら〳〵と言つて貰ひたい』と申しますから、それぢや二拾錢でも三拾錢でも御心持で宜しいと答へました。スルト『誠に僅かで濟まないが』と申して三拾錢呉れましたのですが、これを聞き傳へた仲間が續々來て、三拾錢で取り上げて呉んなさるさうですネと、向ふから通り相塲にして了ひました。私は是等の方に向つて、決して三拾錢戴かねばならぬ譯では無い、三拾錢でも宜しい二拾錢でも宜しい、假し一錢も下さらぬでも御産の御世話致しませうと、篤と申し聞かせましたので、綿や布なぞを持ち込んで世話する家も御座いました。彼れ是れ過して居ますする內、それ等



の仲間が出入する御邸へ吹聴して呉れましたものですが、漸々立派な御邸へ呼ばれ、又其御親戚や御知己に紹介して下さると云ふ具合で、次第に都合好く擴張して參つたので御座います。斯樣な次第で、私は貧家により是れまでに成つたと存じますから、唯今以て斯樣な貧しい產家を大切に致して居ります。唯今でも貧しい產家が是非必要であると申す譯は、實地研究を望んで居る弟子の爲めで御座います。上流の御邸へ連れて上つて、弟子に內診なぞ致させますと、御產婦が厭がられますから、弟子は手傳ひに骨が折れるばかりで、實地を試みる事が出來ませんが、貧家へ參ると、弟子を主任として働かせ、私は傍で講釋して聽かせるのです。弟子が「先生私には此方の子宮口が判りません」と申すと、「モ少し後の方を內診して御覽」と敎へたり、「臍帶の切り方が長過ぎるよ」と敎へたり、種々指圖致しても、產婦は私が傍に座つてさへ居れば滿足して居ますので誠に都合が宜しいのです。此研究が出來ないと、折角成業を樂みにして居る弟子達に氣の毒で御座いますから、此種の產家が實に必要なので御座います。

▲刀自の道樂

私は如何しても金が溜りません……、全く道樂があるからで御座います。釣りと汐干狩は何より好きですが、何時急な御用があるかも知れませんから心配で出掛られず、假し出掛るにしても金の要る道樂ぢや御座いません。先づ金の要る道樂と申せば、貧窮な產家の世話でありませう。『西尾と云ふ產婆は、困る者は無報酬で取り上げて、其上赤坊の產着まで持つて來て呉れる』と云ふ評判が立つたと見え、此種の依賴が隨分澤山御座いまして、參つて見ると實に可愛想で堪らず、思はず肩を入れて了ふのです。先頃も小石川の貧民町で土方の情婦が產氣付いたとて呼びに參り、往つて見ると、雨風も漏る空家の朽ちた根太板の上へ、薦も敷かずに初產の妊婦が轉がつて呻つて居りました。其內相長屋の親切者が薦だの蒲團だの持つて來て呉れましたが、大穴だらけの蒲團を汚すと返すに困ると申して、如何しても妊婦が敷きませんので、『いゝよ私が受け合

ふよ汚れたら私が償つて返すから安心して此上で產みなさい』と無理に敷かせた位で、漸く產をすませました。七日目に如何したかと存じて尋ねて見ますと、產婦は赤兒を十文字に脊負ひ、酒德利や、石油の罐なぞ澤山兩手に提げて御使屋をする爲めに出掛る所でして、私も驚きましたが、天祐で無事に肥立つた相です。まア斯様のは幸ひですが、貧家で難產となると實に氣の毒なもので御座いますよ。昨年の秋、矢張り小石川に住つて居る砲兵工廠職工の家へ參つた處、主婦さんは前日の朝から苦しんで居たとの事で、診ますと胎兒の位置が横になつて居るのです、迚も一人腕では心配の難產ですから、醫者を呼んでと申すと、亭主はツンと後を向き膨れ返つて腕組して居るのです、それで如何程説得しても聞き入れません。スルト近所の主婦さんが來て、『私の所へ來る產婆は何様な難產でも醫者は賴まないよ、取り替へたら宜からう』と忠告しました。ソコデ亭主が『貴女は歸つて下さい』と申しました。私も居堪れないが、此難產を見捨て、歸る次第に參らぬと心配する內、ふと肝心な事を忘れたのに心付きまして『醫者を呼ぶ入費は悉皆私が引受ける』と申すと、亭主は二つ返事で承知致しました。早速專門の御醫者を迎へた所、產後の養生が此處では難かしいから、大學へ入院させよとの仰せで、亭主は又候後ろ向になりましたが、入院は無料で出來るし、釣臺人足等の諸雜費は私が支拂ふと申して納得させ、漸く入院して無事に分娩致しました。



併し悶着で時が後れた爲め胎兒は死亡したので病院へ寄附いたし、附添は宅の弟子を交代に遣はせ全く肥立つまで世話致しました。此主婦は退院後私の宅へ參り、御蔭様で一命を助かり、且持病の消渇も全然直りましたと涙をこぼして喜び、小さい白玉の折箱を出されたので、此方も胸が一ぱいになりました。此際の諸掛りは割合少くて八圓程でしたが、時に依ると十圓以上自腹を切る事も御座います。此事あつて暫く經てから、壯士體の男二人參り、先達の死兒は國元へ埋葬したいから頂きたい、若し瑕でも付いて居たら承知致さぬと推し掛けましたから「あれはアルコール漬として無瑕に保存してある、欲しければ何時でも返します」と申した所、それきり取りに參りませんでした、これは解剖した事と勘定し、私を金持とでも思つて惡友が强請に來たのでせう。處が私の宅が案外質素なのと、赤兒が無瑕であるとで失望して斷念したものと見えます。

▲干潮と灌腸の間違

長い間には隨分滑稽な失策談が御座います。或る御家で御產の手間取れた際、御主人は少し氣がイラ〳〵なされた容子で、私に「西尾さんカンチヤウは未だですか」と御尋ねなさいました。產氣づいた時は必ず灌腸すべしと云ふ規則を私は何時も實行致すので、此時も既に灌腸を終へた處ですから「ハイ最早先刻濟みました」と申し上げましたところ、御主人は新聞紙を二種三種持つて御出でになつて、御覽成さいますから、急に御產がなくて御退屈な爲めに新聞を御覽成さる事と存じて居ました。スルト御主人は唐突に「西尾さん之を御覽なさい、干潮は未だ一時間も間がある、新聞が噓か貴女が噓か、サア如何です」と威丈高に詰寄られました。私は呆氣に取られましたが、能く〳〵考へて見ますと、潮の滿干で御產を知ると云ふ御尋ねを場合が場合ゆゑ私が勘違ひ致し、灌腸と干潮の行違ひから、御主人の御機嫌を損じた事が判り、雙方大笑ひ致した事が御座います。

▲至急と子宮の間違ひ

これも或る御產の時、私が助手に用を申し付けるの

に、小聲で『至急に何々しなければ可けないよ』と申した處、御産婦も御主人も俄かに心配さうな顔を爲されゝ醫者を呼ばうかと相談なされたので、要らぬ事とは存じながら、素より醫者好きの私ですから、御安産に相違ないのですが御醫者が附けば尚更宜しう御座いますと申し上げ、早速御醫者を迎へに遣られるやら、御家内中がそは〳〵成さるので、私は不思議な事と存じ、斯樣な宜い御産に何故左樣御心配遊ばしますかと伺ひますと、實は先刻貴女が御弟子に囁かれた言葉に宜く聞き取れなかつたが、子宮の何々とか惡いと言はれ、御弟子がハーッと溜息された樣子で、必ず難産に相違ないと心配して居ると、御主人が仰しやつたので、始めて間違の理由が判りました。若い弟子達は兎角漢語を使ひたがるので私もツイそれに感染れて、大急ぎを至急と申したのですが、中程の聲が低くて、後の可けないよが聞えた處へ、其弟子は生憎溜息を吐く癖のある者でしたので、御心配になつたのも御尤もでありました。これも間違が判つて私が御詫び申上げ、助手に汝の癖は誠に宜くないから以後氣を付なさいと小言申し、果ては大笑ひで濟みましたものゝ、御産の場合は御全家一生懸命御心配の處ですから、言葉や擧動は餘程注意すべき事と深く感じました。



▲御服と御召の間違

或る上流の奥方が御産氣付いて居らつしやる際、ナ

ヨツト女中を呼んでと私に仰せが御座いましたので、「奥方の御召ですよ」と御傳へ致すと、女中はハツと返事致しながら、御側へは參らないで、御箪笥の抽匣を頻りに探して居りましたので、斯樣な場合に何を暇取つているのか大層御機嫌を損じました。スルト下女は恐る〳〵西尾さんが奥方の御召物をと仰しやつたので、御箪笥から出して居りましたと答へましたので、私は非常に氣の毒に存じました。私が御召しと申したのを、御着換の御召物と間違へたのは尤もの事、「奥方が御召し遊ばしますよ」と申せば宜しかつたのを奥方の御召しですよ」と申した爲めに、御叱りを受けなすつたのは、何共相濟まぬ事と、只管女中に御詫びしたので御座いました。

▲青くなり赤くなつた心配

初産に死兒を分娩された方の二度目の御産で、大層御心配の御邸へ呼ばれました時、御主人が「西尾さん今度は壯健に生れませうか。貴女は頻りに受合はれるけれども、前の時も或る產婆が受合込んで居つたのに死兒が生れたのだから、今度も如何かと心配する、西尾さん乾度受け合ふかと念を推されました。私は一時間前に診察致した時、盛に胎兒の心臓の音が聽えたものですから、「大丈夫です私が御受合ひ申します」と立派に申しました。それから念の爲めに再び診察致すと如何も心臓の音が聽えません、ハテ不思議と御腹のあちこちへ聽神器を當て幾ら聽いても〳〵全く音がありません。此時の私の顏は火のやうであつたと、後に助手が申しました、本當に私は何と返事しやうぞと穴へも入りたい思ひで、暫く手を組んで考へた時は、顏色土の如く汗は背を濕して座にも堪へられぬ位でした。併しながら姙婦に故障も無いのに僅か一時間で斯樣なに胎兒の變ると云ふことは、長い經驗上に未だ覺えのない事、今一度診てからと復た聽神器を耳へ當てますと、胎兒の音とは違つて、コツ〳〵と紙へ虫の這ふやうな微かな音が、微かながらにも幾らか近く聞えたのです。そこで私はハテナと聽神器を透して見ましたところ、眞闇に塞つて居ましたので、煙管通しを借りて

突きますと大きな蜘蛛が一疋這ひ出しました。先づ宜かつたと安心して御腹を診ますと、トッ〳〵と盛に心臓の音が聞え、程なく御安産で御座いました。これは床の間へ聴神器を置いた間に蜘蛛が這ひ込んだものと見えますが、此瞬間の私の心配は譬へやうも無かつたので御座います。

▲刀自の元氣

私は體質健康である上に、貧苦と戰つて身體を鍛へましたので、最少し若い頃は一日十五里ぐらゐの道も歩きましたし、今以て御産で徹夜が續いても疲れる事は御座いません。昨年の二月大雪の晩に深川の木場から御迎へが參つた際、往がけは車が通りましたけれども、歸りには道が埋つて車が廻りませんでしたので、手道具だけ車に載せ、私は尻端折で吾妻コートを捲つて頭から被り、ドン〳〵降る深夜の雪道を深川から飯田町の宅まで車の後推しで歸つて參りましたが、別に老體にも障りませんでした。爾うして之によつて以前の苦境を憶ひ起し、心靈を清めましたのは、天の賜であると感謝致したので御座いました。兎に角何處樣へ上つても御目出度い場合ばかりで、自分もいそ〳〵と嬉しく暮しますのが、健康の基であらうと存じます。假へ貧家で出産が迷惑なやうな場合でも、今に此御子が成人して何程立身なさるかも知れないから、大事にして御育てなされと申して、自分獨り喜んで歸るので御座います。

刀自は天眞爛熳で毫も言辭を飾らず、職務に對する忠實な精神が、火の燃える如く水の溢るゝ如く、抑えて抑え切れず塞いで塞ぎ切れず、世の姙婦産婦に向つてあらゆる注意を與へたいとて其大畧を漏されましたから、機を見て御紹介致しませう。

△戀愛の攻略　セキスピア曰く「戀する時は四月なれど結婚する時は十二月なり」と

△頭と病氣　頭の細き人は肺病に罹り易く、頭の太き人は卒中に罹り易し、前者は京阪人に多く、後者は關東人に多きが如し。

△京都と東京　人を訪問するに京都の女は挨拶と共に土産物を出し、東京の女は歸り際にこれを遣す。

花の遊戯

學校教育は勿論のこと、家庭教育にもよほど缺けてるのは美育といふ事でせう、世間に此事が缺けてる樣ではまだ〳〵完全に教育されたと云ふ事は出來ません、然し何處の國でも文明進歩の一階梯として、美育といふ事が無視される時があるそうです。西洋あたりでは最うずつと以前だそうですが、早や今では覺醒めて美育といふ事に大層重きを置きます、日本では漸と此頃目が醒めた樣で種々の新聞雜誌に美育とか趣味とか云ふ言葉が見えて來ました、それは當然の事ですけれど、喜ぶ可き現象だと思ひます。

それで今までは無味淡白であつた體操などにも種々と趣味をつける樣に骨を折て居ます、けれど西洋で行はれて居る花の遊戯といふ面白い趣味ある事はいまだに行はれて居ない樣ですから、一つ御紹介致しませう。

この遊戯は最初大きな花束を用意して置いて、その花束の中から各自花一本づゝを引抜いて後、その花の言葉に從つて自分達の未來の良人なり、妻なりの性質を占つたり、又未來の良人の職業を占つたりして遊ぶのです。例へて申せば菫、ヒヤシンス、櫻草、雛菊、遊蝶花、さんざし、水仙等を寄せた花束があるとすれば、其時に引拔いた菫は貞操を意味するのですから、それを引抜いた方の良人なり妻なりは貞操な方だといふのです。いま三四の花の意味を書いて見ませう。

風信子　遊戯家　　櫻草　潔白なる心を有する人

雛菊　早く出世する人　　さんざし　希望に滿てる人
遊蝶花　親切、或は思慮深き人　　水仙　大膽な性質の人
薔薇　愛情のある人　　白薔薇　温和なる人
石竹　寛大なる人　　百合　麗しき性質の人
もくせいさう　聰明なる人　　鬱金香　高慢なる人
薊　愛國心に富める人　　紫羅蘭花　性急なる人
罌粟　懶惰なる人　　麥花　節制なき人

それから職業の方を申して見ますれば

樺　農夫
薊　スコツトランド人或は軍人
鬱金香　借地人　　ぢぎたりす　法律家
金盞花　商人　　はゝきゞ　醫師
木犀　詩人　　とけい草　宗教家
かたばみ　アイルランド人

等であります、勿論花を引抜く人には、花を拔いて仕舞までは何の花だか知せない必要がありますから、目隱しでも爲なければいけません。又冬季は此遊戯をするにも花がありませんから印刷した花札を用いたら可いでせう。

諸孃方が日本にある種々の花に此いふような事を當はめて、工夫してお遊戯なさつたら大變趣味あることゝ思ひお勸め致します。



育兒法の改良

東京外國語學校教授、ドクトル　尺　秀三郎

△育兒法と民族の興廢

育兒法の如何は民族の興廢に大關係が有つて、歴史の示す所に依れば、育兒に就て注意深き民族は益〻榮え、不注意なる民族は益々衰へて遂に絶滅に至るが例と爲つてゐる。今其の二三の例を示せば、彼のカナリヤ島の住民は育兒に就て甚だ無頓着なる爲に其種族は漸々衰へ十五世紀頃遂に西班牙人の爲めに亡された。又南米の昔の秘露人なども甚だ不熱心な方で、インコー國の皇太子の如き高貴の身分の人すらも絶えて人の腕に抱かれた例が無いと云ふ。又布哇の土人を見ると子供が眠れば眠つた儘に放任して着物一枚掛けて遣らうとも爲ない。成程氣候の暖かいと云ふ故でもあらうが、一體が育兒と云ふ事には甚だ不熱心であるから、是れも段々と衰亡し他國より人を入れねば立ち行かぬやうになつてゐる。

△日本人は果して注意するか

そこで我々日本人は育兒法に就て果して十分の注意を拂ふてゐるかと云ふに、西洋の書物を見ると、日本人は父といひ母といひ世界の中で最も忠實に子供の世話を爲る國民であると言つて譽めて居る程なれば、實

際我々は子供を大切に爲るのであらうが、惜むらくは今日迄の遣方には道理上衛生上不都合なことが甚だ多いのである。依つて以下各國の例をも參照して聊か我が育兒法に就ての所感を述べて見やうと思ふ。

△子供は那處に寢かすべきか

先づ第一に述べて見たきは子供を一體那處に寢かすべきかである。誰れしも其れは分り極つた話で下に布團を敷いて其處へコロリと寢かせる外はあるまいと言ふであらう、所が却々左樣で無い。廣き世界の中には種々な風習があつて、桶の中に寢かせるのもあれば、穴の中に寢かせるのもあり、甚しきに至つては樹の枝或は灰の中などに寢かせる風習の國がある。

（一）●●桶の中に寢かせることは小亞細亞に行はれる風習で、子供が生れると之を馬槽の中に寢かせて置く。彼の牧羊者等が耶蘇を見んとて生地ジエルザレムへ行つた所が嬰兒なる彼れは馬槽の中に臥して居たとあるが之れは何も耶蘇一人に限つた譯で無く小亞細亞の人民は皆此の風があるのである。

（二）●●穴の中に寢かせることは亞細亞土耳其の或る地方に行はれる風習である。此の地の土人は、子が生れると、產湯も遣はせず着物も着せずして先づ近所の川に行きて洗ひ、家へ歸つて乾燥いた土を掘りて穴を作り其處へ子供を寢かせて上から同じ乾燥いた土を掛けて置く。翌日になると之を取り出して又川水で洗ひ更に元の通に遣つて置く。と云ふやうに子供の大きくなる迄幾度となく恁んなことを繰返すので、彼等は之を以つて衛生に適ふと稱してゐる。

（三）●●樹の枝に寢かせることは多く南米伯剌西爾邊の土人間に行はれる。然ならば「梅の小枝に晝寢」も爲やうが、之れは鳥ならぬ人間の子供が樹の枝に寢るのだから珍らしい、此の邊では妻が子を生む頃になると、夫は裏庭に出て豫じめ適當な樹を撰み、そして子供が生れると其の樹と樹との間に布を張つて其處へ子供を寢かせて置くので、之れが子供の寢床である。一體此の地は蛇、蟻、其他種々なる害蟲の多い爲めに子供を下に寢かせる時は自然是れに襲はるゝ恐がある所ろから

斯くは寢床を空中に吊すのである。

（四）灰の中に子供を寢かせるとは些と考へられぬと作ら、之れは中央亞非利加のホッテントット人の間に行はれて居る。此の地は日中は、子供を單だ皮の袋に入れたのみで置くけれど、夜は急に冷氣を増す故に子供を皮の袋に入れて爐の周圍の温かき灰の中に埋めて置くので、之を燒芋式と謂つて可からう。

斯樣に子供の寢かせる場所も種々あつて、利益な點もあれど又弊害も多いのである。そこで我々日本人のするやうに布團を敷いて子供を寢かせる方法は如何かと考へて見るに、先づは比較的衛生に適つたものと言つて可からうが、併かし之を以つて最上の方法とは言はれまい。と云ふ譯は、全體布團を敷くのは疊の上であるから、子供は到底低い所に寢ることになり、從つて室の下層にある汚れた空氣を呼吸し、塵埃は目や鼻に侵入して、諸種の病原を作る機會の多きは當然であらう。併かし日本の此の慣習は容易に改められるものでも無く、又我が家屋の構造は障子唐紙などで圍はれて上下開け放すことも出來て空氣の流通も宜よければ今日の儘でも格別の害は無からうが、若し出來得る事なら布團の上に寢かせるよりも矢張り西洋流に高い寢臺の上に寢かせるやうにしたい。



△子供は如何に寢かすべきか

子供を布團の上に寢かせるにせよ或は寢臺の上に寢かせるにせよ、其

の寢かせ方か亦大切で、西洋諸國に於ては學者が種々研究して其の改良を圖つてゐる。曾つて墺太利の維納に萬國博覽會のあつた節、其處に子供博覽會を開くこととなつたので、其の委員等は父や母の爲に何か有益な事を遣つて見たいと色々考案の末、遂にアイル博士、メツサラ教授等が主に爲つて最も衞生的なる子供の寢かせ方を示して、大に世人を益した事實は蓋し其の最も著しきものであらう。

で一體子供を如何云ふ風に寢かせたら好いかと云ふに、其の身體を眞直に仰向に爲て兩手を胴の兩脇に延べさせ、關節の曲らぬやうに寢かせるのが第一である。それから日本では子供に高き枕を爲せるからチヤンと口を結んで寢るが、歐洲邊ではたゞ少許の毛を入れた低い袋を用ゐる爲に、苦しげに仰向に反返つて大きな口を開けて呼吸を爲る。然るに斯く大きな口を開けて寢て居ては、病毒を含むだ黴菌が口から直ちに人體の要部を侵す恐があり、幼少の頃は特に其の危險が甚しいのである。鼻から呼吸を爲ると第一鼻毛と云ふ物があり、且つ道中も長いから危險も從つて少くなるが、口を開けて居るとなると其の恐るべきは恰度味方の首腦部が敵に曝露するに等しいのである。去れば兒童研究家カトリンの如きも未だ日本の子供が枕を用ふるを知らず、僅かに北亞米利加の土人中に子女に枕を爲せて、頭を高くし自然に口を閉ぐやうに爲て寢かせるものあるを見て『此の點のみは吾人は實に野蠻人より學ばざるを得ず』と口を極めて賞賛したのである。

右子供博覽會の委員等は以上の寢かせ方を容れて、大理石を以つて可愛い子供の寢像を作り、其の一は枕を爲て口を結んで仰向にすや〳〵と寢て居り、他の一は枕を爲ずに口を開けて苦しげに寢て居る樣を公衆に觀覽せしめて大に喝采を博したと云ふ。

△子供の抱寢は廢すべし

次に子供の抱寢と云ふことは何れの國でも行はれるが此は深く戒しむべき事である。何故なれば、抱寢を爲れば第一子供は乳房を含んだ儘で寢る故、其の眠る頃には自然口を開けて寢ることとなり、從つて前に述べた如く黴菌に侵される危險があるし、又母親の吐く汚れたる氣臭を吸はされて非常に健康を害する。加之、子供に乳を呑ませる頃は母親の最も眠むい時であるから不知不識子供を壓殺する恐がある。此は我國でも往々新聞紙に出てゐるが、歐洲邊でも兎角之れが多いので統計迄も揭げて抱寢の害を論じた者がある。之れに依て、倫敦市に於ける這般の壓殺された數を見るに、近き七十二年間に四千九百八十八人と云ふ多數に上つてゐる。我が東京市なども若し綿密に調査するならば隨分之れが多からうと思ふ。去れば我國で子供の爲に高

い寝床を作るとは困難であらうが、子供を仰向にして雙手を伸べさせて成るべく獨りで寝かせる位は是非共奬勵したい。

△シュミット式の寝床

序に述べるが、寝床で最も好く出來てゐるのは獨逸のシュミット氏の考案に成れる寝床であらう。子供は些とでも熱いと兎角着物を踏み脱ぐ癖がある故、子供の寝床には第一之を防ぐ工夫か要る、又其の身體は極めて柔軟いから、成るべく重みの掛からぬやうにして、手足の運動を自由にさせ、胸部の壓迫を避ける工夫を爲なければならぬが氏の寝床は能く此等の要求に應じてゐる。其の構造は兩方の縁を高くして覆蓋を作り、其の上より着物を掛けるので、何程着物を掛けたとて身體に重みの掛かる憂は無く、又如何に足で蹴つたとてたゞ其の覆蓋を蹴るのみで、着物を踏み脱ぎ得ぬやうに爲つてゐる。



△子供は如何に抱くべきか

以上子供の寝かせ方を述べたが、生れて間も無い子供をたゞ寝かせて置くのみで運動させることを缺ぐと、子供の身體は肪脂分ばかり増して筋肉の發達を防げる故、其の運動法として時々抱いて遣ると云ふとが必要である。然れ共これも餘程注意しなければ大に子供の發育を害するとがある。御承知の如く子供の身體は非常に柔軟いので、些の抱癖も直ちに筋肉の發達に影響する、然るに其の身體は小さくて輕い爲に誰れしも兩手で抱かずに只右の手のみで抱く癖があるので、子供は何時も同じ方向に爲つて、抱かれる親に身を寄せるから、遂に脊髓彎曲になることがある。去れば子供を抱くには能く此の邊に注意して

或時は左方に抱くと云ふやうにして、常に脊髓の中正を保つことに力めなければならぬ。

又我々が子供を抱くには其の可愛い顏の見られるやうに仰向に爲て抱けど、伊太利人は之に反して俯向に子供に地面を見せて抱く。此の點は何うやら我々の遣方が文明式で、伊太利式は體裁は惡ろく、衞生上から言つても胸部に重みを掛けて甚く子供に害がある。

△子供を負ふ事は廢すべし

子供を抱くと云ふ事は隨分手の掛かることで、且つ抱手も疲勞れる、殊に雙手で抱くことに爲ると其の爲に他の仕事が出來ぬ、そこで今少しく便利な扱方が無いかと云ふので工夫されたのが子供を負ふと云ふ方法である。が、一體之れは子供の爲で無く、親の便利の爲に出來た方法であるから、如何な負方も矢張り子供には有害である事を免れぬ。今其の負方の一斑を示して見ると。

(一)埃及邊では子供を背に負はずして肩に負ふのである。即ち子供を肩へ載せ、其の兩足を自分の胸と背に出させて、頸部を片手で子供の身體を支へて居る。埃及の市街や小亞細亞邊は皆此の風であるが、之れは餘程古くから行はれてゐると見えて、紀元前八百八十年頃のアッシリヤ國ザルダナパル皇帝の墓所の裝飾に矢張り恁う云ふ摸樣が刻んである。

(二)ダマスタスでは子供を後から肩車に掛けて前へ兩足を下げさせ片手で後から止めて居る。ニューホルランド、グリーランド邊は皆此の風である。

(三)亞非利加の野蠻人等は夫は安逸を貪りて妻が却つて勞働に從事するので、子供を背に十文字に結ひ着けて田を耕したり採薪に出掛けたりする有樣であるから、子供の苦しむ樣は思ひ遣られるであらう。採薪の歸途は子供を薪の上に載せて來る。

(四)ヒジアンと云ふ民族の婦人も亦同じく勞働に從事するが、子供を上の方に負つては耕作や米搗などの際に自分も子供も苦しいと云ふので子供を腰に負つてゐる。家で饂飩粉を煉るにも矢張り是れだから、煉粉を轉がす毎に子供の苦しむ樣は實に殘酷極まるもので

ある。

我國などにも矢張り右の樣に子供を背に十文字に負つてゴロ／＼と味噌を擂ッたり米を磨いだり爲る風があるので、子供に取つては隨分迷惑な話だから、何うか速に此の蠻風を一洗爲たいと思ふ。

（五）ホッテントット人は些と負方が異つてゐる。彼等は羊の皮で子供を負ふのであるが、其の皮を剝くときに四足の皮を附けて取り、其の前足を左肩と右脇から出して胸部で結び、後足を腰へ廻はして前で結び、而して子供は母の右脇から頸を出すやうに負ふのである。何故恁んな風に負ふかと云へば、之れも母が多忙しくて乳を與へる毎に下したり負つたり爲るが面倒だと云ふ所から考へ付いた便法で、母は其の儘で子供に乳を與へる。去れば初めて子を有つた母は兎も角、子供を澤山に有つた母は、不斷乳房を引張られる爲に右の方のみが非常に長く爲つて居る。

（六）中央亞非利加の蘇丹（スーダン）では腰骨の高い所に子供を負ふ、即ち腰骨の處へ子供を載せて足を腹と腰とへ廻はして負ふのである。此れが習慣と爲つてゐるから、恰度ホッテントット人の乳房と同じ譯合で此の國の婦人は腰の肉が發達して高く凸起してゐるので、小供が大きくなると退屈凌に折々其處で躍るなど却々滑稽である。

以上述べた外に、胸部に負ふもの、頭に戴くもの、袋に入れて脊負つて歩くもの、袋に入れて鞄を下げたやうにしてゐるもの、或は袋鼠のやうに着物に附着せる袋の中へ入れて居るもの等種々なる負方があるが要するに孰れも子供の筋肉を壓迫して其の發育を害するとは一方ならぬので、若し子供の爲を思ふならば斷じて負ふ事を廢すべきである。

△負ふに代はる考案——乳母車

今日少しく開化したる國にては皆子供を負ふ事は有害なりと覺るに至つたので、之れに代はる考案として先年巴里の醫師デードー氏は、散歩用の爲に小さき籠を車の下に附け其の中へ子供を入れて挽いて歩くと云ふ輕便な方法を發明した。之れは子供の筋肉を壓迫す

る憂は無くて至極衞生的に出來てゐたが、之を輓くと云ふ事が稍々不體裁であつたので、汎く用ゐらるゝに至らなかつた。

そこで之れに代つて出來たのが例の乳母車で、倫敦に於て初めて行はれた。此の車は御承知の如く前方に籠を置いて後方から押す樣に爲つて居る爲に、人力車や荷車の樣にも見えずして體裁も好ければ、又子供の樣子を眺めつゝ歩かれると云ふ便宜もあるので、恐くは現今最も進歩したる仕方であらう、一度倫敦に此の車の現はるゝや佛獨の諸國に於て競ふて之を採用したとを見ても其の價値あるとが推察される。我國の如きも近來追々乳母車の盛に爲るは喜ぶべきであるが、我輩は何うか此の風を今一層盛にして背に負ふ舊慣を全然打破したいと思ふので、子供を負ふと云ふ事は衞生上から見ても體裁上から見ても到底開明人の爲すべき所で無いと信ずる。猶委しいことは拙著「子ども」（本郷　育成會出版定價五十錢）を讀んで載きたい。

遠州流挿花大會

鈴川生

風流を語り韻事を言ふ、必ずしも時を選ぶに非らざれども年豐かにして太平なる秋より愉快なるはなし、今茲涼秋十月十五日遠州流挿花大會は兩國元町兩國倶樂部（舊井生村樓）に開かれたり、會するもの元祖本松齋一得翁の門葉全國を通じて一百餘名挿花の出品二百五十餘瓶に及び斯道近來になき大會なりき、記者は此の日招かれて席末を汚し、遠州流一派が如何に全國に瀰つて擴まり居るかを目擊せり、由來挿花の流儀は三派に分れ池の坊、古流、遠州流と稱して、各其挿花法を殊にするが中にも遠州流は二派中の尤も缺點とする所を補ひ、新たに一新生面を開いて、古流池の坊の間に流行發達し來れるものにして、其枝の巧妙を以て大に世にもて囃さるゝに至れり、而して本松齋一得翁が初めて遠州流と稱して、此一派を開いてより、代々門葉の高弟其の師匠の名を嗣いで本松齋一得と稱し、累世傳へて今は五世に至り當代は東京市四谷傳馬町一丁目三十七番地に住し、專ら斯道に勵みつゝあり、地方遼隔の地にして、門葉生の多き所には最寄〳〵に目代或は師範代と稱へて、幹事の如きものを置き子弟の親密を保ち、年々數回の往復をなし以て、益々斯道の隆盛を圖れり、今秋の大會はこれ等門葉子弟を統一し、全國を通じて培々斯道の隆盛を企圖せんとするにありて、斯道研究者に取りては、一段の進歩を加へたるものと云はざるべからず、猶當日地方より出壜したる社中の諸子及最も遠州流の流行しつゝある重なる地を記すれば、兩毛地方、八王寺町、神奈川縣溝ノ口、信州長野、松本、上田、茨城下館、水戸、湊町、古河、加賀金澤、土佐高知、高松市、大分縣、青森市、八ノ戸、富山縣、札幌市、宇都宮、福島其他關西中國に及ぶと云ふ。

庖廚

日常料理の心得

秋穂割烹會主事　秋穂益實

料理は一種の技術で高價な材料を用ゐたからとて必ずしも美味く出來るといふ譯でなく其撰擇は各自の工風に在るとですが玆には衛生と配合とに就いて一寸申しませう。

(一)食物の組織を軟かにして容易く消化の出來るやうにするは、衛生上の最要件。

(二)食物に味をつける事、イクラ牛肉は滋養分に富むと云つても毎日同じ煮方では飽きるから種々に方法を變へ美味しく食はせるやうにすると。

(三)肉の中には種々なる寄生蟲と蟲の卵とがあるから料理の力を以て之を殺し、害にならぬ樣にすること。

(四)食物に配合をつける事、例へば鮪の刺身の赤きに、大根卸しの白きもの、菜の青味を添へて趣を作るやうな事。

(五)食物の組合せをよくする事、例へば餅の後におろし大根を喰べれば直に消化して腹が空くといふ樣に食物は其組合せの物によつて大變消化力に關係がある、又ビフテキの如き生燒の肉には、萬一蟲の卵が生きて居てはならぬから之を殺す爲にポテート(馬鈴薯)を添へる、其他脂肪の強いものには靑物の如き含水炭素物を添へて身體を組織てゐる成分を過不足なく適當に補ふて行く事に努めねばならぬ。

右の外廢物を旨く利用し、又は安い品物でも料理の方法を以て美味く食はせ、經濟と衛生とを兼務めるのは其人の技倆次第であります。それに是非何人も心得ておかねばならぬ事は左の三要件です。

(一)水を清潔にする法　一手桶の水に明礬の粉末を一匙ほど混せて三四時間も經てば汚物は皆水底に

沈澱する。

(二)野菜類を軟かに煮る法　一升入の鍋ならば一匙位の炭酸曹達を加へて茹れば柔かになる。

(三)鰹節貯藏法　酒を塗りて風の通る處に置けば何年經つても變る事なし。

お咄をすれば一冊の本にして盡きませんが心得は此位に止めて、更に臺所の設備、其他食器の整理等に就いて申しませう。

△臺所の設備改良

日本の臺所が今日の如く不潔極まるのは、前にも述べた通り、臺所は元來汚いもの、又穢くとも人の見る處でないから如何でも可いとして、少しも之を顧みないから穢い所が益々穢くなつて行くのみならず、凡ての設備が不完全ですからドウしても淸潔になる道理がない、之を改良して行く日になると一から十まで改めねばならぬが、先づ最も急を要する點から云へば第一に

〔流し元〕の改良です、家中で最も淸潔でなければならぬ臺所の流元が最も汚いものになつて居ます、平土間の隅に木板を並べて其上で顔も洗へば唾も吐くといふのが今の世には隨分多いです、猶酷いのになりますと襁の洗濯までして、其飛沫や黴菌が桶の中や鍋釜等にかゝつたのも知らずに、平氣で飯も炊けばお蔬菜も拵へるといふ次第。本統を云へば土間を漆喰で固めた上へ一段高く、陶器か石で拵へたいものですが、爾うも行かぬ場合には切めて流板を亞鉛板張にして、土間には石灰を撒き、決して不潔物を洗はぬ事に定めたいものです。次は

〔臺所の棚〕です、西洋では卓子の様な臺を設けて其上へ一切の炊事道具を載せておくから一寸塵埃がかゝつても直ぐ掃除に便利ですが、日本の棚は上から高い所へ吊してあるから埃がかゝつても見えず隨つて掃除も行届かぬ、之は少し位場所をとつても是非西洋のやうにしたいものです。

△食膳の改良と戸棚の掃除

それから食卓の改良、ですが、ドウも日本流の塗膳

では、元來愉快であるべき食事が窮屈を感じます、お客などをした場合には尙更です、之は人數相當の長方形の座食卓を設けて家內一同、若くは主客共に卓を同じふした方が、互に氣がくつろいで食事も旨からうと存じます。また食卓には白い敷布をかけて汚れたら直ぐ洗濯をする樣にすれば食事は何時でも奇麗で不快を感ずることはありません。

●●●●●●●●●●

［食器其他を蔵めて置く戸棚］の如きも鼠不入とは名のみで、鼠の糞やら肴の骨やら散々に散ばつて居るのを、半月も一ト月も放つておく家もありますが、衛生上甚だ宜しくない、可成なら中の汚物が見え透くやうに戸を悉く硝子張にして掃除は一週間に必ず一度と定め、西洋人のする樣に、隅から隅まで石鹼をかけてブラッシで擦り、奇麗に乾燥せしめた後物を納れておきさへすれば決して戸棚の中から蟲の湧く樣な憂はありません、兎角日本人は食器を洗ふのに石鹼を使ふのを汚いものと思つて居ますが、これは習慣上の考へ違ひです、西洋では硝子杯から匙から俎までも石鹼で洗ふ事になつて居ます。

△竈はストーブに限る

中流以上の厨房には個々ストーブの設けがあつて煮炊一切の料理はこゝで辨じられる樣になつて居ますが、普通一般の家庭では、大抵改良釜か、瓦斯竈か或は在來の土竈に限られてゐます、右の中何れが最も便利であるかと申すに、私の實驗上、少し價は高いけれど燃料が經濟で便利なのは、ストーブです、之も新しいのなら百圓近くするが中古で買へば四五十圓で、十人位の家內なら充分間に合ひます。五十圓と申せば一寸馬鹿らしい樣ですが一度買へば末代道具で薪炭の經濟も中々大きいです殊に普通の竈では冷えて燒魚などを温めるに一寸困難ですが、ストーブなら肴でも洋食でも直ぐ皿のまゝ温められる樣になつて居ますから來客の際などには至つて便利で且つ他の竈のやうに灰や燃落しの散亂する虞がありません。又燃料には石炭、瓦斯コークス、薪何でもよいですが就中普通の堅炭が一番使い可い樣です。

△七輪の置場と清潔法

臺所が不潔になる一つの原因は、七輪を隅つこに置いて灰が立つのを構はずにおくからです、之を防ぐには七輪を載せる高い臺を拵へて臺所の中央に置けば一番宜いですが、それも場を占ると思つたら、竈の側に据えて毎日灰を取ればよし、之を高い臺に載せておけば第一埃を掃ひ易く、立つたまゝで料理が出來るから衣服の裾を汚す場合が少ないです。又主婦でも下婢でも凡て厨房に入る時は必ず白い前垂を懸けることを忘れてはなりません、白いものを着て居れば直ぐ汚物が眼に立つから自然清潔にせずには居られません。之が料理衛生の一大要件です。それから釜は屢々尻を研かねばなりません、煤煙が堆れば熱をうける度が少くて薪炭を多く費すから、不經濟です。

△食器の洗い方

凡て食器を洗ふに石鹸を用ゐ、次に熱湯を注いで乾いた布巾で濕氣を拭き去らねばならぬ。

●〔箸〕は使用後直ちに熱湯を以て洗滌し日光に曬すべき事、客の用ゐし箸は傳染病の虞があるから必ず二度と使つてはならぬ。

●〔爼板〕は日本では腥爼板と精進爼と二通りですが之は使用法を知らぬからのことで、若し一々石鹸をつけてタアシで洗へば臭氣などは全然去ります。

●〔庖丁〕爼と同じく洗方に注意して布巾で其都度濕氣を拭いておけば甘味と辛味と交る樣なことはない。

●〔膳椀〕は餘り熱湯で洗ふと塗の禿げる虞れがあるから、之は水でザッと洗つた後、布巾を熱湯に浸して絞つたので拭く事。

●〔鍋〕舊式の鐵鍋と當時の瀨戸引とは一得一失で、汁物などは瀨戸鍋が便利で熟煮やうのものは、鐵鍋の方がよいです、洗ひ方は熱湯を注いで灰研きにして置かねばならぬ。但し銅製のものは(有毒分を含む)可成用ゐぬ方がよい。

●〔魚燒網〕普通の柄の附いた魚燒網は、肉が燒附くから、料理屋で使ふやうな金串の方がよい。其他茶碗、小皿、丼、平鉢等の陶器は凡て熱湯と石鹸とで洗ひ淨

めて黴菌を防ぐ様にしなければならぬ。又衛生上最も注意を要するのは、食器を拭く布巾で、之は一々新しい物を取替るには及ばぬが、洗濯だけは必ず怠ってはなりませぬ。

△西洋食器の清潔法

洋食の器は特更に脂肪分が強いから、それを分解せしむる爲に一層強い熱湯と石鹼とを用ゐねばならぬ。

●●●●〔フォークと匙〕とは使用後、能く熱湯で洗滌し濕氣を拭いた後、普通の齒磨き粉をつけて紙で拭いておけば銹の來る憂はない。又、

●●●〔ナイフ〕を光らせるには、「パプリキ」と云ふ煉瓦に似てモ少し軟かい粉末で磨けば奇麗に曇りを去る事が出來る、日本の庖丁の如き亦然り此パプリキは普通西洋食品店にあります、一個二十錢内外で三十年位は使用される。呉々も注意して欲しいのは、出來得る限り主婦が臺所の人となり西洋の如く、一週間に一回づゝ必ず厨房の大掃除をすることに定めて頂きたいものです。（完）

◎神經衰弱者の採るべき食物

神經衰弱病は專ら營養不足の爲めに神經系統を犯されたものである、この病氣に罹るものはまづ勉强過度の學生、心勞の多き事務家、生活上に苦勞の多き人、產後の婦人、外科的にて失血せし人等に多い、されば、この病人に與ふる食物は成可く少量で榮養分の多い食物がよい、茶、咖啡など神經を興奮せしむる樣の物は一切禁じなければならぬ、其代り、熱い牛乳、コヽア、果實の汁などはよい、すべて適度の運動、睡眠、滋養ある食物、幷びに仕事の變化、精神的休息等はこの病に最良療法である、野菜類ではオランダミツバ、獨活、菠薐草、葱などは便秘を利して一般に身體に力を加ふる者であるから適當な調理を施して供給するがよい。

◎熱病者に與ふる食物

熱病に對しては二樣の注意を必要とする即ち一は組織の消耗を防止すること、一は營養を續ける事、一體この熱病といふ奴は甚だしく消化力を弱めるもので、人に依つては一寸とした熱に罹つても食慾が殆んど皆

無となつて、稀粥も飲めぬ様になるものである、故に斯様な場合に強いて力をつけやうとして強い食物を與へるなどは甚だよくないのである、そして其の熱の爲めに身體の組織は非常に消耗するものである、されば斯の患者に對しては殆んど幼兒の如く、若しくは嬰兒の如くに思つて給養しなければならぬ、即ち牛乳の如き流動食物の外に與ふる事は不可ないのである、大體の熱病は身體の組織が甚だしく熱して水分が大に不足するのであるから流動物を多量に與へなければならぬ若し腸に病氣がある時には專ら胃で消化され、吸收されるやうな物を與へなければならぬ、又熱病患者には穀物や脂肪を含んだものはよろしくないから、與ふる事を禁じ止むなくば極少量を供せよ、又渇を醫する爲には水の代りに薄くした果實の汁、ウオーターアイス(菓物の汁を凍らしたるもの)幷に冷したる牛乳などを與へ、又鷄卵を入れた果實の汁などは至極よろしいが、しかしあまり下痢でもする時には果汁は注意して量を少くせねばならぬ。

こゝに看護上注意すべき事は病氣の當時にあつては醫師が其の必要とする食物を指定するので別に特殊の注意も要らないけれども快復期になツて來ると少々困る場合がある、何故なれば身體は熱の爲めに弱められて居るにも拘らず、食慾は進んで居るから急に種々な物を食ひたがつて中々押へきれぬ事がある、この場合に當つて少しく看護を等閑にすると病人は食慾の爲めに遂に其の身體を破るに至るものである、熱病者の死の原因は多く熱の去つた後の食慾に起因するものであるからこの時期は尤も大切に思はねばならぬ、醫家の金言にも「母は熱病より快復せし愛兒の要求を拒むを以て頓に其の子に慈悲なるものなり」とある、「あんまり彼の子が欲がりし故、可憐さに堪へずして遂に與へたるより彼は遂に死せり」とは子を失ひて愁傷に沈める母親の繰り言である、戒むべきは快復期の食餌也。

△鰯の卯の花ずしの拵へ方

鰯の頭と腸とを取去り腹より割り骨を拔き去り酢に

鹽を加へ其中へ鰯をひたし置き豆腐のおからを煎りて一寸五分位の長さに丸め、酢にひたしたる鰯にくるむなり。

△からみ飯の按排

豆腐を一寸五分四方あつさ三四分位に切ざつと湯でて鍋におき香料は七色唐がらし山葵、生姜、茄子又は粉山椒などをよしとす食する時まづ茶碗の中に茹でたる豆腐を入れ七色唐がらしを一つまみ入れ其上に温き飯を盛り鰹だしの沸立たる汁をかけ蓋をなして食卓に出し交せながら食すれば辛味の香氣を發して風味よし。

△梅花玉子の作り方

玉子を沸湯に入れ十五分間茹で、水に取りて殻をむき、黄身と白身とを分け、並玉子十個につき砂糖半斤の割に用意しその中の三分の二を黄身にまぜ、殘りを白身にまぜ、いづれにも鹽少しづゝ加へ、別々に裏漉して少し濕はしたる拭巾をひろげその上に白身を平にのしひろげ、その中に海苔巻のしんのやうに黄身を置き、拭巾ごと巻きてその兩端を糸にてしばりその拭巾巻の周圍に五本の箸を同じほどの隔りにあて中央をしばり三十分間蒸籠に入れて蒸し、あつきうちに拭巾を取り小口より適宜に切りて出すなり。

△五目玉子の燒き樣

鷄卵をこわし、その分量の五分一の位のだしを入れ醤油砂糖を少しづゝ加へ別に鷄肉を細かにたゝいて、味淋と醤油にて味をつけ、又海老の皮をむきて細かに切りたるもの、及び燒のりをもみ右三種を玉子の中へ入れよくかきませ、油をひきし玉子燒鍋に流しこみ、あまり强からぬ火にて燒くべし。

△鱈の甘煎

まづ鹽出したる鱈を一寸角位に切り、沸騰せる湯の中にてゆで、だしと砂糖で煮、煎へかけし時醤油少しを入れて煎あぐるなり、別に八ッ頭芋の皮をむき、大賽に切り、これも沸湯でザッとゆで、鱈と同じ樣に煮、又新牛蒡を皮をむき、一寸位の長さに切り水につけて灰を出し、沸騰湯にてゆで前の樣に煮るなり。

小兒の寢具

嬰兒の體質が、寒氣に對し抵抗力の乏しいとは誰も知つて居らるゝ通ですが今日此頃の冬空世の母親達も種々苦心されて居るとでせう、併し日中ですと注意も行屆きますが、夜分は隨分困ることもあります、さて私の考案は極めて平凡ですが、出來得る丈廉價にして仕立方簡易なるものを二つ三つ、實際に施して多少効果を得たものを御紹介申します。

▲寢衣　地質は出來る丈輕暖なる綿類を撰び、上部下部各別々なるを用ひます、これは上腹部より上の方のと、夫れ以下のものなので、上部に用ゆるのはネルか袷仕立て、普通の小兒改良服仕立の、手のこまぬものを用ひ下部は一般の女學生が穿て居る袴の樣なもので、これは薄く眞綿を入れて置きます、それからおしめは三角形ので取換へが容易に出來る樣にして、紐は殆ど用ひず、小さき安全ピンや、ボタンのみで、帶樣のもので腹部を締る樣なことは致しませぬ、此の寢衣は睡眠中誤つて衣服の下部を汚した時でも、横臥其儘に取換へるとが出來ますから、乳兒の目覺ぬ樣にも出來るのと、腹部、下腹部の露れぬとの益があります。

▲敷蒲團　これは懸けるのよりも厚くし且つ左右部に綿を少し餘計に入れ、乳兒が蒲團の中央に正しく眠り得る樣にしてあります、併しこれはあまり多く入れると嬰兒の活動が自在に出來ませんから、あまり多くは要しませぬ、それから普通の蒲團の上に更に薄きものを腰部以下に敷て、敷換の出來る樣にしてあります、これ一は腰部以下を冷さぬ爲と、汚した時の準備で御座ひます、それから枕は平たく大きいのをさせて居ますが、外す樣な心配はありませぬ。

▲懸蒲團　これは出來る丈輕く、出來る丈暖き方法を採つて居ます、目下は小なる毛布と一枚の夜着とです、此夜衿は、普通に謂ふ夜着の袖のないもので、譬へば箕の形ちしたものです、これは肩を露さぬ樣にするとも出來、また重からぬ利益があります、尤も綿は裾の方に多く入れます。

要するに頭部は暖めぬ樣、足部は冷へざる樣にとの注意から、且つ呱々の産聲を揚げて以來獨寢をさせて置きます所から、どうすれば安心して寢ませる事が出來るかといふ考へから、斯樣な風にして居るので御座ひます、併しこれは特に世の母親達の考へられたことで、私の考案が陳腐なものであるならば私は一層喜ぶ次第です。（一女子）

衛生顧問

私がこの欄に生殖病や秘密病などの問に答ふるのを彼是と陰で批難してゐる方があるさうだ、けれども熟々考へて見るに、これ等の事を面と醫者に向つて尋れにくいが女の情である然るに之を匿名で一枚のはがきを出せば來る五日にチヤンと其答が載つてゐる、これが衛生顧問欄の價値ある所以であらう、されば將來益々これ等に答ふるを以て余の本旨とします。（米　左近）

（問）十五六歳の頃より腋臭に相成り、撒里矢爾酸など色々塗けて試ましたが効有りませぬ、如何致したら宜しいでせうか。（本町雄子）

（答）單寧酸軟膏を中年も續けて塗けて御覽なさい、時節柄最も單簡なる療法は栗の皮を煎じた汁で洗ふも亦頗る功あります。

（問）私は七十に垂んとしてゐる父一人を此の世のたよりにしてゐる女に候が何卒此父が何時までも長命延壽するやう、其の養生法を御教へ下され度願上候。（播磨の千鶴子）

（答）九月十月の中學世界誌上に於て述べたる「長命十法」を讀んで頂きたい。

（問）冬になると手の赤くならぬ方法を教へ賜はりたし。（肥前の手赤女）

（答）イヒチオール二、〇をアルコール百瓦に溶かして塗け、外に出るときは必ず手袋を嵌められたし。

（問）入月より今日に至るまで毛髮がぬけてたまりませぬ、何卒これが療法を御載せ下され。

（答）刷子を以てドン〳〵頭垢を取り除き、度々加里石鹼（藥屋に賣つてゐる）を塗けて御洗ひなさい、さうすると拔ける丈の毛は拔けますが、後の發育が宜くなつて直ちに挽回出來るのみならず殖えます。

（問）酒精を皮膚に塗けても害無きものに候や。（わくらは）

（答）害無し。

（問）妾等皮膚に俗に云ふカザボロシが出來、手足がかゆくて堪りませぬ、この療法を書かるゝの勞を、な惜しみ玉ひそ。（駿河の愛讀女）

（答）毎晩米の磨汁を沸し、これにて皮膚を洗ふこと責めては中年續くるの勞を、な惜しみ玉ひそ。

（問）幼少より秋期から春の暮にかけて顔には俗に云ふハタケが出來て掻けば痛みを覺え困り入り候、この療法を御教授下され度（長崎鍛冶屋町の二十一歳女）

（答）これもイヒチオール二瓦を酒精百瓦に溶かして塗ければ大抵は治りませう。

（問）近眼は不治に候や又其の度の進まぬ方法あらば教を乞ふ。（肥前の近眼女）

（答）殆んど不治なり、適度の眼鏡をかけて、時々遠方を見る稽古をなし、滋養物を多食して能く運動すれば豫防は自ら其中に在り。

（問）子宮より白き粘液下り醫師に診察を乞ひたれば入院せねばならぬと申され候が、私は中々入院出來る身分ではありませぬ、何卒これが

治療法を御願申候。(淋しくさける葉女)

(答)子宮病には種々有りて、何れも白き粘液出るものである、されば唯これだけの容體書では何とも判斷し難し、併し折角の御尋故、一寸其の療法を記せば撒里矢爾酸一瓦を温湯二合位に溶かし、餘り冷たくならぬ中に、之を以てお洗ひなさい、又鞣酸一瓦を凪利設林一瓦に溶かし、これに清淨綿を浸し之を挿入することも試みられよ、勿論房事を禁ぜねばならぬ。

(問)密陀僧を買はんとて、方々探せども無し、如何致して宜敷や。(紀伊日高郡愛讀者)

(答)一名酸化鉛と申しますから、さう言つて尋ねて御覽なさい、それでも無くば大都會の地より取り寄せらるゝより仕方無し。

(問)慢性子宮内膜炎の治療を怠らず實行すれば凡そ何ケ月にて全治致すものに候や。(以下文意不明)(兵庫縣みどり子)

(答)同病でも輕重に依つて大いに差がある、況んや慢性の者に至つては何とも答へ難し。

(問)癜風の療法を御教示に預り度候。(阿波豊町北野猿)

(答)ナフトール五瓦をアルコール一合程に溶かして塗ければ治る。

(問)充寄丁幾五瓦レゾルチン十瓦ベルガモツト油三瓦アルコール二百瓦の合劑は如何なる部に塗けても有効に候や、又生ゆ可き所に生えざるにも宜しきや之を敎へ下され度候。(信濃の心痛女)

(答)如何なる箇所も同じ、殊に後者の岡に有効なり。

(問)私事本年廿九で三人の母と相成りますが、何時にも妊娠四五ケ月より外陰部が非常に痒くて實に困難致し居り候、先生何卒あはれと思召して御敎を乞ふ。(横濱たれ女)

(答)夜は仰に臥れ、撒里矢爾酸を温湯中合に溶かし、冷えてから洗ふ可し、其餘皮膚の清潔法が肝要である。

(問)綿入を着たり又は炬燵にあたりなどすると身體がチタ〳〵何かに刺される様な感じをもちます、これを治す法を伺ひます。(松代信州女)

(答)寒い揚句に急に暖まるからでせう、左うせぬやうにせられたし。

(問)鼻汁及び痰の分泌多きを普通にする法を御教示下され。(北海道アイヌ女)

(答)呼吸器に何か故障あるのでせう、若し然うとすれば其の原因療法をせればならぬ、例へば肋膜炎の爲に痰の分泌多いのならば、其の肋膜炎を療治すれば自然と痰も減るやうな道理である、又若し別にこれといふ病氣も無くば、鼻汁及び痰の多いのは發汗の少い爲であらう、大いに運動し、ドン〳〵汗を流すが何よりの得策である。

(問)火傷の跡へは決して毛の生えぬものに候や、若し生ゆるものならば藥名等の御敎を乞ふ。(芝村はぎ子)

(答)火傷の度にも依るけれど、大抵生えぬと諦められたし。

(問)子宮サツクの衛生上に於ける可否を御伺申し上候。(新潟縣心配女)

(答)これに就いて或醫者は其の効能を述べてゐるけれど、余は斷然排斥論を主張する。

(問)半年計前から月經は二十日に一回の割合にこれ有り、其頃より漸々顏色蒼白く相成り心配致し居り候、其の原因療法を敎へ玉はりたし。(大坂昆婦)

(答)月經は大凡四週間目に平均半合多くて一合までのものである、然るにこれより早い日限内に屢々有るとか、或は多量あるは病的でせう、原因は精神感動、心臟肺臟の病、子宮病、入浴過度、房事過度、黄疸病又は手淫などである、療法はこの原因に依ることとなれば、何とも爰に答へ難し、一般に身體を安靜にし、可成平臥するやうに位置を取り餘り多量に經通する場合は陰部に氷囊を當て、滋養の食品を取り、精神を愉快に暮すこと肝要である。

(問)燒酎で煮たる酒臭い料理を食べしむれば、酒が厭ひになるとは本當のことでせうか、又別に害は有りませぬか、實は私の夫は非常なる大酒家で前途心配に堪へられませぬから、是非共これに答へられたし。(神田區の眞實婦)

(答)道理ある事にて、西洋の醫者達もそれに似たる方法を主張してゐる、而して何等の害は有りませぬ(酒を飲めぬ人には害あれども)行うて御覽なさい。

(問)糸先生よ、何うか〳〵痩せる方法を御敎へ下さいまし。(以下煩文略す)(大々的肥女)

(答)脂肪を含める動物性の食物を當分廢し、又可成液體を飲まずに、度を過ぐる位に勞働せられよ、必ず痩せます、併しながら身體を衰弱させぬやう御注意ありたし、前門の虎を逃れて後門の狼に逢はぬやうあらま欲し。

(問)肺尖加答兒に罹り轉地療養致し候處、大抵全快し歸宅致さんと存じ候が併し毎日午後の三時過より足冷え胸のつまるやうに感じられ候、如何致して宜敷候や。(相州鎌倉郡片瀬にて宮崎しづ子)

(答)歸宅なさる丶所は何くか知られども、兎に角轉地療養せられた位ですから、歸らる丶土地よりも暖い所に相違無い、然るに今や向寒の節、されば此冬だけ片瀬に逗留然る可くと進言致候。

(問)「黑色コスメチツク」といふ鬢附は白髮染の代りになりませうか。(丹後の四十弌郎)

(答)卽効は無いけれど、久しい中には段々染つて來るさうです。

(問)月經不順の時、蘆薈葯剌巴丸の外に、何か簡單ならぬ良藥ありますまいか。(大阪の道頓婦)

(答)運動を盛んにして、毎晩臥床に下半身浴をなされば遂に月經不順を全治するやうになります、併し折角の御尋ゆゑ左の處方を記しておきませう。

蘆薈丁幾　二瓦　泊芙蘭丁幾　三、〇　水　百瓦(半合)

右一日三回に分服すべし。

(問)皮膚の質あらきに如何なる藥を用ゐて宜敷候や今までに御答これあり候ひしならんも、私は七月より讀み始めたる者に候へば、枉げて御答を乞ふ。(上野のカラ〳〵女)

（答）滋養多き食品を取り、適度に運動して身體を健康にし、又屢々入浴して皮膚を清潔にすることも大必要である、其他

　硼酸　五、〇　滑石　二、〇　單軟膏　二〇、〇

の三品を能く混ぜて、夜分睡る時に塗け、明朝になつて、之を洗ひ落すこと毎夜續けて御覽なさい。

（同）薔薇油２％の硼酸水とを交ぜて、顔を洗へば、色白くなるし、食鹽水にて髮を洗へば毛色黑くなるとの事、果して眞實に候や。（京都の今紫式部）

（答）白くなるかも知れませぬが請合かれます、但し决して害にはなりませぬ故御試みあれ、次に食鹽水は幾分の道理あります。

衛生小話　三峰山

糸左近

季節衛生の原稿を書かうといふ時に當つて、小說も及ばぬ面白い因縁談に接した、して又其話は甚だ衛生に關係するのみならず、この季節柄にも恰好なれば、今回はこれを以て代りとします。

昨年の十一月廿五日、日まで覺えてゐる、余は何と無く晩秋の山景色を探つて見たいといふ好奇心が起きて堪らぬから、之を學生の菊地といふに相談すると、「東京の近邊では三峰山に限りますれ」斯う云ふ、この菊地といふは秩父の小鹿野町の者で、三峰山より程遠からねば、この邊の地理に頗る通じてゐるとのことだ。

「では早速同行して貰はう、就いちや一切徒歩主義だぞ」

「それが何より面白いです」

そこで、余は洋服に草鞋、菊地は木綿の紋附に小倉の袴、これならば別に可笑しい事も無いが、可成手に物を持たぬやうにと、二人共笠を冠つて行つた、實に妙與挺な姿であつたらう、併し此笠が抑も此話の種になつたのだ。初日は浦和、次は熊谷、次は大瀧と三晩宿つて、四日目に秩父の大宮に着いたは午前の九時、休憩店に腰掛けながら澁茶一杯啜つてると、菊地は歯が痛み出し、續いて非常なる胃痛を起して來た、仕方が無いから、草鞋を解いて、奥の坐敷へ上り、早速鹽酸古加乙涅（麻醉鎭痛藥である）を買に遣つて、塗けさせたり、服ませたり、介抱したれば、それでも午後の一時頃に全く氣持も清々したとの事、

「今日は一日此所に逗留しようぢや無いか」と、余は勧めたが、菊地は仲々承知せぬ。

「ナーニ三峰山の絕頂までは、此處から五里しか有りませぬ、大丈夫です行きませう」

今か今まで呻つてた者が斯う云ふのであるから、余もこれに勵まされて、「ぢや行く所まで行つて宿らう」これより大急ぎに急いで、テクテク歩き出した、けれども晩秋の短い日足は逃げるやうに去つて、麓の大瀧村に行き着いた時分は最早五時、日もトップリと暮れて、ヒユー〳〵と吹く三峰颪の木がらしは、シン〳〵と身に泌む。

一心込めての願事なれば
　峰の狼ゆるしてくれ

歌唄ひながら、パタ〳〵と轡に調子取らせて歸る馬子の聲は、遠近に聞ゆる、余等は何の願事も無いことなれば、狼の許を請うて、夜中峻しい山を登つて行くやうな勇氣も出ぬ。

で、これから何れかに宿らうと、探したが宿屋らしい家は一軒も無い、何程の禮でも爲るからと頼めども我等の可笑しな風をジロジロ眺めては「己が家は宿屋はしましれい」といふ、「しましれい」とは「せぬ」といふ此邊の方言ださうだ、さア斯うなつてから、大宮で宿れば宜かつたと悔いた所で、又四里の路、腹は空いて來る、肌は寒い、何うしたら宜からうと、色々苦心した末、一策を廻らした、これア何でも「女學世界」か「中學世界」の讀者を探すに如くは無いと、漸く聞き出したは「櫻井善平樣のお娘は豪い學者だけな」との一語、早速尋ねて行けば、藁葺の大きな門の中に、玄關拵の立派な家は、白壁造りの土藏二棟と共に竝んでゐる、余は先づ事の始末を述べ、笠の理由も諸釋し「決して怪しき者では有りませぬ、何卒宜敷御取次をして下さい」と、名刺を出したれば、稍々小半時と經つてから「ぢや何のお構も出來ませぬけれど」と斯う言はれた時の嬉しさは、何とも斯とも拙ない筆では書けぬ、鷄の羹に柚を香はせ、お皿はオムレツ、酒も今までの宿屋とは違ひ、フーゼル油の香はせぬ、この樂しい晩餐も終んでから、主人公を始めとし、妻君より例のお猿、近所の人々までが、ズラリと坐敷に竝んで、「毎々女學世界の衞生記事を面白う讀んで居ります、何うか今晩は御出になつたを幸として、質問を願はれませうか」



「私の知つてる限りを御答へ申しませう、徹夜しても關ひませぬ」

これからが愈々本文に入るのだ。

第一に主人公から問を發し、

「私は斯の樣に身體が肥滿してゐますから、嘸や健康だらうと人樣は仰しやいますが、自分の身に取つて見ますと、時々足の母趾や膝の關節などに痛を覺えまして、夜分寢床に入れば尙更甚しく寢られぬことさへ御座います、それに食慾は何時も進まぬ勝、それから又この寒さに向ひますと、直に寒冒に罹りまして、何時もお藥を絶やしたことが無いといふやうな始末、これア何うしたら宜しう御座いませうか」

「それは痛風一名富有病とて、之を平たく言へば、尿酸といふ小便の一成分が、體內に溜る病です、原因は運動不足で有りながら、滋養の食物を取り、酒類を過す所からこれに罹るので、何時〱までも其の習慣を改めぬと、遂には內臟にまで色々の障りを起し、從つて壽命までも害はうとします、だから今の中に生活法を變へて、薪割、米搗田畑の仕事までドン〱下男衆と共々にするやうになさりませ、次に食物も可成淡白とした脂肪の少い物を撰び、酒類は當分御止になつた方が宜いです、見受けます所、奧樣も矢張太つて居らつしやる、されば御二人とも此法を御實行になるが肝要です、寒冒ですか、これは畢竟皮膚の發汗が少いためと、皮膚の抵抗力が弱い爲に起るもので、何時も原野に出て汗膚流してる勞働者は、能く寒風酷熱の抵抗に耐へ、滅多に寒冒ひかぬぢや有りませぬか、されば運動を盛んに行ひ、皮膚を淸潔にし、所謂冷水摩擦なども、每朝必ず缺かさぬことを勤められたら藥も絲瓜も有つたものぢや有りませぬ」

言ひ終つて次の問を待つてると、又一人出て來たのは主人公の母で、年は六十四五でも有らう、慇懃に挨拶して、

「私は夏は丈夫ですけれども、每年〱秋の末から春の中にかけて喉が燥き、何程湯水で濕しても治りませぬ、その爲か何時も〱鈍い頭痛がして何うも食事が旨しくありませぬ、これは老人の故で御座いませうか」

「それは炭酸中毒症です、年の故では有りませぬ、炬燵火燵火鉢屛風これ等を禁物になされば治ること妙です」

「けれども若い者なら知りませんが、この樣な年寄では直に寒冒を引いて了ひませう」

「其變り湯たんぽを擴つても御用になつた方が善いです、御隱居の身、何の爲す事も無い所から、終日終夜屛風を立て廻はし、炬燵と首ッ引では、何うしても炭酸の中毒は免れませぬ、若しも火鉢を置かねばならぬ場合には、必ず一時間每に戸障子を開いて空氣の入換をなさりませ、大いに開いて空氣を入れゝは其の割に寒くも無く、又寒冒も引きませぬ、けれど、暖かにしてゐる室內へ、僅かの隙間からヒユーと這入て來る寒風は、却つて寒冒を招くの基です、だから思ひ切つて戸を開けなさる方が宜しいです」

この時主人公は笑ひながら、

「夕食は、「此家アなんと寒い家だ」と言ふとは其の道理ですな、お母様ストーブを拵へて上げませうよ」

「今度は何うか私に一つ尋ねさせて下さりませ」と妻君は前置をして、

「この夏で御座いますが、夏は左程で有りませぬけれど、此頃から冬にかけて、彼の通り頬が眞赤になる上に、面皰もダン〳〵殖えて參りますこれを何とか……」

「お母様厭ですよ」と倘赤くして伏向く、

「だつてお前何時かも衛生顧問へ其問を出したぢや有りませんか」

と素破抜く、余は直ぐ之を引取つて、

「其の問は非常に善く有ります、けれど何れかと言へば、強壯體の方で、餘り心配するに足らぬことですから、大抵後廻にしておくのですが、今晩は一つ御馳走に其の原因療法を述べませう、即ち誰でも身體中で、顔は最も血液脂肪に富んでるもの、況んや若い方は倘更なれば、それが冬の寒風に吹かれると、皮膚の反射作用に依つて益々赤く益々面皰も殖える譯です、又一つには冬は何うしても脂肪類を多く食べますからね、乃で療法は常に便通月經を整へ、毎晩下半身の浴湯をして寢るのです、さうすると、血液の逆上を防ぎ、従つて頬の赤みも除れる道理……便通等の整方ですか、それは便秘時にリチ子油十五瓦の頓服法も有りますれど、斯る薬を服むと習慣になりますから、可成服まぬやうにし、前の温浴に慣れて矢張運動を盛んにするのです、便秘の原因は不運動及び精神不愉快等の爲に、腸の蠕動機を弱くするから起るものなれば、茲に注意して居られれば、自ら整へます、月經も矢張其の道理ですから……、次に面皰は爪を以て其の脂肪を壓し出し、亞鉛華軟膏を塗け、四五日經つてから酢で御洗ひなさい」



暴先生直に奥の方へ行つて來たのは、大方ノートブックへ記したのであらう。余は一椀の抹茶に咽還しながら、「これで質問は有りませぬか」と御促すれば、主人公は更に又、

「彼の夫婦は別家の者供で御座いますが、四十歳に三十二でしたツけれ……それで未だ一度も牛産したことさへ無いのです、昨年東京の大學其他でも診て貰ひましたが、子宮には別に何の異常も無いさうです、これは何ういふ身體で御座いませう」

余は熟々二人の人相を眺めて見るに、夫の方は、眼大きく眉は濃く、筋骨は細そりとして、背は高く、黑々とした髮はキチンと分けて、髭も頗る濃きを、チヤント捻り上げ、田舍人に似合ぬハイカラ的の紳士、妻君も濃い髮に白い顔、頬にはホンノリと赤みが有つて、口元の締つた鼻筋の通つた頗る美人の方である、けれど二人共神經質だといふことは何と無く笑顔に乏しい血の氣の少い所に了まれた。

「私の思ふ事包み隱さず申しますれば斯うです、先づ御妻君の事から云ふと、餘程沈靜で居らつしやるに相違無い、早い話が、今日は茸狩に行きませうと人が誘つても、それよりは一間に閉ぢ籠つて小說でも讀んでた方が可いと云ふやうな道理、何事も悲觀的で、詰らぬ事に淚を流したり、驚いたり、腹が立つたり、無常を感じたりなさるでせう、それで瘦軀が弱くて夢見性では有りませぬか……」

「實に其の通です」と、夫婦は聲を揃へて言ふ。

「乃で旦那の方は如何と云ふに、他家で話をしてゐなされば、人目には少しも丁らぬけれど、御宅では、頗る沈默で何が御氣に障るのかと奥樣が頗る苦勞をなさるやうな癖、斯うなると自然御夫婦の情も濃かにならぬ、これが即ち不妊の原因又不健康を招くの基であります、ですから何事も快活に、アハヽ、オホヽ、で月日を經てらるゝこと、あなた方には特にお勸め申します、何うです御夫婦で、半年も纏けて私のやうに草鞋旅行でもなすつたら、山水は實に無邪氣ですからなア」

「成程それに違ひ御座いませぬ、早速實行すると致しませう」

外に會實問したいやうな風だつたれど、夜も大分深けたればとの主人公の注意で、余等は夢路に就いた。

明日は幸天氣も好くて、晩秋の三峰山を十分我物にした、其晩も亦「是非に來よ」といふ櫻井家の親切に甘へ、余等は再び宿つて、細君の三味線に主人公の都々逸、別家の夫婦達も今日はイソ〳〵と樂しげに打交り圖らざる饗應を受けた。

皮膚が強くて筋肉締れゐ　寒胃の取り附く島は無い
お前樂しくわしや面白く　出來る子寶船の種

* * * * *

去る者は疎しとやらで、月日の經つに從ひ、三峰旅行の事も頓と忘れてゐたが、女學世界の季節衞生を書かうとするに當り、偶々昨年の今比は大瀧村で斯うだつたなど追想してゐると、

「櫻井樣といふ方が入來つしやいました」

との取次早速請じて段々聞けば、

「敎に從ひ、冷水摩擦は一日も缺かさず、運動も十分致しましたれば、宅は一圓健全になつて、寒胃一つ引きませぬ、又別家の夫婦も大さう快活になつて、今月が帶ださうです、宜敷申し上げてくれと、くれ〴〵申しました」

「それア何より嬉しいです、早速女學世界に紹介致しませう」（終）

障子襖の張り様

家政子

障子、襖の張替ぐらいは、誰方でも心得て置きなさい。経師屋の手に掛る迄もありません、素人の方でも。経師の遣り方を心得て居たらば出来るものです。尚進んで器用な手を持て居たらば、表装額、或は屏風迄も出来ます。

△まづ障子の張様から申しませう、障子紙は美濃紙に限つて居〼、「書院美濃」之は普通美濃紙大です、紙の縦の寸法は障子横桟二つ以上あります故、二つ分大に裁ち、片端に糊をつけ、長く接ぎつゝ巻くのです乾すため約半日を経て後、「水刷毛」で片端から濕して行きつゝ、前の巻方を逆に巻き、而して小時置く内にすつくり濕りが廻りますそこで張るべき障子を臥かし〼、一人が両手に紙の一方を持ち、一人は擴げつゝ(第壹圖)幅一ぱいになりし所で、鋭利の剃刀で剪ち、手早く箆にて竪桟(張る當人より見て横)を撫で、次に横桟を撫るのです。

書院美濃の張様は、第二圖の様に、接目が石垣になり〼。茶席は此の書院美濃の接だのに限る、接目を一分とし〼。茶席ならぬ所の此接目は、細い程恰好がよろしい。

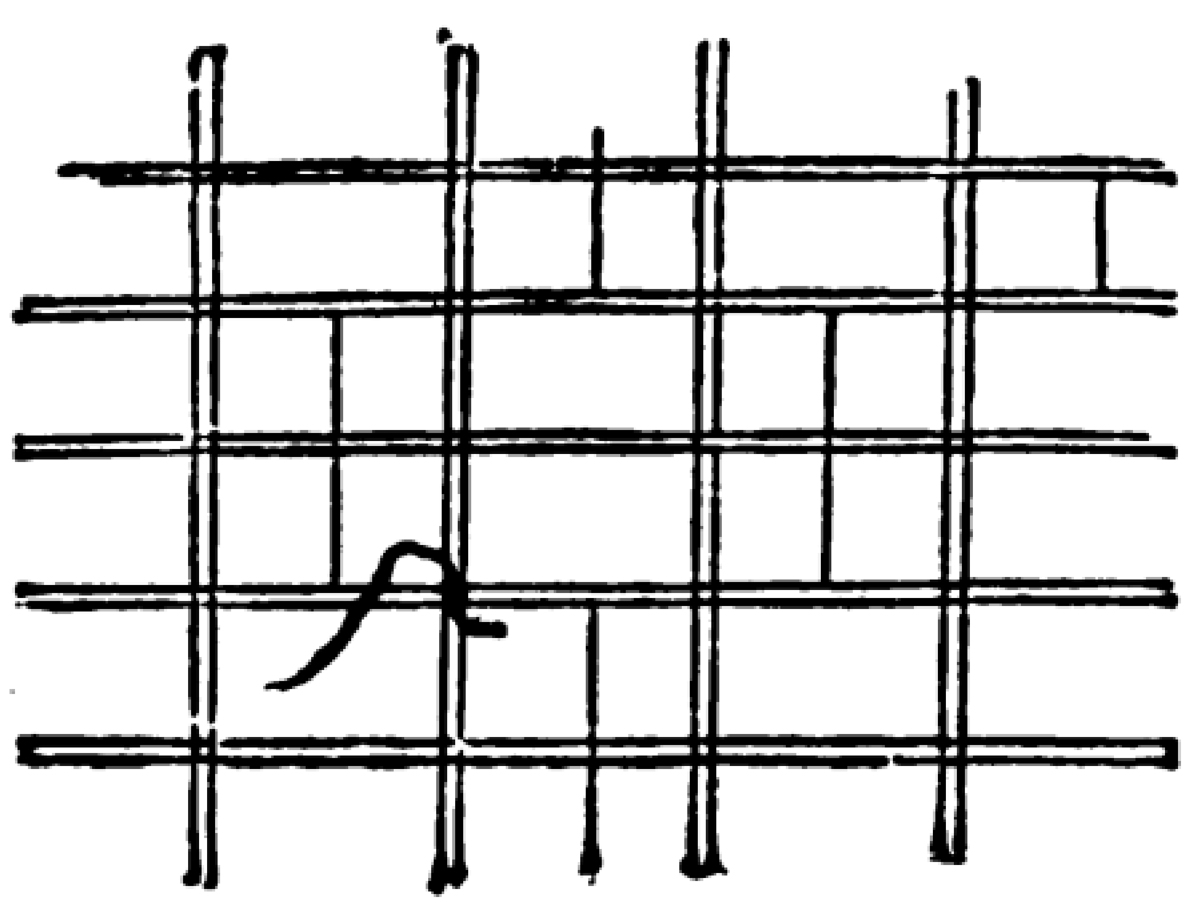
又接がずとも良い美濃紙があります、二間四枚の障子に適合のを四づ折」一間半四枚のを「三つ折」と稱へ〼、是等を張時も矢張濕し〼。

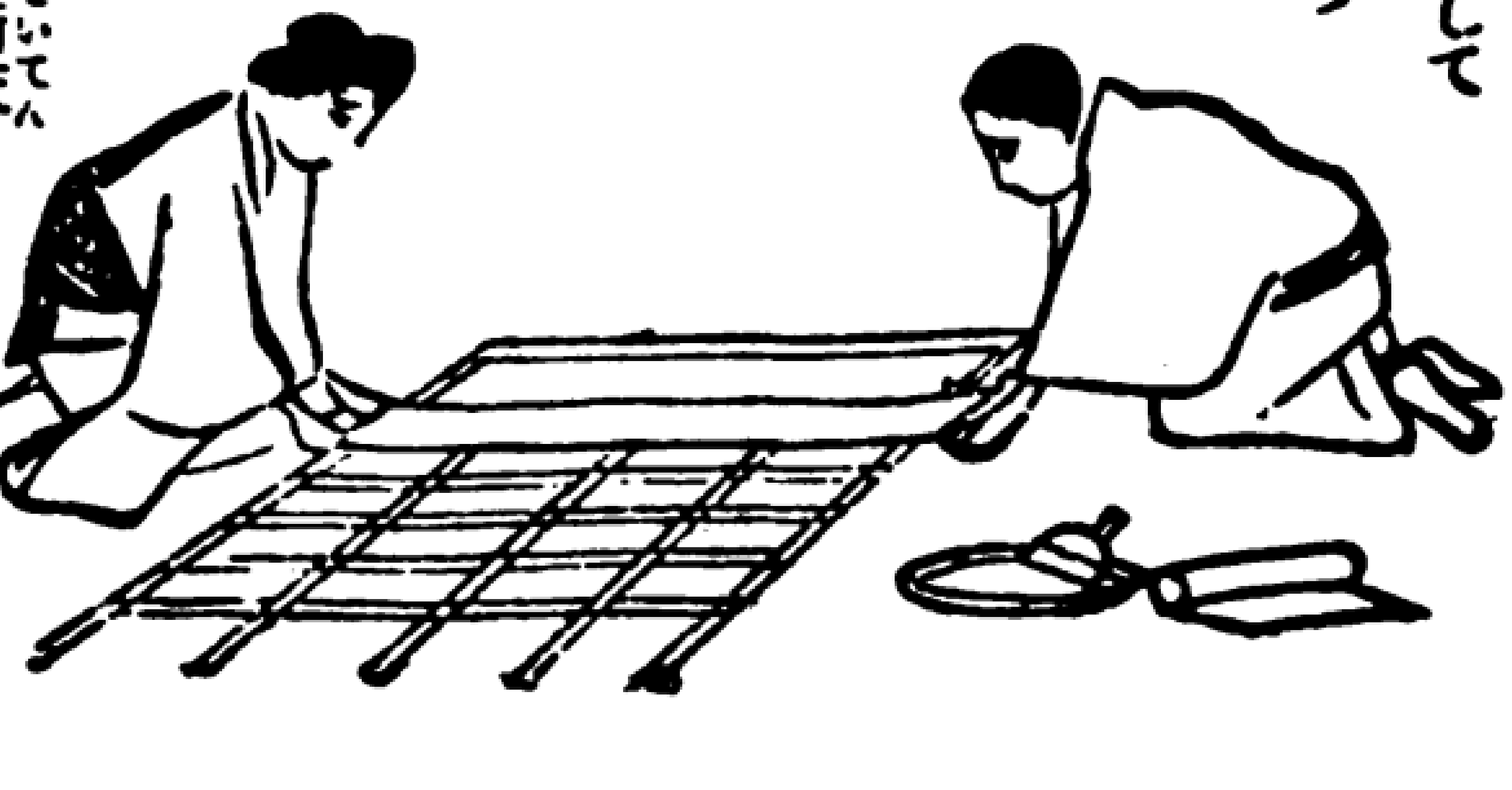
此の張るのは障子の下の方より始めて、上へ向けて張り上げます、紙の二重に重る桟(二桟等)は充分糊を注意して張りつけなさい、下から良くはれ上りますから

障子の桟の細い程糊の堅いのがよろしい。

障子に引手を附けるは勝手向に限つて居〼が、附様は手都合よい様にすれば宜しい、大抵低き腰板の障子は下から三段目、高ければ二段目、あかり障子(腰板のなき物)は四五段位ゐでせう。

以上は大きい障子の時ですが、小障子なれば一人で張れます、此の場合は障子を立てゝ張ります。



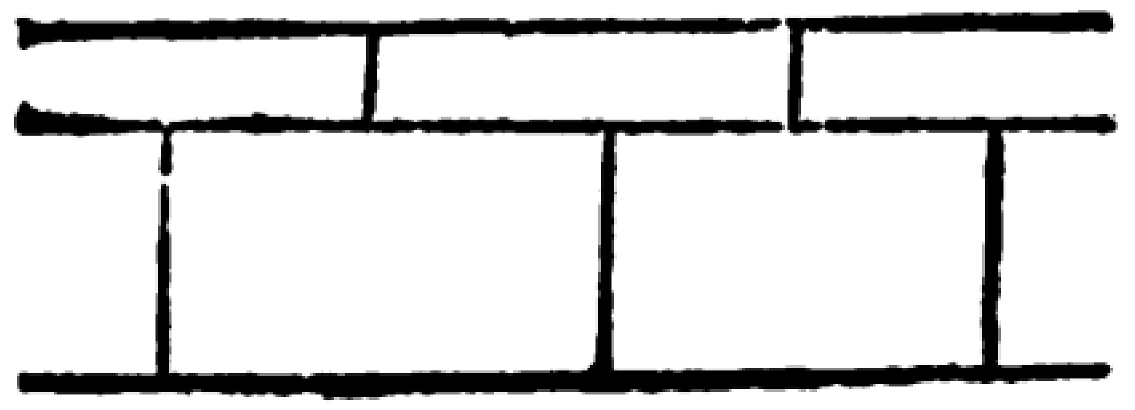


夏もしくは晴天なれば糊を少し堅く溶き、乾いて後ち刷毛で水を吹かけます。

糊をとくには、糊盆に糊を入れ、一時に水を入れず、少しづゝ入れてやわらげるのです、此の糊の加減が東京と上方とは違ふのです、これは東京は風の烈しい處故、障子襖其の他表装等も風當りて糊はなれ、或は反返

り詰ですから、糊を強くします。東京の經師職が京阪に來り、京阪の表具師が東京に來り、風土の者へ無き為、職の巧拙に關らず、往往此の不出來しなやります畢竟風當り強き塲合は、糊を強くしなければいけません。

△次に壁の腰張を申しませう。座敷の腰張は「西の内紙」を用ひ升、高さ九寸、紙の接目四分、床間は高さ四寸五分(他の半分)勝手向は「國栖」を用ひ、高さは汚れ易ゐ故高くして一尺五寸とします、此時は第三圖の如く、上に中枚を用ゐ、例の石垣に張付け升、腰張は向て左より張り出します、これは「布海苔」で張るに限つて居升。

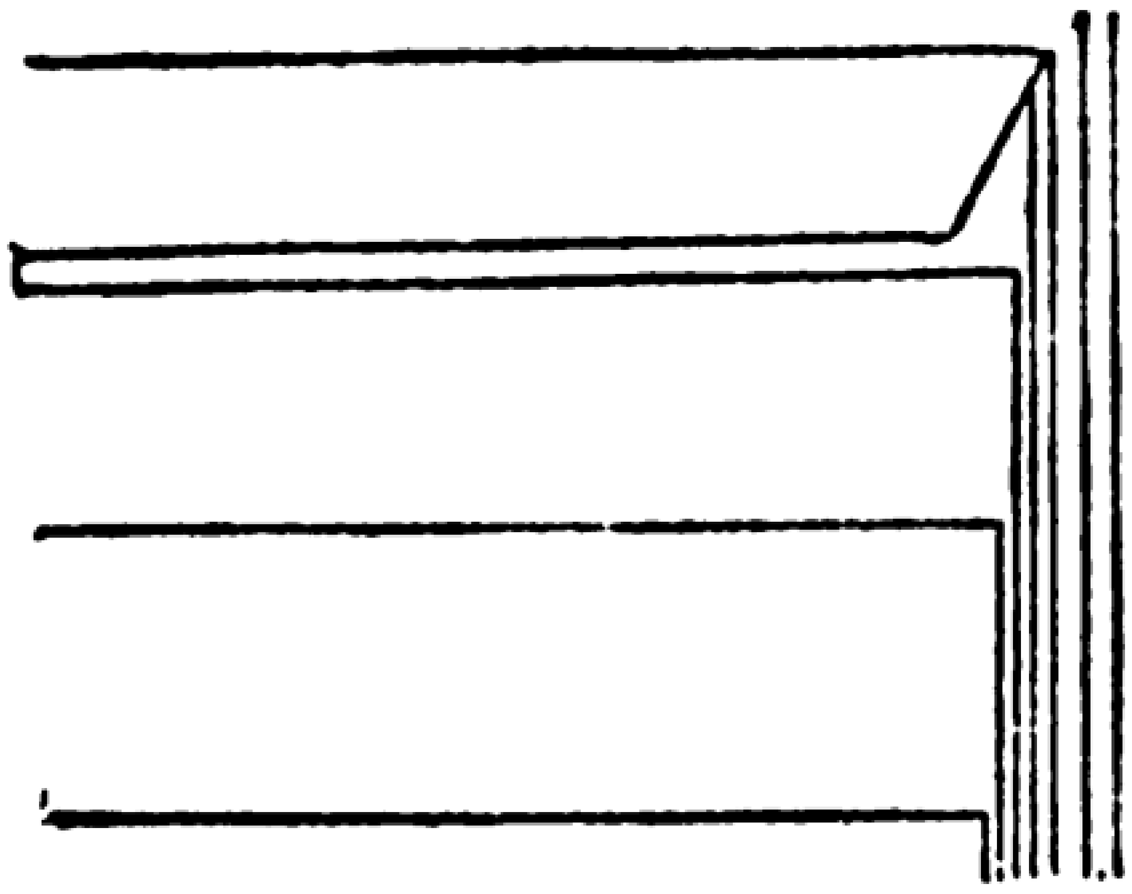


布海苔の煮法を申しませうか、布海苔を極細くちぎりて土鍋に水を張りし内に入れ、蓋をせず、火にかけて煮ます。よく〱掻き廻はし、心のどろりとした頃、極く細き水嚢にて漉し升、水が先に出て後に白い汁が出ます、是をよく掻き廻し用ゆるのです。

腰張の仕直し即ち古い腰張の上を張る時は、前のより一分程高くして張ります。

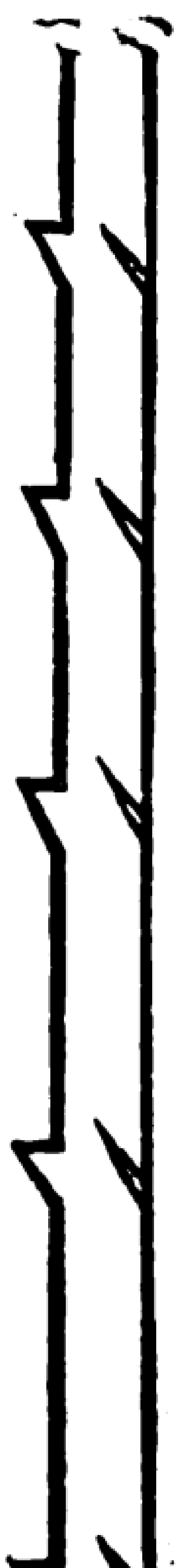
△次に襖の張替を云ふ前に、襖の構造、仕立法を述べませう、先づ最初が「下地」です是は下地職人の手に據るより外は無いのですが、障子の中桟の太い様なもので、框が一寸中桟六分程有ります、用材は杉ですが上物になると框を檜にし、四隅に板を入れ升、金釘を用ひず悉く木釘にて打付け極く丈夫なものです。

第一番に反古の下張を「生麩」を以てします、是を骨しばりと稱へ升。註で經師が用ゆる生麩及び「寄」の事を云ひませう、生麩及び寄とも麩屋にて賣ります。麩を製する時、水の底に澱みたる物です。生麩の煮方は、生麩二升に水五合の割合で、水嚢でこしてから掻き廻しく煮ます、其内堅くなつて掻き廻せぬ様になれば、水を少し宛入れ、尙掻き廻し、ドロリとなつて白味が亡せて、赤味がゝりし色になれば、煮へたのです。之を床下等濕氣ある土中に埋めし壺の内に移すのです、斯うして其上に水を張り貯へ置き、後一ヶ月程經過たのが使ひ頃です。取出す時に叮嚀にすれば二三年は持ち升、然し少しも使用せず煮て置けば、いつか腐つて了ひます、寄の煮方も生麩に同じです。是は生麩より一層強いものです。煮るのは寒中に限り升、同じく壺中に移し、之は水氣を絕て、一日間は冷まして置き、冷むれば上皮に湯葉が張ります、其を其儘に壺を密封し、一年以上を經て用ひ升。風と水氣を入れれば何年でも腐りません、寄は表裝の總裏打の時に、極く薄く水の如くにして用ひ升。



扨說、襖、下地に戻りまして、右生麩の堅きものを、下地の桟に叮嚀に刷毛にてつけるのです。桟よりはみ出る

と年月を經て、乾りて離れ襖の中に、轉がり升。粗末な襖を張ると、カラ〳〵と中に音のするのはこれなのです。生麩をつけたらば、横繼の反古を竪に張るのです。箆を用ひず手にて充分引ばつて張り升、之が充分乾いて後、金槌にて四方の木釘を叩き升、之を釘〆と云ひ升、二初の下張を了り、次は胴張です。



下張反古の上へ、一面平坦に糊を布き、框内へ一分を避けて「マニアイ紙」の下等にてよろしいが張ります。胴張が乾いて後又釘〆しをます。

次が蓑張半紙反古を三枚重れに張り升、第四圖は之を解り易く示したのです。框にのみ糊をつけて、外は糊つけずピラ〳〵にして置き升、框は糊でゴツ〳〵です、之は一寸面倒でも分り難いでしやうが、つまり半紙が到る處三枚重になればよいのです。



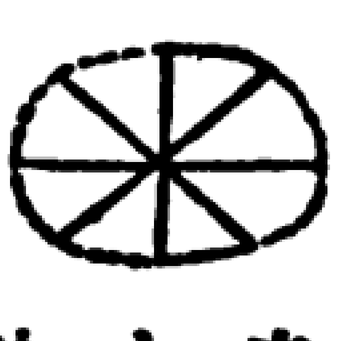
此の蓑張の上へ、半紙反古を、一面糊づけにして張ます、之を蓑縛と云ひ升、是れにて總下張は終ります。

次に引手穴を明ける、大概下より二尺三四寸です。引手に違はして穴をあけ升。

次に四方を鉋にて綺麗に削り、半紙四方糊にて張る、之を請張と云ひ升、二間四枚の襖なれば横三枚竪八枚、一間半四枚なれば横二枚半、竪八枚、

次は最後の上張り「唐紙」を張り上げるのです。下の右より始め升唐紙は一面糊です。以上總て一面糊を張る場合「撫で刷毛」と云ふ、少し毛の剛い刷毛にて、張た後を手柔く撫でゝ、平に引付く樣にします。

次に緣打です、緣は緣屋で購て來ます、先づ竪緣より打ちます、第五圖緣の穴の明け樣及び襖の釘の打方を縱斷して示したもので、縱緣の上より二寸五分下より二寸、此の間に穴を七つ明け升、緣の幅六分の處へ幅二分長一寸八分、深さ三分の片流れの穴を明けます。一方の襖の方へも是に適合した釘を打つけるのです、第六圖の樣に兩折釘を打ち、後ち出てゐる方を上に向け、叩き曲るのです。襖を逆樣にし釘に穴を合して緣の上より打ち付けるのです。横緣は襖を敷居に措めれば、上下は外面より見える故、緣の外に穴を掘り、釘にて外より打ち、釘の頭の出ぬ樣にすれば宜しい。



次に引手は、唐紙の上を第七圖の如くに切りて、引手金物をはめ、鋲にて打つけます、檄暴ながら襖の仕立方は是で終りです。此の襖の仕立を呑込んで居らしつたら、襖の張替は造作ありません。

△襖の張替　一番に引手を放します、引手金物の汚れて居れば、青杉葉にて燻し、汗をかいた處を直に拭取りましたら美しう成ます。

縁は上下の縁より外し、竪縁は上より叩き落し、落合釘は其儘遺し、縁は番號を附して、後に紛れぬ樣にして置き、汚れを拭き揚げたるは、蠟を塗り油を引き置き、凡てを揃へて一括りにして片付け置。
次に唐紙を篦にて捲れば、請張も共に取れます、下張に次の明たるは、上張のめくりにて繕ひます。
斯うして又釘〆をなし、角々を奇麗に削り直し、又請張にかゝります、隅々は二枚張で、角のしかむ時は、裂目を入れてよろしい。
次に唐紙を張り、框さへ乾けば、縁を打ちます、凡て新調の時同樣次に引手を附け之れにて了ります。

裏店生活の實驗

なみ子

深窓の裡に垂籠めて何處を浮世の風が吹くかと、米の値段を知らずに一生を終る方もあれば三百六十五日眞黒になつて稼いでも中々に其日々々の糊口に窮するといふ悲慘な人もある世の中ですから、月に五圓でも生計なれば百圓でも生計、之ばかりは必ず何程なくてはならぬと云ふ標準はありませぬ、隨つて新に世帶を持つに就いても其通りで、世帶道具一式四五圓、夫婦暮しで一ヶ月十圓以下であげ樣と思へばそれでも出來ないことはありませぬ、凡て人の浮沈は七轉八起とやらで、月給十圓位の時もあれば百圓二百圓の時代もありますから各自其身分收入の程度とによつてどうにでも遣繰がつくものと信じます、と申すのも妾共が夫婦生活で一ヶ月八圓内外で凌いで來た經驗が厶いますので、玆に其八圓時代、十五圓時代、四十圓時代と、此三期に分ちまして是から新に世帶を持たうといふ方の御參考までに一寸その實驗談を、

世帶道具一式四圓以下

夫は元某私立學校の出身で、久しく逆境に居りましたから一家を持つ事も出來ず、暫く夫婦共に下宿住居をしてをりましたが、それでは到底經濟が立切れぬ處から、何處か室借でもして自炊をしやうと云ふので、一昨年の八月或巡査の家(三疊)の室を借りて、蝸牛の樣な世帶を持つことにしました。何と申しても其頃漸く八圓の月給で、私が僅な手内職共で十圓足らずの收入にしか過ぎぬのですから所詮永くは持切れまいと思つたこともありましたが、それでも何うか斯うか人樣に御迷惑もかけずやつて來た處を考へますと、全く世の中はロタしたものと感謝致して居ります。そこで世帶を持つに就いても、茶碗一つウツかり買へぬのですから、最初夜店へ出掛けて安値なものを擇びました。其の一式の經費は凡そ左の通り。
△焜爐とお竈(土燒にて古物)十六錢△バケツ(中古)十五錢△瀨戸引鍋二個(中古)二十七錢△擂鉢擂小木(新)十三錢△火鉢(古)二十錢△飯櫃(中古)三十五錢△碗と茶碗二人前(新古)十八錢△茶道具一組(中古)四十二錢△俎と庖丁(新)二十六錢△飯櫃(古)十三錢△丼と小

皿四枚(古)十錢△米櫃は蜜柑箱にて四錢△漬物甕(古)七錢△湯沸し(新の瀬戸燒)十錢△味噌漉とザル(新)七錢△金盥(古)十三錢△火斗(新)七錢△炭籠(古)五錢△ランプ(古)十七錢△箸、火箸、杓子(新)八錢△箒と埃拂(新)十八錢△ビール明壜二本七錢合計三圓三十八錢

これで一寸間に合せの世帶道具が出來ました。勿論安い物〳〵と集めたのですから碌な物はありませんが、それでも夫婦二人切なら結句間に合つて行くのでムいます。

まだ此外に洗濯盥や其他の不足はありましたが、家主の好意で日常品以外の器物は貸して貰ひましたか　別に不自由は致しませんでした。凡て道具數は一時に購入れ樣とすると少々困難ですが、夜店か何かでポツポツ買溜めて行けば二三年の間には自然と一通の物が揃つて參ります。

△九圓以下の生活

十圓以下の收入で二人の人間が生活して行かふと云ふのですから、却骨が折れまして、夫は嗜な煙さへ禁めました、妾は始終洗洒しの一張羅で入湯も月に二度か三度、それは先づ我慢するとしましても、偶に來客などの際にお茶を絕らしても買ふとが出來なかつたり、自分のお友達は皆な立派な處へ緣付いて、奥樣風を吹かて入らつしや る ところを見たりする每に、淺墓な女心からア、情無い、何時になつたら人並な眞似が出來るだらうとやきもきした折も厶いましたが、何時までも怎那境遇にばかり居るでもあるまいと思つて我慢をし、且つ上を見れば限りはないけれど、妾共の下には未だ〳〵難儀なのがあると思返して弱い心を督めて、何やら斯やら左の如く生活費の割當を致しました。

△一圓五十錢室代△二圓五十錢米代△五十錢炭一俵△四十錢醤油と味噌△一圓二十錢野菜代△一圓魚類△十六錢石油一升△十錢茶△一圓三十錢雜費小使、〆八圓六十錢。

恰度收支一杯で少しの餘裕もない有樣でしたが、幸と病氣に罹る樣なこともなく無事に暮しました。怎那に切詰めた生計ですから、目下下宿生活をしてお出の方や、貧乏世帶の經驗のない世間の夫人達は、爾那に安く出來る筈がないと有仰いますが、決して出來ぬ事はありません、不斷百圓の暮をなさる方が何かの御都合で、家政改革をしやうとなさるのに御參考として物のためしに一寸行つて御覧遊ばせ。冗費さへ節すれば必ず出來ます。

△十五圓の經營

右樣の生活をつゞけて居たのか丁度小一年で夫が急に任務替をしましたので八圓から十五圓の月給を取る樣になり始めて一軒の家を持つ事に致しました、お金の有る方から見たら安月給と御笑でせうが、其當時の妾共では收入が約倍になつたのですから、長屋ながらも一家の戸主となり、漸く人間らしい氣持がしたのでムいます。其時買つた物は

△長火鉢(古)六十錢△四十二錢の洗濯盥(古)△陶器茶碗皿小鉢類五十錢△臺所小道具三十錢△手桶三十二錢△手洗鉢十三錢△座布團二枚△水甕と漬物桶七十錢

外に家賃が五圓敷金十圓、室は三疊と六疊の二間で場末の長屋でし

た。そこで以前に比べて何程楽になつたかと申せば決して生活は楽になつて居りません、唯だ一圓五十錢の室代が五圓の家になつた位で二三の勝手道具が殖えた位のもので、食費其他は矢張り以前のやうに節しなければ到底立行かれませんのです。

人の一生は樣々ですから一時逆境にあつても失望するに足らぬ事、又俄に得意になつたからとて、必ず以前の境遇を忘れてはならぬ事、八圓の收入が十五圓となり、次でそれが昨今四五十圓の收入となり、家賃も六圓の處に越して漸々普通の暮しが出來るやうになりました。

女子大學秋季運動會

十月廿七日秋風颯々小春日和の好天氣をトして校内運動場に開かれぬ、昨年は校舍建築の爲め延期となり久しかぶりの運動會なるに各地方より擢りすぐつたる學生が集まれる學校とて此の運動會を見んものと目白さして集まれるもの引きもきらず黄白のリボン小豆色の羽織婦人八分に男子二分綺羅紛然絡繹織るが如し、午前中に場内殆んど滿員の有樣なりき、さて番組は四拾餘回の競技にて午前と午後との二部に分れて秩序正しく行はれたり、幼稚園の兒童は二手に分れて籠球の競爭海軍服の小國民赤リボンの小式部が入り交りて勝たせじ負けじと立ち働ける樣バンザイと喜ぶなど其の可愛らしさ一層觀覽者の心を動かさしめにき十六番の白菊、十七番の深山の菫なんど面白く綱引、自轉車、薙刀、蹴球などあつて正午の休憩となり、午後は午前よりも一層面白きものを交へ觀者をして倦厭を來さゞらしめたり中にも本誌の口繪に紹介したる家政二學年の演じたるアマゾン其他虹霓舞、花の帶、自轉車に乘りて薙刀を使ひしなど尤も壯快觀者をして手に汗を握らしめたり斯くて午後五時閉會に至るまで間斷なく四拾餘回の運動無事に行はれ櫻楓會の組織にかゝる音樂隊あり、すし、辨當、サンドイッチなど用意し親切に觀者の間を斡旋して些の雜沓を來さゞらしめたるは流石女子大學の規模よと感ぜしめ近來になき好運動會なりき此の日來賓の中にて目立しはシルクハットの四國守侯、羽織袴の大隈伯を始めとし、歐米婦人、清國人等少なからざりき尚ほ來年四月には一大バザーを開くと云ふ豫定なり。(本誌口繪寫眞版參照)

時事寸言

△女子の勝利

爲替貯金管理所に於て、男女雇員の競技珠算を擧行したるに、女子が二分十秒にて速了したる計算を、男子は三分以上を要して漸く終りたる程なりと、此一事偶々以て女子の爲に氣を吐くに足らん乎。

△小間物類の進步

近來東京に於ける小間物類の進步せる原因は第一の需要者たる女學生の刺戟によるものと某小間物商人語る、良く云へば美術品の進步なれど惡く云へば奢侈の餘弊なり。

△娘を持つ親の參考

行儀作法を見習はすようとて或る邸へ奉公に上げましたら、イヤモウ飛んだ我儘者になつて偶々家へ歸れば身分不相應階上ばかり申して困らせます。とは其娘を一華族に託したる親父の泣言なり。

△下婢女學校の好成績

子守の善惡は家庭に於ける子供の感化上、多大の關係を有するものなり、新潟市婦人教育會員は從來の雇員制度を改善せんとて一昨年中同地に下婢學校を設立したるに成蹟頗る良好にして生徒百八十名の多きに達したりと。

△面白き貯蓄法

頃日東京府の郡部に於て「物品貯蓄會」なるもの設立せられたり、右は現金に代ふるに鷄、屑繭、屑糸、雜穀、草鞋、鷄卵、果實の如き物品を以てし、一株を十錢と定め（鷄卵五個を標準とし）凡ての物品は時價に應じて貯蓄簿に記入する組織なりと。

△罵倒は教訓に如かず

歸省女學生のお土産は高慢と奢侈なり、と某博士憤慨す、百中一二の墮落女生を捉へて其全班を律せんとするは兎角今の論者に多し。

△男女交際の誤解

伊太利（大山）公使夫人曰く、七年振りにて歸朝し先づ一驚を吃したるは我青年男女の交際が紊亂したる事なり、自由交際の旺なる歐洲各地と雖も女子の外出時は必ず下婢を附添はせ決して一人歩きを許さずと。

△趣味と愛讀書

某裁縫女學校生徒五百九十名に就て、其嗜好を徵したるに、音樂百九十五名、遠足及び散步百七十一名、歌カルタ八十三名、テニス七十五名、文學美術八十四名、次に愛讀書は、女子に關する諸雜誌二百三十名、傳記類七十八名、小說七十二、文學書五十五名、其他雜書約五十名なりき。

△珍らしき婦人會

倫敦に婦人菜食會なるものあり、從來盛に肉食廢止說を唱へ居りしが、近來は更に步を進めて動物より製する一切の物を排斥し、衣服も絹物は蠶の糸なればとて禁じ其他靴、帽子等凡て動物に緣あるもの

を用ゐざる規則なりと。

△人格に觸接せよ

讀書するには二ツの目的あり、一は智識を取得し、一は人格を取得するにあり、人格の取得とは即ち書籍中に現はれし偉人傑士の人格に觸接する事にて、前者は何人も容易とする處なれど後者に留意する者の鮮きは洵に遺憾なり。

△車夫も英雄なり

新渡戸博士の偉人觀に曰く、「偉人とは釋迦や孔子の如き人のみでなく、寧ろ平凡なる社會の下層に幾多の英雄が潜んで居る、冬の夜など私は折々辻車に乘つて斯云い事を思ふ。此人は此寒夜に私を運んで居る、偉いものではないか、若し自分が斯る境遇であつたならば屹度泥棒をするか或は自殺したに相違ない、と考へると此種の車夫が何者よりも偉いものに思はれる。」

△齒は消化器の關門

齒の衛生に注意せざる人は統計上八年短命なる割合なりと、而して之が攝養法は日常酸類を食せし時必ず丁寧に口を掃除するにありと。

△學位の下落時代

歐洲各國に於て學士の稱號が殆んど其人の學識及び人格を表章せざるが如く、我邦にありても亦博士が車掌となり、學士が車夫となるの時代に達するや蓋し遠からざるべし、と或は然らん乎。

△自働人形と女子教育

英國の一女學校にては女子に生理學の智識を授くる爲め自働人形を案出して之に病氣の狀態を起さしめ、同時に内臟を解剖して詳しく治療法を實習せしむる科目設けられたりと。

△毀譽に對する態度

女子は兎角他人の事を是非したがるに拘はらず、其癖自己の噂に氣を揉むものなり、古哲ボーロは誨へて曰く「我は人に評せらる事を最も願事となす、我は人を評せざると共に自己をも評せず、而も我自ら省みて過あるを覺えず」之實に世の毀譽褒貶に對する最良の態度ならずや。

△催眠術と宗教

催眠術にて疾病の治するは決して術者の力に非ずして全く被術者の信仰に依る、宗教によつて煩悶を消せんとする苦惱者の慰安法も亦此の原理に他ならず。

△隱れたる慘酷

己が智力と體力とに缺點あるを自覺し乍ら之を押隱して結婚せんとする女子は詐欺師にも劣る、と痛論する學者あれど斯の如き事實は隱れたる慘酷として寧ろ同情すべきものならずや。

△教育と遺傳

小兒の教育は決して其誕生の日を以て始まるものにあらず、母の胎内にある時は勿論、遠く其祖先の血液を承けて生れ來るものなれば之が遺傳の關係は單に親子間のみに止らまずと知るべし。

△盗兒の母は買喰を好む

感化院及び養育院に收容さるゝ兒童に共通せる缺點は百中の九十九まで泥棒根性なる事にて此根性の湧出せし源は凡て母親より買喰の惡癖を受けたるものなり。



社會研究の一方面

泥棒の要心

伊藤銀月

其一　泥棒に遭つたことの無い人

火を見たら火事と思へ、人を見たら泥棒と思へ。一面から見ると、これはあんまり料簡の狹い膽ッ玉の小さい處世法である。こんなケチ〳〵した考へでは一生碌な事が出來るもんぢやない、けれども、また或る一方から見るときは、これ程に要心をしなければ、今日の世の中に安穩に暮らして行くことが出來ないやうにも思はれる。

世の中には、まだ泥棒にやられた經驗の無い人が多い、此人達の態度に注目して見ると實に面白い、幾度も泥棒にやられた經驗のある目を以て此人達を見る程面白いことはない。

或人は、ナアニ俺の家へなんか泥棒が入るもんかと濟まして居る、何故かと聞けば。貧乏だから泥棒に持つて行かれる物がないと云ふ。

これは、泥棒の内容を研究することを度外視した態度で、泥棒の中には、そんな小さい貧乏な家ばかりを選つて入ることを専門にしてる者があるのを知らないからである。

又或人は、貧乏だからでも何でも無く、たゞ漠然として、自分の家へは泥棒が入らないものと極めて居る

さうして此類が甚だ多い。

これは、泥棒にやられたことがないから、まだ其味を知らないので、こんな家の多い間は、泥棒商賣は何時迄も、繁昌である。

自分には一種の幸運があつて、それが爲め、自然に泥棒などの難に遭はないやうに保護されて居る。自分の家には。泥棒が入りにくい妙な神秘的な所がある。などゝ、勝手に極めて安心して居る人も少なくはない甚だしきに至つては。自分には泥棒の寄り附けない威嚴があると云つたやうに、何の根底もない自惚的空想に依つて安んじて居る先生もなきにあらずだ。

以上は、何れも泥棒から見て、難有い御華客様ばかりである。

さうかと思へば、泥棒に入られた經驗はないけれども、切りに要心をして、戸締りはどうの。引窓の綱はどうしたの、風が吹くから雨戸を外されても分らないの、雨が降るから足音が紛れるのと、寢る目も寢ずに騷いでゐる人がある。

結構は結構だが、此人達の要心の仕方を拜見するとどうも、敵無きに弓を引き。病無くして藥を服するの弊を免れない、無駄ッ骨折、見當違ひ、馬鹿念、要するに、却つて泥棒の注目を引き。こいつ一番からかつてやれとの意を起させるに過ぎない。

素人がいくら要心をしたつて。たとへば、相撲を取つたことの無い者がいくら馬鹿力があつたつて、巧者な手取に逢ふと、自分の力の爲に却つてひつくりかへされるやうに。肝腎の所を締めてゐないから、專門の泥棒から見ると可笑しくつてたまらなからう、くだらない所へ力を入れる者は、必ず肝腎な所を疎かにするのだ。

泥棒の要心にも研究が必要である。

たとへば、大きな金持の家で寢ずの番を置くと假定する、それが、一時間に一度とか、三十分に一度とか木を打ち或は金棒を引いて、屋敷の隅々、土藏の間々を廻る、成程、これで、人間が起きて居るが、要心があるぞと云ふことを。泥棒に告げることが出來る、け

れども、これを一面から見ると。木を打ち棒を引いて廻つた跡に隙があるぞと、御苦勞にも態々發表するものである。小泥棒なら卒ざ知らず。大泥棒は之が爲めに却つて便宜を與へられる場合が多い。

家庭を持つて居る多くの人の爲めに、僕自身の實驗研究し來つた結果を語るのは、必ずしも無益の饒舌ではあるまい。

其二　泥棒にやられた經驗

僕は。東京に家を持つてから泥棒に物を持つて行かれたことが大小四度、入られかけたのは都合三度、私に以て自ら泥棒に就いて語るの資格ありとなす者である、而も、今此話を紙に寫して居るのが十月十七日で、最近はタッタ二日置きの前の十四日夜。其前が先月二十九日の夜だから難有い、話からまだ蒸氣が上つて居る、順序を逐うて話すと。



(一)三十五年七月、本郷元町に居た時であろ家族は、僕の外に今一個あつたが、夕方僕は湯へ行つて、今一個は一寸買ひ物に出たそのあとで、明巣狙ひと云ふやつに入られ、簞笥の抽出二つを空にされた。

(二)同年十一月、上駒込山王臺に居た時、家族は皆晝飯を濟ますと同時に出て、日が暮れてから歸つた、所が、留守をして居る筈の婆アやが、隙を見て自分の用遂しに出たので、其間に簞笥一つを空にされた。

(三)本年四月上旬、現在の上根岸に移つてからの事で、僕は朝から

遊びに出、妻は午前九時から十時迄の間に、一寸坂本迄行き、下女は裏の井戸で洗濯をして居る間に、大膽にも横手の萬仁寺垣を踰えて入つた奴がある、八疊に置いてある箪笥の抽出を二つだけ空にして妻の晴着の中ばを持つて行つた、六疊に在る二つの箪笥へも手を掛けた痕がある。

(四)本年六月中、下女が一張羅の紬の羽織を、裏の空地へ掛けて晝干をやつたら、垣根の外から竿の端を手繰つて、難無く拔き取つた奴がある。

(五)本年八月中、妻が朝早く起きて便所へ行つたら、裏手の垣根をメリ〳〵破る音がする、犬かと思つてフト窓から覗くと、これは如何に、汚い筒袖の單衣を着た男が、犬のやうに四つん這ひになつて、垣根の隅を半分もぐりかけて居る、畜生と聲を掛けたら逃げ失せた。四時々分だからまだ薄暗かつた。

(六)去る九月二十九日夜、十二時半、臺所口から忍び込んだやつがある、下女が目を覺ましてコリヤと聲を掛け、其聲で書生も矢庭に飛び起きたので、例の雲を霞と極め込んだ、折角入つたのに氣の毒千萬。

(七)一昨々夜即ち本月十四日夜十一時半頃、隣家の門から入つて、僕の屋敷へ移り、隣家の人が覺つて僕の方へ注意したので、下駄を置いて逃げた奴がある。

ざつと並べると、先づ右の次第だが、此景氣では、此先まだ〳〵趣向の變つた御見舞を受けさうで、前途の希望は充分、樂み測るべからずである。

泥棒の見舞も、最初の一二度は餘り心持よく受けられないもので、數日の間いやな思ひが殘ります、けれども、僕のやうにかう泥棒の贔負が厚くなられては、又かと思ふばかりで、泥棒ですよ、よし來たと、其時は景氣よく飛び起きるが、いゝ加減にして寢て了ふ、直ぐにグウ〳〵鼾をかくと云ふ始末。

それに、僕の家には、赤樫蛤刃の木劍と、犬殺棒とがある。平生之を役に立てたくつてたまらないが、人と喧嘩をして撲つたら警察の厄介になるだらう、結果があまり妙でない、そこで此泥棒と云ふ種族、これは古へから撲つてもいゝとしてある、まちがつて撲り殺したつて、正當防衞が少し過度に傾いたのだと云へば申開きの立たないことはない。

これから泥棒が來たら、成るべくやつに知れないやうにして僕へ密告しろ、コツソリ起きて、木劍を提げてやつが、雨戸を明けるを待つ、軈て龜の子のやうに

頸を延ばして、奴さんソロリ〱と入つて御出でなさる。平生の修錬、ピューッと風を切る、ギャッと云つて尻餅を搗く、其儘抓んで庭へ放り出して。あとは知らん顔をして寢て了ふ、此間、家内の者はエヘンともカタリとも云つてはいけない。

と云ひ附けて置くのである。

なんだか、かう、泥棒が來て呉れゝばいゝやうにも思はれる、來るのが待遠しいやうな氣もする。

其三　泥棒に就いての要心法

以上の經驗に依つて、僕は、泥棒の要心に就いての五則を定めることが出來た。



(一)素人が依つて以て安んずる戸締りなんど云ふものは、大抵何の役にも立たない。

(二)泥棒は、素人が意想外の時と、意想外の所とを見て、之に乘じやうとする者であるから、尋常の要心は、却つて泥棒に隙を見出ださうとする注意を與へる、語を換へて云へば、素人考への尋常の要心はあつて却つて無きに劣るのである。

(三)多くの泥棒は、金持と貧乏との別を問はず(極貧は論外)に、たゞ入るべき便宜のある家へ入る、さうして、一個の泥棒に成功を與へると、彼等の仲間から仲間へ語り傳へて、其家及び家の人は長く泥棒種族の的にされるのである、引越すと、引越した先へ附いて來る

(四)明巢狙ひは、其家の前へ來てから、偶然空なことを知つて、入

る氣になるものではない、先づ家族の數と、其職業と、其平生の生活の有樣とを探つてから、少し離れて、其外出の要路に網を張り大抵は其行先に迄も見當附けて置いて、ゆつくり仕事に取掛るのである。

(五)素人考へで、泥棒の心を推測して、かうだらう、かうであるまいと、勝手に極めて了ひ、小刀細工のやうな要心に安んずるは、大間違ひである、多くの泥棒は慾心よりは寧ろ病ひで、素人から見れば、下らない樣な、割に合はない仕事をするものである。

先づ(一)に就いて申さうなら、元町でやられた時は家を空にはしたが、格子戸へは、外から嚴重に錠を下して、素手では明けられないやうにして置き、お負けに、僕の戸口は下宿屋の戸口と直角をなして居るので怪しいやつが入り掛けたら、直ぐ向うへ分らなければならぬ、御神さんが親切で氣早だから、早速呶鳴つて呉れるだらうと、當てにしたのが油斷の本まだ、日も暮れないのに旨々とやられて了つた、刑事巡査の云ふ所に依れば、手拭にくるんで捻ると大抵の錠前は苦も無く引切れるとの事、下宿屋に怪まれなかつたのは、畜生風をして友達が來たやうに見せたのだらうとのことだ。

駒込に引越した時は、屋敷が千二百坪もあつて、半分は自然の山林のやうに荒れて居る、家も可なりに廣い、裏手の籬根を破つて、薯蕷を掘つたり栗を拾つたりする泥棒は、一々叱るも煩はしい程に入る不要心極まる住居であつた。

八つばかりになる女の子を連れた婆アやを置いたが家の者が皆出て、婆アやばかりが留守をする時には、裏口だけを明けて、其他は殘らず嚴重に締切つて置かせることにした。

所が、或日の夜分に外から歸つて見ると、內は眞暗で、お負けに表口の戸が外れて居る、どうも變だ、婆アやと呼んでも返事がない。

よく見ると、表口の戸は無理に外から引外されたのだ。諸君此戸をどんな戸と思召す、嚴重な二枚の板戸が、シックリと食ひ合つて居るばかりでなく、內からは大丈夫の閂が掛つて居るのだ、魔術師でゝもなければ、之を外から明けることは出來まいと、信じ切つ

て居たのだ、それが確に外から引外された形跡を留めて、而も門及び門を通す金には何の異狀も無く、ソロリと引抜かれてある、實に不思議だ。

他の所から入られやうとも、表口だけは泥棒の力に了へまいと思つたのは愚かであつた、況んや、婆アやが、泥棒なんかは自分の居る家へ來ないものと極める部類の樂天主義で、裏口の戸を引いたゞけで何所かへ行つたのに、其入り易い裏口からは入らずに、態々至難の表口を破るとは、素人の要心を冷笑するの態度ちやないか。



箪笥の上には、誰も點さないカンテラが油煙を立てゝ居る、燈火を點けてゆつくりと仕事をしたのだ。人を頼んで訴へたので、其夜の中に板橋警察署の警部と刑事巡査とが來る、以上の不思議を話さうとすると、警部も亦泥棒がかうであつたらうと思はれる冷笑を浮べて、マア御待ちなさい、何も聞かずに、私が一番泥棒になつて、外から明けて御目に掛けませう、元の通りにして置いて下さいと云ふ。

内へ入つて、戸を入れ直して、門を掛けて、裏口

から外へ出て、宜しいと云ふ、此間警部は無論遠く離れて、目を餘所にして居たのである。

ようがすか、明けますよと進み寄つて、ガタ〳〵戸を鳴らす、ハア閂が掛つて居るなと、モウ悟つて了つた、切りに戸をいぢくつて居たが、御覧なさい、どんな戸でも、動かして居るうちには小指の先の入る隙が出來ます、小指の先が入つたら、もう明いたも同然ですと云ひさま、無名指も突ッ込む、小指が入つたら無名指も入ります、小指と無名指とが入つたら手も入る、手が入つたら身體も入る、ソウレ御覧なさいと、片手の指を皆入れてグッと前へ引く、戸が弓のやうに撓つて、三日月形の隙が出來る、次には片膝を屈め、無理に其隙へ押込んで下へこき下す、同時に、手を深くさし込んで、閂を一方の戸へ送つて遣る、一二三で手と膝と一度に刎ねると、ドンと響いて、面白いやうに戸が外れる、どうです、ハヽヽヽ、いや實に感服しました。

警部が泥棒の眞似をして見せるのに、盗まれた奴が嬉しがつて見物するのです、さうして、其術の妙に感服するのです。

以上二つの經驗で、僕は戸締まりの何の用をなさぬを悟つた、此法が戸を固くするの研究より、泥棒が戸を破る研究の方が、常に數歩を進めて居るのである。

それから(二)に就いて申さう。

諸君若し、白晝晴天、而も家の一部分には人が居て門の戸には掛金を掛けて置いた時に、籬根を越えて泥棒が入り、椽に上がり、障子を明け、座敷へ入り、唐紙を明けて又座敷へ入り、簞笥の錠前を毀し、抽出を明け、中から五六枚の着物を取り出して風呂敷に包みそれから、抽出を元のやうに締め、唐紙も障子も音をさせずに締めて、椽から下り、籬根を越え、ドロンを極め込む迄、近所の者も往來の人も知らず、家と食ッ附いた裏の井戸で洗濯をして居た下女も氣が附かずに終り得べきを信じられるなら、斯る場合に想ひ到らなかつた僕及び僕の家族だけが馬鹿の名を頂戴しただけで事は濟むのだ、第一、そんな大膽且つ巧妙な泥棒が

あらうとは想はなかつた。

僕は、歸つてから此報告を聞いて、其泥棒を憎む心よりは、感服敬服の餘り、一たび尊顔を拜したいと思ふ程であつた、これ程の膽力と手腕とを以て大きな事業にかゝつたら、世界を震動することの亦甚だ難くあるまいと思つた、自ら顧みて忸怩たらざる能はずであつた。

泥棒は、此の如く意表外な時に、此の如く意表外な所から入つて來る者である

次には、(三)に就いても僕の經驗を以て答へることが出來る、僕が度々泥棒に狙はれる理由は、一度本郷元町で泥棒に成功を與へてから、華客の名が彼等の仲間から仲間へ傳はつて、何所迄も追掛け廻はされるのだらうとは、多くの警部や巡査も云つた、自分もさうだらうと想像して居る。



どうか一度、彼等の腦天へ、絕緣の木劍を食はしてやりたいもんだ。

なほ(四)と(五)とに就いては、別に實例を擧げて説明する迄もないが、僕が根岸へ引越して來たのは去年の七月で、それ以來月に一二度は必ず變な事があり、或は音も無く門の戸が明いて居たり、裏手の生籬の隙間に人間の首が挾ま

つて見えたり、押賣商人が勝手に裏から庭へ廻つたり奇麗な話ではないが、あるべからざる所に人間の排泄物があつたりした揚句に、四月の難に遭つたのだから七月から四月迄の十ケ月間は、泥棒の準備に費された時間と見なければならぬ、此長い準備の結果、辛うじて占め得た物は、原價こそ二百圓に近けん、彼等の仲間で處分したら、本人の手に握られる現物は、高々十か二十に過ぎないのだらう、稻妻强盗が末期の告白でも分つてゐるぢやないか。

先月二十九日と、一昨々夜とに入つた奴は、恐らく同じ者であらう、これも長い準備の上と思はれるに、二度共本意を遂げずに、嘸殘念であらう、御察し申せば氣の毒の至りである。

要するに、泥棒の要心は家に人を多く置くに限ぎる多くなくとも、相應の人數だけは是非置かなければならない、それも一つの所に固まつて居てはいけない、要所々々に割據させるのである、戸締まりや近所を賴みにするなどは間違ひの本である、けれども、一向戸締まりに注意しないのもいけない、泥棒に明けられた時に、近い所に寢て居る者が目を覺ます程の響も發しなくつては困る。

全く泥棒に入られないやうに戸締まりをするなら、入口の戸や雨戸を釘附にしなければならぬ、これとて老熟な泥棒には左程の困難を與へないかも知れない、お負けにこんな事をしては、それ火事、それ地震と云ふ時に大慌てだ。

そこで、泥棒の要心の神髓は。

(一)火事、地震、其他の異變の際に、外へ出るに苦しまないだけを程度として、戸締まりを固くする事

(二)家族が要所々々に分れて寢床を設け、且つ要所々々に充てるに足りるだけの人數を置く事。

(三)晝夜の別に依つて要心を二つにせぬ事。

の三である、極めて平凡のやうだが、實驗の結果、以前の奇拔な考へが皆役に立たぬを悟つてから、始めて平凡の中に無量の含蓄ある此神髓を得たのである。

其四　泥棒から受けた訓練

近頃は、泥棒に狙はれるのが習慣になつて、ア、泥棒さんかへ、睡いから失敬するよと、云ひも兼ねない度胸になつたが、それでも、心の底が引締つて油斷がない、之が爲に注意力が强くなつた事は確である、此注意力は他の多くの方面にも應用されるのである。

何時でも泥棒と鬪はうと思ふ氣が底にあるから、からだも心も凛として居る、惰氣に襲はれることがない。

それから、眞夜中に泥棒が入つたとの報告を受けてよしと飛び起きて木劍を取るなどは、頗る古武士的趣味の生活である、家の周圍、屋敷の前後、植込の中、物の陰など、身を固め眼を配つて見廻はると、昔の小說の挿繪の中の人になつたやうな氣がする、折柄、闇を劈く五位の聲、稜あつて凄い星の光など、何でも無い時に見るとは、餘程趣が變つて目に映るのである。

○遠林暮雨　　伊勢　珠川　朋子

賤が家のともし火ひとつほの見えて
　遠里林あめにくれゆく

觀察

佛國婦人の特性

ハナ、リンチ述

金好きの婦人

此地球の表面に於て佛蘭西人の如く愉快な家庭を作つて居る者はない、男女兩性とも家庭を作るに最も適當な性質を有して居る、家庭の幸福を主眼とする思想を劣等なものとする或る國民には、佛蘭西の家庭は餘りに完全で、餘りに愉快である、何が故に佛蘭西人は殖民に成功しないか、と云ふ問題は容易に之れで解決される、彼等は殖民すべく其家庭の空氣が餘りに溫かである、彼等は其の家庭的快樂を氣候の惡い殖民地に捜索する必要がない、此點は甚しく英國人と異なつて居る。

然らば其家庭の本尊たる佛國の婦人は如何、彼等は決して完全な婦人ではない、彼等は他の歐洲婦人の如

く種々の缺點を有して居るのみならず彼等の特長は金錢を愛することと甚だしい、而して又それを貯蓄することも一段である、彼等の總ての行動は經濟と云ふ原動力から來る、是れが即ち佛蘭西婦人の特長である、彼等は一般に良人と子供との爲めに生活する、彼等は實に妻としては良人に、母としては小兒に滿腔の愛を賤ぐといふ人種であるけれども、其場合と雖も決して金錢を離れては居らない、佛蘭西の小說は槪して亂暴で淫猥で、讀むに忍びない者が多いが、佛蘭西の母は其小兒が、富貴なる夫人と小說的の罪惡を犯すのを見るを喜んで居る、彼等は其小兒が結婚するならば必ず財政の事に心配のない財布の膨れた健康の可い女を撰ばなくてはならぬと敎へて居る。

家婦の敵

家婦は全然夫と小兒との犧牲である、が家婦の敵は外來者である、凡そ佛蘭西人程外來の客を好まざる人種は無い佛人は客來程不經濟なるものはないとしてある、英米人種は不經濟を犧牲としても來客を歡迎するのであるが、佛蘭西の家婦は、決してそんな人種ではない、彼等は唯夫婦、兄弟を以て家庭を組織し、姻婭の如きも時として門外漢視せらるゝ事がある、彼等は外來者に對する費用を轉じて專ら其家庭に注ぐのである。

其結果として彼等は客に對して一種の嫉妬、憎惡の念を抱くやうになる、佛蘭西の讀者も夙に此弊を認めて、パルッ、デ、ブリー夫人の如きは「佛蘭西の家庭は外來者に對して堅き花崗石の壁を有す、一見すれば彼等は外來人に對して安易、愉快、歡迎の色を示すと雖も、其底には甚しき嫌忌あり」と云つて居る、それが延ひて一種の排外思想となつて、外國人を嫌ふうやになる、文明人種たる佛國人は、半開人種たる支那人と此點に於て同一の傾向を有する、其源因は家婦の客嫌ひにあつて、而して其の又源因は家婦の經濟思想にある。

家婦の經濟思想

經濟思想を除けば、佛國の婦人は賞讃すべきもので

ある、彼等の世界の婦人中最も價有るものである、殊に家庭に於て大に其材能を發揮する、若し彼等に英國流の自由主義の敎育を施したならば殆ど完全なる婦人が出來るであらう彼等の性情は單純で、忍耐力に富み且つ怜悧である、經濟思想に富める割合には人の品性と云ふ事に重きを置くやうである。

佛國の家庭には槪して二個の潮流がある、一は堅忍なる經濟思想と、他の一は優しき愛情とである、此矛盾撞着し易き二個の潮流は佛國に於て最も能く調和せられて居る、愛情は頑固なる經濟思想の車の心棒に注がるゝ油で、それが爲めに車の輪も圓滑に動く事となる、從つて佛國の家庭では他國の家庭に於て見らるゝが如き喧嘩口論が少ない都會でも田舍でも上流社會でも下等社會でも一般に喧嘩は少ないのである。



文豪チーンの「旅行記」中斯う云ふ事が書いてある之れは最も能く佛國上流婦人の經濟思想を說明するに足るものである、一巴里人が友人の所有地に銃獵に案内されて、未だ一發も放たぬ中に、或る子爵夫人の所有地に迷ひ入つた、銃を抱へて歩るいて居

る間に番人に出會して、路を尋ねると、番人は他人の所有地で勝手に銃獵をなす者と疑つて容易に許さない終に二人打連れて子爵夫人を訪問する事となつた、夫人は面會した巴里人は先づ彈丸箱を出して「此邊り一發も放つて居ません」と説明すると、暫く考へて居た夫人は軈て「他人の所有地へ這入つたのは、間違ひとは云へ貴方も善くありません、番人が紳士を苦めた罪も輕くありませんから、雙方から二十法宛お出しない」と宣告した、そして其金は直ちに金箱の中へ入れられたのである、世人は此婦人を經濟家として最上の人であると賞賛したとある。

極端なる儉約

佛蘭西は贅澤な國であると云ふ事は佛蘭西に來遊する外國人の身の上をいつたもので、佛蘭西人自身決して贅澤でないのみならず非常に儉約な國民である、巴里で中等の生活をして居る者も、冬になると寒さに慄へて居る、佛蘭西が寒いからではない、火を多く用ひないからである、英國の中等階級では妙齡の婦人が、職業を得る爲めに狂奔して居るが、佛蘭西では、母が小兒に敎ゆるやうに熱心に丁寧に儉約の德を説敎しつゝある、要するに消極的經濟と云ふ事は、佛國家庭の主なる原素である。

斯くの如き極端なる儉約の結果は往々にして悲慘なる事件を生ずる、儉約の反對の性質を帶びたるものゝ中、最も大なるものは子孫の增殖である、子が一人殖へればそれだけの費用が掛る、それ故に子を生まない工夫をする、墮胎、避姙是れである、子孫が增殖しない、國民が減ずる、國民が減ずるから國力が弱くなると云ふ事になる、現在佛國は露國の金主であるけれども、國力の露國よりも弱いのは、一に家婦の極端なる儉約から來たものだと云はなくてはならぬ。

佛國の中流社會の生活は實に愉快であると、同時に經濟と云ふ事は嚴酷に過ぐる程に實行されて居る、元來客を待遇すべき應接室はその裝飾品を保護する爲めに常に閉ざゝれて居て、必ず來客があると定まツた時でなければ開かれない、冬になると煖爐に少許りの薪

が投せらるゝのみで、石炭は費されない、それも來客の時ばかりである、若し客の前に茶でも供せられたならばそれは、非常な優遇だと心得ねばならぬ、而も其茶は概して氣の拔けた旨くも何ともないもので、茶と同時に供せらる、ビスケットも大分日が經ッて朽ちたものである。

○湖上秋月　　伊勢　藤堂しげ子

櫓の音もしばし跡絶て水海の
さゝ浪しろし秋の夜の月



婦女雜觀

薄田斬雲

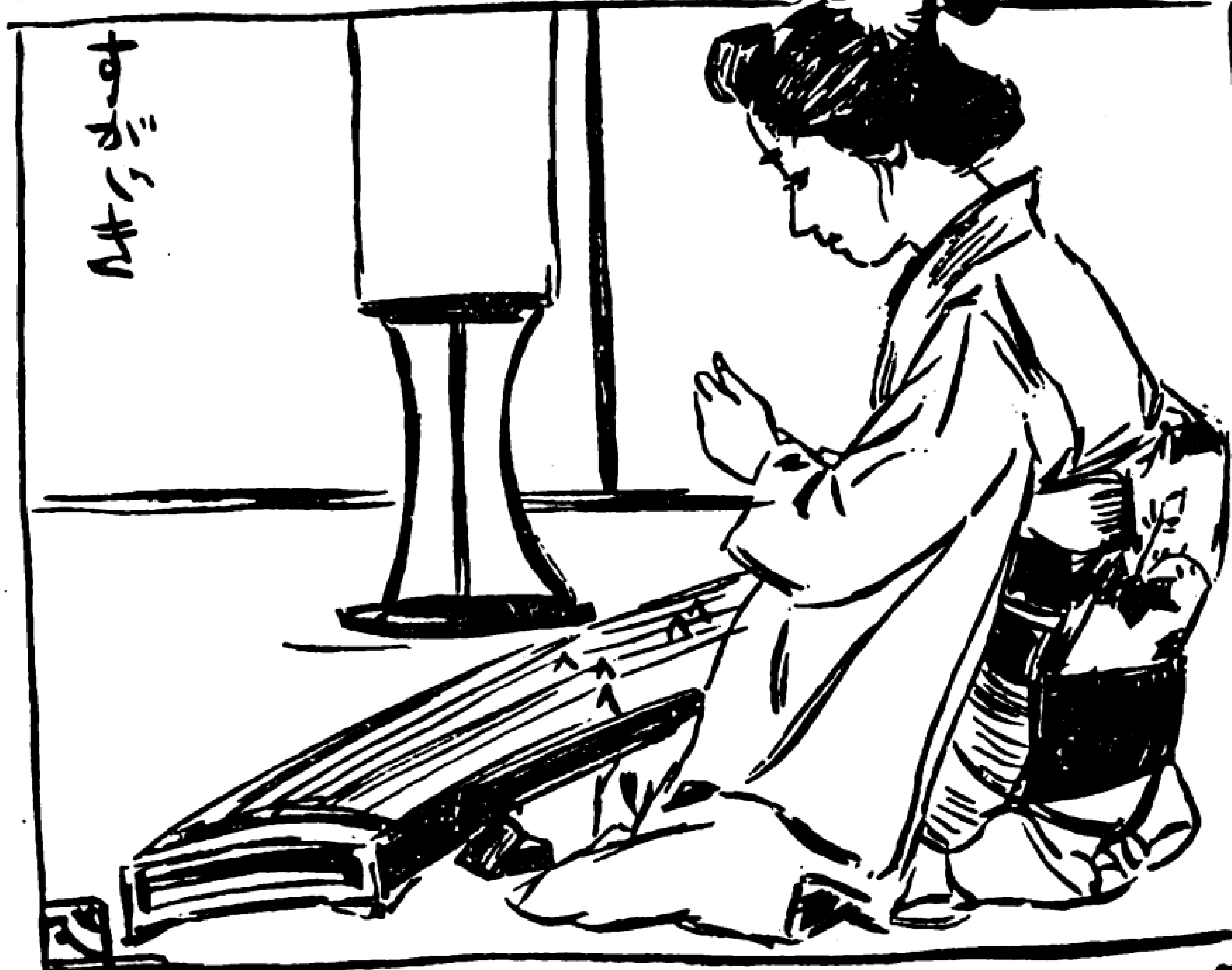
◎嫁と姑

嫁と姑の關係は以來屢々論題に登ッた事であるにも拘はらず今日猶新たな波瀾を擧げて居るのである箱に入れて置きたい程な自分の愛娘を他家へ嫁入らせる母親の心は何んなものであらう。其の嫁が試驗的の爼上に置かれ將た批評的なる冷かな眼光で二六時中睨められ、蔭では惡口され罵しられては、生みの母親が二十年來養育の苦心も形なしである。若しも自分の娘が可愛いならば、嫁へは辛く當れ

まいのに、そこが女の性には大なる矛盾があると見えて、今迄は佛様のやうなお人好しであつた姑も一たび嫁を得ると忽ちに目に角が立つて口が曲んで嫁の缺點を見付けにかゝる、一體女足らずの娘に萬事の氣がつく理由はないのを、姑の方で、無理な注文を嫁に課する自分の家の中の事を自分丈けは袋の物を探る如くに詳しく心得て居るに照して見てさて我家の嫁は氣が利かぬと罵り辱かしめるのである。

抑も嫁は姑の指示を待て萬事を行へば澤山である。だから姑の方には、一々綿密な指示と注意を與へて然るべき所をそうはせずに只默つて居て、萬事不案内な嫁をその難局に當らせて自分は高い處から見張つてゐて缺點のあつた時に、こゝぞといふ元氣でやかましくいふ夫れんばかりの事氣の付きそうなものだとて皮肉な事をいふ。それでは實にたまらない十七八の娘一人を丸め込むだけの度量のない姑は、嫁を迎へる資格がないのである。つまり嫁に苦痛を感じさせるのは、姑の馬鹿なのである。今日五十以上の姑は、今日の時代が、自分の嫁入した頃と、何れ丈け世の中が進化して居るかを知らない、而して唯曰はく、妾共の若い時には、毎月の様に夫婦揃ふて外出をした事は無い、妾共は嫁に行つてからは毎日の様に友達と往來する事は無かつたなどと、忽ち不機嫌になる。嫁の方には姑を始めから煙むたいものにしてかゝるから堪らない。そこで父子別居論が起るが、併し之は怪しからん話である、今日の時勢、嫁と姑の問題は、嫁が至誠を以て姑を感動させると云ふ事で解決が付く、理論上調和し難い點があるを知らず、情實や誤解のゴタ〳〵は、嫁の至誠で立派に解決されるべき性質のものである。吁、我家の嫁は感心だ、辛く當つては濟まないと姑に思はせる丈けに眞心を盡くすのは嫁の本分である。そこで無教育な娘は到底一人前の女にはなれぬ、女の眞の學問は姑の目に睨まれてこそ始めて發揮するのである。孝は百行の基と云ふが、親に孝行する位骨が折れて面倒で忍堪を要する事は無い、親に十分孝行する事が出來れば、何んな困難な仕事でも樂に仕遂られる、と同じ

く、女が姑の氣に入る事が出來る迄に丹精すれば、夫に仕へ、兒を育てる位な事は些とも苦しくない、詰り姑に睨まれるのが、嫁へ魂を入れるのである。嫁に行く、直ぐ東京へ出て夫と二人の世帯を持つと云ふ女は殆んど凡てが不精で、だらしがなく推察がなく、夫の月給を唯一の賴みとし又鼻にもかけて、そしこ夫を困らせると云ふ事になり、遂には夫に愛想を盡かされると云ふ破滅になるのである。父子別居は今日の處ろ甚だよろしくない、つまり女の我儘をしやうといふ點から割出したものである。故にまづ姑は我が娘を思ふ心で嫁を勞はり、嫁は眞心もて我母につかへる考へで姑の爲めを圖るのが今日の急務である。



◎結婚を急ぐ勿れ

娘が結婚を急ぐのでなく、天保時代の道德形式に迷はされて居る父母が結婚を急がせるのである。廿になつて嫁に行かなければ世間に顔出しのならぬ恥辱であると云ふのが、天保式道德である。直ぐ離婚して歸つて來ても良いから十七八の花盛りに一たび裾模樣の晴衣を着せて、嫁にやりさへすれば良いのだとは何と恐ろしい道德も有つたものではないか、女は結納金で貰〱買する物品かの樣に、過大の結納金を取り、翌日歸つて來いと言い含めて嫁入らせた娘が、果して翌日歸つて來たの

を評して孝行娘だと世間で賞めたと云ふ話が東北の都會にあつた、之等は極端な例であるが、世間には嫁を呉れる事を犬猫を呉れるやうに簡單に心得て、氣に合はなかつたら、さつさと歸つて來いと言ひ付けてやる親の了見方は文化の遲い田舍ばかりでなく、隨分生活の進歩した都會にも少くない十七歳にして純潔な處女が一人も無いのを普通とするは必らずしも北陸地方ばかりではない、それだから女子敎育の力をもつと强くし、もつと盛んにし、もつと有勢なものにしてこの弊風を打破せねばならぬ。

父母が何故に娘の結婚を急ぐかは、何も理由はないのである、唯だ天保式である。其時代の人智と社會組織とは必然にそんな傾向を招いたのである。所が今日の智識と社會組織では、そんなに急ぐ必要はないのである。故に心ある人士は此の弊風を一日も早く取除く樣に心掛けなくてはならぬ。結婚を急ぐ爲めに、女子は自活する丈けの藝能を修め得ない、自活の方法が立たなければ精神の獨立は出來ぬ、從つて、男の寄生蟲として、金ある間は玩弄物、金が無くなれば厄介物となる丈け、夫に死なれては、子供を抱へて、再婚も出來ず、食ふことも出來ないものが續々と出現するのである。

情的方面　男女の研究

秋霜生

●女性は解すべからざる乎

世界中で最も能く女性を研究して居るのは、佛蘭西人であるとは世の定論であるが、其佛蘭西人の而も一世の思潮を指導すると云ふ大家先生達が、千思萬索の末女性は到底男性には解釋が出來ぬと匙を投げ出して居る、如何にも女性とは一槪に云ふもの丶、百人が百人其性の異ること其面の異るが如くなるはまだしも、同じ女性でありながら、境遇の異るに從ひ、其人物性格に大相違を來すものは女性であるから、比較的單純なる男性が匙を投げるのも無理はない、予の友人に斯

う云ふ御目出度い先生がある曰く『僕は結婚して六ヶ月目に、自分の妻の性格を悉皆呑み込んで仕舞つたが、否呑み込んで仕舞つた積りであつたが、安んぞ知らん爾來茲に二十年の今日は、却つて自分の妻の性格氣風萬事萬端が少しも解らなくなつた、之を妙だと考へれば考へる程益す解らなくなる云々』と、如何にも笑止千萬の話であるが、世間の女性を研究すると云ふ男性は大抵斯う云ふ手合である、六ヶ月目であればこそ解るのである。

●女性を解する鍵

一體男性は女性に比較すると、非常に無邪氣な可愛らしい處がある、早い話が吾々男性は一寸風邪でも引くと、御同樣夫れは〳〵大變の騷ぎだ、夫れ醫師夫れ藥と家の中が顚覆りさうな大騷ぎを遣る、之と反對に女性が病氣などすると、じつと辛抱して居る、すると元來御目出度く出來て居る男性は御互樣だが、自分の身に引き較べて、彼の女は感心だ能く辛抱して居ると、口を極めて賞讚する、何たる罪のないことだが、只此時不思議であるのは、斯んな品評を聞かせられると、其女性が破顔一笑頗る御滿足の體に渡らせらるゝことだ、之が實に女性の乘ずべき絶好の機會で彼等の奥の手であるのだ、何うだ少しは女性の本性が解つたかね、解つたなら今度は細君選擇について少しく天機を漏さう。

●妻君選擇の標準

妻君選擇について一番肝腎なのは何か、財産の之は沙汰の限りである、金持の娘だからと云つて、世間並に結婚したいとの念はあるもの、即ち相手の男が、自分と結婚したのでなくて、金と結婚したとあつては面白くないに相違ない、然らば美貌であるか、美貌は年と共に衰へ行くを如何にせん、然らば醜貌は如何、尚ほ不可なり、何となれば醜貌は一生涯死ぬ迄消滅すると云ふことがないからよ、然らば何であるか、曰く精神的形體的共に自分の理想と符合し、其上趣味好尚、傾向を同じうする婦人即ちそれである、若し諸君が容貌の美を何とあつても其個條に入れたいと云ふならば

其美の標準を確定するのは一寸困難である、何故と云ふに人によりて其嗜好を異にするからだ、即ち或人は丸ポチャを好み或人は面長を愛するの類だ、其處で予は斯う云ふ一個條を提供する、曰く先づ其女性が假りに自分の女房となつて、自分の側で針仕事をして居る處を見ても、乃至は椽側で子供をアヤす處を見ても、美しく見えると云ふやうな種類の婦人である、左もない婦人は斷じて見合せ玉へ。

◉忌避すべき女性

元來女性と云ふ者は、得意の時よりも失意の時、順境よりも逆境に處して、特色が發揮され、其精神は益す確實となる者であるが、自分の得意の境遇に處すると、反對に頭腦の平衡を失ふ者である、だから自分の良人の成功は心からして其成功を樂むけれども、扨て自分が成功して世間から持て囃されると云ふと、嬉しさの餘りに氣が顚倒し、家庭の幸福も良人の愛も敝履の如くに打ち棄てゝ少しも顧みなくなる者である、男性は如何に成功すればとて、家族に對する感情を一變するやうなことはない、否男性は世間の嘖々たる賞讃の聲よりも、却つて貞實なる妻君や可愛ゆき娘の賞讃する簡單の言葉の方を遙に嬉しく思ふ者である、然るに女性にありては世間の賞讃の聲は、酒も同樣之が爲に氣を狂せて了ふ、斯る次第で成功した婦人は一種の畸形兒であつて、到底家庭の賢母良妻としては不適當であるから、配偶者として男性の最も忌避すべき女性である、總じて女性の愛情は、高い處から低い處に注ぐ事の出來ぬ者で、先天的に低い處から高い處に仰いで捧ぐるを常徑とする者、だから妻としては名高い學者や、音樂家や、乃至著作者よりも、質朴の田舍娘の方が優である、斯う云ふ理由で、自分より學問ある婦人、自分より脊の高い婦人、自分より年の上の婦人、自分より金持ちの婦人は決して配偶者として適當の者でない、財産から體の大さ學問の程度、扨ては年輩に到るまで。幾分づゝ細君より上と云ふ處を恰好とするのである、夫で始めて細君が自分を良人と仰ぎ力にもし又頼りにもするので一家が甘く和合して行くのだ、

一體良人たる者は、細君に對しては戀人たり、相談相手たり、保護者たる以外に少々御阿爺さん風を吹かす事も亦必要である。

◉既婚男子の心得

夫婦生活の當初何より一番肝腎の事は、妻君を取締まることである、凡そ何處の主權者でも、一び人民に與へた自由や參政權を取り返さんとして成功したる者がないやうに、夫婦も結婚した最初一度降參したら最早一生取り返しが出來ぬものと諦め玉へ、例へば細君は自分の良人が絶えず家に居らなくても、幸福を感ずる者である、否却つて時々家を明ればこそ側に居る時が一層嬉しく思はるゝのである、然るに妻君への氣兼から十年も辛抱し、碌々外出もしなかつた者が、漸くの事で決心して倶樂部などに這入らう者なら夫れこそ乾度後悔する、斯うした場合に稀に倶樂部になど行くと、直ちに不實の行爲を以て論せられ、讒責、批難、苦容、溢面、之に次ぐは必定である、揚句の果ては「近頃はモウ初め程に可愛がつて下さらぬ」と云ふ極り文句に終る事は、鏡に掛けて見るが如しだ、兎に角夫婦は一生だから途中で火の消えぬやう、愛の薪を最も經濟的に用ゐなければならぬ、其處で愛情節制の必要が起る、故に結婚の最初氣を附け過ぎたり、甘やかし過ぎたり、到底永續の出來ぬ事は見合せた方がよい、然れば世間の男性諸君は、巧みに愛情を節制して、細君に良人の愛が日毎に增し來るが如く思はせるが肝腎だ

最後に一つ二つ既婚男子の心得を簡單に述べて置かう第一朝飯を食う時は、決して細君の前で新聞など讀むべからず、夫れより雜談でもして細君を喜ばす方がよい、これが爲めに細君は一日御機嫌の善いのは必定だ、亦夜分ランプの一つしかない場合には、自分許りランプに面して都合よく書見などをしてからに、側に仕事をして居る細君の手元を暗くしてはならぬ、何となれば婦人は猫と違ひ暗中には物が見えぬからだ、次には妻君の癇癪を起した場合である、斯る場合には何處を風が吹くと云はぬ許りに、冷淡に濟し込むが一番である、奏効眞に神の如しだ、又男性は總じて妻君の口から自分を愛するなどと云はれると、興について厭になる者であるが、細君は之と反對に自分の良人の口から出る、愛するとか惚れたとか云ふ言葉を、何時まで聞いても聽き飽きると云ふことがないものだから、遠慮會釋なく一日に何遍でも之を云ふがよい。

◎都の友の許に

平塚白百合

柳櫻をこきまぜてと都のはなやかさをうたがひ候ひしはいつか今はかへりて此の草深き庵こそ錦につゝまれて候へ。君故郷こいしうは思ぼさずや、今宵はいと靜かなる夜に候くまなくすめる月かげは物をもはしげなる萩の花をてらし君と共に植ゑし實生紅葉は此の程下葉二つ三つうつろひて候。あゝ君よ都の空には美しき園もありなんされど〳〵故郷の美しきは。せめて夢になりとも君の來給はん事を紅葉も散らせずともどもまち居り候かしく。(入賞、牛込砂土原町三ノ八)

◎親しき友を茸狩に誘ふ

若槻淑子

秋風肌に心よく千草咲き亂れて眺め見飽ぬ今日此頃の好時節を空しく破窓の下に過さん事のいと本意なく蟄居候折柄山には早くも松茸生え初め所狹き迄に發生せし盛りの頃よりも返つて興多き由山里なる伯母の許より消息給はり候間一度松茸狩に御出遊ばされては如何に候や心に隔なき君と連立ち香り床しき邊りを尋ね彷徨ては此所に一つ彼所に二つと互に先を爭いて探し出す愉快さは如何ばかり殊に健康の爲にも至極宜しからんと存ぜられ候まゝ萬事お繰合せの上兩三日の内に是非妾の宅迄御出被下度先は御誘引のみかしこ。(入賞、德島縣那賀郡坂野村)

◎妹の不養生を諫むる文

宇都宮秀子

昨夕一寸塾まで御尋申しし候所あいにく先生と御他出中の由にて御目にも懸らず殘念いたし候其の節幹事殿より伺ひ候へば御前樣には此の頃餘りの御勉强成され少々胃弱にて食も減じ候とか驚き入り深く〳〵御案じ申し候かねての氣象御出精の段は誠に悦ばしき事に候へ共運動の時間なるへ惜みて机に寄り給ふは身體のため甚だ宜ろしからず殊に滋養分をおきらひなされわれ程申し置き候に牛乳も鷄卵もお厭しの由餘り聞きわけ無く子供らしき所業にて候最早さばかりの事辨へられぬ齢にもあらず且は物の道理にも暗からぬ御身右樣の不養生なされ候にかあやしきまで覺え申し候父母はたゞ其の病を憂ふるものぞと先哲の言はれし語よく〳〵御服用成され母上樣初め吾等のむねも安んじ給はん事をのみ祈り入り候かしこ。(愛媛縣伊豫郡中村大字上吾川宮元寓)

今上天皇降誕五十五年の佳節を祝し奉りて

▲興國の君

謹で古今の政史を按ずるに、興國には興國の君ありて衰國には衰國の主あり、今茲に我　天皇陛下の第五十五天長の佳節に遭ひ奉りて、過去半世紀を回想すれば、陛下は眞に天の成せる興國の君におはしまして、嘉永五年　陛下の御降誕ましましける歳『大日本史』の本紀は成り、翌嘉永六年を以て米艦は浦賀の海門を叩きたり、前者は　王政復古の大業を恢廓し給ひ、後者は開國進取の國是を推弘し給ふの嘉祥吉兆なりしことを思ひ合はされける。

元治元年京都の變、兵火宮闕に及ぶの際、陛下實齢僅に十二歳にましまし、前近衛關白御供して難を鴨河の磧まで避け給ひたるに、小さき神孫は始て廣き河面を覽なはして『爺御へ騎りて此河を打渡しなん』と宣へり、關白とかう賺し奉れども聽かせ給はず、詮方なければ御心のまゝに從はれたるに、神孫の御歡極りなく『はい〱どう〱』と數十間を打たせ給ひしとぞ、後の史を草する者　陛下は初め御一歩より、水を畏怖せし彼得に凌駕し給ふを稱へ奉らざらめや。

▲登極の事

慶應三年正月九日、御齢十五歳にましまして萬世一系の帝祚を踐ませ給ふや、三條相國、岩倉右府、西郷參議、木戸參議等一時の賢良左右に侍し奉りたりき、皇室の御陵夷より以來、御即位の大禮廢れて行はれざりしこと幾百年に及びしかば、諸臣既墜の大典を講じ、年を超へて御準備は齊ひ、翌明治元年八月二十七日といふに御即位式を擧げさせ給へり、時に補弼の一人は建議すべく、中興の君皇御位に即かせ給ふとなれば異例壯大の一典を加ふべし、即ち御府の中に大地球儀あり、之を御式の庭上に備へ御足を着けさせ給はゞ如何と奏しけるに、諸臣皆賛し、議は立どころに御嘉納あ

らせられ、百官庶僚鵠立の前、青春の天子御足を擧げて地球儀を履ませ給ふこと三回なりき、皇祖の詔のらせ給ひたる「六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇を爲す」の御氣宇、既に此時より顯然たりしぞ畏けれ。

▲月輪の東陵

今上の御宇三十九年間の盛德大業は光被して海の內外に在り、今更稱へ奉らんも愚かなり、煥乎たる大日本、世界の上に顯出し、世界萬國東海の天を仰ぐもの一に我　天皇陛下の御稜威なりとす、斯る盛典を拜し奉るにつけて無限の感懷に禁じ敢へぬは先帝孝明天皇陛下の御事にぞある、先帝陛下の御治世は內外多事なると歷史未だ曾て其比を見ず、幕府の末葉威權地に落ちて諸侯其の命に復せざるに、而も倒幕の勢正に熟して干戈漸く動かんとし、公卿其隙に乘じて政權の奪還を圖り、加之野心を包藏せる諸外國は交々來りて修交を迫り求むるあり、若し施設一度び其宜きを失はば內憂外患一時に來りてアワレ金甌無缺の皇統も千載の汚辱を蒙らんとす、陛下此際に處して毫も過ち給はず、先づ攘夷の勅を下して人心を鼓舞激厲し、更に幕府の專橫を抑へて政權を朝廷に回復するの基を定め給ふ、陛下の明斷此に到るなからましかば、焉んぞ能く今代の隆昌を拜するを得ん、未だ大業の緖につくを見そなはさずして崩御あらせ給ひしは坐に惜み奉るも畏こし、玉體は正月二十七日を以て、京都月輪御陵東の陵に葬り奉る。

▲巴里萬國博覽會の出品

今上御踐祚の年を以て佛國巴里に開設されたる萬國大博覽會に逢る〳〵日本より出品を諾し、剩へ將軍慶喜公の弟なる淸水民部大輔、將軍の命を受けて此博覽會視察の爲め遠く巴里へ使したり、是れ我國が外國の博覽會に加盟したる嚆矢とす、排外思想盛なりし當時の政府としては洵に果斷の處置と云ふべきなれ、その意固より外國との交通は世界の大義にして到底人力の阻遏すべき所にあらず、殊に彼の制度、文物を直接に見、親しく軍艦、商船の堅牢快速なるを見るに付け到底我の企及する所に非ざるを知りて、彼の長所を採

て我短所を補はんとするの念、最も熾なるに由らずんばあらず、されば豫て博覽會の開設を知りたる幕府は慶應元年四月、內外の交涉益々多端なるの時に當り、令を發して萬石以上の大名に告ぐる樣、其領分知行內に土產の物品を萬國博覽會へ出陳せんと希望するものは其旨申出づべく、假令百姓町人にありとも同樣出品差許さるべきよしを達し、專ら出品を勸奬して世界的智識の普及を圖りたるこそ健氣なれ、連年の外交談判每に屈讓の痕を殘し來れる幕府の對外施政上、最も光彩を放ちたる處斷なりかし。

常に幕府の對外政策に反抗したりし薩長の二藩に在ても、疾くより外國文物の採用に留意し、巴里博覽會にも薩藩よりは琉球國王松平修理大夫の公使と稱へて岩下方平を遣はし、又長州よりも特派したりと云ふ。



▲外交の暗鬪

當時幕府と佛國との關係はその交際決して淺からず、殊に勘定奉行小栗上野介の如きは薩長の同盟旣に成らんとして幕府の威勢漸く衰へんとするを慨し、平生深く交を訂したる佛國公使レオン、ロシユに計り佛ナポレオン三世の邊境攻畧の野心滿々たるを奇貨とし、竊に軍資四百萬兩並に軍艦四隻を佛國より借受るの約を結び、之を以て一擧長防を亡し、勢に乘じて薩州を下し、其政策として目論

見たる郡縣制を斷行して既に傾廢に陷らんとする德川の宗社をして永く安全ならしむるを得べしと立案したり、是れ小栗上州一個の意見なりと云ふと雖も以て幕府の冀ふ所を知るべからずや。

然るに此時權力の均衡上、常に佛國と爭ひたるは英國なり、英は幕府の佛に依賴する傾向を觀取するや、薩長諸藩に說くに幕府の郡縣制度斷行の計畫あるを以てして諸藩を激せしめ、以て幕府を倒すの謀を鼓吹したりければ、諸藩は英の云ふ處多年の宿望に合ふより彼此相倚りて斯に無二の交を訂し、就中薩長の二藩は兵器軍艦を英國より買入るべき約束を爲し、同時に下の關及び鹿兒島の二港を開くべきことさへ密約せりと傳へらる、さる程に幕府對薩長の爭ひは、他方に於て英佛の東洋に於ける權力の爭ひとなり、若し一朝干戈の間に相見ゆるに至らば如何なる結果に立ち行かんも知るべからず、皇國の前途に於て實に寒心の極みなりしが、此年二月暮に海軍兵制研究の爲め留學したりし榎本武揚子和蘭より歸朝し一層外國の形勢を詳にすることを得、幕府にも勝海舟伯の如き憂國の士ありて遂に事なきを得たり。

●兵庫の開港

禁闕附近の地たる兵庫を開港と決したるも亦此年に於ける大事件の一なりとす、是れより先き安政五年時の幕府は條約を以て、翌六年(西暦一八五九年)に神奈川、長崎、函館の三港を開き、一八六一年を以て新潟を開き、六十三年には更に江戶、大阪、兵庫の三港を開くべきことを約束したり、而も攘夷の論頗る烈にして最初の横濱開港には血雨屢々下るの難ありき、殊に此條約は勅許を經ざる非違の計ひなりとて非難の聲最も囂しく、到底禁闕に近き大阪、兵庫開港のことは思ひも寄らざる有樣なりしかば、幕府は特使を歐米に遣はして僅に五ヶ年の延期を約し、一八六八年即ち御踐祚の翌年を以て是非とも斷行せざるべからざるはめとはなりぬ。

されば諸外國は切に注意を與へて又もや違約のことなからん旨を迫りたるが、當時幕府は長州征討の大軍を

起し、前將軍家茂公自ら馬を大阪に進めたり、而も戰利あらずして勢威日々に傾ける折なりしかば、如何で外國の談判に應接し得る暇のあるべき、斯くて歲月を有耶無耶の間に糊塗しありける時しもあれ、慶應元年九月十六日と云ふに英、佛、米、蘭四國の軍艦九隻舳艫相銜んで兵庫に入港し來り「大阪、兵庫の兩港は特に條約の期限に先ち開港せん」とを幕府に迫り、幕府にして承諾せずんば直に京都に入りて直接朝廷に請求すべしと敎圍きける、外國使臣が斯る理不盡なる言動は前に下の關砲擊償金談判の際、威嚇を是れ事とせる英國公使パークスが、期限に先ち兵庫を開港せば、曲げて償金を半減せんと談じたりしが、今口を此に藉りて優柔無力なる幕府を見透かしての强請なりき、時の閣老阿部豐後守及び松平伊豆守は禍亂の發せんことを恐れ、獨斷を以て勅諚に戾るも先期開市を承諾すべしと答へたれば事逆鱗に觸れて兩人は官位を召上られ國許に蟄居の嚴命を達せらる、此處分は大久保利通の建議に依ると云ふ。



此に於て幕府は朝命を以て有司の進退を決せらるゝこと、一に幕府をして政權を行ふ能はざらしむるものなりとし、閣老以下有志の一大評定を開いて將軍職辭職の奏請を爲し、一面開國の不得已を論じて勅許を求めたり、而も勅諚は、條約履行は諸藩合

議の上に取極むべくも兵庫の開港は許されず、又將軍辭職は沙汰に及び難き旨を達せらる、將軍は强て兵庫の開港を請はず、改めて條約の勅許を各國公使に告げ追て兵庫は約束の如く一八六八年を以て開港するに違背なきを達せしかば、斯に各國軍艦は當初の目的を達したるに滿足し漸く攝海を拔錨したりける。

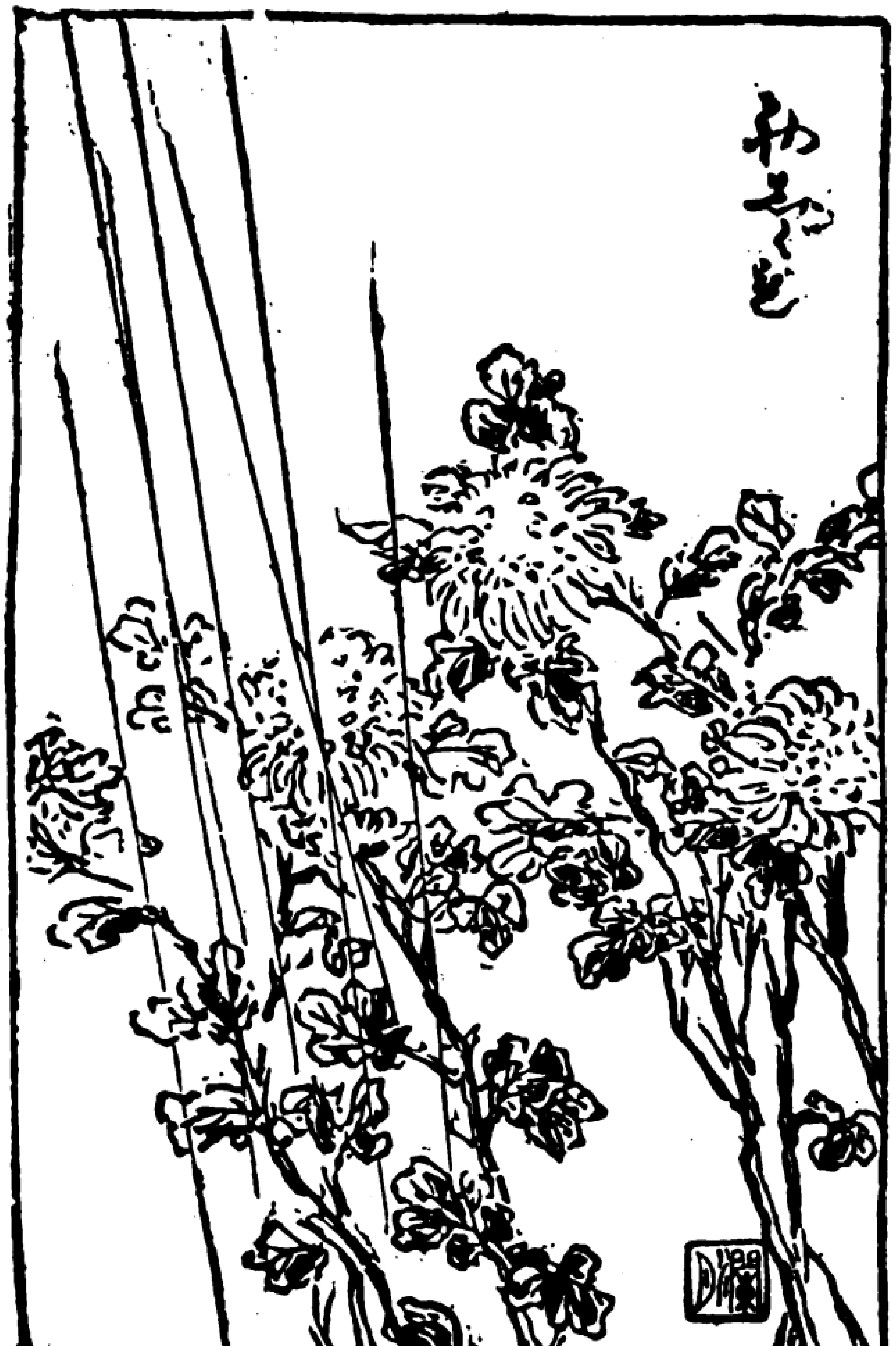
▲大政の返上

大政返上は實に將軍慶喜公の一大英斷にして、克く大勢の趣く所を察し祖宗二百六十五年の覇圖をして終り有らしめぬ、將軍をして此決意を爲さしめたるものは土佐藩主山內容堂侯の策畫に基く、去る五月朝廷の御召に應じて他の三大藩と共に京に入たる容堂侯は、徐に天下形勢の推移を見、長州再征以來幕府の威權地に隕て振はず、最初公武合體を主義として專ら過激なる攘夷黨排斥を以て任じたりし薩藩主の一變して今は幕府を顧みざるの色あり、偶々幕府防長處分、兵庫開港事件の爲に踏跙逡巡して決斷する所なきに愛想を盡かし、奮然袂を拂つて國に着きしより長州を聯盟して幕府を倒さんとするの形勢を觀取したりければ、斯に德川宗社の安全を圖り、一には生民塗炭の苦を未然に救はんとの誠意より、遂に九月其臣神山佐多衞、福岡藤次、後藤象次郞、寺村某の四人に內意を含め將軍を說かしむるに此上は大政を奉還し進で王政復古の大業を建つるの外あるべからざる旨を以てす、更に後藤福岡及び薩藩士小松等の熱心勸奬する處あり、此に於て將軍意を決して十月十二日在京四十藩の重臣を會して其沙汰に及ばれ、十二月十四日愈々政權返上の奏聞を上りたり、超て翌十五日を以て直に勅許あり、引續き諸般政務議定の爲め十萬石以上の諸侯の上京を命せられ、更に萬石以上の大小名を召し上せられ、此に大權授受の一大事件は平穩安泰の內に滯りなく結了を告げ、第二維新の紀元を史乘に劃したり。

▲討幕の密勅

平和の手段に依り王政復古を建てんとせる容堂侯一派の活動によりて、天下を驚かしむる大政返上の奏聞と同時に、他方に兵革の手段に依り王政復古を畫せる

岩倉具視公一派の密謀によりて討幕の密勅は下りたり初め岩倉公は島津公と同じく過激なる攘夷論に反對して佐幕の主義を採りしかば、忌諱に觸れて洛外の幽居に天下の形勢を傍觀しつゝありしが、恰も島津公が幕府の無能に慊焉として長州に欵を通じたる頃、岩倉公も亦同じく三條等の諸公卿の薩長聯合に心を寄せ、偶々來り謁したる坂本龍馬、中岡愼太郎等を介して聯合諸藩と討幕の手順を謀し合せ、内より諸公卿を動かして討幕の密勅を奏請せんと企てられける、身は洛外の幽居より兼て志を同ふせる中山、中御門の二卿に謀を告げ密勅奏請の手數に及ばれたり、此密議に參したりしは薩藩の小松帶刀、西郷吉之助、大久保市藏、長藩の廣澤、木戶、鳥尾、藝藩の辻、植田、寺尾の諸士にして計略は極めて秘密を保たれたれば神ならぬ身の幕府方に知る由もなかりき、斯くて十三日には毛利公父子の官位回復入京の許可あり、十四日を以て討幕の　勅諚並に幕府の股肱たる會桑二藩主誅戮の宣旨は發せられぬ、此時大政返上の奏聞若し一日を後れたらんには、世は忽ちにして修羅の巷と化すべからんと知るべからざりしを、何事なくして止みたりしは當時の諸傑が明識善謀の致す處なりとはいへ、實に聖德の賜に



して機微の間に國運の發祥を得たるものといふべし。

▲王政の復古

慶應三年十二月九日を以て王政は古に復されぬ、其中心となりて專ら諸般の經綸を立てたるは主として討幕の密勅を奏請せる岩倉公の方寸に出で、全く幕府の實力實權を奪ふて大權發動の根源を朝廷に收めんとする策略に由る、されば幕府黨の憤懣して暴發すべきを慮り、その萬一を察して容易に事を擧げず、薩長諸藩の兵十一月下旬を以て京阪の地に入るを待ち、即ち十二月九日を以て既定の計畫を發表し、將軍の職を解き、公武合體主義の諸公卿を斥け、三條以下五卿の官職を復して入京を命じ、會桑二藩の宮門守衞を廢め、悉く從來の官職を廢して總裁、議定、參與の三職を設け、即夜小御所に新任の諸職を召し集めて最初の御前大會議を開かせらる、岩倉等一味の期する所は幕府の手足を斷ちて屏息せしむる考なるも、尾越の兩親藩德川慶勝、松平春嶽及び土藩(山內容堂)の欲する所は德川氏をして諸侯の首たる位地を保留せしめんとするにありければ、兩派の激論勢ひ鋭くして、容堂侯及び後藤象次郎等は口を極めて德川氏を疎外するの非なるを責め、岩倉公、大久保市藏等は之を反駁して毫も下らず、中頃　陛下の小憩を給はりたる際、岩倉公は匕首を懷にして容堂侯等を刺さしめんと決したるを、幸に藝州侯其家臣辻將曹を以て後藤及び容堂、春嶽の二侯を諷せしめ僅に事なきを得、竟に岩倉公が策畫するところに議決し、宵を徹して漸く會議を終りぬ。

▲德川內府の退京

九日御前會議の議決に從ひ、尾越の兩侯は翌十日を以て二條城を訪はれ、內府(慶喜公)の退官及び納地の朝旨を傳へらる、此の命令の裏面に含まれたる策略と云ふは、若し內府一門葉の薄遇を恨んで暴發せんともあらば、直に朝敵の罪名を附して討伐の師を擧げんとの魂膽なりける。

さて聰明にして順逆を知るに敏なる慶喜公なれば、春嶽侯が苦しき朝旨の程を傳へたる後に色を正して告られたり。言「公にして若し兵を擧ぐるの意思あらば

自分は宗家（越前は幕府の枝藩也）の覆沒を傍觀するに忍びざる故に死を決して兵を率ひ來らん」との決意に對してすら、誓つて無謀の擧を爲さずと告げられたる程なりしも、翌十一日手書を裁して特に春嶽侯の訪問を求め、余は朝敵の汚名を受くるを欲せざるを以て苛酷なる處置も勉めて之を忍ぶべきも、家臣等の憤悶には到底之を和ぐるに途なしとて涕の中に物語りあり、春嶽侯も亦涙を吞みて之を聽かれたりしといふ、斯る斷腸の光景は復とあらざるべし、軈て内府は尾越兩侯の勸めに從ひ、翌十二日夜二條城の裏門を出でゝ大阪へ下り、僅に禁闕の下に於て兵火の慘事なきを得たり而も騎虎の勢は止むに由なく、翌明治元年正月早々伏見、鳥羽の衝突を見るに至りたるこそ是非なかりき。

かくて今上陛下御踐祚の當年は前日の如く物情恟々の中に暮れたりける、その國步の艱難なりしは今日昇平の聖澤に浴しつゝある明治子女の想像も及ばざる所なり、明治維新史の一頁を記して聖德の彌高きを感謝すと云爾。



嵐の朝

廣守千能子

よべ一夜、轟々たる風の音と、雨戸打つすごい響とに瞻寒からしめ、打々ミシリ／＼のひゞきにまんじりともせないで明かした。

今朝、起き出で見ると、昨夜の烈しかつた嵐の跡とは思へぬ程の靜かさ、るり色の空は一點の雲もない、見るから勇ましい。

おばあさんの隱居所は、最も風の當りが烈しかつたであらうと母樣の案じて居られた、其の隱居所へ、手水もしないで走けて見るとおばあさんは、未だ起きられない、で、家へ行かうかと思つたが北むきの窓や朝顔の垣根は、どうなつたかと、心もとなくて行つて見ると、オヤ／＼折角おばあさんが、丹誠して作られた朝顔の垣根は跡形も無くその葉も花も切れ／＼になつて裂かれた花片には雨の名殘の露を浴びて眞紅の色は炎の舌の樣で恨らめしいといゝそう、むしろ哀であつた、窓はと見ると幸に破損もしなかつた樣だ。

裏庭はどうであつたかと案じながら廻つて見ると此れは又、表と違つて風の當が最も烈かつたとみえて梧の葉や、さゞんか櫻、栗の實なぞが堆く積つて居る。

白壁の處に青葉、枯葉や紅白の花なぞが、吹きつけられて繪の樣、雁來紅の鉢も紅葉の鉢も見事二ツに分れて哀れや雁來紅は中途から折れてあつた。

あゝ亡き兄樣の二なく愛でゝ居られた此の雁來紅!!!おばあさんが孫の首途の記念と朝夕心に掛けて丹誠された其のしるしが此年の秋は眞紅の色一としほ美しく嬉こんで居られたのに………あゝ憎い嵐だ、おばあさんの御落膽はどれ程であろう實ににくい嵐だ。椽下に行儀よく植えられてあつた秋海棠の左に倒れ右に曲つて見る影もなく昨日今日漸く開きかけた淡紅色の花の無情の風に吹き散らされて落葉の中に交つてゐるのも又なく哀である、此年初めて泉水の側の栗の木に實がなつてもうすこしで、落として喰べられたのに柿の實もみんな落ちてしまつた泉水の底にも澤山沈んで居る、又木片や籠のこわれたのなぞが何處から吹きつけられてきたのか浮むで居る、さながら池の面は塵だめの中へ水がたまつた時のやう、金魚はまるで塵の中に居る樣なものだ、朝飯がすんだら松吉に取さらつてもらをうよ。

今二三日經てば美事熟してさぞ美味しいであらうと樂しみにして居た葡萄も無慘！棚が落ちてしまつたので其半ば小豆色した葡萄の實は、なし氣もなく大地にこぼれてしまつて早くも大蟻小蟻が占領してしまつた。

さぞかし弟の殘念がるであろうそして今少しまつてと、とめた自分を恨むであらう。

彼れ程しつかりして居た棚が落ち樣とは父樣も愕かれるであろうそれにしても昨夜の嵐が思はれる。

何處やらに未だ惡魔のたける樣な響の殘つて居て、ほえ立てる樣な氣がしたので、おそろしく足早に表へ出た。入口の側の家雞屋はと見ると牝雞どもは少さく縮こまつたまゝ身動きもしない定めて嵐に愕ろいて居るのであろう自分の足音を聞いて牝雞が目を開いたそして嬉し氣にクツクと鳴いた。

苦し氣にせき入る聲がしたのでおばあさんと呼ぶと寢返りの音がして「まア千のちやんかい 鉢は什麼なりました殘したくないが」と此れ程に案じて居られるのに、………神松もあんまりな。と根ごきにされた白牡丹を見て居た時、愛犬プレンスが落葉をとびこえ／＼走つてきた。（相模高座郡田名村）

六十日間實費特賣

日本家庭百科事彙

邦文百科辭典之嚆矢

東京帝國大學文科大學敎授 文學博士 芳賀矢一先生
女子高等師範學校敎授 文學士 下田次郎先生
編纂

印刷部數……貳萬部 期限後は嚴に實費特賣を停止し定價金拾圓に復す

▲但期限内と雖も印刷部數盡くるときは、實費特賣を撤回すべし

(甲種)……金五圓五拾錢 着金順により來る十一月一日より送本す (印刷既成)

(乙種)……金六圓 來る十一月廿日迄に金壹圓を添へ申込み殘餘は特賣滿期後六十日間内に送金する時は乙種特賣購買者たることを得。但拂込完了と同時に送本す

▲遞送料…東京市内金五錢、市外金五拾錢、(臺灣、韓國、淸國各廿錢增、)

▲大冊挿繪入見本 御入用の諸君は郵劵四錢を封入して御申越次第進呈す

裝釘極美紙數一千五百餘頁 六號活字廿四字詰卅行三段振假名附大形四六二倍判 大小項目約三萬

▲精巧木版挿圖約千個 ▲石版 二十度刷 彩色寫生圖畫 本文大二頁 十七枚石版 八度刷 精巧鮮明 本邦世界各國幷に著名都市 詳細地圖十四枚

(中付の一)

東京 神田 合資會社 富山房

郵便振替貯金口座五〇一番

電話本局一〇三六番

六十日間實費特賣

日本家庭百科事彙

本邦出版事業の發達を表示せる印刷の鮮明正確なるは我出版界未曾有の事に屬し裝釘の粹美と共に辭書として一要件なるを以て弊房は築地活版所と特約し同所の深大なる同情を得て一切新調の活字を用ゐ、三十八年五月より一部の印刷に着手し凡そ一箇年半を以て、茲に全部の印刷を完了するを得たり。

體裁と挿繪

各項目は五十音順に排列し、アイ（愛）に始まりて、ワーテルローに終る。其數大小合せて三萬。何人にも見出し易き樣、發音的假名遣を用ひ尚其下に舊假名遣を併記せり。說明の文章は平易通俗にして、稍むつかしき漢字には振假名を加へたれば、高等小學の學力だにあらば理解し得ざる憂なし。

挿繪の豐富鮮麗は亦本書の特色なり。第一に精巧緻密なる大小の木版圖約千個は各項目の周到なる說明と相俟つて本書の特色効用を完全ならしむ。第二に本書二頁大の極彩色石版圖册一葉は東京印刷會社、中村工場、小柴英侍、大江石版所、築地活版所石版部、泰錦堂、小島工場等都下屈指の工場に於て各得意の技を競ひ、寫生より製圖製版迄殆ど二箇年を要したる者にして寫出す花卉、鳥獸、昆蟲、蔬菜、果實、寶玉、石材、國旗、勳章、徽章、服裝、更紗、小紋、帶地、摸樣等描寫精巧、色彩絢爛として人目を奪はざるはなし。第三に世界各國及內外都邑の地圖は專門技術家が最新の國勢によりて、苦心作成せる物にて、坊間得べからざる新式の地圖なりとす。

本書の効用

本書は家庭の良友たるのみならず、社交の顧問なり。學校以外の教師なり。日常生活の後見人なり。複雜なる今日の社會分らぬことあらば、本書を繙いて滿足なる說明を求むるを得べし。心配の事あらば本書を拔きて信賴すべき助言を受くるを得べし。齊家、處世、あらゆる方面の指導教訓、慰安娛樂は滾々として本書より湧出すべし。如何なる家庭にも如何なる學校にも銀行にも會社にも商店にも役場にも倶樂部にも病院にも又旅店にも、場合と事柄との何たるを問はず、本書は實に博識聰明なる友人、教師、顧問、技師として常に十分なる忠告と技能とを捧ぐべきなり。

實費特賣

本書の完成は恰も弊房創業二十年に當りたるを以て、紀念として此際二萬部を限り六十日間破格の廉價販賣を行はんとす。本書の如きは、これを普通書籍に換算すれば無慮一萬頁の大册に相當し優に拾圓以上に價ひすべきものにして、此の如き異例の販賣は、到底再びせらるべきものにあらざるは、一度本書を手にせられたる人の直に首肯せらるゝ所なるべし。

（郵便爲替貯金口座五〇一番）　東京　合資會社　富山房　神田　（電話本局一〇三六番）

（中村の三）

男女學生必讀書

明治大學教授
服部躬治著

新樣 青年書翰文

洋裝美本全壹冊
定價金四拾五錢
郵税金八錢

新樣 女子書翰文

洋裝美本全壹冊
定價金四拾五錢
郵税金八錢

新なる趣味、新なる樣式、こゝにこの文の典範は立てり。文品の高きを見よ。文情の至れるを見よ。材は雅事俗事を併せ、體は文語口語に亘り、個々皆姿致あり、百態つぶさに具はる。更に薦む、附錄書翰日記の一篇、もとよりこれ清新富麗の文。特に、讀者諸君の鑑賞を庶幾ふ。

●發兌 寶文館

東京市日本橋區本石町三丁目
大阪市東區備後町四丁目

正則中學校教諭
竹内松治著

新式 漢文捷徑初步

洋裝全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

新式漢文捷徑

洋裝全一冊 定價金六拾錢 郵税金八錢

凡て思想の發表には文章に熟達を要す文章の熟達には漢文學の素養を要す本書は竹内教諭が數年の經驗に基き漢文捷徑初步は中學三年迄を漢文捷徑は中學上級迄の程度を標準として漢文學に關する全般を平易懇切に說明せられ一讀漢文の眞味を會得せしむる樣獨習者の便を計り編述せられたるものなりされば漢文研究者の指針として官立學校受驗者の參考書として無二の寶典なり

(中付の四)



日本婚姻法の變遷

清水芳子

第一　習慣法時代

人影三五落るところ必ず社會があります、社會のある以上は是を統べ治めて行く法律のあることは當然ですが、然しまだ共同生治の智識が淺く法を定めて國を治めると云ふやうな高尚の考へのない時代には、專ら習慣が社會の秩序を維持し併せて人心を支配して來たのです。我國でも神代から孝德帝まで約一千二百年間は習慣が法律の代用をしてゐたのです。現今でも習慣が一種の權威を有して社會に存在してゐることは事實でありますが、習慣が斯くの如き規範力を有するまでに發達するに就きましては必ず三つの約束があります、其一は行はれた年月の長きを要すること、其二は善良なる風俗を害さぬこと、其三は行はれる範圍が廣いことであります、此三つのうち其一を缺けば習慣ではなくして單に一時の慣例とか又は一家の作法とか云ふもので、決して習慣として社會に價値あるものではありませぬ、此處に云ふ習慣とは勿論此三つの約束に叶ふたものであります。

偖これから婚姻に關する習慣を申上げますが太古我國では婚姻のことを『呼ばひ』又は『呼ばふ』と云ふたのであります、是は其頃の風俗として春の花秋の月の折々に、市に鄙に或は野に山に又は神々の祭りなどに、若い男女が打集ひ互に歌を唱和しながら舞ひ遊び、之を歌垣とも歌かゞひとも云ひ其中には止むごとなき高位貴人も立交つて遊んだものです。此歌かゞひの折に男の方で之は自分の妻にもと思ふ女のあつた時には、先づ其女を呼びかけて自分の姓名を告げそして婚姻の申込みをしたので、呼ばひとも呼ばうとも云ふたのであります。所で斯く呼びかけられて女は其男が自分の夫として差支ないと思へば必ず其父兄に告げて許しを受け、許可された時に始めて女の髪の飾りなる押木珠鬘を男に贈り之を婚約の證據と致すのでありました、結婚式は總て女の家で行ひ之を聟取の式と稱へます。唯今では婚姻と云へば多く嫁取の意に解しまするが、嫁取と云ふことは極めて近代に起りましたもので、太古は婚姻と云へば聟取に限つたものであります。然して此當時では婚約が調ふと第一に新郎新婦の住むべき家を造りそれから結婚の式を擧げるのが例であります、素盞嗚尊が稲田姫を娶つて須賀宮を造り給ひ、此處に移り住んで夫妻隱に八重垣造るの御歌を詠れ、大國主命が出雲で八野若姫を娶らんとして先づ住むべき宮を造りしなど皆此例で、後世嫁を「御新造」と云ふのは之に基いたものだそうです。又當時の習慣は男は數婦に見えるも女は必ず一夫を守つたのです。須勢理姫が良人大國主命の旅に行くを送つて『吾が大國主こそ男にませば何處にも妻持たらせめ、吾はもよ女にしあれば汝除きて男はなし汝除きて夫はなし』と歌はれ、垂仁帝が丹波より五人の女を召し給ひ、景行帝が美濃より姉妹二人の女を召し給ひ此外代々の天皇が後宮に數人もしくは十數人の女を召したことは即ち一夫多妻の例證です。尤も斯かる風俗は獨り貴族權門の人々にのみ行はれていたとではなく、下々の階級まで萬遍なく行はれてゐたのです、支那の書物で我國の事を記した後漢書によると『倭は韓の東南大海中にあ

り、國に女子多し、大人は皆四五妻、或は二或は三、女子は淫せず妬せず』と云ひ、又山海經の註には『一男子數十婦』と書てあります。斯くの如く男は數婦を娶るの自由を有してゐるに反して、女は一夫を守るの義務を負ふことが當時の習慣であつたかと云ふに、是に就ては男子は戰爭で多く死亡し女の數が男に比して多いこと、一夫一妻で、時々男子の制慾を要すること、男子は變化を好むの情深きこと、男子は人類自然淘汰による若き女または美しき女により情を動かし易きこと、野蠻の女子は男子に較べて早く老



ゆること、男子は自衛上子の多きを望むこと等の數個の理由が因となり。更に當時の社會制度は天孫人種、即ち我々の祖先が皇澤に霑はざる諸國の熊襲や梟帥や土蜘蛛を征討した時代を餘り隔てゝゐぬので、此征討者即ち我々の祖先は勝利者の威勢で國内到るところ歡迎優待を受け、當時の父兄は斯かる勝利者と婚を結んで勢力を占めやうと計り、婦女子も斯かる人に愛されて勇者の妻となり勇者の子を産むことを無上の誇りと信じ、人も許し世も許したことが緣となり、此因緣が久しく行はれてゐるうちに習慣となり、

途に一夫多妻の風俗を造るに至つたのであります。尤も風俗は一夫多妻ではありましたが、當時に於ても繼嗣を重んずる心から、嫡妻が他の者に比して權威の强かつたことは勿論で、其名稱も嫡妻をコナミと云ひ後妻をウハナリと區別して呼びました。唯今の風俗から考へますとウハナリとは後添ひと云ふ意味に聞えますが、當時では結婚した時の前後で斯く云ひ習したのであります。

婚姻を取結ぶに媒介人を要し又婚約の證據として後世の結納の意味なる物品を贈つたことは是も古代からの習慣で、仁德帝は雌鳥皇女を納れて妃となし給ふ折に隼別皇子を媒介人とし、雄略帝は若日下部王の家に行幸して途に獲たる犬を妻問の物と云ひて下し賜つたこともあります。妻問の物とはこれ取も直さず娉問の義で媒介人の仲立の心なることは說明までもありませむ。婚姻の儀式は極めて簡單なもので纔に盞結とて男女互に盞を取交すだけでありました、馳走には机代の物と云ふ酒饌を饗するのみで今から見ると儀式と云ふほどの設けはないのであります。此外離婚のこと及び夫婦の財產のことなどは習慣があつたのでしやうが、今では定かに知ることが出來ませぬので總てを省くことに致します。

第二　唐制模倣時代

支那との交通が追々盛になり彼地の文物制度を輸入して孝德帝の大化二年に始めて良民賤民（奴隸と同じものなり）の結婚に就て禁を定められました。是が我國に於ける最古の婚姻法で、その條文は左の如くであります。

良男良女の共に生める子は、離婚の時には其父に配し、良男の婢（賤民の女）を娶りて生める子は母に配し、良女の奴（賤民の男）に嫁して生める子は父に配し、奴婢（賤民同士）の共に生める子は母に配すべし。

當時は社會の關係がまた複雜でありませぬので、婚姻法の如きも極めて簡單なもので此外は專ら習慣に依

つて萬事の取締りをしたのであります。所で茲に附言して置くことは賤民の位置でありますが、我國に於きまする賤民は西洋で云ふ奴隷と全く同じもので、其起原は太古に屬し、其種類には犯罪のために處刑されし陵戸、叛逆人などの子孫を沒官したる官戸、家長に使役される家人、及び父兄に賣られし者または借財のために自ら身を投じたる者、亦は戰爭の折に捕虜となつた者との二者を含みし奴婢との四種あります。此うち政府に屬する者と公奴婢と云ひ王臣以下百姓の配下にある者を私奴婢と稱し、前者は賣買を禁



じてありましたが後者は賣買く は勿論生殺與奪とも其所有主の隨意で、是が待遇は家畜の牛馬犬豚と少しも變るところはありませむ。我國に於きます人身賣買の價は實に此奴婢から起つたもので、然も此不條理至極の觀念が長く我國の人心を支配して、人買ひとなり人商人となり、遂に婚姻には賣買婚と云ふ風をつくり、女子の人格は全く無視されて一個の財産扱ひを受くるやうになつたのです。

大寶律令は我國最古の成文法で是までは重に不文律の習慣でのみ處理して來たのですが、支那との交通は漸く歸化

人を生じ及び是等の歸化人を官吏に任用する必要も起り、國內の出來事も段々複雜となり金錢の貸借物品の賣買なども頗る發達して來て、今では單に習慣だけでは取締りがつかぬやうになり、玆に孝德帝の朝に時の刑律學者に命を下し支那の唐制に準據して始めて大化改新の法制を定められ、後天智帝聊か改刪を加へられ近江律令として發布し、更に文武帝の大寶年中に再び改正されて發布になつたのが即ち大寶律令でります。されば大寶令は其內容を云ひますと全く支那の制度を基とし是に我國の習慣を加へたものにしか過ぎぬのであります、同令中婚姻に關する條項は大略左の如くです。

▲嫡婚齡及び婚姻の成立

一、男子は年十五歲以上、女子は年十三歲以上に達すれば婚嫁を許す、

一、婚家には必ず婚主を定む（婚主とは女子の祖父母また父兄の如き家長を云ふ）、婚姻の成立は婚主の承諾により諸近親に申告すれば足る、若し婚主となるべき、家長なき時は女の隨意に之を定むることを得、男子も亦これに同じ、

▲男子より離婚し得る場合

一、子なき者、婬佚なる者、舅姑に仕へざる者、多言なる者、盜竊する者、妬忌の心ある者、惡疾ある者、（是を七去と云ふ）、

一、七去の理由ありとも左の三不去の事情あらば離婚を許さず、

舅姑の喪を經持したる者、

娶りし時賤くして後に貴くなりたる者、

受くる所ありて歸す所なき者（嫁の里方の絕家したるを云ふ）

但し三不去の事情あるとも婬佚、惡疾、義絕（義絕は夫の祖父母、父母、兄弟等を毆罵し又は殺傷すること）の罪を犯したる者は離婚することを得

▲女子より離婚を求め得る場合

一、結婚約束後三月を經るも婚姻の式を擧げざる時、

一、夫となる者婚姻の式を擧げざる前に逃亡して一月

歸り來らざる時、又外國に行き一年を過ぎるも歸り來らざる時

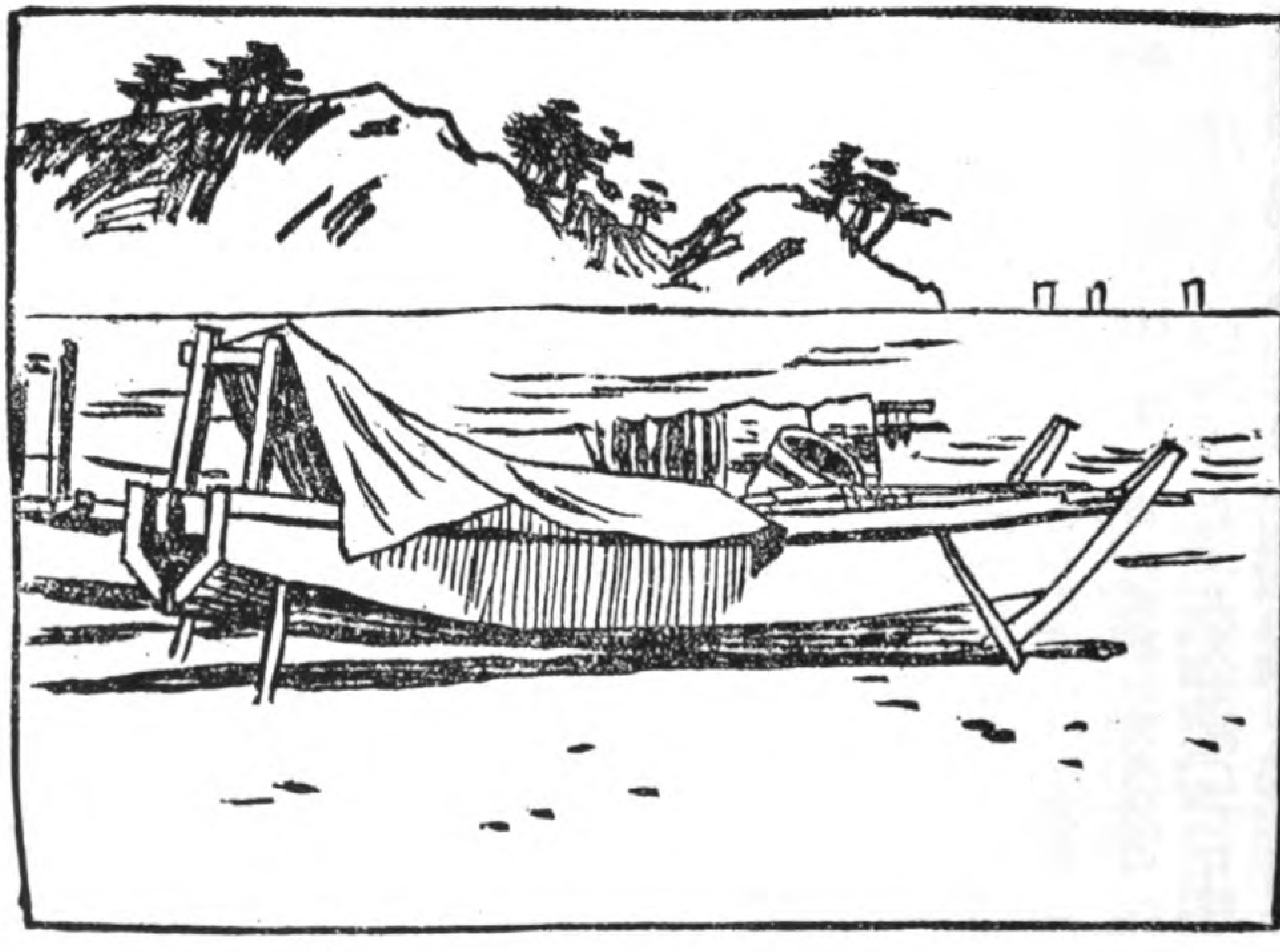
一、夫たらん者婚式以前に於て徒刑以上の罪を犯せる時

一、婚式を擧げたる後に夫逃亡し二年歸らざる時（子あれば三年待つ）又夫外國へ行き三年歸らざる時、子あれば五年待つ）、

▲離婚の手續き

一、妻を離婚するには先づ祖父母父母近親に申告し其承諾を受くべし、若し祖父母等なきときは夫の自由たるべし、

一、離婚の證は夫手づから其理由を書し近親連署して妻



に與へよ、但し夫無筆なる時は代書せしめて氏名の下に指畫（今の拇印と同じ）して證とすべし、

▲夫婦財產の處分

一、正當の事由ありて妻を離別する時は其持參せし財物及び召連て來りし奴婢は妻に戻すべし、

一、婚姻の日妻の持參せし財產、及ひ夫婦相共に勞働して得たる財產は常は夫の所有に係り、妻の沒後も其遺產は夫の所有とす、

▲婚姻に就ての罰則

一、婚主に承諾を求めずして結婚又は離婚したる者は笞五十に處す、

一、姦通より成りたる婚姻は大赦に遇ふとも各自を離別す

一、婚姻を約して聘財（今日の結納なり）を受け、其約束を變ずる者は笞五十に處す、但し飮食類の贈りものは此限りにあらず、

一、妾を妻とし、女家の婢を妻とする者は徒刑一年に處す、

一、監臨の官其監する所の女を妻とすれば杖八十に處す、

一、人の妻を娶り及び之に嫁する者は各徒刑一年に處し、離別せしむ、

一、妻に七去及び義絶の狀なきに妄りに離別する者は徒刑一年に處す、

一、七去の事由あるも三不去の理あるに猶は強て離別する者は杖八十に處す、

一、妻ありて更に娶る者は徒刑一年、女の家は杖一百に處す

此外同令には皇族の婚嫁に關し種々な定めもありますが是等は態と略します。偖茲に掲げました大寶令は王朝時代の前後五百年間施行されたもので、此間婚禮の式作法には元より移り變りはありましたが、其婚姻法にあつては少しも改むるなく此律令によつて取締りを續け、武家時代に及んで此律令に代るべき幾多の式目法度が出て、遂に大寶令は自然と廢止されたやうに爲つたのです。

第三　武家法度時代

源頼朝が天下の政權を執り京都から三善康信を招いて武家取締りの規則を拵へましたが、婚姻に就ては別に前代と渝るところもありませんでした。源氏が亡び北條氏が執權となりまして貞永年間に貞永式目と云ふ規則を發布しました、此式目は專ら北條氏の支配してある武家にのみ適用したもので、婚姻に關する條項は纔に武家が其所領の一部を割いて女に持參させた折に、其夫が死亡した時または其女が死亡した時には其所領は如何に處分するかと云ふやうな規定ばかりで、

武家以外の百姓町人に就ては別に新しい定めはありませむ。後醍醐帝の朝に制定された建武式目も又前の貞永式目と同じく重に武家の取締りをしたものです、足利氏が政治を執るやうになつてからも婚姻法には差したる變更はなく、唯輿入れの方法に就て聟取の式が廢れて嫁取の式となり、且つ其式が以前に較べると甚だ複雑鄭重になつただけであります。

武家時代の八百年間、其半ば以上は年々戰亂打續いて男子は常に攻城野戰のことにのみ從ひ、之につれて男子の權は强く女子の權は弱くなり、加ふるに群雄割據の餘風は家に重く人に輕く、家長の權は家族を自由に處斷するほどの境に到らしめ。加之、佛教の女子に冷酷なりし觀念は之等の思想と抱合して、遂に女子は物件と同視され當人の意に適さうが適すまいがそんなことには頓着なく、父兄が命ずるまゝに一生の苦樂を他人に委せると云ふ果敢ない境遇に陷つてゐたのです。猶ほ此以外に於て當時の女子に多大の同情を寄せべきことがあります、それは當時戰國の習ひとて盛に婚姻政略をもちまして相互に權勢を張つたことです、所で此婚姻政略には二つの事情が含まれてゐます、一は女を人質の意味で嫁にやるのと一は女に間者の役をさせるために嫁にやるのです、是等の實例を當時の書物に求めますと其數も頗る多く、且つ戰國時代の女子が知れますが、今は煩を避けて略すと致します。

足利氏の亡びて徳川氏に移る前後六十年間は豐臣秀吉の太閤式目と云ふがあるだけで、他は貞永建武の兩式目を用ゐてゐたのですが、此太閤式目も其多い部分は武士の取締り法で婚姻に就ては單に『男女の仲立、十六七まで斟酌あるべきこと』の一條があるだけで、外には何も規定してありませむ、所が徳川氏が天下の政令を握るやうになると將軍家康は慶長二十年に武家諸法度を布告して一萬石以上の大名の私に婚姻するを禁じ、更に元和元年に公武法制應勅十八ヶ條を發布し、婚姻に就ては左の如く規定しました。

公家より武家に緣組のこと關東へ相達し將軍家より沙汰に及び其上にて取組申すべく、若し其儀之なれ

く取結ばれ候に於ては其罪申付べく候、緣組の上も猥りに宮中の趣き其沙汰仕り候儀相聞え申すに於ては重罪たるべきこと(下略)、
猶は德川百ケ條に於て左の如く規律を設けてゐます。

男女室に居るは人の大倫なり、十六歲獨居すべからず、媒妁を求めて婚姻の禮を結ぶべし、然れども同姓を娶らず家筋血筋を撰び緣を結ぶべし、
妻妾の差別は君臣の禮を以てすべし、天子十二妃、諸侯八嬪、大夫五嬙、士に二妾、其以下は匹夫なり、古聖是を禮記に記す古今の帝典なり(下略)、

以上は專ら公卿武家に限り適用した婚姻法で、士分以下の百姓町人に對しては一度に之が律令を示さず、事件の起る度ごとに其取締り法を出しました、左に掲ぐるものは德川禁令考に載せてありましたものを抄出したので、其年時は寬永以後寬保に至る約百年間の定めであります、德川時代では是等を標準として後は當時の習慣を參考して總てを裁斷したのであります。

一、離別狀遣さずして後妻を呼び候者は所拂ひ、但し利欲の筋を以ての儀に候はゞ家財取上げ江戶拂ひとす、
一、離別狀取らずして他へ嫁入り候、女は髮を剃り親元へ相返す、但し右の取持いたし候者は過料とす、
一、離別狀なくして他へ緣付候親元は過料のこと、
一、緣談極め置き候娘と不義致し候男、並に娘共に斬り殺し候親は搆ひなし、
一、緣談極り候娘と不義致し候男は輕追放、但し女は髮を剃り親元へ相渡すこと、

此外婚禮の儀式の奢侈に流れることを禁じた二三の法令もありますが、這は本問に關係が少いことゆゑ省きます。偖當代は家族制度の最も極點にまで發達した時で、家長の權は絕對無限で家族は負擔する義務はあれど主張する權利とてはなく、就中、女子にあつては三從とて家に在る時は親に從ひ嫁しては夫に從ひ老いては子に從ふの制裁を受け、一生の大事を定める婚姻

に就ても父兄が行けと命ずるところなれば否應なしに其命に從はねばならず、嫁した先で舅姑の意に滿たないと舅姑去りと云ふ厄に遇ふのでありました。斯かる境遇ゆゑ連添ふ夫が不行跡のことがありましても辛抱ばかりして離婚を求めるなど云ふことは出來なかつたのであります、女は三界に家なしとか或は女子とは業の凝りである等の俚諺は實に當時の女子の境遇を說明してあります。



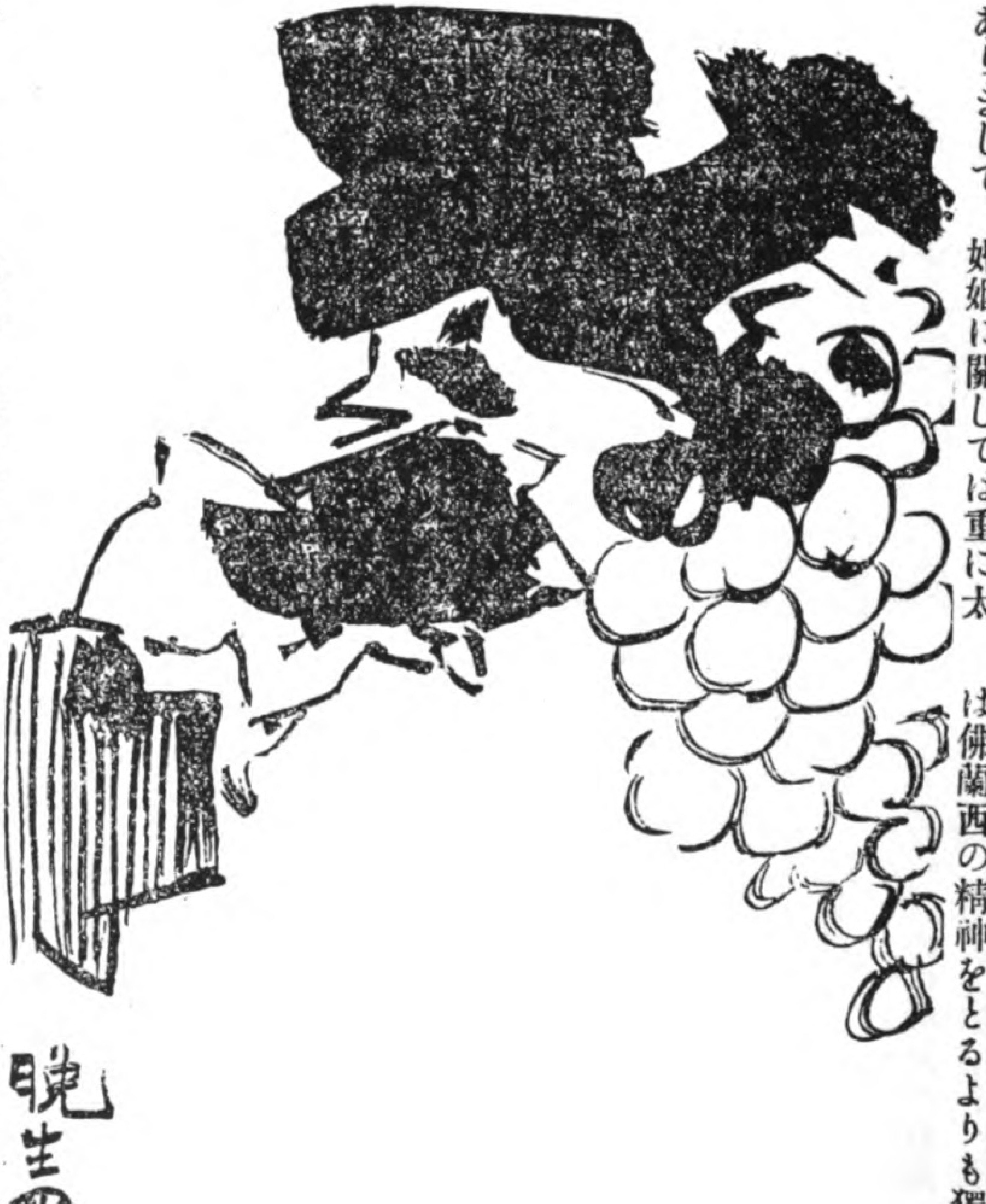
女子の人格を無視し無理往生に結婚を强ゐる風俗は、實に亂暴とも不法とも云ひやうはありますんが、天はまた此無告の者を救濟する大慈悲者を降しました、それは北條時宗の夫人覺山禪尼で、俗に云ふ鎌倉の緣切寺のことであります。緣切寺とは鎌倉松ケ岡の東慶寺の別名で、此寺は源賴朝の叔母が住持となつてから以來尼寺となり、中興の開祖は即ち時宗の夫人覺山尼であります。弘安八年覺山尼我子の北條貞時に語つて

云ふに、自分は出家の身ではあるけれど女子のことで世を益することも出來ない、凡て女子の身は必ず一度は夫に身を寄する者ではあるが、其夫が邪見非道のために愛情も絶え果て狹き心から身を過つ由を折々見聞する、誠に不便と思ふ故、若し斯かる女子があるならば寺へ入れ三年の間佛事修業の趣意で邪惡の夫の縁を切るを寺法とし、世に數多き薄命の女子を救ひたしと相談されました、貞時は當時の執權職ではありますが斯かる新制度を立てるには自分だけの考へでは濟ぬとて此旨を時の天皇に奏聞し勅許を受けて、茲に始めて縁切を寺法と定めることゝなりました。其後後醍醐帝の皇女用堂尼この寺の住持となりまして三年の期限は餘りに長しとて二十四ヶ月に縮め。德川氏の初めに豐臣秀頼の女で德川秀忠の孫なる天秀禪尼が入寺して以來縁切寺の名は世間に高くなりました。所で其救濟の方法はと云ふと夫のために不幸に沈んでゐる女子は走り來たつて此寺に投じさへすれば、たとひ夫が跡から追かけて來るも如何ともすることが出來ず、既に其女、下駄片足でも寺の地内へ投げ込めば最早夫と雖も其女に指もかけることは出來なかつたのです、斯くして救はれた女は二十四ヶ月の期限が過ぎれば再び何處へなりとも縁づくことが出來たのです、上州の滿德尼寺も又この東慶寺と同じ寺法がありました。寺へ逃げ込んで始めて其身が救はれる當代の女子は眞に氣の毒の極みであります。

第四　民法制定時代

明治の維新は總ての制度を根底から破壞しました、婚姻法の如きもまた空前の大改正を見るに至りました、明治四年に新律綱領と云ふ法律が出ましたが、是は彼の大寶令が唐制に依據したやうに專ら支那の清律を基として定めたもので、其精神は必ず我國の人情風俗に適したものではありませむ、例へば妻妾の區別は君臣の禮を以てすべしの慣習があるのに、新律綱領では妾を置くことを公然と許したのみならず、之が差等を設くるに妻を一等親とし妾を二等親とする規定であ

りました。尤も同令は身分に關する規定は少く犯罪に就ての制裁が多くありまして、婚姻に關しては重に太政官の布告で或る事件の起る度ごとに裁斷を下しました。斯くてある間に明治十四年現行刑法が發布されて新律綱領は廢止となり、身分の法律に就ては佛國からボアソナードと云ふ學者を顧問に聘し、法典調査會を設けて佛國民法の精神をとりぞれへ我國の習慣及び代々の法律の意味を加へて民法草案を脱稿實施致しまし



た所が世界に於きまする法律學殊に身分に關する民法は佛蘭西の精神をとるよりも獨逸の法典に則る方が完全であると云ふ議論が起り、其うちには我國にも有名な法律學者が續々出て來まして研究詮議の結果は、遂に佛國法を棄てゝ獨逸法を採ることに決定し、曩に實施致しました民法草案は廢止となり是に代つて明治三十一年に發布になつたのが則ち現行の民法であります。婚姻に關する規定は民法第四編第三章にあり七百六

十五條から八百十九條まで五十四ヶ條に亘つて明記してあります所で條文を紹介する前に現行民法に於きまする法の精神を申上げて置く必要があります。それは他事でもなく由來我國の親子兄弟の關係は絕對なる家族制度で、戶主の權は恰も主人が家來に對するやうな酷苛を極め、父兄が承諾さへすれば嫁に遣るのも聟を取るのも自由勝手で、婦女子は唯その命令に從ふより外はなかつたことは前にも云ふた通りでありますが、現行民法では此制度を全く改正して個人制度と致し、父兄が何と命令しやうが婚姻をする本人が不承知なる以上は決して其命令に從はなくも宜いとしたのであります。然しながら男女共に適婚齡に達したゞけでは複雜した世間のことを判斷するには其智識のまだ十分でなく、妻を撰み夫を定めるに就ても自分のみでは危險があるので、或る年齡に達するまでは父兄または後見人の承諾を要することゝなつて居ります。

左に婚姻に就ての重なる規定を列擧致します、

▲婚姻の成立と要件

一、男は滿十七年女は滿十五年に至らざれば婚姻を爲すことを得ず、

一、配偶者ある者は重ねて婚姻を爲すことを得ず、

一、女は前婚の解消（即ち離婚の場合）又は取消の日より六ヶ月を經過したる後にあらざれば再婚をなすことを得ず、

一、姦通によりて離婚又は刑の宣告を受けたる者は相姦者と婚姻を爲すことを得ず、

一、直系血族又は三親等內の傍系血族（伯叔甥姪の間）の間に於ては婚姻を爲すことを得ず、

一、子が婚姻を爲すには其家に在る父母の同意を得ることを要す、但し男が滿三十年女が滿二十五年に達したる後は此限りに非ず、

一、婚姻は之を戶籍吏に屆出づるにより其効力を生ず、

▲婚姻の無効及び取消

一、人違ひ其他の事由により當事者間に婚姻をなすの意思なき時、及び當事者が婚姻の屆出を爲さゝる時

は無効とす、
一、詐欺又は强迫によりて婚姻を爲したる者は其取消を裁判所に請求することを得、

▲婚姻の効力

一、妻は婚姻によりて夫の家に入る、入夫及び聟養子は妻の家に入る、
一、妻は夫と同居する義務を負ふ、夫は妻をして同居を爲さしむることを要す、
一、夫婦は互に扶養を爲す義務を負ふ、

▲協議上の離婚

一、夫婦は其協議を以て離婚を爲すことを得、
一、滿二十五年に達せざる者



が協議上の離婚を爲すには婚姻につき同意を爲す權利を有する者の同意を得ることを要す、

▲裁判上の離婚

一、夫婦の一方は左の場合に限り離婚の訴を提起することを得、
一配偶者が重婚を爲したるとき、
二妻が姦通を爲したるとき、
三夫が姦淫罪によりて刑に處せられたるとき、
四配偶者が輕罪以上（破廉恥罪）の刑に處せられ又は重禁錮三年以上の刑に處せられたるとき、

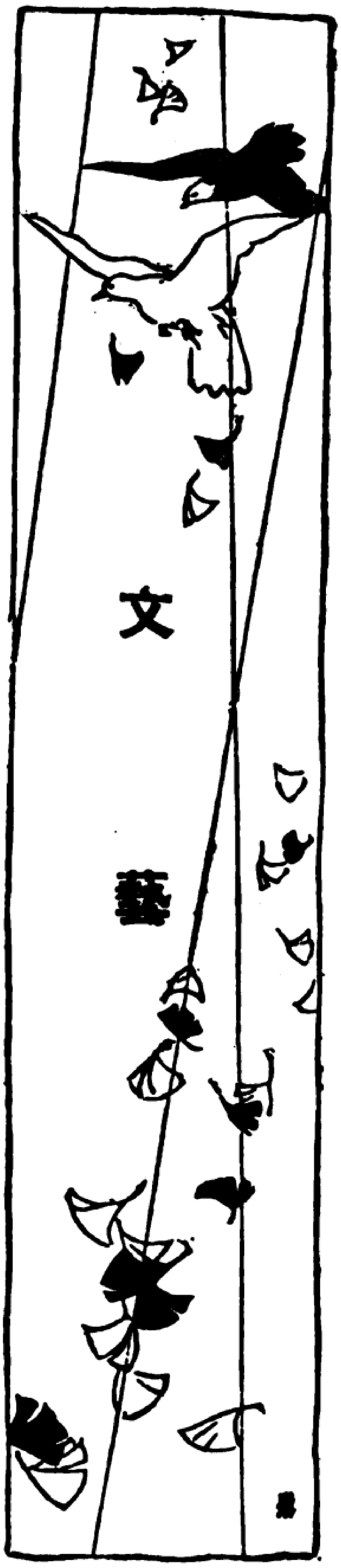
五配偶者が同居に堪へざる虐待又は重大なる侮辱を受けたるとき、
六悪意を以て遺棄せられたるとき、
七舅姑等が虐待又は重大なる侮辱を受けたるとき、
八配偶者が自己の直系尊屬（祖父母父母）に對して虐待を爲し、又は重大なる侮辱を加へたるとき、
九配偶者の生死が三年以上分明爲らざるとき、

猶ほ此外夫婦財産制、法定財産制及び外國に於て日本人同志が婚姻する塲合等の規定もありますが、是等は多く婚姻そのものに關する規定と云ふよりは婚姻によつて生ずる夫婦間の約束を定めたものゆゑ今は略します。

偖我國に於きまする婚姻法は其始めは全くの自由婚姻制度でありましたのが、中頃支那の儒教主義が輸入されて干渉制度と爲り、更に戰國時代と爲つて女子の權利は男子のために蹂躙され、佛教の禁欲主義は之と抱合して女子を輕視するやうになり、女子は外面菩薩の如くで內心夜叉の如く、七人の子は爲すとも、女に心許すなとか、或は子を生むとも腹は借りものであるなどゝ云ふあらゆる侮辱迫害を加へたのです。斯かる不遇なる境涯に沈んでゐた女子も民法の制定と共に再び元の自由婚姻制に戻り、此侮辱此迫害から脱出することが出來たのであります、是が我國に於ける婚姻法の變遷の大略であります。（をはり）

有毒白粉

日本在來の白粉の有毒なるは人の知る處ろなるが今其有毒白粉は如何にして製せられしかといふに原料は鉛と葛粉にてまづ鉛、葛とも酢蒸にして白くなりたるを清水に浸し細粉の沈澱するを待ち布漉にして更に數回清水を以て曝らし乾かして麝香を加へ香氣をつけるなり、其有毒なる事知るべし而して西洋白粉は米粉の粉末したるもの七千グラム、洋紅五グラム、玫瑰油二十グラム白檀木油十八グラムを混和し絹篩に掛くるなり。



絶艶の人テオドーテとソクラテス

宮坂芙蓉

折からテオドーテは一人の畫師に、その艶やかな姿を描かせてゐる。が、今まで、どの畫師も〳〵つい恍惚としてしまつて、果ては「私にはどうも」と茫然と歸つてゆくので、テオドーテは「困るはね」と微笑みながら又他のを招かせる『これが内々道樂の氣味なので、で、小婢の後に跟いてソクラテスが入つて來ると、テオドーテは極く輕い——が、それで愛嬌滴るばかりな會釋はしたれど體は其儘でゐる。ソクラテスは大理石の圓卓子を少し隔てゝ立つたまゝ、些と四邊を見廻した。

ソクラテスの後には供の弟子が立つてゐる。そして非常なる感動に打たれてゐる。

おゝ莊嚴と美！千古嚴正な老偉人と千古の美人！まあ什麼な氣合の、什麼な會話が始まるであらう。

と、ソクラテスは口を開つた。弟子の方を拂返つて囁くやうに、

「や、なるほど美だ。想像以上だ。が元來我等がテオドーテに謝すべきだらうか。このやうな艶やかな姿を見せて與れるのだから。しかし、或はテオドーテが先づ我等に謝すべきだらうか。我等は唯彼の美を見るべ

く來たのだから」

低聲ながらも聞違からぬテオドーテには聞えさうに思はれるが……ソクラテスは獨語を繼いだ。

「若しも我等の賞讃で、少しでもこの人の譽が高まるなら、我等は去つて更に廣く遠くこの人の名を傳へやう。それが一層よい謝辭であらうから。我等は目のあたりその美に醉はされるばかりでなく、別れて後も永遠に忘れ難いものがあるだらう」

何氣ない容態で聽いてゐたテオドーテは、やがて此方へ向直つて嫣然と微笑みながら

「まあ嬉しうございますこと、さう言つて戴けばほんとに嬉しうございますよ」

言ひながら二人に椅子を勸めるのである。で、綾美しく着飾つた小婢に命じて、金銀、水晶、目も眩ゆい皿や盃に堆かき菓物や珈琲を持運ばせる。

「や、これは御丁寧なことで……時に唐突だが、貴孃は何かナ、地面でも所有つていらつしやるかナ」

「いゝえ、そんなものは……」

「ハ、ア、それでは長家でも貸付けていらつしやるのだナ」

「いゝえ……」

「フム、では奴隷でも澤山ゐて勞働しますかナ……ナニそれも……ハテナ、では失禮ぢやがお生計の方は……」

「ハア、それは御交際します方々が、いろ〳〵お贈り下さいますので……」

「ハ、ア成程、や、それは良い財源だ。羊や山羊の群を飼ふよりもずつとよい。が、さういふ友人が蠅のやうにおのづと群がつて來るに任せておきますか。又は何等か招き寄せる手段を用ひますか」

テオドーテは酷いことを言ふ老先生だと思つた。が又面白い人だとも思ふ容子で、例の艶やかに微笑みながら

「どうして貴方、そんなことが……妾は手段なぞは存じませんもの」

「ナンノ、六つかしいことはないサ、あの蜘蛛のやう

にやればよい。網を懸ける、蟲が掛かる、捕つて餌にするわけのないことサ」

「オホ、、、………でも妾はそんな事に慣れませんもの………悉しく敎へて戴きたうございますね」

「慣れない？では敎へて上げやうかナ」

ソクラテスは珈琲を一啜りして

「貴孃は獵を御存じないかね、友人といふ貴い獸を驅出すのもあれど同じサ、まづ獵人は深夜に山へ入るには夜道を案內する狗を伴れ、明けると足の疾い、鼻の銳い狗を使ひ、細道には沈着いた狗をやり、あらゆる手段で兎を驅出す



そして四方から網の中へ追込むのだが………」

「でも、妾などに驅出すことが出來ますでせうか」

「出來ますとも、狗の代りに美しい人を使ひ、それで富める人を網のところまで誘つて來さへすればよいのだ」

「網と仰しやるのは何の………」

「網ですよ、人に纏ひつく網で、即ち貴孃の身體のことサ。而も貴孃の身體には心が宿つてゐる。で、什麼な言葉で人の心を惹かう、どういふ姿で人を動かさうと、障なく案へるでせう。好意ある者は微笑で迎へ、不利益な者は戶口より追ひ………ハ、、、、まあお聽

きなさい、病ある者は他ならず愛護り、慶事で打笑む人には、心籠めたる同情を表し、笑顔や言の美のみでなく、心の優しく愛情あるを知らせやうと努めるでせう」

テオドーテは嫣笑みながらも熱心に

「妾は決してそんな巧みを用ひたことはございません」

ソクラテスは頷きながら

「や、更に話すことがある。友といふものは暴力では求められず、又それで引留められもせぬ。篤と親しく交つてこそだと思ふが……」

「ほんにさうでございますよ」

とテオドーテも感じたやう。

「で貴孃は什麽な友を求めやうと思ふかナ。わけもなく交際へる人、といふばかりでは無いでせう。情愛の永く變らず、遠く久しく別れても貴孃を忘れぬ人がよいだらう。が、その忘れさせぬには、貴孃を敬慕させるに限る。すると其の愛も長く醒めないものサ。そしてそれ、食ひ飽きた者には什麽な珍味もだめ、飢ゑてゐる者には何でも美味だ。そこが秘訣なのサ」

「ほんにさうでございますね。ですが什麽したら飢を感じさせて、惹き付けることが出來ませう」

「それにも手段ありサ。まづ敵手に好意を示さない、で、彼が寂寞に堪へられず、いかにもして好意を求めやうと苦悶して來た時に少し與へる。が餘り多く近づかぬやうに、寧ろちと遠ざかるやうにして、一層敬慕の情を高めさせる。で、徐ろに親しく交るやうにする。かうすると効果は非常なものだらう」

嚴かしい容貌の、頭髪にも鬚髯にも白いものゝ少なからず雜つた老先生が、坐ろに微笑を含んで恁んなとを言ふので、テオドーテも打解けて笑ひながら

「ですがその多勢を驅出してくれる人がございませうか」

「左樣さナ、それは拙者が盡力すると極く容易いのだが……」

「オホヽヽヽ、では什麽したら貴方のお心を惹き付け

て盡力して戴けませう」

「さあ、それはまあ案へてごらん。その手段が適當に備はれば、早速擒にされやうから」

で、主客は霎時笑壺に入つてゐたが、テオドーテは氣が付いて卓上の種々を愛嬌よく巧妙に薦めるので、ソクラテスも敢て辭せずに饗應を受けてゐたが、やがて、

「だが、どうも公私の事が忙しくて貴孃のために奔走する遑がないだらう。それに又拙者は人を迷はす手段を多く知つてゐるので、習ひに來る友も少なくないから」



テオドーテは更に嫣然として

「どうして又そんなに御存じでございませう」

「まあ御覽なさい。アポロドロス、アンチスセ子スの輩は拙者の側を離れず、ケーベス、ジンミアスの輩、は、拙者に逢ひたいばかりで、遙々と此のアゼンスにやつて來る。これは拙者は人を迷はせる魔力があるからだらうて」

「ほんにお美しうございますこと、それを何卒敎へて戴きたいものですね、さうすれば直ぐにそれで貴方を迷はして上げますから」

「ハヽア善いでせう。けれど拙者は貴孃に惹き付けら

れるものでなくて、貴孃を惹き付けるものらしいが」
「オホヽヽ、それも善うございませう。まあ妾の手際を御覽なさいませ」
「ハヽア、然し拙者に愛すべき多くの友が無かつから或は貴孃の爲すが儘だらうに、ほんに惜しい事ですわい」
やがて西の窓に射入る晴れやかな日影の稍斜なのを見遣つてソクラテスは暇を告げた。で、師弟二人の後姿を嫣やかに見送つて、甃の上に佇んだテオドーテの艶顏には從來に見ぬ光が輝いてゐた。あゝその瞬間こそ名畫工の筆に殘して置きたかつた。きつと千古に傳つて多くの人を惹き付けることであらうに。

誤りし儂の結婚

ふじ子

身に相當の敎育も受け終へ今は緣ありて此處に嫁ぎぬ。友は其幸福を羨めど、花嫁の身にもあるまじき我身は露其幸福を感ずる事能はざりき。

新世帶の初々しき夢は日に醒め行きて、家持ちたらば置かんとの約束なりし下女も終に許されず、我生家とて今こそ見る蔭もなく零落れたれ五六年前迄は田舍の開墾に小作人の十七八家も入れて年毎に增す年貢に豊に暮したれば何事も思ひのまゝならぬ今となりても學びの道にこそわけ入りたれ、手を下して水一杯くみたる事なきに、此處に來りてよりは、朝起くるより早く襷かけて水仕の業をなさゞるを得ず。

あはれ友が花嫁の新婚旅行なすべき頃に我は斯くして慣れぬ仕事に日々身と心とを痛めつ、

朝八時に出勤せられし夫の、三時過に歸り給ふまでは家の内に我一人のみ、隣、近所にいまだ親しき人もなく、新世帶の用事も少なくして只茫然と待つ間のさびしさ、生家は僅に十五六丁隔りたるのみなれど家を空けて行くなと固く云ひ付けられたれば、暖き母の懐のあれども徒に羽なきを悔むのみ。

我娘時代の理想には、他に嫁したらば、斯くせん、あゝもせまじ或時は母を招きて日頃嗜めるものなど馳走して悦ばせて、さては親しかりし友達招きて昔語せんと樂しき夢にのみふけりたりしを。

來て見れば何事も意外の事のみ多く、月に七八十圓の收入ある身には相應しからぬあられなき家まづ耻かしくして友達への披露も終にお流れとなりぬ。

母は我身を案じて十日に一度は見舞に來給ふ、さりとて嬉しき中にもうら悲しく折角に訪ねられしものを何がなもてなしせんと思へど夫のやかましければ遠慮して只しとやかに物語るのみ、やがて歸り去りし後は一しほの寂しさ、行末の望みはさて置きて只何となく心細き日を送る。



まだ此處に來ぬ前頃、仲人の口は實に立派なりき。

國元には田地も少なからず、村には相當の豪家なりと、世なれぬ我は豪家と聞きて何となく心進みしなりき、我家に比べて豪家と云へば定めし我昔の家の如くにてやあらむと、落ぶれたる我身には多大の望みを與へしものを。

母と妹とあれど今は國にありて何の氣兼もなく、本人は學校に勤めて何の不自由もなく、且つ支度などは

無くてもよし、何事も此方の氣に入る樣に取計らふべければと頻に進められたるまゝに、何れは緣付かねばならぬ身の之れも緣と、さて來て見ればあきたらぬ事のみ、何事も云ふがまゝになさむとは只其折の口先きの事のみにして、此方より云ふ事は一も聞き入れられず、花々しき交際もなく、裏長屋に引籠りて見すぼらしき今の有樣。

母は第一に不承知を云ひ出して、斯る處に來でもまだうら若き身の他によき處の幾らもあるを、日も猶淺ければ今の内に歸らずやと里歸りの日のさゝやき。

夫として仕へしも只三日なれども、嫁しては再び歸らず滿身の愛を以て只仕へんと決心したる我身には、情けある母の言葉も只恨めしく。

男子の愛と云ふもの初めて受けたる身には、其愛の深きか、淺きか、誠なるか、僞なるかを見分くるに由なくて只離れがたく、我夫を捨てゝ、など歸るべき、恨めしの母よ、我は再び生家の敷居は跨ぐまじと。

夫れよりは度々に音づれ呉るゝも只何となくうるさくて過す、さはれ血を分けし誠の愛のなど切り離さるべき、徒然なる時、寂しき頃は只なつかしく、朝夕側に侍りし昔を思ひ出すまじとしても能はざりき。

＊　○　＊　＊　＊

夫は我身を愛し給ひぬ、否少なくも然思はれき、されど恨めしと思ふ折もなきにあらず、我は何氣なく生家より持ち來りし寫眞見せよと云はるゝまゝに取り出したるに中にまだ學校に有りし頃交りたりし男子の寫眞ありしを取り上げて、夫は日頃の和しきに似ず不愉快なる顏して、之れは誰にて、如何なる關係ありしやなど、くど／＼と問ひたゞさるゝに我はうるさく、よき程に答へ居たるに、之れは我預り置くとて取り上げたるまゝ返されず。

五六日經て紙屑買らむとて、屑屋の籠あけ居るを見れば彼の寫眞の片々になりて底より出でぬ。

恨めしの夫よ、愛すべき妻が幼なじみの人の寫眞に何とて斯る情なき事をし給ふぞ。

取り上げられし折は只一時の戯と氣にも止めずにあ

りしが、さては怪しき關係にても疑ひての事なりき。恨めしの夫よ、多くの男女交際は極めて危險多くして、何の益もなしと人は云へど、我は幸にそを認めざりし、寄宿舍の外出日に許されて行く、知人、親族の家にて出合ふ男子の人々との交誼は實に我に取つて有益なりき、我は之等の若き異性に依りて學問以外の新しき智識を得て、幸福なる日を送り來りしなりき、種々の方面に斯る友は多くありしも幸にして忌はしき戀愛に陷るものもなく敬愛する兄、親愛する妹の如くなりしものを益こそ有れ害は少しも無かりしに、さればこそ今、夫と仕く人に其人々の寫眞見せても我にやましき心なければ何の隱す處も無かりしに、我夫は誤解してあるならむ。



我身に眞の兄の如くなりし友は、我夫も亦友として親しく交際して貰はん心なりしに、今は其望みも全く絶へて其寫眞すら破り捨てらる。

あはれ其人々の美しき交際は我嫁ぎしと共に全く止められぬ、母の心に反き、兄と信じ賴みたる人々との交際は斷たれて眞に孤立の位置に立てる我は只夫に依るより他に道なし。

妻として其半身たる夫を信じられぬ程不幸はなし、頼りなき身は只何事も夫により頼みつゝも猶其基石の砂の上にあるには有らざるかと危み〳〵心細き日を送りぬ。

妻として夫を疑は惡しと知りつゝ、我は夫の身邊に深き秘密の暗に包まれたるにあらずやと思ふ心は日を經るも去らず。

果然其一つは表はれぬ、夫の國より歸りたる人の話を聞けば、我夫には元、妻の有りて已に三人の子迄有りしに如何なる故にや、今は離縁して都に出でられしなりと。

我は思はず、知らず湧き出づる涙禁ずる能はざりき。

何事も包み隱すまじき妻に、斯る重大なる事を隱せる夫の心の先づ空恐ろしく、まだうら若き十九の身に聞くも情なき後妻の、而も繼子の三人迄もある處に來りたる不運にみす〳〵陷れたる夫の心の恨めしさよ。

さてこそ我心の穩ならざりしも道理、我夫は斯くて何事も我身を欺かむ決心ならむ。

多くの衣服、調度を買はむよりも金にして預け置かば何事にても必要の折取り出し得べくして最安全なりとの事に、多くも無けれど、急げるまゝに支度の金は其まゝに持ち行きたるを、銀行に預けよと頻りに云はるゝまゝに夫に渡しぬ。

やがて預帳はと見れば、之れも恨めし我名にては無くて夫の名前なりき、夫の物は我物、我物は夫の物と思ふべき筈なれど我は何となく心安からず。

昨日と過ぎ今日と暮して夏は去り、朝夕の風も身にしむ頃となれば冬の用意も有ればとて預金の取り出しを乞へど何かと口實設けて容易く聞入れられず、斯て我身は不自由なるを忍びつゝ日を送りぬ。

徒然の人々は何よりも嬉しき郵便の聲に我はいそいそとして或日の朝戸口に受取りたる手紙、差出人はと見れば美しき女文字にて表と同姓に書かれたり、國元の妹よりの手紙にも有らず。

其昔、何事にも無頓着なりし身も此處に來りてよりは我ながら怪しき迄に物事の氣になるを、今此文手に

して我は深き疑と恐れとに身の怪しく慄くを禁づる能はざりき國許の整理を付くる爲とて月に一度は必ず行かるゝを若しや〳〵と疑ひし如くさては僞りにて、此手紙の主の許をや音づれ給ふなるべし。

離縁せられしと云ふも賴みがたき人の話にて、眞は今に緣のつながりて斯くは同姓をも名乘るにや、賴みの綱も切れ果てゝ底もわからぬ谷に落ち行く思ひ、あゝ我行末は如何に。

幸か、不幸かさきの日より孕れるを、斯くと告げたれど夫は世の人の如くに嬉しき樣子も見えぬを不審と思ひしも道理、愛らしき男の子の三人迄もあれば中々に厄介者の樣に思はれたらんを人の話など考へ合して初めて氣付きし折の悲しさ。

生れぬ先より邪魔にせられて、初めての腹に出來ながら一家の跡繼がむ事もかなわぬ不運の子、我身一つにてすら辛く悲しき此世に父に愛されぬ子を抑如何にして育つべき。

日毎に育ち行くを感づるにつけ、折々動くを覺ゆるにつけ、あはれさはいや勝りて、世の常の人ならば愛らしき幼子の顏一日も早く見てと美しき衣服など拵へて待ちこがるゝと、我は又、無情の風のいや冷めたき此世を一日も早く見ずにあれかしといのりしぞ。

此文を見るにつけ我身の前途の心細きも今は中々にやがて生れ來む子の男にともあらば我は抑如何にすべき、あゝ貧なる家に和樂あり。金に不自由なければ心に悲あり。

姑の一所に在らぬは結句氣樂と悦びしも勿體なや、せめて斯る時に共に姑のあるならば兎角の相談をもなすべきに、都よりは程近き神奈川の邊に在しながら月に一度は必ず行かるゝ夫に共につれて來よの言傳聞きし事もなく孫の世話に忙しとはいへ半年に一度の都見物をもなし給はぬとや、まして倅に嫁の來しをも知らぬ顏して居らるゝ心强さよ、思ひめぐらせば、ぬぐらす程我身の位置の不甲斐なさ、心細さ。

今日は土曜日なれば明日にかけて一寸家に行く程に留守を氣付けよと、眞しやかに云はるゝ夫の言葉、

日に增して疑の雲霧深くなりまさり行く我身に何とて信じらるべき、ネクタイ、カラーなど今日に限りて新しきを着け給ふも心憂く、靴の磨き樣の粗末なるを氣にし給ふも他に待つ人の有る故とおぼろげならず覺りては見送る門に熱き涙のむ辛さ。

あゝ今宵を如何に明すべき、語ふ人もなき寂しき家に、暮れてはいとゞ心細きを慰む方もなく、美しき人と酒酌み交す夫の愉快氣なる顔、やがて見捨てられて歸り行く身の行末、生れ來む愛らしき幼子の顔など、思はじとすれどあやにくに廻燈籠の如く廻り〳〵て幻に見え、思ひはいよ〳〵深く果なく、床のべむ力も無くて夫が机の前にランプの火影もほのくらき一室に默然と坐せば涙は自と湧きて、流れて冷かに頬を傳ふて膝に落つる一點又一點

はてもなき野邊を時雨に行きくれて
あらしに迷ふわがおもひかな

怪しき人よりの手紙は其後又も來りぬ、思ひ切りて封押切らんとは思へども、親書の秘密を如何にせむ、夫の怒り給はん事の辛くて、去り氣なく渡す口惜しさあはれ心の内にて舌や出し給ふ。

さはれ辛きは只之れのみならず果は見も知らぬ女の折々來ては、夫のあはてゝ出で行かるゝを、云ひ知らぬ心苦しさ、何處の如何なる人と尋ぬれど何時も信じられぬ事答のみ、強いて問ひ正さむも心弱き身にはなし難くて涙と共に呑み込む口惜しさ、辛らさ。

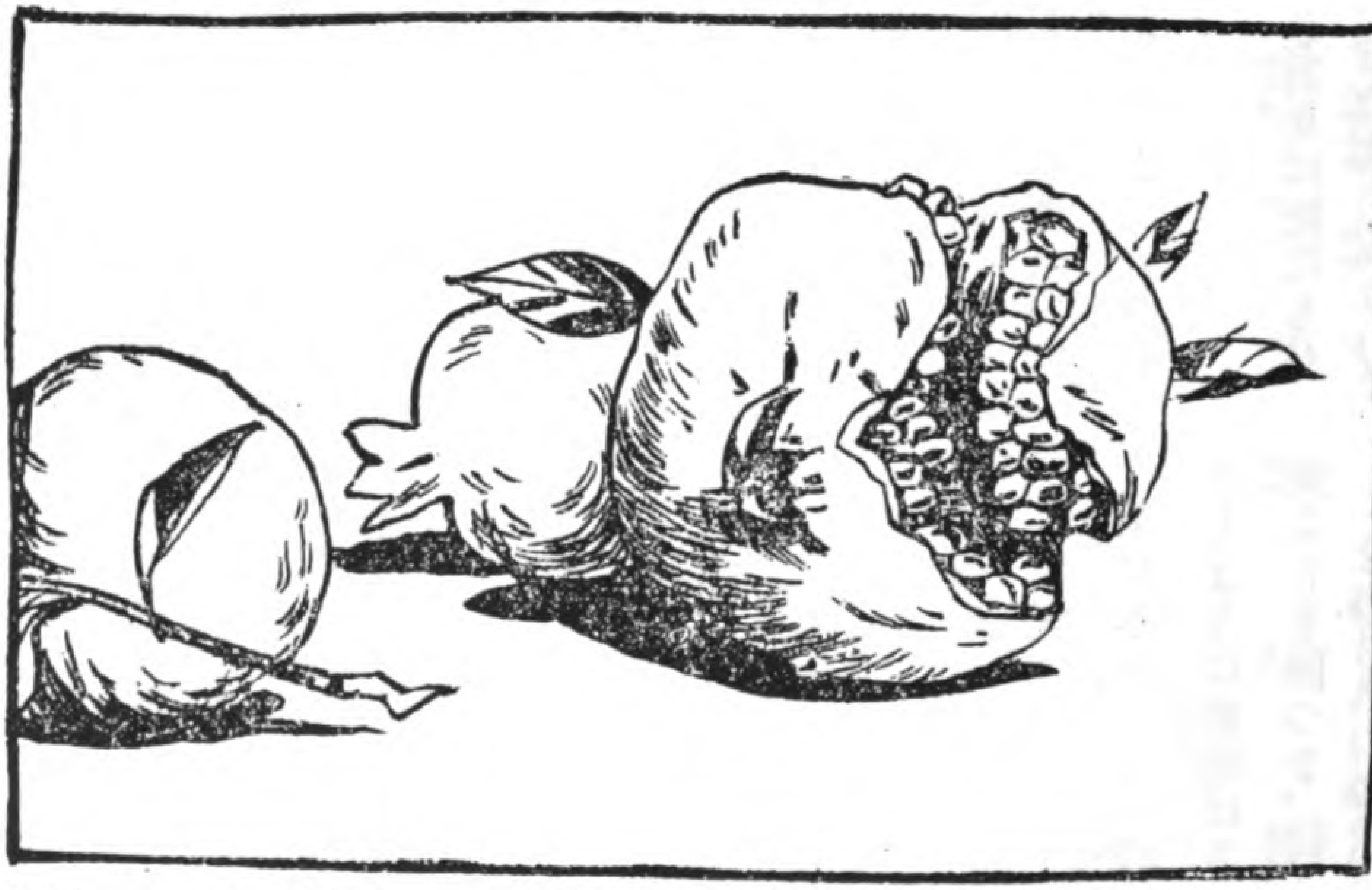
思ひ餘りては只泣くばかり、さる人の有るならば寧一思ひに出で行けと云はれたらむにはなか〳〵に我心も定まるべきに、斯る人の常とて誰にも口先きはよくて常は優しき仕向け、却りて辛く、情なき人と知りつつも蜜の如き言葉にほだされて憂き年月を今日も過しつ。

入籍の屆けも幾度となくせまれど母の言葉も、我願ひをも何かと事に寄せては、はか〳〵しく取り計らひ給はぬも然る仇人のあればなりけりと知りてより母は心に決する事や有りけむ、旅なる父に云ひ知らして又再び其事を云はず、斯る處に置かむよりは子の生れた

らば引取らむとし給ひしなるべし。

又此處にも心遣ひは出來ぬ、たとへ情なき夫なりとも我さへ胸に秘めて忍びなば何時かは嬉しき日の來らむと只夫れのみを望みの光りに今日迄暮し來つるにやがて生れむ幼子を見捨てゝ何とて歸らるべき、所詮果なき運命の下に永き月日を送らむよりは幼子と共に此世を去らば如何に嬉しからむとの怪しき考へは一度起りて終に去らず然なり〳〵死して行く身は入籍の必要もなしと、果なき夢の如き決心して、我も夫れよりは再び乞はず、只恐ろしき日の遠からず來るべきを靜に待つのみ。

七月、八月となれば立居も不自由にして身體にもさはるべければ、



せめて小女にても置きてたまへと母は見かねて再三せまれど何の故ともなく今に〳〵と引きのばして身重なる者は立ち働くこそ却りて身の爲めとて聞入れ給はず、今はつく呼吸さへも胸苦しきを忍び〳〵てする水汲みや、洗濯も、やがて無き身となるには却つて爲にならむと中々に心進みて人々の危むをも聞かず高き下駄はきて井戸端に轉びし事も一度ならず。

斯る不養生と、絶へぬ心の憂ひとは終に腹の子に及ぼしけむまだ生月には間のあるべき八月頃のある夕。

何時になく心地惡しく、腰のまはり時々痛みては止む、年寄りの有らむには又夫れ〴〵と氣も付く

べけれど經驗なき身は夫れとも心付かず、食物にやあたりたらむと有り合せの藥のみて忍び／＼臥戸に入りしも時經るまゝに次第に烈しくなり行くのみ、果は時時刻々と時を切りては痛み出する早や如何にも堪へ難くて、夫に斯くと告げたるに、夫は容易ならぬ事なり萬一の備にもとて十二時頃産婆呼びに行き給ふ。

間もなく産婆來りぬ、産の用意もまだはかゞ／＼しくして有らざれば有り合せたるものなど、彼是と取り出して身のまはり何くれと、いたはり與るゝも夢心地、さては流産をなすとやと氣付きては、あはれに痛はしく、月足らねば死んで生れむ、あはれ暗より暗へ葬られ行くよと今更ぞ思ふ間もなく幼子は生れぬ、死せしと思ひきや、程經て絹をさく如き聲して泣き出しぬ。

喜びませ月足らねどもいと太りて大きなる男の子にて在しませりと、人の心も知らねば我子の如くに喜びて産婆の湯あみなどさす。

夢心地より醒むれば有りて甲斐なき我身は死にもせで、而も新來の珍客は早や、すや／＼と我傍に眠れり、あゝ我には飽まで辛き世の死をさへもまゝならぬぞ憂き。

さはれ八月兒の育たぬ譬に洩れてや我子はあはれ其夕終に此世を去りぬ、共にと願ひし母を殘して、まだ眼も見えず、足も立たぬに只一人彼の世へと旅立ちて行きぬ、あはれ朝に生れて夕に死ぬ、かげろふにも似たるあはれの幼子よ、不甲斐なき母と情なき父とに育てられむよりは去りて永久に平和なる天國に逃れ行きし事の如何に幸多きよ、行け／＼我子よ、後をも見ずにひたすらに、無情の世を一刻も早く逃れ行けよ。

此世の罪劫猶深ければにや、死せむの願は空となりて、永へともなき命又とり止めつ、生家の母が朝夕に運び與るゝ情もあつき食物に身は動かねど飢ゆる事もなくて肥立ち行く。

果なき内にも一縷の希望たりし我子が我を置きて去りしよりは前途はさながら暗となりて眼の底に殘るは愛らしき眼つき、口つき、豊なりし頰の丸々としたるなど、夜となく日となく、浮びちらつきては去らず、

しばし忘れ居たりし身の行末など一時に思ひ出されてさしもに順當なりし身體も其後ははか〴〵しからず、打伏す床はあはれ涙にしめりかちなりき。

正月の三十日雲は滿都を蔽ひて今漸く止みし朝まだき、旅より歸りし父は突然に來給ひて今より共に生家に歸れとの事、床を拂ひて猶十日に足らぬ我は一時に眼もくらめきて危く倒れんとするを漸くに忍びて如何にせむと思案する間も父の急き立て給ふに、日頃は情なき夫と思へど今更に別れの辛く、何とかして云ひ譯せむと思へど、父の見幕の恐ろしさ、あはれや夫に一言の名殘をも惜ますして見かへりがちに立ち出づる門口。

あれも云ひ度かりし、之れも云ひ度かりしと思へば心後に引かされて歩みもたど〳〵と雪の小路、わき出づる涙止めもあへず、落ちては雪も溶け行くを。

春の御雪は消ゆるとも恨みは消えじ死するとも、我子は逝きて歸らず、夫には離れて今は又再び歸るまじと立出でし家に時雨るゝ袖のかはく間もなくて今も猶

さむしろにかたしく袖もうらさむき。
　秋の夜ふけぞあはれかなしき

我が友

愛子

世に知らぬ郷にて情けをかけて慰めの言を與へらるるばかり身にしみて嬉しきはあらじわれには壽和子の君のみめぐみの朝夕忘れ難きぞ理りなる我一とせ久松山麓の里の學び屋に敎へ草摘みし初め故郷遠き旅の空傍なる人々は昨日迄の面影にも似ず更に新たなる交りを結ばんとする事々につけて悲しき折何のゆかりありてか壽和子の君のいたわり哀れみ給はりければ新参の身には偏に嬉しう其頃より打とけて幾千代迄も變らじと花の晨に月の夕に隔てなく打語らふ事のこよなう樂しかりき斯く迄馴れにしものを花には嵐月には村雲この幸なる日は永續せず苦しき別れは來りぬ。

一夜しめやかに物語りして君の「入相の鐘に花ほろ

ほろと枝離れ行く夕御身の故郷の月に物思ふの時は我れも亦空行く雁に同意を通ずるの折と知り給ひてよ」とのたまひし事は今猶耳に殘りぬ露けき袂を千代川のほとりに別ちし折「別れは逢ふの初めぞとあればそをせめてもの心やりとせん」と云へば君は「來年の今日は不定の世の中」と堪へ難さうに云ひてさめ〴〵涙にくれ入り給ひぬわれは慰めて泣かじとすれば涙は湧きかへる泉の如く果ては無言の儘心殘して行く我淋しげに見送る君見返るこの身たたずむ彼の君圖らざりきこ



れぞ永久の別ならんとは無殘や君はきくも恐ろしき腦充血の爲に死の神の手に奪ひ去られ給ひぬとあゝわがことを聞きし時はいかなりしぞげにや斷腸の思ひとは之なるべしとおぼえき。

君と我と揃ひの徽章を簪して久松山を望む校門を出入せるの折いかで三年の中に訃音に接するの今日あるを思はんやさては先つ日身の不幸をかこちて細々と書き送りたまひし御ふみは一としほなつかしうゆかしう操り返しゝが思へば之れぞ今

生の名殘なりけるあはれ花は散れども亦咲きぬ月は雲れど亦照らすあゝ儚なきや壽和子の君蓮の宿はいかにか樂しき千代までも歸り來まさず壽和なる名さりとはあまり短かき露のやどり共にとりし寫繪に梢に歌ふ蟬の音に書きかはしつる水莖の跡に何れかなげきを增すの種ならぬ惜しや葬の初花は嵐のもとに散はてぬ日頃愛で給ひし撫子や手向くる遺友が血の涙知らで靜に眠り給ふやいかに。

あはれ破鏡は再び影を照らさず落花はまた枝に止らず思ふまじなげくまじとすれどなか〳〵に甲斐なしやたゞ夢にゆめみし心地のせられてなん。

▲心の波（下篇）

田口掬汀氏は現今小說界中の撰手なり 不知歸が最近文壇に一新紀元を作りてより以來作家の描ける小說は皆痛切なる人生觀を齎らし來りて生活上意味あるものとなりしは喜ぶべし掬汀氏最近の作「心の波」上下二篇は 所謂家庭小說中 の精華なるものならん（定價七拾錢上田屋發行）

▲夢の華

上は萬葉より下は 明治諸流の歌に至るまで 日本在來の和歌といへる和歌を眼中に置かずして 自から一家の機軸を出したる新詩派の鬼才晶子女史最近の歌を集めたるものなり 一讀天荒を破るの雄調ある 又偶然にあらず（定價八十錢文淵堂發行）

▲新女訓

新らしき時代は新らしき要求を生ず女大學や今川女訓の愛讀せられたるは其の時代が之れを要求したるものなり 日本露西亞に勝ちて世界の覇國たらんとする今日は 舊時代の遺物を讀んで 婦人の地位を高めんとするは愚なり下田文學士此の要求を充たさんとして 新女訓の著あり文字豐艶にして 情思溢る婦人日常の寶典として 左右に備ふべきの良書なり（定價八拾錢明治書院發行）

▲懺悔錄

信仰の力を以て 世道を救はんとし之れを一世の業として 世を去られたる清澤滿之氏の歿後三年同學の人相集まつて 先生の遺言を集め懺悔錄と題して 鉛槧に附せしもの 信仰によつて自個の思想を修養し且つ先生の言行を知らんとするものは是非共此書を讀まざるべからず（定價七拾錢金尾文淵堂）

科學

動物珍話

藤葉女史

象だの、犀だの、海馬なんかと云ふものは世界の動物の中で一番身體の大きな獸であるが、之れは世界でも一番時候の熱いアフリカに澤山に住んで居る。

夫れでこんな大きな身體をして居るものは一體何を食べるかと云ふと虎や、獅子と違つて草ばつかりを食べて居る、處が何しろあんな大きなものが腹一杯に食べるのであるからさしもに廣いアフリカの野原もだんだんに食物が無くなつて來るので、なるべく自分の食物のある土地は廣く取つて置かなければならない。

其處で此三ツの獸物は何時でもなるたけ廣い場所、食物の澤山にある處を占領したいと、そんな事ばかり考へて居るが、此内でも河馬は只身體が大きい斗りでは無く、力が大變に強くて然うして無鐵砲な、亂暴者であるから、他のものは如斯な奴に係り合つて怪我でもしては損だと云つて誰も相手にしない、處で河馬は得たり賢しと一番食物の澤山にある處を思ふ樣廣く占領する事が出來る、だから食物をさがしに遠方に行かなければならない樣な事は殆ど無いけれ共、犀と象とは中々然うは行かない、丁度未開な游牧の人民が水草を追ふて方々に移住するのと同じ事で、時々自分の身の近邊にあるものは皆食ひ盡しては他の處に引越をしなければならない、其引越し最中に犀の方と、象の方とがぶつつかると大喧嘩、否大戰爭が初まつて來る、象は大抵十匹か二十匹と群をなして旅をするけれども犀は至つて氣むづかしやで我儘なものだから何時も獨りで歩く、象と犀と力を比べたならば勿論象の方が強いに定まつて居るけれ共、犀は丁度河馬に似た猪武者で其上に大變活潑に働く事が出來るので大抵は象の方が攻められる。

何しろ大きなづうたいの者同志が飛んだり跳ねたりするのだから、其騷ぎは非常なもので、大きな地響きを

させて、かんじんの食物の事はそつちのけにして近邊の草や木をめちや〳〵にふみにじつて汗水かいて戰う
犀は例の丈の低いのを利用して逸早くも象の腹の下にもぐり込んで、鼻の上の角で突き上げて、ひどい手傷を負はせる、象は長い二本の牙で敵を刺うとする。お互に敵の周圍をぐる〳〵廻つて何の事は無い、犀と象との廻り燈籠――
であるか、どうかは知らないが、何しろ敵の側面を突いて攻め樣とするのである。
幸にして象の方が勝つて當の敵がたほれると、夫れが本當に死んだが、如何かを確める爲めに人間ならば止めを刺すと云ふ處だが象は其大きな前足を以て敵の頭をふみ潰して、嬉しそうに凱歌を擧げて又悠々として進んで行くのである。
之れは野象と云つて性質も荒くて中々人の云ふ事なんかは聞かないが土人は之れを捕へてだん〳〵に馴らして行く、其捕へる時には如何するかと云ふと、先づ象の澤山に居そうな處に行つては大きな圍い場所を拵へる、其圍い場所は大きいのになるとまわりが五里にも六里にも亘る樣に廣く場所を取つて木から木と丈夫な綱や、材木を以て垣を拵へ、只一方に入り口を開いて置く。
此用意が出來上ると澤山の獵夫が集まつて象の居る處を取りまいて遠くから火をつける。
流石の象も彼等の目には此火が何と見えるのか、大きに狼狽て出して、如何していゝか分らない、其内に火はだん〳〵近づいて來て、おまけに其火の向ふからは澤山の人間が手に〳〵得物を振り廻して、怒鳴つて來るので今は絕對絕命、命から〴〵漸と一方に活路を見付けてどや〳〵と後をも見ずに逃げ出してしまふ。
見ると火は次第に消えて行くのでやれ安心と、初めて息をつくと、こは如何に身は頑丈な圍ひの中に這入つて居る、驚いて元來た道に引返して走つて行くと入口はもうチャーンと塞がつて居るので象はうま〳〵と計略に掛つてしまつた。
夫れと今更知つた象は口惜しさに暴れ廻り、狂い廻

るけれ共如何ともする事は出來ない。

　獵夫は其處で飼ひ馴した象に云ひ付けて、亂暴な同類をだん／＼に馴れさせるのである、馴れた象はもう獵夫の味方になつて居るのであるから、主人の命令を受けて野象の處に行つて、鼻を以て徐に其身體を敲いて何かひそ／＼と話をすると今迄散々暴れまはつて居たのが不思議にも大人しくなつて、夫れからだん／＼に馴れる樣になるのである。

　やがて充分に馴れてしまへば、荷物を運んだり虎狩りに行つたり、子供の守りをしたり、藝をしたり、大變に重寶な愛すべきものとなる。

　其處で虎狩りに行く時には多年鍛錬した、度胸の坐つたものでなければいけない、何しろ相手が相手で有るから、ソラ虎が來たツて乘者を振り落して逃げ出す樣なものでは飛だ危險な目に逢ふ、敵を防ぐに礎石のぐら／＼した城では到底駄目である。

　其處で此時には澤山の象を用ゐて、大勢の人が一所になつて行く、首の上に乘つて居る馭者は一番大切な役目で、虎が不意打をして來ない樣に始終目を四方に配つて進む、虎は大抵長い籔や笹繁きの處に居るから其そよぐ有樣や、音に依つて大抵分る、處で象の背には鐵砲の上手な人が乘つて居て、夫れと見るや否や猶豫なく打出す、第一發に幸にして打止めればいゝけれ共大抵は傷を負ふて、非常な勢力で飛んで來て一番先きに進んだもの目掛けて矢庭に飛び付く、上では一生懸命に短い槍や、劍を振り上げて防ぐ、すばしツこい象は其長い鼻を以て虎の身體を卷いて一生懸命にしめ付ける、此瞬間は實に危機一髮の時で前の樣に手廻りよく行けば宜いが運惡く象が狼狽てゝ身體をひどく搖つたりすると、其ひまに虎に飛び付かれて引ずり落されて寸々に引さかれて殺される事が幾何もある。

　もう死んでしまつたと思つて油斷をして居る處を不意に飛び付かれて反對に餌食にされる事もある。

　幸にして敵を首尾よく打仆して、生々しき血潮の中に其骸を横へてしまつた時には、人よりも先きに象が悦んで、鋭い爪先きに受けた手傷の痛さも忘れて、長

い鼻を擧げてさも嬉しそうに鳴き、然うして敵の死骸を彼方此方鼻で轉がして見る。

之れが家に歸つて來ては子供の守りをする、如斯なものに子供を預けて置くのは如何にも危險らしいが、決して然うでは無い、小さい子供でも鼻の上に乘せたり脊に乘せたりして何時迄でも遊ばして居る、又子供の後から何處迄でもついて行つて常に護つて居る、夫れだから象が子供を助けた話は澤山にある、象は之等の小主人公と一所に遊ぶのが彼に取つては大變に嬉しいので有る。

魚釣りになども一所につれて行つて棹の先に餌を付けて貸てやると、象はさも嬉しそうに棹を鼻で捲いて糸を垂れ、丁度人がする通に其小さい眼を以て一生懸命に水面を見つめて居る、魚が餌を引くのが象にも解るので有う、少時すると棹を擧げる、糸の先きに魚の跳ねて居るのを見た時の嬉しそうな樣子は實に可愛らしい自分にも魚が釣れたと思つて大變に嬉いので有う側に居る人が餌をさし代へてやると何時迄でも釣つて居る若しも魚を取つたなりで餌を付けてやらないと、悲しい聲を出して頻りに賴む樣な樣子をする。

如斯な處は物こそ言へないが人間と少しも變らない實に愛すべき動物である。

昔支那では、天子が何處へか行幸せられる時か、又は百官が道を歩く時には皆象を用ゐた、其處で象は前に云つた樣な利口者であるから、いざ出御と云ふ時になると今迄草を嚙んだり、遊んだりして居たのが澤山に役人が並んで、鐘の音を聞くと一時に靜かになつて自分の行くべき場所に行つて少しも動かなくなる。

若しも象の中で病氣か何かで其役を勤める事が出來ない時には、象を使ふものが其象を他の象の處につれて行つて、此象は病氣で今日は出る事が出來ないからと云ふ事を能く云つて聞かせて代りを勤めて與れと云ふと其象は悅んで行く。

併し其譯を話さないと頑として少しも云ふ事をきかないと云ふ事が古い本に書いて有つた。

此象が一日に食べる食物の分量はどの位かと云ふと誰でも知つて居る彼のチヤリ子に飼はれて居るものは今は知らないけれ共自分の聞いた時には一日に藁を二十貫目と、米を一斗三升位與へると云ふ事である。

人間が一月かゝつてやつと食べる米を一日に食べてしまふとは如何に、身體が大きいからとは云へ實に驚くの外は無い。

髪の結振と粧飾

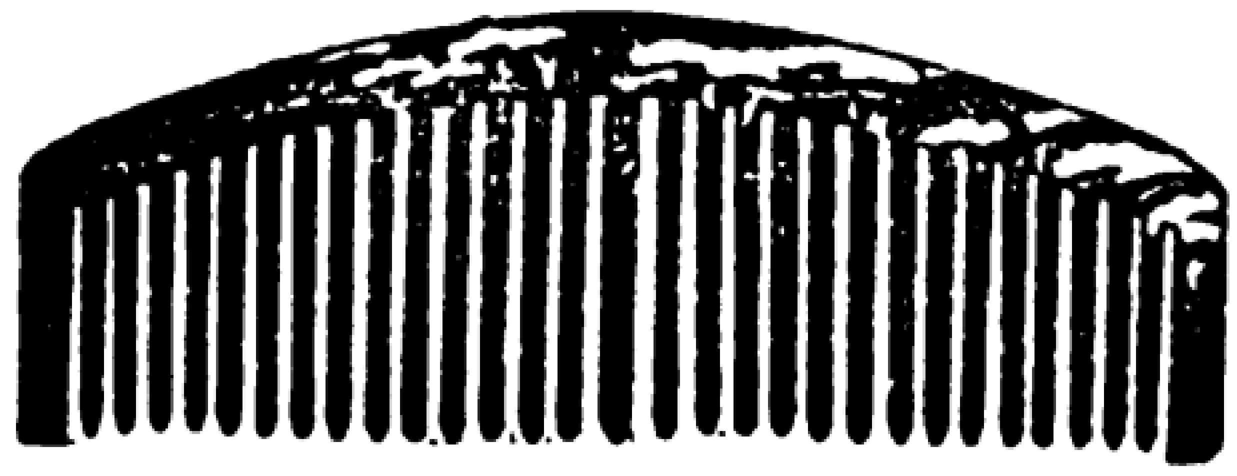
新川豊子談

御婦人方の髪と申せば島田、丸髷、銀杏返し、之れは何時になつても動きませぬ。俗に流行と云ふのは其の根の上げ下げ、鬢の椀き方、髱の出方などが其の折〳〵の好みに依つて多少變つて來る位のものですが、之れは何も流行と云ふ程のものでは無いのです。と申すのは恁うで御座いますよ、私共が髪を結ふには、先づ頭の形を見て、其れから髪の毛の癖と良否、之を見極めて其の次に全身の格好品格を見て、其れ相應に適るやうに結ひ上げるのです。結ひ上げて其の人の總格好に適當れば其れが始めて好い格好なので御座います。そこで、其の形が實際好く見えるとすれば、ちよいと誰さんの髪を御覧よ、好いとね、誰れが結つたの、私も結つて貰はう、髷入は何處で買つた、なぞと我も〳〵と其處へ詰めかけるやうな事になります。そこを此方に腕があつて、來る人毎に格好品格を見て結ふやうなら、其れが流行と云ふ名になるのでせうが、思へば其實其の人々に最も能く似合ふやうに結つたに過ぎないので、之を流行と云ふのは如何かと思ふのです。然れ共恁う云ふ事を申しては何も話が出來ませぬからまあ假りに之を流行として今日の髪風を少しく御話致しませう。

▲島田

髷の中で最も六ケ敷いのは此の島田で御座います。此の髷は結方一つで四つや五つ年齢が若くもなれば年嵩ても見えます。『女はお妖で年齢が分らぬ』と云ふ下世話の起りは此の髷の結方から起つた話だらうと思ひます。お姫様から下は藝人お三どんに至る迄皆結ふ髷は此の島田で、人の品位を見るのも又此の島田であります。

島田の中にも多くの種類がありますが、就中最も高尚なのは高髷(文金)です。之れは御承知の通り廿歳以下位の娘達の結ふ髷で、高尚である丈に服裝も之れに



準じなければなりませぬ。で今日流行の形と申すのは根は稍や上り氣味で、前髪は廣く取り、髷の丈けは以前よりも心持程延びて、鬢尻は詰めてふつくりと出して置くのです。之れに掛ける打紐は、白、蒲、淺黄、紫、（紫は褪め易いとか言つて婚禮には忌む）などが上品で御座いませうが、併かし何方かと云ふと打紐の代りに二本か三本位の奴元結を掛けて、根を丈長で卷く方が淡白と美しいかと思ひます。

高髷の外今日行はれて居る島田の重もなるものは、結綿、はぶし、藝子などでありますが、其の結綿と云ふのは素人も黒人も結ふ髷で、十五六の少女が結ふと誠に初々しくして可愛らしく娘柄を見せます。形は高髷と大差なけれど其れよりも少しく根を上り加減にして、掛綿の餘りふくらまぬを好いとして居ります。掛けるものは先づ鹿の子で御座いますね。つぶし、藝子となると黒人は好んで結ひますが、餘りに意氣過ぎるから素人方には向きませぬ。



▲丸　髷

丸髷は、太きからず小さからずこんもりと、些し厚みを有つて後髪の立つたのを喜びます、之れに掛ける手柄は、若い御婦人ならば赤（赤を掛ける位なら髷は大きい方です）、藤、紫（婚禮などの儀式に忌む）水、淺黄、鶸、肉色等で年長の方ならお納戸、藍鼠、梅幸鼠等色々あります、根へは銀紙か丈長を結びます、玉を掛けるなら先づ珊瑚で御座いませう、櫛や中挿は金銀鼈甲はお定りですが儀式の時は無論鼈甲に限ります。女は龜の甲とやら人の前で頭の上らぬものだから、其れで儀式に鼈甲を用ゐるとは言ひますが、之れは如何で御座いますか、まあ御目出度いからと申した方が本統でせう。

▲銀杏返し

銀杏返しは其の大體の格好は他の髷と同じく當世風のふつくりした方ですが、其の上若し若い婦人方ならば年増よりも髷を稍や大きく結つて、前髪なども之に準じてぐつと廣く取れば、却々意氣なハイカラさんが出來ます。掛物は成る丈淡白の方で、玉、丈長、奴元結、銀紙など好みに從つて用ゐます。

▲桃割れ、唐人髷、鴛鴦

少女の髪で廣く行れるのは矢張り桃割です。形は以前は其の割目を前後共に同じやうに爲ましたが、目下は後の方を廣く明けて、前の割目を狹く一分か二分位に致します。根は淡白と丈長を用ゐるが、鹿の子などをあしらうのも却々に可愛う御座います。其の他銀杏返しに似たもので唐人髷と云ふもの、又島田に毛の掛つたもので鴛鴦と云ふものもあります、孰れも少女の結ふ髷で、實に奇麗なものですが、餘程派手な髷ですから堅氣な御娘達は餘り御結ひになりませぬ。

右の外尙ほ種々ありませうが、重もなる所は先づ恁んなもので、特に當世流行の束髪は却つて皆様が御精しからうと思ふから、まづ此の位に致して置きます。

◎友を紅葉狩に誘ふ

渡部みや子

ふりみふらすみ定めなき此頃の時雨にも、朝な〳〵の露霜にも、木々の梢こそ思ひやられ候折柄、如何渡らせられ候ふや、こなたなのかし浮かれて雪の如き蕾の白菊などもてあそびおり候へどそれにては餘りに曲もなくて、羽黒の紅葉など如何ばかりなかしからんなど思ひめぐらす折しもあれ、ゆくりなく羽黒なる知り人より年毎怪しげなるノート携さへ給ひて紅葉の知己こそ己れかと許りに入らせられ候君の相手は何處の梢に御目のとまり給ひてか、かれてより紅葉せばおどろかし給はむやうのたまいしな、一すぢにたのみまゐらせて、今日は明日はと待ちくらし候ものを、御車の音もせねば、昨日今日の霜に色變りゆく梢うらめしうのみ眺めやられ候と、言ひおこせ候、そゞろ飛び立つ程尋れたう侍れど、雅びたる君を出しぬいで行かんは、紅葉も本意なう思はんと存じ且つは文かくわざをもやしなひはべるたすけともなりはべればいみじき修養にもなるらむと存じ候まゝ、かくはいざない參らすになん。是非〳〵うべない給ひてよ。あら憎や庭前の紅葉一ひらそゝのかし貌に散りて候。先はおさそいまでかしこ。（入賞、羽後酒田町濱畑町七八）

癈兵は如何に慰籍すべきか

東京盲唖學校長　小西信八

私は玆に戰後に於て最も重大なる事業に就て御婦人方に希望する事があります。それは日露戰役で一生不幸な身となつた癈兵諸士に對する設備、即ち國民が此等の諸士に對する報酬です。平く云へば即ち忠勇なる兵士に對する御恩返です。元より戰爭で死んだ人は氣の毒なもんです。しかも癈兵諸士に至つては一層氣の毒な氣がします。生れもつかぬ不具者になるよりは一思に死むだ方がよいなどの考が起らないでもありますまい、兎に角癈兵諸士の心中の苦は如何でしよう。何でも此等の人々に對する設備としては癈兵院の設立ですが、私は其設立の準備に手間取るよりも今迄病傷兵を收容して居た病院に隨分明室がある筈ですから其處へ取り敢へず癈兵を收容して着々歩を進めて貰いたいのです。徒に支度に手間取のは餘り賞た談ではありません。

又世人は如何したものか、戰時中は盛に各病院を訪づれて、病傷兵の慰問をして居ましたが、近來はポツリ／＼位になつた實に氣の毒の事では在ませぬか。今更事新しく云ふまでも在ませぬが、此等病傷兵は我國威を世界に輝した主働者ではありませんか、して見れば國民が此等の士に負ふ處は實に重大です、しかるに戰爭が濟むだ今日には丸で忘れた樣に慰問を怠るとは餘り酷いでは在ませぬか。此病傷兵で今迄在院する人々は大抵一生不治の病傷者と思ひます。殊に病傷兵で手足の無くなつた者や盲や聾になつた人が澤山あります。考へて御覽なさい夏散歩納涼の出來ぬものや、五月蠅蚊や蠅などを追ふことの出來ものや、無聊だと云つて讀書の出來ぬものや、或は音樂で耳を樂ますことの出來ぬ人などがあるのです。其不自由は如何程でしやう。それと知つてはどうしてでも此等の不具者を慰籍しなければなりませぬ。其慰籍としては飲食物や音樂や講談や例の强聲發音器や花卉草木や書籍などを提供するのですが、飲食物は如何でもなります。

其他のものを出來得る限り充分に集めることが肝要です。

其慰籍者は男子よりは婦人方がどうしても結果がよいと思ひます。其婦人は特に凱旋將校の夫人令孃達がよろしい。之は平生將校の前で小くなつて非常に畏て居る兵士が其上長官の夫人令孃達から優い詞をかけられてさへ感涙を流したと云ふことはこれまで度々見聞した事です、それに親切に眞心を以て種々慰籍して貰ふのですから其喜は非常なものに違ないと思ます。それに論功行賞でまた收入がありましやうから自然御金の融通はよくきくに違ないと思ます。で此等の人々が團體を組で出金をして設備をすれば漸次完全な事が出來ます。實際戰後の軍人連が如何に有福なるかは彼の日清戰役の後に軍人の贅澤が特に目立つて見えたのでも明かなる事であります。で今回は彼の廿七八年役の後とは塲合が違ますから、大に注意して此等不幸なる兵士の慰籍の樣な有益なる事業に金を費して世人に軍人の尊ぶべきことを知らせて頂きたいのです。

憐むべき、しかも如何にしても盡さなければならぬこの癈兵諸氏に向ッて妻たらんと希望する婦人が續々現れて欲い事です、之も輕薄な人から云へば誰が不具者の女房になるものかと冷笑するかも知ませぬが、之は大した間違です。抑も癈兵と云へば名譽ある軍人の不幸なる不具者でしやう、此人々に對しては如何なる方法を以て報ても充分だとは申されないですからどうか心ある婦人は進むで此人々の妻君になつて貰ひたいです、また年頃の婦人のある家では差閊のない限は是非とも此等の人々に娶して貰ひたいです。元より是は眞に誠のある人でなくては迚も駄目で虛榮心の塊みた樣な婦人達には望みませぬ。よしむばそんな人が欲から行くにしろ迚も末永く同棲の出來ぬことは歴然です。故に進むで妻君たらんとする人は一身を其良人に捧ぐるは云ふ迄もなく多大なる同情と滿腔の愛とを注で一生其不運不幸なる癈兵の良人を慰籍しまた良人の方でも其忠實なる妻により不自由を忘れる樣にしなくてはなりませぬ。聞ば盛岡女學校卒業生某は一家親

族の物議を排して失明軍人歩兵中尉芝内魁三氏の妻君になつたとか、これは近來の美談でありますが、癈者でも將校は色々都合のよい處がありますから嫁入しても兵士の家に好く樣に苦くはないでしう。考て御覽なさい兩眼を失した兵士の年手當は漸く百廿五圓内外ですから、普通なる人ですら生活費には不足を告ぐるのがどうして不自由な人に足りましやう、其手當などは今少充分にありたいと考へますが之は先致方がないとことゝして、兎に角その不自由の多い人の家へ嫁になつて行き一意專心不幸なる良人の世話をする奇特な婦人が續々あつて欲しいのです。慰籍々々と云つて其實親身の世話は妻でなくては出來ませず、また一方に於ても身にならないと思ます。其故此眞に尊敬すべき眞心ある妻たるべき婦人ほど癈兵諸氏に慰安と滿足とを與ふるものは確にないと信じます。



また癈兵の内には巳に妻子があつて忽生活に困る人もあるでしやうから斯云ふ方面にも充分注意して出來得る限り不自由をさせぬ樣に手配をしなければなりません。一體に將校連は割が能いですが兵士になると兎角割が惡いですから、其報る處も下に厚ふして貰ひたいのです、此點については餘程考へて當人

は勿論世人をも成程と合點させまた安心させたいと例の「一將功成萬骨枯」と云ふ古い文句を引出して彼是云ひ出し民心に非常なる影響を及ぼすであらうと思ひます、何卒篤志の方々は此等の事に多大なる注意を拂はれて其慰籍に盡して貰ひたいのです。殊に凱旋將校の夫人令孃方は是非とも癈兵の爲めに盡力して頂きたい且つ特別に社會の人々に望む事は手足兩眼などを失して生れもつかぬ不具者になつた忠勇義烈な戰士に嫁いで一生の世話をする忠實なる妻たるべき婦人が遠近に出て欲いのであります。（八千代子筆記）

家庭科學

食料品と其成分

自然兒

歐洲人は昔しから專ら肉類を食ひ、之に反して日本人は、重に野菜穀類を以て、其常食として居りました、之は中古以來佛敎の弘通すると共に、切に殺生を禁じ、從つて肉類を食ふと云ふことが、非常なる罪惡を犯すことゝ思はれて居たからです。

然るに近來は餘程其趣を異にして、盛に牛豚其他の獸肉を用ゆる樣になりました、之日本人の體質を發達せしめる上に於て、眞に喜ぶべき現象であらうと思ひます。

一體野菜穀物の如き植物質の食料は、之を動物質の夫れに比ぶれば、脂肪質が少なくて淡水化物が多いのでありますから、古くより之を常食として居た日本人の腸は、歐洲人のに較べて、遙かに長く出來て居ます。

そこで動物質の食料ばかりとか若くは植物質のものばかりでは、到底完全なる營養料を得ることが出來ませんから、どうしても其二つの物を加味して、適當に調理したものを採る樣にしなければなりません、即ち一方丈では啻に營養分の不足するばかりでなく、著しく消化を惡くするもの故、二者混食して以て消化

を助けるが得策であります。

で私共が用ゆる食物の主成分として、其營養を助けて與れるものは、先づ蛋白質と脂肪と、そして炭水化物の三者でありますが、之等の成分は私共の體内に入つてから、如何なる作用をなすものでありませうか。

即ち蛋白質と云ふものは、體内に入つてから二種の分業を營み、一部の者は體内に於ける種々の機關が磨り減らされたのを、順次補つて、元の通りの物と致しますし、又他の一部の者は、少しも休まずに體内のあらゆる部分を循環して、營養を助けつゝあるのです。

肺臓内に吸收されたる空氣中の酸素は、血液中にあるヘモグロビンを酸化して、非常に鮮かな赤色を帶べる酸化ヘモグロビンと云ふものに致し、之が忽ち分解して、例の蛋白質をも酸化して分解させますが、この蛋白質の分解したものは、尿酸、尿素、水などゝなるのであります。

次に脂肪も又蛋白質と同じやうに、酸素の影響に依つて、酸化分解し、遂に炭酸瓦斯と水とに變化致しますが、此の酸化は、恰も薪などが燃えて、炭酸瓦斯と水とになることゝ少しも違はないので、酸化のためには、非常なる高熱を發します、で脂肪質のものを多く食べた後には、大層體が温まるのはこの理であります。

又炭水化物の澱粉は、先づ唾液を受け、更に膓液の作用で、一種の糖類となり、其他のものも溶け易い性質になつて吸收せられ、蛋白質分解の量を減少せしめ、併せて脂肪の消耗するのを保護する役目を有つて居ります。

近來各新聞紙に豆腐の効能が大層述べたてゝ有りますが、この豆腐の原料たる大豆には、なか〳〵營養分が多く含まれて居るので、今試みに大豆を初め、其他二三の食品に就いて其成分を擧げて見ると、

	水分	蛋白質	脂肪	炭水化物	纖維	灰分
大豆	一〇、一	三三、四	一七、六	二九、二（糖分）	四、八	五、〇
牛乳	八六、四八	三、八〇	四、二六	四、七三	—	〇、七三

白米	二〇、一三	六、八二	〇、二九	七一、六五	〇、四四	〇、三七
牛肉	六〇、八〇	一八、〇〇	一六、〇〇	—	—	五、二〇

と云ふ樣な譯になります、其所で普通人一人の食料は、どれ丈の成分が必要であるかと申しますと、先づ蛋白質が百グラム、脂肪質が六十グラム、炭水化物が四百グラムで、女子は其二割減位でよろしく、又勞働者の如くに、絶えず身體の諸機關を使用するものでは、遙かに其量が増加されるのです。

そこで豆腐が營養分に富んで居ると云ふことは前記の分析表を見ても直にお判りになることゝ思ひます、さて其豆腐も冷へたのや餘り煮へたものは、どうしても効能が少くなりますから、ざつと湯を通して温かくした、所謂湯豆腐なるものが、一ばん消化がよいのです。

さて話は前に戻りますが、一體この蛋白質はどうして出來るものでありませう、之は如何なる食品の内にも、最も多く存在して居る所を見ると、動物及び植物の身體組織中、最も必要なものであると云ふことが判るではありませんか。

植物は先づ根より地中にある鑛物質を吸取し、又葉からも空氣中に存在する炭酸瓦斯を採り、日光の作用に依つて、之を分解し、炭素を收めて酸素を放出することは、何人も知つて居る所で、蛋白質の如きも、この樣な作用で出來るものであります。

けれども悲しいかな、動物は此の樣な働きをすることが出來ない故、總て蛋白質を得るには、直接又は間接に、之を植物に依らなければならぬので、云はゞ植物は蛋白質の製造場で、動物は夫れを消費する者であります。

然らば蛋白質を組織するものは、如何なる種類の原素であるかと申すと、曰く炭素、酸素、水素、窒素、硫黄と此の五つの物が集つて出來て居るので、彼の卵の白味の如きは即ち夫れであります。

先に記して大豆の中に含まれて居る蛋白質は、レグミンと云ふもので、全體の約四割程ある、で大豆を水で浸して臼で搗き、之を袋に入れて搾り取つた汁は、即ち此のレグミンが水に溶解したもので、これにニガリを混ぜて固結したものが豆腐であります。豆腐の成分はと云ふと水分が八八、六、蛋白質が六、六、脂肪が二、九、炭水化物が一、〇、灰分が〇、六、と云ふ割合を以て含まれて居ますから、營養料としては眞に申し分なく、且つ又其蛋白質の如きも、頗る消化し易い性質のもの故、私達が日常の食品として結構なものであります。

脂肪には種々ありますが、普通其重なるものは獸類の身體組織となつて居るもので、鳥魚類にも又多少御座いますが、併し其量は甚だ少ないのであります。

さて此の獸類の脂肪は、何から出來て居るかと申しますと、パルミン酸と云ふ有機酸と、オイレン酸、ステアリン酸など〻云ふもので、此の三種のものは、何れもグリセリンの化合物であります。

で此の脂肪と云ふものは、既に皆樣も御承知の通り、人體の營養料としては、此の上もないもので御座いますが、又啻に食料となるばかりでなく、蠟燭を作つたり、石鹼を造つたりする原料となるので、また彼のグリセリンの如きも、元より此の中から取ることが出來るのであります。

植脂肪としては油、木蠟の如きものもありますが、之は食品として餘り必要のないもの故先づはこれ位で止めて置きませう。

◎病人の食物

病人の食物と云へば粥に梅干、玉子と牛乳にスープと何處の家でも殆どおきまりの樣にして居るが、只二三日の病人なら夫れでも宜いとした處で一月も二月も長く床にある病人に每日そんなものをばかり、進めるのは誠に殘酷な話である、病氣で食欲の無い處へ普通の人でも每日食べればすぐにあきる樣なものを無理に强られては實にたまらない。

同じ粥にしても少し風を變へて、例へば極く軟らかい飯を裏漉にして小さい茶飲茶碗五杯程に玉子の黃味を四つ、砂糖少しと牛乳二合程を入れてよくかきまはし、何か病人の好きそうな、病氣に障らない香ひのするもの、例へばレモン油の樣なものを少し入れて丼に入れて茶碗蒸の樣にして熱い内に食べさせる。

玉子や牛乳の嫌いな人には玉子二つに牛乳一合の割合で、夫れに砂糖を少しづゝ交ぜ合して(甘きを嫌う人には鹽を少し入れてもよし)之れも矢張り茶碗蒸の樣にする、また他に玉子や牛乳を使つて拵へるものはいくらも有るが、同じ材料でもいろ〳〵に工夫して食べさせると食欲も進み、消化もよく滋養になるものである。

◎野菜の效能

人參は眼病の藥となり、葱や、玉葱、にんにく抔の切つたものを枕頭に置いて寢ると不眠症の人でも不思議によく眠られる、生姜と水飴と煎じて飲むと咳の藥となり、赤茄子は肝臟病に、アスパラガスは腎臟病に効があり、大根卸しは餅を食したあとに食べると大變に消化をたすけ又通じをよくする、柿は酒の酔を早く醒す、茶の澁いのも然り。

◎食物調理

醬油は物を煮〆める性質が有るから、野菜物などを軟らかに煮樣とする時には必ず初めに煮出しや、砂糖で味を付けて、已に煮上げ樣とする時に醬油を入れなければいけない、あく氣のあるものを湯煮する時には鍋の蓋をしてはいけない、海の物と陸の物とを一所に煮ると兩方の性質がよく合つて硬いものも軟らかになる、魚を燒く時には硬い炭をよく起して強い火にして遠火で燒くのが一番宜いです。



◎初奉公

郁子

私は今年とつて十八になつたので御ざいます、貧乏ながらも、士族の家に生れたので御ざいますが、いろ〳〵家事の都合により、奉公に出ねばならぬ身となりました、そこで或人の世話で、或、官吏の、お家へお小間使としてあがりました、旦那樣に、奥樣、御隱居樣、お孃樣、お上はこれだけ、下は、下働きに、仲働きが、二人、それから書生に、車夫と都合九人の御家庭、初奉公の、私には、ちと御家族が多いやうで御ざいましたが、いづれ、奉公に出れば辛い事は元より、殊に今迄他人の前へ出た事のない、私、憂い事もつらい事も覺悟の上何事も辛抱一つ、自分の心次第で、勤まらぬ事はなからうと、決心は並にきまりましたが、何を云ふても初めての事、勝手がわからなくて困りました。こうしては、主人へ不敬ではあるまいか、こうやつては朋輩の氣に障りはせぬかと、方々へ氣をくばる、私の氣がねは、又なか〳〵に辛う御ざいました、然し又だん〳〵なれるに從ひ呑氣なものと思ひました。

旦那樣と申上ますは、でつぷりとお肥りになつた如何にもおちついた、着實な方で御ざいますが、時々御酒を召あがると、御笑談をおつしやつて、面白いお方で入らつしやいます、朝は早くお出ましになり、夜はをそくお歸り遊ばしますいづれおつとめに、お忙しいお身體なので御ざいませう。

奥樣は卅六ださうで御ざいますが、お若い事、知らぬ人が見ましたらどうしても、三十路位と思ふで御ざいませうお茶の水の女學校御出身だそうで御ざいます。そのせいか、毎日ずい分訪問のお客樣が旦那樣より多いやうで御ざいます、御氣に召す時は。どこへでも、お一人でお買ひ物などにお出かけ、遊しますのは、此のやうな御大家の奥樣としては、實に出來ないところで御ざいます、全く學校へお通ひ遊したせいで御ざいませう。

今年六十八にお成り遊ばす、御隱居樣は、それは〳〵御丈夫、そのかはりおまめで、お口やかましう御ざいます、下女達には奥樣よりもお小言が多いやうで御ざいます、お孃樣とは大の〳〵のお仲わるで、御氣が逢はないので御ざいます、それも御隱居樣は、昔のお方、お孃さまは廿世紀の、パリ〳〵で入つしやるから、御無理も御ざいません。

お孃樣は品子樣とおつしやつて只今高等女學校へ御通學遊ばします、時

時東京パッタの、荒馬物語から、とび出したやうな、女學生がたの見えますのは、お友達で御ざいませうお嬢様はごく〳〵かつぱつな方でいらつしやいます、仲働のお竹さんは、私よりも四つばかり、上なのでそれは〳〵ぬけ目なく、其のするどい眼で、方々を眺めて居りますから、私は始から何だか、嫌な人だと思ひました、すべて小ぢんまりとして、身だしなみよく、自分の機嫌のよい時は、いと輕く身を動しますが、一つ我が意に合はぬ時は、お奥でお呼びになつても答もせれば、皆もなき里小ばちになどあたりちらす時も御ざいます。

次は、お花さんと云ふて、二十だそうで、御ざいます、ほちや〳〵と太つて、愛嬌、溢るゝばかり、一本のをくれ髪もなく、束髪に結び、下女には不相應な程、お粉粧に念入り、いづこへ、行くにも「かい中鏡は懐にひそむで居ります、そうですが此の美しい面にも似ず、いぢわるき事はおどろくばかり、新参の私は、時々、此の人にいじめられます。

下働きのお秋さんは、朋輩中で一番年上だそうですのに、萬づ物疎いのは、田舎生れの故か、時々わけの、わからぬ事を云ふは、少し精神の足りないが故で御ざいませう。ですが不思議にも、此人は、誠にきれい好きですべて、物事に、清潔を守りますは、實に一つの長所で御ざいます、陰日向なく、身命を主人に捧げて、正直に勤めて居りますのは、誠にしほらしう、私は此のお家でだれより一番好きで御ざいます、時雨降る淋しい晩などは、此の人の爲に笑ぜられる事もあり、朋輩達がつれ〴〵のなぐさみには、お秋さんか愚なのを面白がつて、いろ〳〵とからかう時などは、あはれいじらしう御ざいます。

廿ばかりなる書生さんは、ほんとうに生意氣で、嫌な人で御ざいます、時々、英語などを使つて人を困らせて、面白がり、私達には、わけのわからぬ新體詩とやら云ふものを、さも得意氣にうたつたり、自分の氣に入つた時は、くだらぬ議論をはいて、つまらぬ理窟をならべ立てかへつて、車夫の方がよつぽど、ものがわかつて居ります、尤も此のお家のは車夫としては何かゞよくわかつて居りますし、書生さんから見れば、年も多う御ざいますから、下女達か、喧嘩などするときは、いつも仲裁するのは、此の人ばかり。それですから、書生さんはをとなしく、車夫なぞ對手にせず、だまつて居ればいゝのに、いつもくだらぬ事を云ふて喧嘩を買ふのでせう、何と云つたつて、こちらは、車夫ですもの、いくら何かゞ、わかつて、居るやうでも、又そこは、違ひます、アレお奥でお呼びに、なつたやうです、から此の位ひにして、いづれ又こまかく御話し申しませう、(千葉縣佐倉町宮小路小永井都子)　(完)

◎しのび音

秋萩女

秋とは言へどまだ日中の暑さ、まして病人には堪へられぬだらうと浪江は伯母の熱睡つたのを見てソッと氷嚢を取り換へた折柄おもてに車の止る音がして、お醫者様といふ聲が聞える、浪江は急いであたりを片附けて室を出やうとする、ともう遲かつた、引き開けやうとした唐紙は案外た易く開いて入つて來たのは二十八九の品のある紳士、ハッと驚いた浪江はふと顔を見て二度ビックリ、出るにも出られずあはてゝ會釋をすると彼方は氣付かぬ樣に輕く受けて病床に進んだ續いて從兄の謙一が入つて來たので浪江はすべる樣にして座をぬけた。

「アヽそうだ積田樣だ、お珍らしい、今日此處でおめにかゝらうとは!お氣が付かなかつたのかしら? お忘れなすつたのかしら!?……。私は春

川様の祝賀の宴でお目にかゝつてから片時も忘れたときはない、一年振ではからずも今日……、あらお話聲がする、何か御用はないかしら、呼んで下されば善いのに、アラ、でもこんな姿して……」と硝子障子に影を寫して、恥かしそうに髪を掻きあげた、

「そうまあ浪江さんが？お目に掛り度いことね」

「ホントに貴女が理想の銀行家の奥様に御成り遊ばしたのを御覧なすつたら、お羨ましがりなさるでせうよ」

「あら、いやな、！あなたこそ！　だけどもう三年になりますわねえ、皆様お變りになつたでせうね……」

「エヽ色々でございますわねほんとに學校の窓で暢氣な事を言つて居たのはタッタ昨日の様ですのに……ですけれど浪江さんほどおかあいそうな方は御座いませんよ、今度お歸りになつたと云つたつて……」

「オヤ、お目出度い譯ではござんせんの？」

「あなた、私浪江さんの爲にはほんとに泣きましたよ、それに今度の事を聞きましてはねえ、一體あの方種田醫學士に餘程だつたでせう……」

「エ、それやよく聞いてましたわ、御一所に塞つた春川さんの會からですつてね、何でも大分お親しく行來してゐらつしやつた様でしたが、遠山さんのお姉様が御いでになつたときはホントにおいじらしう御座いましたわねえ」

「あんなお温和しい方ですから口にはお出しになりませんでしたけれど、お心の中は何程だらうと思ひましてねえ……それから一昨年東京に嫁つておしまひなすつて間もなく今度のお歸りでせう……！」

「法學士だそうですね、お仕合せだつて評判でございましたが」

「それが、あなた、御自分では進んで居らつしやいませんでしたのを御家で先方の財産と學位とを見込んでお極めになつたのだそうですよ、其方は大層お身持の惡い方だつたのですつて、それでもあの方の事ですから、お二人分お姑様に盡してらしたそうですが、とう／＼お體が惡くなつて、お里からやかましく云つてお離縁りになる様になつたのですわ、おかあいそうにね、其法學士の方に惡い御病氣が御ありなすつて其故ですつて、」

「まあ……!!　何てお氣の毒な！　お心中どんなでせうねえ、それにしても早くお癒りになればようございますがねえ……」

語り合つて居るのは浪江の同窓の友、主人はよし子客は園子何れも今は新家庭を經營して、久し振りの出逢ひに、不幸なる友の身の上を語り出したのであつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

秋になつても

浪江の病は愈々重つて昨日縣立病院に入院した。

事情知らぬ人は早くおなほりになれば、と祈つた。少しく事情を知つたものは人知れず同情の涙を注いだされど彼の女の胸の思ひを知りぬいた者は有つたか無かつたか、あゝ院長は種田醫學士である!!」（盛岡市三戸町百六十六田村方高山い子）

（をはり）

▲病間錄批評集

病間錄は嘗て綱島梁川が病餘の餘瀝を以て近時宗敎上に於ける自家の感想を記されたるものにして一度此書の出づるや明治思想界の自覺史なりと稱して識者の間に傳へられたるもの今其の批評を集めて一冊としたるものなり。（定價廿五錢金尾文淵堂）

短文

◎印は入賞

◎秋の便り

福井　榎並保子

姉さん、とう〳〵常子さまはお死になさいました、悲しう御座います、荒くれた男が無慘に亡きがらに火をかけました時は、あまりの悲しさに妾は、火葬塲に居堪へられなんだので御座います、むら〳〵と立ち昇る煙の恰度妾を招く樣なのを見ましたとき、妾は心から淋しさと悲しさとを覺えました、あゝかくて秋は今、ゆくので御座います。

（評）短文の妙味は、僅々百字前後の文字を以て、一篇の文章を草し、首尾自づから法なかる可からず、此文の如きは叙事法其よろしきを得て、殆んど短文と思れず、結び得て何等の妙。

◎豆明月

島根　淑子

夕飯後の運動にと母上と二人でまいておいた枝豆が、このごろだんだんふくらんでまゐりましたので、御月樣もまけまいと一日一日と丸くなられます。いよいよあさつてはこのまるいのをながめながら、より圓滿なまとゐのむしろにたのしい箸をとる豆明月なのであります。

（評）佳作。

◎弱點

姫路　船戸ゆき

夜も更けたればとて辭し給ふ八重子の君送りて表に出づ「子ー雪さんちよつと分らないでしよーこれ鍍金よ」金色まばゆき時計取り出でゝかくのたまひぬ、噫此君人目には殊に熱心らしくみらるゝ基督信者にておはせど。

（評）最短の文、最長の敎を含む、離有し々々々。

◎女學生

和泉　津田なみ子

遠く相別るとも互に音信絶えぬ樣にと、くちぎりし千代子の君はじめの程は月に三四回音づれありしも、其のちは二回一回となり遂には返り文も來らず、今年の夏、暑中休暇に歸省されしとかにてふと途中にて出あひ、おや千代子さんと呼掛くれば、さも横柄に暫らくと一言仰せられしまゝ傍なる制服制帽着けたる君と手を取り給ひ、サモ面白げに靴音高く行き給ふ。

（評）手を飜せば雲となり、手を覆へば雨となる、世の中は三日見ぬ間の櫻かな、この文この消息を漏らして遺憾なし。

初雪

下野　大出タニ女

暑中休みに終へぬれど、殘んの暑さに汗絞り、日々通學の朝な〳〵目先に高き黒髮山、色うるはしふ、眺め暮らせしを、いつかは變じて白妙の、白髮山とは化し去りぬ、嗚呼時が運び來し雪、此間の日子、妾が修め得し學業は何、同じ三年二學期。

（評）奇想。

◎奇しき境

大阪　後閑八重子

むづかしきわけは分かれど、神てふ者のあるがやう覺ゆれば朝な〳〵眠の國を出で〻活動の巷に入らむとする時、先づは天地の極みを思入りて心の儘にをろがむなりけり。山や森や淡き星殘んの月、風の聲も露の香も、凡て胸に吸入る〻惡とみて眼を閉づれば、人なく物なく世さへ我さへ消え失せて、只美しき心地よき奇すしの境に浮びゆくなる。

（評）直ちに是れ天國、直ちに是れ神仙、

◎あゝ怖い

大和　井上正子

こゝ旅宿の氣味惡るげな一室。時計がまだボーンと一時を打つたばかり、と見ると行燈の灯が丁子を結んで、青い青い光を出して居たが、ザヾと音して、ばツと暗くなつた途端。隣の間にげらげらと笑ひ聲。覺えずそつと身を悚めると、つゞいてぎゞと齒切の音、あゝ怖い!!!

（評）鬼氣人に迫る、鏡花の小說を讀むが如し。

花火

岩代國　岸野常子

大地を搖かす轟然たる音、尋で起る爆發の聲、と見る五哲山の一角、パツと破る〻紅白の煙火！　ォ、亂れたり煙、散りたり煙、飛びたり火粉、流れたり火光、と思ふまもあらせず紅となり、次で白となり、茶となり、青色となりて、終に音なく消え行く、吁世に亡き弟に見せたなら。

（評）「散りたり煙」などの修辭は感服せず、たゞ句法の佳なるを取るのみ、結末一句、無限感慨、全篇之が爲に活動す。

◎草木四觀

姬路　濱田貴惠子

山頂三尺の松は天を摩し、海底十丈の昆布は世に顯れず。すれたる木は、人之を賞翫す。成長すること速なる桐は軟質なり、中空なり、成長すること遲き欅は堅質なり、中實なり。餘りに大く實れば、枝折る。

（評）菜根譚、嗚呼菜根譚。

小春日

出雲　世良ふみ子

妾一人留守番に殘して、家内皆大根引に行つてしまつた。妾は一人讀物をして居たが、什麼も淋しくつてならないから、障子を明けて裏庭を眺めて居た。障子に虻が唸つて居るのみで、邊は寂寞として人影も見えない。椽には栗が干してある。傍に猫が鼾をかいて眠つて居る。垣根の山茶花が淋しさうに二三片散つた。

（評）小春の景物、一々眼中に映じ來る、題に背くの文を作らず。

◎聖地

名古屋　香久子

東は斷崖二千丈の絕壁、西新月形の平壤はカペナウム其他の小邑、南北は無花果橄欖の茂れる平和の村落、で中なる湖水のゲ子サレは耶蘇君が傳道上有名な聖地である。だが廿世紀の今日迄變らぬものは其所に滿

へた水の味計りだとは情けない。

（評）豈獨りこの聖地のみ然らんや。

風

岩代　岸野常子

風こそなかしきものなれ、團扇に招かるゝと思へば柳の糸に姿を隱し散る花に厭はるゝかと思へば尾花が袖に招かる、松が枝に宿りては微韻秤な奏で、萬朶の花に觸れては無聲の韻を弄す、且風鈴に遊ふてよき人の心を清うし、夕一雁を送りて遊子の腸を斷たしむ、あゝ風こそなかしきものなれ。

（評）女子の文としてはかゝる筆つきこそ好ましけれ、あまりゴツ〳〵したるは風情無きものなり。

私の室

府下　宮崎ゆき

私の勉強室は二階で青田の見晴らせられるのであります。破れた楽山子に蝶のやうに舞ひかゝる雲も霞んだやうな遠くの櫻花も風に浪打つ夏の田も四季折り折り寂さへ明ければ眺られる面白さ、今日も今日とてこの秋な樂みし柿の、人に盗まれるを見つけて叱りました。

（評）結尾の想、天外より來る。

親の恩愛

下野　野尻よし子

今日は珍らしい好天氣になつたので、妾の家でも六段田の藁を乾したのであるが夕方になると、東の方より益々黒雲がかぶつて來て今にも雲れさうになつた、父母は今宵位は……若し降つたなら妾なもといつてやすんだ、翌朝覺むれば雫が軒端の石を打つてゐる、驚いて母上に聞しに、さむしいから餘程起して連れていこふかと虛つたが、うまいしてゐたからそれでと……嗚呼親の恩愛は斯くも……。

（評）叙景にはじまりて抒情に結ぶ、人を引き入るゝ力あり、この一篇。

白菊

波多野春枝

春より土かひ育てし、五六株の白菊、咲き初めぬ常ならば、ふり向きもせぬ、我が庵の、破れ垣を今日は又、行き交ふ人の、褒めそやすぞ、おかしけれ、やがて、秋老ひて、花萎れたる頃は、またさらで昔の美しさを、だに、賞むる人ぞなき、あゝ、白菊、汝が樣の、いかに我れ等の境遇に似たることよ。

（評）想は古るけれど文は佳し。

白川の花賣娘

京都　みどり

朝とくお三の打つた水に塵の沈まりし頃「花はいりまへんかー、花や晩茶いりまへんかー」と流暢に唱ふて來るのは京都の東、白川の花賣り娘であります、紺の着物に赤のまぢりし太き襷もふさはしく足には脚絆をはいて白足袋にわらじのいでたち、頭上に花束や晩茶をのせて兩手で釣合を取りながら歩んで居ります、此花賣娘こそ姿勢で一等賞を取るでありませう。

（評）雅致ありて面白き文也。

妾も

水戸 桑野ます

お日様は、最早お寢のお仕度く、其の御迎に、四方の雲は金、銀、はた、五色の綾衣、身につけて、西へ〳〵とお姿のかすかになりし頃、月やもる家の門々に、泣きやまぬ、あかさんをお母様がおんぶして、小聲での守歌すると、いつしか樂しき夢を結でしまひました……あゝ妾もこんな事が有ましたんでしやうか。

（評）あどけなき言葉、罪のなき想像、直ちに是れ詩、直ちに是れ美文、めでたしともめでたし。

秋の夜

羽後 渡部春屋子

雲に消えゆく晩鐘の音、星は野末の空に晃めきぬ。年は廿の上を一二色白の程優しげな奥さん、傍への少女の手を伴と握りしめて「光ちやん、姉さんはもう何ツ處も行かんよ、今日から子ー光ちやんと二人して遊ぶのよ」天地寂として聲なく、たゞ聞く蟲の聲！

（評）秋の夜てふ題を解説して、たゞ何となく引き入らるゝ文なり。

不孝者

下野 白澤きく子

秋空高く晴れて實に實に心地よき日、我が學校にても大運動會の幕が開かれた、妾は元より薄弱の身、何時の運動會にも笑の種子……しかし今年は間違つたのであろか、靴下一足頂いた、嬉しいと生れてから始めて、逸速く父母の許へゆつてやつたはよかつたが、其の運動の罰かなどの心臓病は……この事父母に知らせたら……。

（評）よほど巧みし文なれど、過ぎたるは及ばざるの感あるは、この文の爲めに惜むところなり。

君知り給ふや！

相模 廣守千能子

君！ 月清き夜、山吹の盛りなる籬に寄り添ひて業成りし曉の樂しき未來を幻の如、胸にゑがきて悦び合し彼の時……妾は終生、忘るゝ不能……さるを、君は如何！ 別れて只一度の音信をもせで振り捨て給ひし君が心……。妾が今日此頃の此のいたつき……。君！ 知り給はずや。

（評）たゞわけもなき文のやうなれど、そこにいはれぬ面白味あり。

中に立つた柱

河内 田中八須子

旦那さんあなたが御不在ですとアノ時子は本當に手に合ひません、何を言付けても一も聞かないですチト言聞してくだされと恨めしげに告げますから主人は奥に居る時子に向ひ、お前も十四と云へば分別のない年でなしなぜ其様に母の仰に隨はぬのかと詰れば時子は、お父さんあなたが御不在ですとアノ御母さんは無理な事計り言つて意地惡をされるのです、生のお母さんが居られたら——と後は泪。是を聞たる主人の胸。

（評）あゝ恐ろしき家庭の波瀾。

前號◎印當選諸孃の住所不明に付賞品發送不能至急御一報あれ

短歌

（天）題知らず

花といふ花なき頃をわきてまた菊の薫りの高くもあるかな　京都　波多野春枝

評。丈高きこと甚し。

（地）秋雲

紅葉する里の檜にまたれけり月にいとひし峰のしら雲　神戸女學院　勝屋登美子

評。月に厭ひし峰の雲を待つとは、如何にも面白き着想と謂ふべし。

（人）蟲

おく露のしげき思ひたれにたてゝ蟲もうき世の秋をなくらむ　岩代　岸野常子

評。用詞巧妙。

秀逸

〇〇〇菊露芳

折る袖にかくろも嬉し咲く菊のはなの香うつす露のしら玉　名古屋　清水みさを

詩情露と滴らむと欲す。

〇〇〇山家萩

手まくらの友となれても山里の軒ばの萩の音ぞ淋しき　下谷　窪田幸子

友となれてもと着想したる所、殊にめでたく聞こゆ。

〇〇鏡

朝な夕なむかふもうれし曇りなきむねをうつすかゞみと思へば　鳥取　紅梅

完作。

〇〇〇題しらず

なま臭き關帳摺や照すらん新高山の冬のよの月　安藝　松阪梅子

奇想甚し、むしろ弄するに過ぎたることなき歟。

〇〇秋夜

秋といへばうら哀しきをよもすがらもの思へとや蟲のなく　神戸　中西やく子

流麗。

〇〇〇梟

ゆきくれて三日月すごき折しもあれ並木の松に梟のなく　足尾　森照野

何等の物淋しき景ぞ。

〇〇〇秋の歌の中に

糸すゝきそよぐ小路に蟲なきて夕月淡し前津野の原　名古屋　森井せき子

光景亦詩の如し。

〇〇時雨

紅葉がり時雨降りきぬよしさらば染むるがまゝに袖ぬらしてん　備後　立神峰子

古歌翻し得て拙ならず。同じ人の「秋興」に、朝の露夕の紅葉夜の月誰かは秋を寂しといひし。

〇〇追懐

心いそぐ背子の袷を縫ふ窓に桐の大葉のまたこぼれけり　香川　横山登美

眞情を歌ひたるものなるべし。

〇〇秋夜

逢瀬や月に思ひの長き夜を浮世話しに糸車ひく　兵庫　柳田白ゆり子

光景如畫。

、○○逃題　上總　齋藤やえ子
たらちねの慈も厚きふすまには夜毎の風もよきて吹らん
親愛の情油然たるを見る。

○○　羽後　渡部みや子
露こめし眞萩が奥の柴の戸にそこはかとなくにほふ夕月
詩味頗に饒し。

○○秋　越後　坪井わか子
欅の木の梢に高く鵙なきて雄々しくはれし秋のそらかな
詩風亦快爽。

、○○秋雨　京都　四辻清子
たなれたる卒都婆のしたにこほろぎの鳴音ほそりて秋の雨ふる
評荒涼の景。

、○○逃題　芝　新野喜枝子
男兒二十年理想の夢のあだなれや木犀の香の暗にみだるゝ

、○○橋上霜　岡山　田上はま
おく霜の白きをふみて誰ぞゆきしあかた一人のあけむつの橋
着想面白し。同じ人の「寂境」
夕月のほのめきかゝる絲柳の小暗き陰にたをやめ立つも。
「雨夜待夫」
過ぎゆきぬまたも車の行き過ぎぬ夫まつ雨の夜は更けぬるを。

○　常陸　菊地峰子
病む母のしばぶき多く何となくねられぬ夜中をきり〳〵す鳴く
纏情人に迫る。

、○○友の信州高岡神社の月景の繪葉書を
贈られしに謝して　河内　田中八須子
居ながらにみるも嬉よ信濃なる名も高岡の御社の月
聲調極めて快暢。

、○○水邊菊　深川　小池富美子
池水の底にうつろふしら菊はなみにも消へぬしもかとぞ思ふ
浪に消えぬ霜とは面白し。

○○題知らず　岡山　藤村修
るりの空朝のもや行く詩人の袖のかなたは穂すゝきゆらぐ
光景文詩。

佳調

○月　美濃　山田愛子
ふるさとに母ひとりおきて三千里おもへば遠し伯林の月

○　女子大學　羽田豐子
入相の鐘のひゞきはたへはてゝおとなくちりぬ糸萩の露

○　下谷　河村鶴
くさも木も枯かれはてし岡の上にまれ〳〵も淋しなのゝなすゝき

○友の逝きしを哀しみて　長門　佐々木綾子
菊むらの蟲さへ宵にも啼き出でゝかなしさまさる秋の夕暮

秋雨　群馬　秋乃
よもすがらなき明したる蟲の音もいつしかやみて秋の雨ふる

○　大阪　高安やす子
八千草のにしきと匂ふ秋の野にはたをりそふるむしのこゑかな

秋郊蟲　宮城　山形さち子
秋の野の千くさの花のいろ〳〵におもひみだれて蟲のなくらん

秋のうたとも　尾張　大野浦女
世にうとき深山住居の我宿もよそにおくれず秋は來にけり

萩　小倉林とみの
おきわたすつゆ重げなる枝の上に月さへやどす庭の秋はぎ

古寺秋　香川　吉田ます子
かべはあれ軒はくちたるあれ寺にこぬ人まれく花すゝきかな

田家霧　伊豫　渡邊梅子
山のはに朝日匂へと霧籠てふもと七村夜を殘しけり

偶感　京都　西澤松子
はかられぬ事のみ多き世の中にやすくも人をなにたのみけむ

○　横濱　吉川香都子
馬子うたはかすかになりて川瀬の小村一里にうすもやかゝる

○　美濃　渡邊よし子
奥山の秋も知れけり筏舟散りたる紅葉そのまゝにして

○石見濱田なる搦水亭に遊びて　伊豫　熊谷友枝
濱田川岸の紅葉ば影みえて水にも深き秋の色哉

名所月　名古屋　清水みさを
鷹の濱廣重をこえて住吉や松にさやけき秋の夜の月

秋蝶　筑前　木村こま
うつろひし庭の小萩に花の上を力なげにもとぶこてふかな

失題　出雲　得野富久子
ふきかへす袖にこぼるゝ秋原の花にすさびの思ひ出多き

秋の夕　周防　佐々木いつ子
さえ渡る月に都のことゝへばこらへ顔なるかりの一こゑ

紅葉　大阪　西村秋子
讀む書のうへにちり來ておのづからしをりとなりぬ窓のもみぢ葉

○　麹町　神谷好子
をりたてばしら露はらゝ裳にちりて菊の香寒しあかつきの庭

○　神戸　なみ子
何となく涙ぐまるゝ秋の夜を蟲啼き出でぬ雨ぶり出でぬ

永瀬の君に別るゝ時　東京　大久保玉枝子
昨日まで永き合瀬と思ひきや今日はあへなく君と別るゝ

萩　上毛　栗原庫子
賤の女は機織る宿の垣の端に咲くや優しき白萩の花

蟲　小石川　寺田ひろ
すむ人も無くて荒れにし山里の草のまがきにこほろぎの泣く

秋の月　武藏　青柳彌生子
草の上にかゞやく露の玉見えて蟲の音清し秋の夜の月

○　築地　いく子
秋野道露はらひつゝたどりくれば霧にうすれしもみじやま見ゆ

蟲　姫路　船戸ゆき子
北支那の荒野の原に月落ちてきひから千里蟲の音寒き

○　廣島　清濱子
汲む人の絶えやはてけむ古き井の上をおほひて萩の花さく

月夜　片田舍　小笹千代子
問ひあるむれをいだきてそゞろ行く月の小道の白萩の花

なりふれ　越後　荻野てる子
柿の實の枝もたわゝにみのれるをかめに生けたる乳母の手すさび

朝がほ　廣島　久子
人のよもかくぞありけるはかなくも咲きてはしぼむ朝がほの花

山里の靜　下野　外塚あさ

雲の影あせてかすれて山里の靜けき夕鐘吹聞ゆ

折にふれて　甲斐　もろ子

おとづれし人だにもなきあま寺に匂ひこぼるゝ白菊の花

折にふれて　神田　大館春子

夜な寒みもの思ふ秋はうかりけりたえず聞つるさをしかの聲

田上月　紀伊　とく子

ふく風も身にしみ渡る秋の夜の山田のいほは月やもるらん

戸さゞむと思ふ折水鷄を聞て　丹波　すま子

ねやの戸をさゝむと思ふ折しもあれ月はかくれて水鷄なくなり

○　牛込　平塚いと

萩が枝にもつるゝ蝶のかげしたひ小猫よしきぬ散りまくをしも

折にふれて　肥前　瀧野金子

さらぬだに都の君の戀しきをなじかなくなり小山田の里

折にふれて　麹町　三澤花子

雲はみなはらひつくせし秋風に暁が軒端をてらす月影

○　牛込　しげ子

夕映に紅葉色ます日は落ちて月になり行く川沿ひの里

○　伊賀　服部うた子

淋しさもしばし忘れて野に山に紅葉かりする秋の此頃

○　伊賀　服部かへ子

落葉かくかこはふもとにおろし置きて木の子とるらし賤の女子ら

○　本郷　西岡古代子

何となうさびしきまゝに窓おせば雁なきわたる秋の夕暮

秋雨　淺草　春江

病む妹を看護れる夜半の呼吸は幽かむろ細さの秋の雨かな

日光の秋　麻布　田中美穗

ふた荒の峯の紅葉もみぢして瀧の七つは霧にかくれぬ

○　神田　及部峯野

手折てし萩の花束そのまゝに流れにひたす波瑞の秋

○　大阪　北川晴子

とむらひの小さき儀は行き過ぎてすゝき靜に秋の雨ふる

亡き父を思ひて　越後　ことぢ子

よきにつけあしきにつけてともすれば父さまゝげむと思ひけるかな

○　長門　三宅眞子

時雨ふる奈良の旅籠や紅葉散る山に寂びしく鹿ぞ鳴くなり

折にふれて　下野　三森ぎん子

病む人に冥府の使來る夜か廢寺あたりを野狐の聲

十六夜の月　山口　さと子

空さむく遠ちこち蟲のこゑ〳〵に限なくてらすいざよひの月

山風　赤坂　森英子

月淸み川風寒くさゆる夜はあしべの千鳥なきわたるなり

秋旅　神戸　むらさき

野に山に樂しき秋のたびなれど折々しのぶふるさとの庭

故郷の野邊　鹿兒島　藤濱やな子

五とせのむかし遊びしこの野邊にいまもかはらで萩の咲くかな

秋夢　上州　增田たみ

母そばのはゝそのかげをしのぶよの夢もおどろくさを鹿の聲

蟲　浦和　池田たつ子

さやかにもてる月かげに秋のよのふくろもしらでまつむしのなく

折にふれて　　静田　富原愛子
草枕萩の小窓になく蟲よ己が身の上ともになかなむ

○　　美濃　田中久代
露おもき秋海棠に風立ちて星の影散る曉の庭

秋　　大阪　仁木須磨子
人遠き野路の露草つゆながらみだれて秋の色ぞ見えける

失題　　上毛　星野花子
一日一日身はちゞむらん心地してあまりに淋しゆく秋の空

○　　近江　宮城椿子
蘆の葉の風のまに〱流れきて鳩むれ遊ぶ夕月の庭

失題　　京都　佐藤晶子
おもひたつ錦の衣の香が身にはふさはぬ迄も着では止むべき

晩秋　　栃木　小森谷好子
秋暮れて谷川下る猟士の笠にこぼれぬ紅葉の一つ

暮秋　　大阪　後閑八重子
夕映の空に鳥の影消えて塔のみ高し秋暮れんとす

折にふれて　　京都　岡辻歌子
今日諍ひし妹がちいさきもゝわれにそとさして見つ白菊の花

みたれの歌　　長崎　田中たれ子
月のもとみだれ鋼ふる忍び音も思ひ出多くみだれ〱て

述懐　　上野　佐藤露子
千草枯れ百草枯れて秋の野は露の花咲くころとぞなりぬ

題知らず　　廣島　阪部信子
人のみもからましかばと思ふ迄日々に新たに咲けるあさがほ

雁　　本郷　佐藤蝶子
望みちし月の面わを掠め来て湖畔に落ちぬ雁の一つら

蟲　　名古屋　山中かれ子
秋の野に啼く蟲のこゑ悲しともうれしと聞くもわがこゝろかな

岩清水　　周防　眞弘やちよ
一しづく岩間の清水手にうけてかくてふり行く我が身をぞ思ふ

秋季雑題　　大阪　沖ふく子
小谷川きよく流れて紅葉赤くわか故郷の山に似たるよ

萩　　小石川　串本して女
故郷の秋したはしみこの宿も庭のま垣に萩植て見し

○　　岐阜　鈴村元二郎
父戀し母又戀ひし君こひし御空にかゝる月眺めては

秋感　　小石川　村木　簾影女史
笛の音は遠く野末に消えゆきて萩野三里はたゞ秋の風

初霜　　芝　新野幸枝
散りしける紅葉の色も白妙に夜中のさむさを殘すはつ霜

落葉　　横濱　登久子
吹く風の落葉さそひて二片三片散りくる窓の秋の夕暮

雁　　本郷　堀江花子
雁来紅日に咲きそひて雁のしげくも来鳴く頃となりけり

暮秋　　埼玉　三上靜子
いとし子の祝ひの衣に着せしてか高尾の山に染しもみぢは

秋夜聞鹿　　仙臺　渡邊作子
何となく袖ぞ露けき秋の夜にあはれを添えて鹿ぞ啼なる

○　　尾張　大野くら
眞帆片帆紅染めて御空よりかへる夕の海うるはしも

草庵の秋　　臺南　岡田貞子

時雨降りて稻のよしやぬるゝともこのまゝにもる月をながめん

折にふれて　　駿州　ゆかり女

かりの夢蟲のなく音にさそはれて袖に時雨のふらぬ夜ぞなき

折にふれて　　愛知　ますみ

けさよりはよきことのくを菊月の胸もいさめるうれしのゝはら

○　　本郷　田中常子

貧に泣き不如意に泣けどたのしきは父と母との健かにます

紅葉時花　　大阪　大草よしな

紅葉の花に粧るは山姫が晴れの衣の上着なるらむ

暮に詣でゝ　　熊本　大野君子

きり〳〵す聲もよはりて苔むせるしるしの石に夕日つめたき

秋田家　　熊本　安田文子

風稻葉とどろ〳〵とひゞくなり瑞穗ゆたけき秋の祭りに

月　　長門　久保いと子

月きよし母上まさば去年のごと蟲啼く野邊に御手とらましを

○　　名古屋　小山かく子

ふと醒めて寢られぬ夜半を聲細く鳴く蟋蟀の只かなしかも

○　　尾張　大野かなへ女史

百千草花咲にけりそれ〳〵に名はあるらめとしるよしもなし

折にふれて　　長野　松尾節子

なき父の形見の衣とりすてゝなみだにむせぶ秋の夕ぐれ

山里に迷いて　　長崎　兒玉まき

迷い入りたどり暮しぬいざゝらば今宵は月の宿やからまし

萩のつゆ　　みゑ子

秋更けて訪ふ人もなき宿なれば庭も狭におく萩の上のつゆ

○　　伊豆　大川わたる

くちなしの色に出されねばしらぬ火のしらずやあらむもゆる思ひを

月夜の雁　　岡山　靜子

古ひたる土橋の畔たゝずめば冴へ行く月に雁鳴き渡る

紅葉　　信州　松子

山姫の如何に染めてか紅葉の錦とまがふ秋の山々

初秋の風　　備後　壺坂喜久子

手になれし扇のつまも忘れけり初秋風のおとづれしより

秋雨　　下谷　島山ゑん子

秋雨に思ひ出多き故郷や終日眺る百日紅の花

旅夜雨　　前橋　宮内りき子

故郷の母ぞこひしき旅の夜の枕に淋し秋雨の音

初もみぢ　　稻波子

古郷のおさなき妹が玉章の中より出る初もみぢかな

○　　陸前　山形幸子

朝寒き小川に櫨の花すてゝ水に笑む子の顔美しき

○　　三重　佐々木らく子

針とめて乳子かれ顔をそと見てはおもひにふける美しき人

蟲　　尾張　つせ子

なく蟲のこゑもすみ行く庭の面の月おもしろし秋の霜夜は

秋夕　　備後　立神峯子

なにすともなき夕ぐれの萩の松蟲の音をたゞうましときゝぬ

ものはづくし

◎印は入賞

●身にしみるもの

○寒夜中に警官の靴音　北海道　尾崎　雪子
◎旅で思出した親の異見　周防　笑　子
、類焼後の鐘の聲　岩代　菅野　崎子
、歯の痛み　大阪　竹本　花枝
、秋雨の夜　同　戸田　やす
、山中の呼子鳥　同　見島　菊子
、、、夜更てセコンドの音　徳島　し　げ　子
、旅順の實戰談　大阪　堀内　荻江
◎霜夜の非常汽笛　近江　宮城　梅子
、、悲しい時に同情の言葉を聞いた時　盛岡　か　ほ　り
、犬の遠吠　大和　村田よし子
◎出征前夜の訓示　大阪　森上　隆枝
、月下讀經の聲　陸前　小松　竹代

●陽氣なもの

◎朝　の　食　住吉　高原　つる
、活動寫眞　米澤　我彦ゑい子
、池上本門寺の會式　下谷　男　の　子
◎歳晩の餅つき　伊豫　熊谷　友枝
、鰊の大漁　小樽　門倉　優子
、雨後の日光　伊豫　星野たづ子
、一家團欒　松江　坂田いち子
、進軍喇叭　秋田　佐藤とき子
◎園遊會の樂隊　京都　濱部　郭公
、收穫時の農家　本郷　高木　白菊
、ホーカイ屋　牛込　平塚いと子

●赤うなるもの

○夕焼時の白雲　大阪　竹本　靜枝
、死後の海老　信州　神津ゑい子
、、泣いた時の目　大阪　ま　さ
、、、青柿　宇都宮　寺田きち子
、鬼灯　小樽　伊庭　たけ
、道に許嫁に逢ふた顔　福井　井田　美子
、蚤の食つた痕　小樽　眞　子
◎紅葉を移す溪流　大阪　吉野　金子
、熱い風呂に這入る　富山　鈴木つる子
、戀人の名をさゝれし時　伊勢　星野たづ子
◎意中を言ひ當てられた時　府下　平　鶴江
、緣談を聞かされた時の耳朶　神戸　由比　雪子
、田舎孃の牛蒡　神奈川　内山　清子
◎都へ遊學する學生の七分　上越　市原　貞枝
、、鰹の群る〻海の面　美濃　杜若食育子
、怒つた猿　京都　波多野春枝

先月◎印入賞の分投稿諸嬢の住所不明に付賞品發送不能至急御一報煩はし度候

來月の課題

▲福々しきもの
▲痛々しきもの
▲惜きもの

謎々

◎印は入賞

「艶書」「薩摩芋」「西太后」とかけて

▲西……「女の奴隷」と解く、心は「女奴(權)」を振り廻はす　武藏　戸田　やす
◎艶……「圍碁」と解く、心は「小石(戀し)」々々のならべ合ひ　岡山　田上　はま
▲西……「巧な催眠術」と解く、心は「心底(淸帝)」を自由にする　長門　久保いと子
▲西……「北京の市街」と解く、心は「世界無比の不潔(婦潔)」　靜岡　大高　ふみ
▲艶……「急行列車」と解く、心は「乗客(情書く)」　下野　永井　きく

が多い　上總　齋藤やえ子

▲西……青年士官の出陣」と解く、心は「新調(清朝)の劍(鞘)を擬る　栃木　石井蝶子

▲西……農家の秋」と解く、心は「新穀(清國)の始末をする　瀧の川　戸田やす子

▲臨……昔の大井川」と解く、心は「川越が名高い　岐阜　杜若舍育子

▲點……春の積雪」と解く、心は「心から解けそめる

▲西……店頭の素見」と解く、心は「品(支那)を亂らす　岡山　靜子

◎點……片輪車」と解く、心は「人中に出して見せられぬ　靜岡　藤木まさよ

▲臨……修身書と解く、心は「處世の要卷(書生の羊羹)　伊豆　大川わたる

▲點……寒中の泉水」と解く、心は「鯉の數々が縮つてゐる　駿河　片山いさ子

▲西……寶物の持主」と解く、心は「品(支那)全體は心の儘　美濃　田中文子

▲西……遊覽家」と解く、心は「殺生(攝政)をやめぬ　越後　坪井わか

十一月の課題

▲歲の暮　▲五二共進會　▲許嫁

前號◎印入賞投稿諸孃の住所不明に付賞品發送不能至急御一報あれ

▲奥參謀總長令息の結婚

奥大將の令息保夫氏は本月十三日を以て甘露寺義長伯の長女義子と華燭の典を擧げらるゝ由、儀式は小笠原式の古式に準據して取行はるゝ筈にて昨今兩家とも之が準備中なりと、大將は今年還暦に相當し夫人茂子も亦既に老齢に達したるさへあるに元來蒲柳の質なるのみならず長次男の二人は不幸にして夭折し今は三男保夫氏代つて家督を相續することになり居るものにて、保夫氏は今年廿四歳、近衛歩兵第三聯隊附少尉として軍隊生活を營み居る身の妻帯などは思ひも寄らぬと本人仲々に硬骨稜々たれども早く身を固めて兩親に安心させ淋しき家庭を賑かにするも親孝行の道なりと今回の婚約を結ぶに至りしなりと、新婦の父義長伯(五十六)は夫人立子(五十二)との間に受長(二十七)及び此度の花嫁義子の二子を擧げ受長氏へは曩に北白川宮滿子女王殿下(二十六)御降嫁遊ばされ義子は本年十八歳の妙齢、華族女學校の出身也。

▲大日本婦女人名辭書

國初以來三千年男子の事蹟は昭々として史乘に明かなるも婦人の行實に至つては寥乎として晨星よりも少し今回岩崎英重氏此の缺陷を補はんとし十年の苦心研鑽を積んで「婦女人名辭書」を公けにし豫約方法を以て購讀者を募集しつゝあり今内容の一端を窺へば上神代より明治の現代に至るまで我國歷史上に現はれたる忠孝烈婦美人才媛より賤妾遊女等稗史小説に記されたるものに至る迄婦女に關する一切の傳記を網羅したりこれを讀めば自から當時の世態風俗より婦人に關する周圍の事情男子の行跡をも知るのみならず婦女の境遇、家庭、教育、文學、技藝、總ての方面に於て知る事を得べし印刷鮮明所々に美麗なる圖版を挿入す東京芝區南佐久間町一丁目興文館（廣告文參照）

人事活斷

▲發問者へ――不幸女、煩悶女、心配女、女學世界愛讀女などの匿名は澤山で差合ひが出來て甚だ困りますから、成るべく特殊の分り安い匿名を用ゐて下さい、次に現住地を明記し難き方はその地方丈けなりとも記し置き下さい、これは判者の大なる參考となるのです。

▲多くの發問女へ――貴女達が私は何時頃結婚するでせうか、私は何れの方角へ縁付でせうか、私は如何なる夫を持つでせうか、私の夫の身分及び職業は何でせうか、私は彼の人を思ふて居ますが先方は思ふて吳れてるでせうか、などで煩悶せられて居るとすれば、天下の處女として煩悶のないものはありますまい、斯るお問に一々御答を致さんには本誌の全紙面を舉げて人事判斷に充つゝも千百分の一も揭げられません、故に今少し要領を得た發問でなければ何時も沒書と致しますからそのおつもりで。

▲むらさきすみれ女へ――よし貴女の推測通り最初は眞人が破談の覺悟で結婚されたとするも、其處を末永く縁を全ふされるが貴女の責任で一意愛を込め誠を盡してお事へなされたら、眞人も捨てやうとて捨てられるものでありません、然るに自ら猜疑に猜疑を重ね離婚仕度に煩悶せらるゝとは此上の心得違ひはありません、よく〳〵御反省あれ。

▲山里ふく女へ――如何にせば父御に愛せられるかとのことだが、なさぬ中ではなし彼らに愛せられやうなどゝの考が宜しくないので、底日爾の出來るやうになるのだから、誠意心の中から父御を信じてお事へなさるがよし、結婚談は未だ來らず、結婚の用意の學問ならばなくとも、なくて濟む方面へ縁付かるべし。

▲新潟ホーム生へ――意中の從妹と結婚されて障りなし。

▲高崗女へ――幼少より許嫁の眞人が意氣地なしだとて死を決して離婚なされたとはまて〳〵我意の强い婦人である、再縁は御希望通り技術のある男でなければ親、兄弟に對して相濟まぬわけですから其選擇は中々六ヶ敷、貴女一己の見立てゞは得て誤り易いから矢張十分父兄の御意見をお用なさるに限る。

▲岩生女史へ――姉妹の内一人は子供が出來ないなどゝは迷信の極で、そんな道理があるものですか、元來女子は受胎するものと限つて居る、西も世に兒なき人のあるは夫婦何れにか生理上故障があらからで、それは攝生なり醫療で濟ふとが出來るのです、次に眞人との同棲は早ければ一ヶ年後でせう。

▲梅林女へ――如何せば眞人に愉快を與へ無上の樂しみとするとが出來るかとのことですが、ことさらに眞人の意を迎へて悅ばせうなどゝは賣女の技です、夫婦の間は夫唱婦隨と云つてある、勤め心を離れて一意眞人大事に事へなさるがよし。

▲群馬の願女へ――貴女の眞縁の來ないのは貴女と母御との希望が異つて居るからです、斯くて追ひ〳〵婚期を誤り取返しの付かぬやうになるのですから、先づ母御との間を一致させるがよし、結婚のとは其次です。

▲秋子女へ――眞に眞縁です、結婚の手續をお運びなさい。

▲二十歳の女へ――友人方へお譲りなさるが吉、生中未練で居らしても成婚從來なし。

▲田舍娘君代女へ――お急ぎですが近い内には眞縁が見付りませんでせう、職業は軍人、會社員、銀行員、醫師、農家ならばよし、商家ならば時計商、金物商、藥種商、青物商などがよろし。

▲中國の風子女へ――又從兄との結婚は父上の同意を得るまで永く貞にしてお待ちなされたら遂に悔亡びて目出度成婚する運びになりますが、若し無理な考へを起し無分別なことをなされたら成就する期はありません。

▲秋の夕ぐれ女へ――音樂學校入學志望は貴女の志の堅くして事に熱心であれば達せられる見込がありますから、折角奮發なさい、併し誤りの少いことを云へば最早や年頃でもあり家に居て嫁入の準備をなさるがよし。

▲愛知心配女へ――再縁のこともあり、廿五歳と云はゞ未だ色も艶もあせた齢でもなし、缺あるこそ幸ひ大抵の處ならば嫁入らるゝを吉とす、婿の年齢は三十一、三十、二十八、二十七の所ならば上々吉、職業は醫師、辯官、僧侶、銀行會社の重役等、商家なれば金物商、材木商、米商、食品店等何れもよし。

▲京都氣がゝり女へ――それは貴女の杞憂と云ふものです、大事に留守をなされて大切な老母御の看病に心配過ぎてのヒステリーでせう、子供もある性質なり、行末屹度幸福ですから決して彼是れと心遣ふに及ばす。

▲山陰の某子女へ――學問が出來ないから他の方面で立てたいとの希望ですが、御兩親は健在、令兄あり、令妹あり、何不自由もないのですから早く結婚の運びをなさるのが第一です、合性から云へば廿九歳の男がよろしい、御考へ通り運で御覧なさい。

▲筑後心配女へ――耳が聞えなくなつた爲に妙齢の貴女が月雪花の面白きことにも會はで、愁傷なされて居るとは、實にお氣の毒に存じます、併し病氣は屹度平癒して遂に耳は聞ゆるやうになりますから御安心なさい、保證します、醫療器械のアタチナでも使用なされたら奏功が早いでせう、先づそれにも及ばないと判じ置きます。

▲草野露子女へ――先年同居された軍人との縁組は至極妙、成婚せば軍人好の親御の意にも叶ひ、貴女の身の納りも付き行末を煩悶するにも及ばないのですから、早速交渉を試みなされてよし。

▲西の空なるきだ子女へ――女兒はいらない男兒が得たいとのことですが、それは餘り勝手過ぎませう、世の中には兒が授からないとて心遣ひなされて居る婦人も少くないです、併し折角攝養を重じて健全で居らしたら其内受胎あるべし。

▲ひろしま煩悶女へ――僅か十八歳の乙女が一徹での婿定めは此上の危險はない、殊に父母の不賛成とあるものを叔母が時節を待てと申さるゝは、その内に年も取らば常識も出來、分別も付くやうになるからとの老婆心です、今貴女が進んでことを爲されたら將來は大々不吉恐るべし恐るべし

▲東海の三重女へ――貴女が離婚を請求せうかなどのお考へには全く間違つて居る、幸ひ優しき姑御が健在のことですから、世帶の持樣なり良人への事へ方なり何かと指圖を受けて稽古なさるが何よりの好都合です、學校で生半可な教授を受けた家政學や何かが實際に役に立つものでありません、それも結婚前ならばまだしものこと、今は全然よろしからず。

▲荏原の一女へ――老母在世中は如何に苦しくとも身の納りを付けないとは少しお考へが違ふでせう、身の納りを付けなさるも御老母を安心させなさる一の道ではありますまいか、八歳以下の男子との結婚は多少異樣にも感ぜられますが合性は極くよし、結婚も鳴鶴在陸其子和之と云ふ樣な象がありますから無論和樂の中に成立するでせう。

▲岡野櫻子女へ――貴女の結婚は年內には六ヶ敷い、御望の外交官、銀行役員などは最もよし、年齢は本年三十五、三十四、三十二、二十九、二

十六、二十五、二十三歳の男子ならば吉、親類の婦人との中違ひは一寸容易に解けませんから其心得で居なされば別に障りはありません。

▲崎陽の高子女へ――父母の親切なるお進めを不承知云はるゝ方は、大抵已に意中の人を拵へて居る人に限る様ですが、貴女も果してその一人でありました、併しお氣の毒ですが結婚は覺束なし。

▲北海道慶の女へ――女子の技倆は知れたものです、役所の事務員になつたとて赤十字社の看護婦となつたとて其收入は僅かなもの、矢張り相當の處へ嫁付て婦人の務をなさるに限る、さればフランクリンの妻としてワシントンの母としても成功が出來ます、貴女の意氣は誠に感稱いたしますが、此處は御兄弟の秀才如何にもよることですから篤とお考へなさることを勧告して置く。

▲駿河柔順女へ――學校卒業の履歴が嫁入の一資格であることは去ることですが、さて卒業證書が働くのでなく實際は其人にあるのですから、縱令學校卒業の履歴がなくとも自習してそれ丈けの修養があれば、何も恐ふることはありません、本年三十四、三十三、二十五、二十四歳の男ならば大吉、農家、商家へ嫁付かるれば吉。

▲すみえ千惠子女へ――向ふ二ヶ年の内に女子が授胎する象があります、攝生を注意なさるべし。

▲岐阜すみれ女へ――養子は理想通りのを得んには中々六ヶ敷、嫁付方ならば幾分撰擇の自由な場合もありますから、差支ない以上は嫁入なさる方針がよし、又軍人へとの希望は所が所ゆゑ少し困難でありませう。

▲武藏富士見女へ――良縁です結婚なさい、良人の高等師範入學は非常の憤發の上でなければ困難です。

▲まいこつゆ女へ――貴女が失明軍人の妻として行末へ力になつて上げたいとの考へは近頃珍らしい殊勝のことですが其心掛で再嫁なされたら何處へ嫁付かれても不縁となる筈はありません、再嫁なさるに限ります。

▲萩野の露子女へ――結婚は早くなさる方が吉、結婚式は姉の卒業と同時にお擧げなさい、勤務は地方をよしとす。

▲春日心配女へ――令妹の肺病は極初期であるから必ず治します、第一は心の持やうで一切心配事は打捨て快活に持つこと、第二は運動で、第三は滋養にあるのです、藥はその次ですから此心得で療養させてお上げなさい、是れは肺患で全治した方々の經驗上一致した處です。

▲長崎縣和歌子女へ――令兄の放蕩、嫂御の里行、二人の姪を養育なされて居なさるは、御現情十分に同情しますが、併し斯る不健全な破綻した家庭を實驗なされたことは、將來貴女の身に取て此上なき訓でありますから必ず幸運が訪ひますから折角力を落さずとお世話して上げなさい。

▲美月女へ――祖父母の御意に從つて再嫁なさるに限る、當時話ある二十二歳の男との結婚は吉なり。

▲防府やれ女へ――來春二月に良縁あるべし。

▲越後白雪女へ――順養女とならるゝも一家の爲めですからお受けなさるがよし、一年下の男は相性もよろしいから婿に迎へなさることを勧めます。

▲京都北山の女へ――東京方面の縁談は不調でせう、結果は面白くありません、商家が嫌ひならば農家か、商工か、美術家、銀行會社員などへお縁付きなさい。

▲長門の待兼女へ――義兄の無法は貴女が結婚以前のことですから幾分現在の良人に對して罪の輕い次第です、貴女は此上煩悶なさらなくともその心を良人の上へうつして一層大切にお事へなされたら將來はいよいよ幸福です。

▲母になり度女へ＝成れます、併し今一ヶ年許り待つて御覽なさい。

▲長崎四五女へ＝結婚二ヶ年夫婦間互に心が合はないとは、これ程不幸な家庭はありません、さて合はないとせば、ナゼ合せやうとなさらぬのです、世の中は自分の思ふ通りになるものでありませんから、よし再嫁して好きな軍人の處へ嫁付ても終りを全ふすることは覺束ないでせう。

▲山陽洏辛女へ＝成程女親なく男兄弟計りではサゾ御相談相手がなくてお心遣ひはお察し申ますが、さて今更女學生となつて婚期を誤るも宜しくありません、此處は小兄の御意見通り家事を手傳ひつゝ良緣をお待ちなさるが道です。

▲田舍の一心配女へ＝學問がないので良緣がないやうに申されますが、ドーして發問者が自筆なら十二分の修業が出來て居ます、又一生緣のないなどゝは女子の身にある間敷とです、帝乙婦妹以祉元吉と云ふ象ですから既に良緣は結ばれてある筈です如何。

▲子供好女へ＝御夫婦はまだお若いから今に授胎せらるゝでせう折角攝生を大事に天の御惠をお待ちなさい。

▲金澤煮痛女へ＝既に良人が短氣であるとを御承知の上は、何處までも逆はず唯命是れ從つてお出なされば、柳の枝に雪折れなしと云う次第で、無事に收りますのです、身を引くなどゝ云はるゝは却て貴女が短氣ではありませんか、今一つ考へ直して御覽なさい。

▲山奥の泣娘女へ＝學問の爲上京の御希望、熱心はさることながら男子と異なり學資の續かないのを知りつゝ父母に心配お掛けなさるはよろしくありません、思止りなさい。

▲九州涙咽不幸女へ＝貴女の煩悶は同情を表します、併し秘密は秘密で葬つて置くがよろしい、一時貴女の潔白なお心は示されませうが、爲に温き家庭も壞はれ、愛し愛されもしつゝある夫婦の間も心にもなき離別となり、其上叔父母や實兩親の歎きを見ることですから、今の所は許いて直しとする塲合でありません、唯お忘れなさい、自分の爲め總べての爲めです。

▲鹿兒島の梅子女へ＝渡米の目的は遂し難し、よろしく斷念なさい、

▲淋の國村雨女へ＝異母あり異母弟のおありなさることですから、後日家庭の面倒が起り勝ですから、成るべく養子婿を迎へらるゝより嫁付の方針をお取りなさるが吉、今日では未だ取りとめた緣談はありません。

▲煩悶女へ＝相性は極よろしいが、さて成婚はと云ふと、一つ障碍物がある爲に成り立ち難し。

▲いそのこぶ女へ＝幸福におなりなさるには、病身でもあり及ばないとお氣が付てるのだから、我意見などは封じ込めて一意良人の意にお從ひなさるればよし、他に妙法とてあるわけではありません。

▲心配女へ＝貴女の婚期は今日の處では不明ですが、いづれ來春三月後のとでせう。

▲西野菊女へ＝先づ技手を婿にお撰みなされたら無難でせう、次は機關士がよし。

▲二十三歲女へ＝事情を承れば甚だお氣の毒ですが、急には運びにくいやうです、併し永貞にして時節をお待ちなさるれば必ず一所になる時節が來ます。

▲不幸女へ＝長姉としては貴女の責任は中々重くなつて參りましたから、相思の人などのとを彼是れと苦にして居る塲合ではありません、此事は斷然と諦めなされて氣苦勞をも減し、又身體の健康をも傷はないやうになされて、其內緣談も出來てくる事ゆゑその節はこれまでの理想などは第二として相當の處ならば進んで應じなされ、相談相手を得て責任をおつくしなさるがよろしい。

▲落花流水女へ――ドンな人でも兩親が定めて下さつたなら天命と思ふて大切に妻の道を盡くすつもりとは、實に近頃珍らしい好きお心掛けです將來は屹度家庭の圓滿を保證します、お友達の婿さまが何れも皆中學以上の教育のある方なるに、父御の御撰みなされた婿の候補者が小學程度の教育しかないで中流以下の人物にしか見えぬので、母上共々進まないと云はるゝはさもあるべきことです、併し誠にも妾妻と云ふこともあり況して優しき貴女が眞人として内助なされたら品格は自然と備はて參ります、學千萬吉と云ふ象ですから結婚なされても御心配なさる程のことはありますまい、而も此一人に限つた譯でないのですから他に候補者をお探しなさるもよし。

▲稲田の心配女へ――筆跡の見事な上から見ても今時の女學生が比較にもならない位の嗜みある身分に係らず、日陰ものと埋もれなされた貴女の境遇には同情に堪へません、さて現在の境遇が改まられば先づ何事も駄目ですが、來春一二三月の中に都合よく御相談なされたら暇が取れませう、開運はその後のことです。

▲片田舍の鼓の女へ――貴女の御心配は御尤もです、令姉は今は開運の時節でありませんから諸事扣へ目に用心なさらないと、折角快復した病氣を又引き興す恐れが見えて居ります、成るべく氣を落着けてあせらぬが第一です、來春雪解の時が來れば諸事都合よくなります。

▲みとり松女へ――相性も至極眞好ですから末は幸福です、嫁付なさるが吉。

▲謎女へ――音樂の修業は何の爲めです、唯好きで樂しむと云ふ丈けでは一生に再度と來らぬ娘盛りを無にしてまでの勉強は、合點が參らないのは御父兄計りでないです、矢張現在の職に在て眞緣を求めなさるがよし、親御を安心させなさる謹程です否な唯一の道です。

▲入景女史へ――結納も濟みたゞ黄道吉日をのみ待つて居なさる處へ、肝心の花婿が腳患とは、御心配の段は如何にもお氣の毒です、而も三歳不氣凶と云ふ象を得ましたからお待ちなされても其甲斐なく嬉しい日は來ないでせう。

▲長門女へ――婿定めは父御の遠緣の若者に限る。

▲牧浦郡無名女へ――陸軍大尉との結婚が將來の幸福です。

▲早稲田若野女へ――今一ケ年間には授胎の見込みなし、その先きは知らず。

▲一迷女へ――高等女子師範への入學は覺束ない、小學本科教員の方は稍見込あり、併し小學校の教員では女子としての身の納りが付た譯でありません、御兩親の仰の如く嫁付るゝが一番でせう。

▲野邊の白菊女へ――年下の學生との結婚は貴女が婦道に誤りがなければ將來は無事です、令姉の立志はお氣の毒ですが遁じ難し、不節若則嗟若と云ふやう結果となるでせう。

▲苦心女子へ――二十五歳と云へば女子としては先づ晩婚の方ではありますまいか、話のある内に大抵の事は我慢してお極めなさるがよし、父御の思召にも叶ふではありませんか。

▲田舍の妻へ――四緑生のものは終始二軒の家を進退するとせば、世界の人の九分の一はさうでなければならない筈でせう、又四月十月がドゥの断うのと云ふ人もあるやうですが、人事はソンナ簡單なものではありません、たゞ聞くものは戒めとして身のたしなみとせば損のない所です。

▲アヽノ少女へ――十六歳の少女が秘密に思ふ男があるなどゝは知す早過ぎませう、未だ世間知らずの初心での婿定めは此上ない危險ですからお愼みなさい。

▲大和心配女へ——戸人に他に情婦があるにしても貴女に對する愛に變りはないでせう、貴女が惡い顔を見せなさらないで居らしたら緣は全ふ出來ます。

▲伊豫の悲觀女へ——病人窮を誤りて凶となる象がありますから母御の病氣は御注意なさらないといけません、貴女の獨立生活は正直にして和氣あらば成功の見込があります。

▲失望女へ——結婚に限る、撰り好みを大抵にして緣付なさい、新光明は新家庭の成立から來るのです。

▲山口蜂少女へ——貴女の理想とやらが陸海軍人であるので折角所々から話のあつた緣談を皆お斷りなされたとか、併し貴女は軍人の妻女として特別の修養が何程出來てありますか、軍人の方では貴女の如き婦人を好みますかどうか。

▲荏原歌子女へ——令妹の身の移動はよろしからず、矢張現在の地位に甘んじて家業をなされ、結婚の後の方針は養子婿の都合にお任せなさるを吉とす。

▲浪花みよ子女へ——結婚は多少故障があるやうですが、そこを甘く取纏めれば成婚します、現在の職務は先づ今暫くは從事なさらればなりません。

▲大阪能登女へ——一人の戸人の機嫌を取り得ない位では人氣營業はもとより駄目、貴女の性質では席藝開業はなされても流行ないでせう、戸緣あるを待つて矢張り再嫁せらるゝが將來の爲め吉です。

▲養父母嫌へ——今回の養子も結果は面白くないでせう、御注意あれ、

▲愛讀女へ——戸人の官吏を辭職して野菜栽培は極天眞の性情に適して至極よろしい、運動は未だ開きませんから力に餘るやうな無理はなさらないことを望みます。

▲伊豫のヒステリー女へ——矢張り戸人出征中の留守と心得へ商法大事に御勉强なさい、さて急がずともよし相當の婿養子をお迎へなさるが家の爲めです、令妹は他へ嫁入、令弟は志望が軍人ならばその方面へお出しなさるべし。

▲沈默女へ——父御の御話通り本姓父方へ復籍なさるがよし、養母に對する報恩の道は如何樣にもなる、お心裏は去るとながら養母と運命を共になさる時でなく、又雙方の爲にでもありません。

▲花子女へ——緣談は今の處では不調ですが他方面より話が改めてあるでせう、その時は多分成立ちませう、勿論今年中のことです。

▲浪花の片田舍好子女へ——最早や婚期も熟して居るとゆゑ今の内が花です、他から緣談のあるこそ幸ひ、理想とやらは一切封じ込めて應じなさるが吉、一生の開運は結婚後のことです。

▲大阪片山里住子女へ——小學時代よりの戀人との結婚は先づ上首尾成婚疑ひなし。

▲鶴女へ——醫師との結婚は成立する見込あり、病氣は永びき全快にはマゴ〳〵手間取るべし用心なされ。

▲孤島の千鳥女へ——獨立して兄弟の助力をなさらふとの考へは天晴れで、女子高等師範入學も有望です、意中の人との結婚は談は行き合ひますが最後に不調に歸する恐れがあります、其心得で交涉なされたらよし。

▲神田妙子女へ——直接の取極めは甚だ惡しゝ、仲介人を以てせらるゝも成婚の見込は先づありませんから、同速を未前にお避けなさい。

▲信州二八女へ——健康な身體に健全な精神が含るので、貴女の虛弱な病身では如何に心がはやつても駄目ですから、先づ身體の健康の恢復を計るが順序です、彼是れと出來もしない無理な考へをして氣をもむのが

わるい、心を緩るやかに持ちて居らなければ折角の大志も空想に終りませう。

▲すゝき女へ‖貴女の煩悶は無責任の婚約からです、先方は流石は男子失戀にて遠國へ渡るに當つても、父母の命に違はず女子の操を立てないとて訣れたのではありませんか、故に現在の良人に大切に事へるが當人の意にも叶ふと云ふものです。

▲南部の文子女へ‖多情の男でも愛妻は又別で 決して捨つるもので はありません、折角療養を怠りなく健康體に復させられたら、 從つて授胎する時が來ます、 心配に及ばず。

▲寧樂の白梅女へ‖幸あれかしと祈らるゝ 親御の見立の愛婿におろそかなことがあらふ筈はない、正當に求婚の出來ない男に憧がるゝは大なる心得違ひでせう。

▲朝野露子女へ‖陶器商の青年との結婚は、伯父の見立てゞすが、思ふた程の人物でもないやうです、猶は十分に精探せられよ、 實の處は婿養子をお迎へありて母御へ共々孝養なさるが至當です。

▲筑紫の一女へ‖夫婦同樣が道ですから早晩さう運ぶことですが、向ほ當分は現情のまゝでせう、併し若い時分の別居は却て愛情を深うする動機となるものですからお案じなさらぬともよし。

▲秋野松子女へ‖覆水盆に反る動機です、先方は再婚しゝ見た處が元木に勝る末木なしと云ふ所から、貴女に會見を申し來つたのでせう、貴女の決心次第で會見せられて害なし、次に小學教員就職は來春三四月の中とす。

▲姫路の女へ‖結婚は神聖でなくてはならぬ 成婚するにはそれ〴〵順序がありませう、私の約束ことでないから貴女の私交の上の勝手な取極めは責任あるものでないのです、 御心配に及ばず。

▲濱邊の白萩女へ‖從兄との結婚は 姉夫婦の意思にて自らは進まないとのことですが、如何にも此結婚は將來に見込がありません、 此まゝ姉上の旨に逆ふて居るはお心苦しいことでもあるから、一時小學校教員ともなりて身の振方をお付けなさるもよし。

▲かつぎ子女へ‖年内ならば來る十一月、來春ならば三月に結婚式をお擧げなされたら上々吉。

▲深雪女へ‖醫學書生との約婚は將來有望にあらず。

▲越後の花子女へ‖實母と繼母との不和合は 天性であるから致方はありません、此處は雙方に遠慮して衝突をお避けなさるがよし。

▲池の端花子女へ‖父の酒をやめさせる藥はないかとのことですが、心掛けよき妻女が亭主の大酒を節しさせた實驗をお教へ申すから お試みなさい、それは最初には極上等の酒を亭主の酒量丈け十分に與へて滿醉させ、その翌日も同樣毎晩同じやうにもてなすのです、 所でそこに手段がある、毎日杯に一杯なり中杯なり飲人に分からない程づゝ減するのです、例の妻女は根氣よく一日も怠らず一ヶ年に及びました所が、 最初はおしきせの晩酌に一升以上を傾けた、大酒家が一ヶ年立たぬ内に僅か一二合で陶然と醉心地となり、それ以上は退くるやうになりました、 暴飲でない以上は必ず効驗のあることゝ思ふ。

▲馬關心配女へ‖大尉の方をお採なさい。

▲楠の庵女へ‖親戚 父兄の不贊成とあるものを强て遊學なさるにも及ぶまい、又家に居て厄介物あつかひせられるならば、 最早や婚期のことですから嫁付るゝ方針をお採りなさるが萬全の道です。

▲瀬戸の海邊女へ‖求婚は 先づ不調でせう相性も良くない所を見れば、惜むべき縁談ではありません。

▲不遇女へ‖折角の良縁が不調となつたとて落膽さるゝけれど、これ

も案々なき縁なればこそ成立せなかつたのですから、樂みて次の良縁をお待ちなさい、來る十一月より運が開けますから御注意なされば近き將來に屹度目出度とが舞込みて來ませう。

▲西海の愛讀女へ――年内から新春へ掛けては未だ貴女の身の納りの付くやうな家は見えませぬ、上京のとも未定の中に經過するでせう、その積りで家にお當りなされたら案外心易う運ぶかも知れません。

▲木村紗子女へ――貴女のお考へ通り決行なされたら將來は吉。

▲南晉女史へ――話しが長くて何時も末はまとまらないとのとですが、何時までも落き話を氣にして待つのは愚の極です、世間は廣いからドシドシ新らしき候補者を見付けなさい、此次には優々と話を引張らないで此方よりハキハキと早く進行なさる方針を採られたら屹度成立します。

▲深山美人へ――來春二三月の頃に縁談あるべし、併し貴女の理想通りなさるや否やは保證し難いのです、外國行は全く駄目、令弟は或程度まで成功されます。

▲不幸なる春子女へ――繼母の甥との約婚履行に付て、繼母しからざる義從兄の成功をお待ちなされたお心は尤もですが、義從兄に對する貴女の誠意も屆いた今日ですから、此上は父御の御意に從はれて他へ婚嫁なさるゝも聊か疚しい點はありません、却てそれが貴女の好運命で、將來の仕合となるのです、御決心あれ。

▲大阪艶子女へ――浮沈は人生の常です如何ほど零落しても一點後ろめたきとさへなければ俯仰天地に耻づるとはありません、病める良人を冷かなる下宿屋に托して外に勤奉公をなさる考へは最も惡し、縦令木賃宿の一室を間借しても温き貴女の看病ならば快復が早いです、且つ良人は當年四十一と云へば俗に所謂前厄ですから今明年は開運の見込ないものと決心して諸事その運びをつけるべし、良人は一週間に一日出勤なさるとも先方より解雇せらるゝまでは辭職なさらぬがよし、貴女の手に叶うとは何なりとも收入の道をお付けなさい、耻も外聞も云ふべき場合でない、眞に死活の境ではありませんか、併し落ちる所まで落ちれば其後は上る計りでありますから樂しみも出て參ります、落る場合には深く落つるがよし落ち汚きは直に昇るとが六ヶ敷いから、此處の理を合點せられたら將來は幸福です。

▲萩の美枝子女へ――折角ですが成婚望みなし、他方面に候補者をお求めなさい。

▲心配母へ――年配の娘子をお持ちなされた親御は、誰も皆婚嫁を急ぐ者です、所で姉妹の婚期は年内には六ヶ敷しいが來年早々には縁談があリますから、善惡に係らず交涉を試みなさるべし、良縁の緒は開けます。

▲松山の心配女へ――弟の病氣を心配するは姉の身として尤もの事なりさりながら病氣は醫療の如何によつて善くも惡くもなるものなれば第一醫師に謀つて病氣の全癒するや否やを確めた上にて倚ほ天啓堂にたのみなさえ。

▲北海の苦闘女――苦勞して後に樂を得るとはうそだと貴女は申すなれども千本の稻の内にも一本の實らぬがあると均しくたまには貴女の樣な方もあるかも知れんがそれは一時の事で末には必ず安神立命の境に達しられますから決して失望せずに何事も決して踊斷的にせず家内中の相談を以てせば必ず成就し縁談も必ずまとまります然し今年は年運はり惡しき故來年に延ばした方が尤も安全なり。

▲伯耆女――人が縁入をしたとて決して羨むには及びません必ず近い内に良縁があります然るに人が縁入るからと云ふて無闇に立さはいであるくと却つて縁遠くなりますから茲五六ヶ月の間おとなしくして家事を勤めて御出なさい。

●結婚道しるべ●

▲本誌の結婚紹介は信用確實なり▲申込者は博文館女學世界交信部宛の事▲申込者は住所姓名番地を詳記する事▲本人の寫眞を送らるれば保存して希望者に紹介す▲照會者は雙方への通信料として三錢切手三枚を送らるべし▲寫眞を望む方は切手貳拾錢を送らるべし▲〆切は每月廿一日限り▲一時に二名以上を紹介せず

行きたき方

▲年二十二歳血正容貌並、普通教育を有する商家の娘にして相當の資産を有し兩親健在昨今裁縫の實習中家庭は嚴格なり遠近を問はず商館員又は實業家に行きたし(前橋の花)

▲地方高等小學校卒業後香道茶花を習ふ容貌普通品格有り在學中は優等首席を占む眞宗にして愛情に富む相當敎育ある血正の男子に嫁きたし(名古屋の希望者)

▲二十一年十月生高等小學卒業後家に在つて家政を手傳ひ傍ら音樂を練習せる容貌普通中流商家の女四歳にして父に分れ爾來不幸つゞきて貧苦に成長したるもの相當の眞緣を求む(大阪の而立女)

▲年二十三初婚土地の女子職業學校卒業其他生花音樂を稽古す今は家庭にあり容貌普通體格健全なり兩親兄弟多くある商家の娘三十歳前後の軍人又は商人に嫁したし(日向の無名女)

▲知人の娘年二十五年性質溫良相當敎育あり公債株券時價一萬五千圓餘を分與して別家せしめんとす着實なる銀行會社員又は官吏軍人にて相當の配偶を求む都合によつては嫁入せしめてもよし寫眞あり(姫路の愛婿者)

貰ひたき方

▲實弟廿四歳體健血正目下醫學專門學校在學中學資不足に付試驗修了まで繼續補助しくるゝ慈愛心ある眞家の養子を望む(北國本人の兄)

▲年齡卅九歳官吏月收貳百圓外に財產あり東京以西の出生にして圓滿なる家庭に生育し中等以上の敎育を受け性快活にして交際的の淑女を求む(在韓の高等官)

▲年二十四博物學專攻者にして獨給なり年齡學力の如何に係はらず財產の有無を問はず裁縫に熟達し進取の氣象に富む淑女を求む再婚不嫌寫眞あり(長崎の肥兒)

▲年廿七歳中學卒業後米國シカゴ市商業學校卒業某會社員月收五拾圓實家あれども次男なり財產容貌を論ぜず女らしき高尙なる精神を有する意志鞏固なる眞婦を汁む(大阪の逸名氏)

▲年廿九官吏月收四拾圓母一人年十八乃至二十三位賢性溫順高女卒業若くは一科の技藝に長ずる淑女を求む現今就職又は在學中なれば婚後通勤又は通學隨意照會封書に限る(在京濃州男子)

▲年廿六某大學卒業目下某會社員東京市內にて中流以上の新平民の家に養子に行きたし照會あれば午後七時より直接參堂若くは寫眞送附あれ(東北男子)

▲東京府士族呼年卅一歳目下某銀行奉職月收五拾圓餘係累なし仕度の有無を論ぜず二十三四迄の多少敎育ある淑女を貰ひたし(大阪在勤生)

▲知人年卅三東京某專門學校出身目下奉職年俸七百圓他不動產收入あり父母あるも別居す廿歳以上廿三歳以下高女卒業或は技藝學校を卒業せし者を求む(東京SA生)

▲年廿六血統正體健身元駐しからず月收三十五圓目下敎職に從事せる者溫順にして愛に滿てる初婚の女を迎へたし都合によつては養子緣組するもよし(本鄉の次男)

▲海軍々人年二十二歳勳章及恩給を有す十五六歳の處女にして目下小

學校在學又は女學校在校の者に 毎月多少の學費を支給し 父母の許にて通學し得べきものを求む但し東京市に住するものを可とす(横須賀生)

▲呼年二十七 高等官月收九十圓以上家には財産あり 女學校卒業以上の教育を有し二十歲 以下にして容貌美なる 淑女を求む修學中なれば學資を補助す(鴨緑生)

▲或專門學を修め 一定の資格を有する男子 品行方正性質純眞米國の視察を終り今回歸朝す係累少なき氣樂の家に養子たらんことを望む(GY生)

▲年三十歲陸軍歩兵大尉なり志 趣高尙體格健全容姿美にして 溫健なる家庭を作らんとする 中流以上の嚴格なる 家庭に育ちし高女卒業位の二十三歲までのもの と 六ヶ月以上文通交 際の上結 婚したし (在韓の獨身)

▲知人年二十九東京帝國大學々生家格よく 容貌淸秀にして 溫雅なり容貌教育相當以上の淑女を求む(東京角帽生)

▲知人年二十八血正溫厚係累なし 目下船員を廢して 獨資を以て 富國的商業をなさんとす 多少の學力を備へ 體軀精神共に男健にして活動的三十四までの女を求む(神戶の實業家)

▲友人年二十九 目下海外某會社支配人月收七十圓以上 內地にて有望の事業あり資金壹萬圓乃至五千圓を要す 右融通してくるゝ 血正の妻を求む(梦口の月下氷人)

▲某帝國大學工科大學在學中年二十四 財產なし年十九歲 以下にして高等女學校卒業 又は修業中のものにて 中等以上の家庭に育ちし令孃と約婚したし(在韓研究生)

▲年二十七 家は地方第一流の門閥家數萬の資產あり 某銀行支店長を勤め傍ら專門學研究中有爲の士を以て 任ず高等女學校卒業位 にて年二十歲相當の資產家の美貌なる女子を求む、都合によつては養子に行くもよし寫眞あり(大阪白羽生)

▲三府の一に住する官吏年三十六歲 年收千圓無係累のもの 高女以上の學を修め性質溫雅家事に 誠實にして普通の容姿あるものを 求む但年齡二十五歲迄(獨棲者)

▲陸軍恩給を有する年三十一 無係累のもの現今は農場を 支配せるも遠洋漁業に大望あるもの中等教育ある 身體强壯血統 正確なる年二十位の淑女を求む(北海生)

▲知人教師にして 某會社顧問を兼れ 月收百五十圓將來會社員たらんとす大阪鴻池に 親戚あり美なる二十三以下の 女子にして高女卒業以上有洋航したき目的ありて逆境に育ちし女を求む(東京ゆり子)

▲目下臺灣南部にて 警察に就職 月收廿八圓外に五百餘圓の貯蓄あり廿一歲位の普通容貌あつて多少文字を解し 將來實業に 從事せんとする女子を求む(在灣愛婦生)

▲年三十三 行正體健正義を愛し 政治を好む學財なし又係累なし將來發展せんとす廿二前後初婚 體健容貌可品格眞高小卒業以上の 學力ある裁縫に熟する淑女と結婚を望む(東京生)

▲歲三十五 獨身者東京在住教職に從事す月俸三十圓 今後實業に從事する目的にて 辭職し語學を研究せんとす 多少財產を有し女學校卒業の教育ある女子を求む再婚不苦(東京生)

▲知人年廿五 東京帝國大學法科大學法律科第二年生 成績優等身體健全なるもの學資不足に付き卒業までの 學資を貸與しくるゝ 人の令孃と結婚若くは約婚を望む(帝大生)

▲基督教信者にして 圖案當家廿四歲月收五拾圓兩親兄弟財產なし 弟子と二人暮し廿二歲以下にて高等小學三年以上の教育ある處女を求む(京都の畫家)

▲年二十五歲體格强健酒煙草を好まず 之迄陸軍に奉職歸宅後 美術學研究中獨力大計畫を立つるに由なし 同情あつて資金持參しくるゝか 又は資金を繼げる人の養子となりたし(熊本SK生)

▲年廿四歲體格申分なし 目下官職にあり月收四十圓時機を見て滿韓地方へ行き大事業を起さんとす是れと 希望を一にせる 年廿二歲までの人と結婚したし(奮發生)

▲身元正無係無財年二十二 學資に窮し恨を呑んで休學す 來年四月まで貸與し下さる方と至急結婚を望む(窮迫生)

▲友人年廿四實業家にして 月收廿五圓將來益々有望なり 二十歲以下にして普通教育ある處女と婚を求む(東京紺帝生)



母子

正岡秋子

一

『母さん……』

私が柳津の家を出やうとする時でした、千勢は眠りから覺めて、氣疎げに室の中を見廻しましたが、つい其枕元で着更をして居る私を見ると、悲しさうに呼ぶのです。

『母さん』と、私が手に持つて居た帶上を引たくる樣にして、犇と私に寄り添ひながら、しみ〴〵と見上げて、又、

『母さん……』と呼ぶのです、

思ひきつて

『あい』と返事をしてやりました、

『母さん――母さんてば！』

千勢は只それぱかりを繰返して、確りと私の膝に抱き付いたまゝ離れませんでした。

いつもなら『何處へ行くのよう』と鼻をならしながら、泣聲になつて脅すのですが、小供心にも何と思つてか、今日は行先を尋ねもせずに、私に抱き付いて、悲しさうに見上げては只呼んでばかり居るのです。

千勢はことし六つです『年にはませた子供だ、可愛氣のない子だ』と旦那樣は口癖のやうに我と我子を陷しめなさるを、聽く度々に私は、我身を打たれるより

も蹴られるよりも切なく思ひました、

世間狹げに大きな聲さへ出し得ぬのと、物を見る度おつかなさうに上目を使ふのも、終始遠慮勝に俯首いてませた口を利くやうになつたのも、皆誰がさせた業でせう、斷つても斷れぬ自分の子供を、父親自身で此樣有樣にして了つた癖に。

『なぜ此子供は此樣だらうな』

とせめて憎々しげにでも仰る事か、通越りの瞽女の子供でも見るやうな目付を遊ばして、あゝは云へまいと思ふほど、冷淡な濟しやうをなさるのを、

子供心には、これが叱られるのとも憎まれるのとも分りかねる父親の樣子を、千勢は何時でも凝と見て居ますが、やがて母子二人きりになりますと、嬉しさうに私の膝に寄りかゝつて、

『母さん、千ちやんはね、母さんと二人で居るのが好き』と申すのです、

餘程以前の事でした、いつもながら不機嫌さうに旦那樣の出ておいでなすつた後で、珍らしく千勢はぴよんぴよんと跳ねて居ましたが、『母さん』と呼んで、矢張ちん〳〵まご〳〵をしながら、

『千ちやんは生れて來なければ好かつた』と苦もなささうに申すのです、

腹の底から冷たい涙が突き上げる樣な心持がして、私は何とも答へられませんでした。

『母さんねえ、ちいちやんを生んだからお父樣が叱るんでせう母さんを』

つと立止まつて、ぢつと私の返事を待つて居るんです、犇と抱きしめて私は思ふさま泣きました。

『千勢ちやん、そんな事はないの』

千勢は抱きすくめられたまゝ、頭を擡げて何とも申しません。

『千ちやんの故ではない、何もかも皆な母さんが惡いの』

『母さんが惡いの？』

『でもね、ちいちやん、お父樣はあんなでもね、お[illegible]

の中では母さんだの、ちいちやんだのを大事にしてゐらつしやるんの、お父様はねえ毎日裁判所で、種々な惡い人達をお調べなさるんでせう、だからいつでも彼様怖いお顔してゐらつしやるの」

「さう――」

子供心には一寸安心したのでせう、つい笑顔になつて、むづ／＼私の膝から離れたがるのです。

此三月ばかり前、こんな事がありました、千勢はあわてゝ私の所へ走つて參りましたが、

「母さん――」といつもの可愛い聲で、

「お父様にはねえ母さん、可愛らしい兒さんがあるんだつて、ほんと母さん、その兒はねえ母さん、千ちやんよりも小さくつて千ちやんよりも可愛らしいんですつて、ほんと、好いわねえ……」

としみ／＼考へて、

「根岸つて何處？　母さん」

私は、はつと吐胸を突かれました、根岸といふ所には、旦那様の美しい思ひ者と、その女との中に出來たとやらいふ女の兒とが居るのです、私の有甲斐なしに扱はれるのも、一人子の千勢が疎まれるのも、それもこれも根岸といふものがあるばつかりの事、忘られぬ恨みつきぬ思ひ、私の心はそれが爲め、三年このかた解けた日はないのです。

「誰にそんな事を聴きました」

と私は思はず立上りました、千勢は妙にはにかんで俯首いたまゝ返事をしません、

「誰から聴いたの、えゝ千勢」

と優しく尋ねますと、おづ／＼と顔をあげて、

「春が……」

「春が？、不可い女です春は、」

と私はさり氣なく云ひ捨てゝ

「お前は欺されたんです春に、お父様の子はお前一人、そんな根岸なんて、他家の子が如何してお父様の子なんです、欺されたんですよ春に」

「さう」と千勢はつまらなさゝうに俯首いて了ひました。

永年よく勤めて惜しい者でしたが、春には其晩永の暇を遣しました。

二

過ぎこしかたの、あの事此の事、今更に胸を突いて、去られては行かねばならぬ此刹那、今迄しみ〴〵と不運といふ不運を身にしめ貫いた我身ながら、今更あまりの淺ましさに、私はもう涙さへ出ませんでした。

私の行つて了つた後は如何なるだらう、此年頃の夫の素振で、私にはもうそれが丁とわかつて居る、さうなつた時私の可愛い一人子の千勢が、此上どんな憂目を見るやら……

それが辛さには、此幾年を出てゆけがしの旦那樣の仕打に堪へ忍んで、情なさ口惜しさを身にしめぬいて來たものゝ、

さりとては旦那樣とて鬼ではなし、今に私あはれと思ひ直して下さる事もあらう、千勢のいとしさを少しでも身にお知りなされて、せめて笑顔の一つも見せてやつて下されたなら千勢がまあどれ程嬉しがる事か、其時の千勢の樣子がつい目に見えて、其有樣が見たいばつかりの私の辛棒も……。

今日はもう此始末、だめ、だめ、私はとう〳〵柳津の家を去られて了つた、此世一世限りとやらいふ親子の緣を、今日といふ今日私は斷られて了つたのです。

つれない旦那樣の仕打には、もう飽きた、明日からは見もせず聞きもせずに濟むやうになつた私の心は嬉しからうか、人に言つたら卑まれやう、私は柳津の家を去られたのが悲しい、

四五日前日野の小母さんがいらしつてから、今日の始末はもう覺悟をしたのでした、一昨日の晩、旦那樣おかへりなき夜の寢物語に、それとなく千勢にほのめかした言葉を、利口な心には何と聽いたか、泣きもせず縋りもせずに、たゞいたいけな返事をしてゐましたが、ぽッつり大きな目を開いて、じつと洋燈を見詰めたなり何時までも寢付かずに考へて居るのです。

「千勢……」と呼ぶと、眼ばかり此方向いて、

「母さん――」
「何?」「嘘よ母さんの言つた事は」
「何故」「でも……」と、こちら向いて、じつと私を見てゐましたが、
「嘘よう!」
と言ふなり私の身體にからみ付いて、しく／＼泣き出して了ひました。
昨夜は只じつと抱きしめて、これ限りのせめて一夜、何にも聞かせずにと觀念して、無理から枕に就きましたが、どうしても寢附かれぬ私は、枕邊の火影につくづく千勢が眺められて、云ひ切れぬ思ひのあれやこれやが、怪しく涙になつて湧き出るのでした。「千勢」と呼んで見ますと、子供心の最早すや／＼と寢て居りましたが、一言で眼を覺して、
「母さん呼んだの」
「あゝ、おッ乳をあげやうか」
「いや……」と頭を振つて、
「千ちやんは最早先年からおッ乳は飲まないぢやないの」
こんな理窟めいた言葉が親心には又嬉しく
「あゝさうだつたねえ」と私は淋しいながら笑ひました、
「母さん」と千勢は甘つたれて
「出ないでせう、おッ乳」
「あゝ」
「ぢやあ駄目!」と今更申譯をするのです、私は何かしら悲しさが身に迫りました、
「千勢……」「何、母さん」
「來年はお前學校へ行くんでせう」
默つて私を見詰めて居るんです、
「學校へ行く樣になつたらね、先生の仰る事を能く聽いて、えらい人になるんですよ」
「あ……」と千勢はしほらしく、うなづきました、
「母さんは居なくつても、よく勉强をするんですよ」
默つて又うなづきましたが、
「さうしたら母さん、又千ちやん家へ歸つて來るの」

「あゝ」と返事をしましたが、こんな事を考へてゐるのかと思ふと、私はいつそ情なくなりました、

「それからねえ千勢」「何」

「母さんが行つて了つたら、自分で身體を大事にするんですよ、雨のふる日に傘をさゝないで外へ出歩いたり、いつまでも日當の處に居たりしては不可ませんよ、寒い晩には氣を附けて、お蒲團を脱がない樣におし」

私はもう言ひ續ける事が出來なくなりました、千勢は變な顏をして、凝と見詰めて居ましたが、「母さん」と明晰呼んで、

「私ね、母さんのお顏何時迄も忘れないで居てよ」

何といふ悲しい事を言ふのでせう、私はさめ〴〵と泣きました、

「母さんが歸つて來る迄必定忘れない事よ」

と力を籠めて言ひ足すのです、

「千勢、本統に忘れては厭ですよ、え、いゝかい！」

「でもね母さん、いつ迄も〳〵母さん歸つて來なかつたら如何しやう」と私を見て、

「千ちやん漸々大きくなると、お河童さんがもつともつと長くなるでせう、さうすると髪結ふでせう、でも母さん千ちやんの顏分つて？」

「分りますとも！母さんが千ちやんの顏を忘れるものですか」

「さう、分る？」と考へて、又心配さうに、

「でもね母さん、直母さん歸つて來なかつたら千ちやん困るわ」

「どうして」「でも……」と考へて、

「いつ母さん歸るの？」

「さうね、直、十夜も寢たら」

「十夜？」と仰山に叫んで、

「そんなに……、ちやア千ちやん十寢たら、御門に出て居やうや」と小さい聲で、

「よし子さんと最早喧嘩しないで遊ばうや、母さんが居なくなるから」と、心細さうに申しました、

去つた後の自分の心持を考へると、私は今斯うして千勢を抱いて居るのが勿體なく思はれました、そして又、

千勢が獨りでどんな事を考へて暮すだらうと思ひますと、私は例へ如何なつても千勢と離れる事は出來ないと思ひました、離れともない、どうあつても離れともないと思ひ詰めると、私はふいと樂しい好い事を考へ附きました、それは世間に能くある樣に、母子が一處に死んで了ふ事でした。

死んで了つたら、明日からの辛い思ひをしずに濟う、幼い千勢にいたいけな目もさせずに濟う……、と考へると、私は死といふ事程有難い物は無いと存じました、母子で死なうと云つて聞かせたら、千勢は厭だといふだらうか、必定怖いから厭だといふに違ひない、いやいや並脱れて賢こい子だ、母親に別れるよりも一緒に死んだ方が好いと思ふに違いない

と思ふと此賢こい我子の行末を見ずに終ふのが情なくて堪らなくなりました、愚な親心とは知りつゝも、めでたい我子の生先が目に見えるやうで、これが爲めには何事にも耐へ忍ばれると思つた我身の思惑も恥かしう、親として行末長い身の命を捨てさせて、それで自分は滿足が出來やうか。

別れるのが如何に悲しいとは云ひながら、親たる身が何といふ淺ましい事を考へたらう、自分は兎も角、幼い者は悲しいと思ふのも一時、漸く賢こく育つて行つたなら、その中にどんな幸福な身にならないとも限らぬ事、彼子の身が幸福にさへなつて呉れゝば、それでもう私の希望は叶ふといふもの。

あゝ別れやう、思ひ殘さずに別れて了つて彼子の幸福を蔭ながら護つて行かう、と思ひ定めると、今が今考へた事の恐ろしさに、私は思はず慄然と致しました、明の今朝、私はよく眠入つてゐる千勢の頬に吻して、潛かに別れの心を決しました、で、そつと起き上つて、靜に夜着の袖を抑へて遣つて、さて其室を出ますと、新參の竹があたふた參りましたが、

『あの旦那樣が』『お歸り？』

『へ……』と答へて又急がしく勝手へ去りました、私は心を定めて、靜に玄關へ出ますと、名ばかりの私の夫は、突立つた儘冷かな一瞥を呉れましたが、私が

會釋を致しますと、妙に氣取つて、

「歸るだらうな！　都合があるから今日片付けて貰はう」と落ついて云ふのです、

「よく存じて居ります」

「さうか、荷物は日野へ屆けます」と云つたなり、何と思つてか引返して、其儘外へ出て行きました、何事も胸一つにと思ひ定めた我身ながら、あまり別離のそつけ無さに、私は言ひたかつた事の彼や是やが一時に胸に迫き上げて、此儘此處に倒れて了ふのかと思はれました、入變つて日野の小母さんが入つて參りましたが、私が凝と立竦んで居るのを見かけて、

「お貞さん——」と遠慮らしく呼ぶのです、もう私を引取に來たのでせう。

三

千勢は私の身體を一寸も離れません、私は此子を殘して、どうして柳津の門が出られませう、

日野の小母さんは次室に扣へて居りましたが、此室の様子を悟つたのでせう、

「お貞さん」と優しく呼びかけて、

「爲に惡いからね、思ひ斷つて早々となさいよ……ねお貞さん、未練な風をして見せちやあ千ちやんが後で又……」と口籠つて、

「爲に惡いからね」と繰返しました、千勢は珍らしさうに小母さんを振返りましたが、

「母さん——」と私を呼んで、

「小母さんは何しに來たの、え、母さん」

小母さんは淋しさうな笑顔を見せて、

「千ちやん」と呼んだなり、眼を瞬いて俯首いてお了ひなさるのです、千勢はまじ／＼と見て居ましたが、又、

「小母さん」と呼んで、今度は

「母さん——」と呼び續けましたが、遂々聲を出して泣いて了ひました。

「あゝお父様が惡い／＼」と小母さんは誰にいふともなく云ひましたが、そつと私の袖を引張つて、

「お欺し、え、お貞さん」と小聲で囁くのです、
「今になつて小母さん」と私は怨めしく、
「欺したつて、欺されるやうな子ではありません」と私は少し取亂して居たのでした、小母さんは怒りもせずに優しい聲で、
「千ちやん」と呼びますと、千勢は父親似と云はれた切の長い眼を見開いて、小母さんを凝と見詰めました、
「お泣きでない、ね、お前が泣くと、母さんが心配をするから、ね、小母さんが困つて了ふよ、いゝかい千ちやん、母さんは今日一寸行つてね、又直歸つて來るの、だからそんなに泣かないで、大人しくして待つてお在で、ね、お土產は何が好からう、小母さんと母さんと二人で、大きなお風呂敷に一杯入れてお車で歸るよ、ね、いゝかい」
千勢は耳に入れる樣子もなく、力一杯止めて返らぬ私の袖を引張つて居りました……、

四

我とも知らぬ、うつゝなき身を俥に運ばれて、私は日野の小母さんの家へ一先づ落着きました、春や昔この品川の沖つゞき、ほの〴〵と霞める夕を、ゆくや眞帆、かへるや片帆、をかしと眺めし我身は今も我身ながら、七年の後の今日の行末を、斯うとは思ひもかけませんでした。
親はあつても十年前、一家殘らず引移つたのは北亞米利加の某州、元來引込思案の私は、其折一人居殘つて、引取られたのが此日野の家、波の近き此一室を與へられて、朝に晚に見暮した此沖の景色……見るにつけても今更に、千勢の無かつた昔が懷しい、我眼の前を去りやらぬ、いたいけの面影、耳に殘るしほらしの聲、憎い人が定めての仕打も思ひ遣られていたはしく、此身にかゝる無情には見事堪へ得し我ながら、猶千勢の事ばかりは、どうあつても斷念らめる事が出來ないのでした。

此四五日酷く痩せたと云つて、小母さんは種々御心配をなすつて下さるのを、お志の嬉しいにつけても、ついかへらぬ愚痴を申上げては、いつも小母さんを泣かせて了ふのです、いつそ親達の居る亞米利加へ去つて了はふかと考へる事はあつても、今よりも一層遠く千勢と離れて了はなければならぬと思ふと、迚もそんな決心は出來ませんでした。

昨日でした、

『どうしたら好いんだらうね、本統に』と小母さんは持あましてお了ひなさいました、

『千勢にさへ會はせて下されば私は何にも泣きは致しません』と自暴な事を申上げても小母さんは怒りもせずに、

『會はせて上げたいけれど、そんな事をしては矢張あとあと泣氣が殘つて、餘計忘られなくなります』と窘める樣に仰いました、小母さんは、終には私が千勢を斷念めるものだと思してゐるんでせう、

『爲にならないから、思ひ斷つてお了ひなさい』と小母さんは此頃口癖の樣に仰る、爲になつても、ならなくつても、私は其樣事は考へられませんのです、斷念めやうと思つても見ねば、又斷念らめる事が出來るものとも存じません。

と言つて如何ならう、千勢との緣は最早斷然切られて了つたものを、今更どう考へて、どうしやうと云ふのでせう、けれど私は千勢を思ひ斷る事は出來ませんのです。

別れてから今日で丁度十日、今頃は子供心にどんなにか私を待つて居るでせう、家には必定あの女があの子を連れて來て、嘸賑やかになつたらう『お前のお母さんは最早歸りはしないよ』と、きつと云ひ聞かされては居やうが、それでも千勢はきつと私の言つた事を、せめて心頼みにして、私を嘸や待つて居やう、十夜寢たら歸ると云つたのを覺えて居るかしら、利口な子だもの必定忘れずに居るだらう。

歸りたい……、歸りたくいないが千勢と一緒に此世が送りたい、さうなつたら忙しい時甘つたれても叱るま

い、欲しいと云つた彼の和琴の玩弄物、高が五十錢か六十錢の物を何故あの時買つて遣らなかつたらう、お父樣に叱られるからと餘計な言をつい云つたら、よくよく身にこたへたのだらう、あれ程欲しがつて居たものを直ぐに斷念めて了ッたが、あれもこれも皆いとしい。

今頃は繼々しい女の意味ある眼に睨まれて、情のないお父樣の前で、小さくなつて居はしまいか、考へると私は最早じつとして居られなくなりました、着物も更へず帶も直さず、私は小母さんに一言云ひ殘す暇も待たれず、直ぐ飛び出して電車へと急ぎました、戸山に近い大久保の柳津の近所へ參りましたのは日も最早薄暗りの五時過ぎ頃、夕日の名殘が廣い〳〵戸山の原の雜木林に落ちかゝつて居る時分でした、

見覺えのある豆腐屋が、妙な顏をして、それでも會釋をして通り過ぎてからは、案じた程知つた人にも出會はずに、私は怨ある柳津の裏門の横に出ました、

私は此處に佇立んで、我と我胸の鼓動に驚きました、日野の家をどうして何時飛び出して、いつの間に此處へ來て了つたのか、考へれば自分ながら自分の振舞に驚かされました。

情ない樣な恥かしい樣な思ひが、むら〳〵と胸に湧いて、涙がほろ〳〵と溢れるのです、それにしても千勢はどうして居るだらうと、考へますと、かつと又血が頭に上るやうな心持になつて、恥かしさも見苦しさも此思ひには代へられず、私は忍び〳〵横丁を表門へとたどりました、

千勢が立つて居ります！ あゝ千勢が立つて居ります、空飛んでゆく烏を仰いで、千勢が只一人悄然と立つて居ります、先の通り、あの改良袖のめりんすの羽織を着て、赤い駒下駄を履いて……

私の來たのを知らずに、何をまあ彼樣して居るのでせう、私は震ふ足を踏みしめて、驅け寄りますと、驚いて此方向きましたが、どうしたのでせう、飛び付きもせず縋りもせず、淋しい眼をして凝と私を見詰めて立竦んで了ひました、きつと吃驚し過ぎたのでせう、

『千勢――母さんだよ』

としみ〲頰を押つけていとしさに堪えず抱き上げますと、

『母さん――』

と小さな震ひ聲、戀ひ焦れた此聲を聞くと、私はもう氣が遠くなる程嬉しくつて、はら〱と涙がこぼれました。

『何してゐたの？　千勢』

これには答へず

『ほんとに歸つて來たわねえ母さん、千ちやんは最早十夜寢たの』

としみ〲嬉しさうに笑ひました、

千勢は私の子です、千勢の身體は私の血です、離さうとて離れませうか、私は最早二人別れて生きて居る事は出來ません、私は千勢を擁いて、再び法律のない死の國へと決心いたしました。

（をはり）

外國の觀察者曰く天の男子に與ふる最も大なる愛は蓋し婦人によりて證明せらるものなりされば男子は己れの愛する少女の許にゆき其の心情の切なることを告ぐべし若し其の少女にして承諾と應ふれば直ちにその收入の額幷に如何なる處ろより收入を得るかを打明かして約束を結ぶべし

月の船

葵山

私は窓に身を靠して考えに沈み込んだ。身體中の血汐は冷えて逆行するやう頭は岑々と痛み出して、物の知覺をも解せられぬやうに感じたが、其れも一時、少しは胸も靜になつて、自分が如何なる場所にあるかゞ解つて來た。眼を轉じて窓の外を眺めると、夏の夜の暗碧の空からは美くしい月光は流れて來て、四邊を浄めて照らして居る。遠くの松原はほのかに、近く樹立の建物は墨繪、蟲の音もして道を越えた向ふの砂山の家には未だ灯が點つて居て語らふ人の姿も見える、清しい風が海の方から吹いて來て、立つ波の姿は見えね

ど打寄す響きは自分を慰める様に聴えて來る。
何とはなしに不圖思ひ起した、自分の九歳の折の出來事、男女とも自分に取つては從兄妹、女は母の姉の子、男は母の妹の子、恁る月明の夜を矢張此の鎌倉の別墅に來て居て、海へ小舟を浮べたので艫を操つたのは鄰の漁夫の七蔵爺であつた。從姉は秋草を染めた派手な白地の浴衣、緋色の帶を背負上げに締め、頭髪は、幅廣な白のリボンを蝶と宿らせたマアガレット結び、奇麗な襟足に艶を添へて居た。取つて廿歳であるのに小柄なのを一層に飽迄初々しげな娘裝飾り、誰も三歳は若く見るのを見得にして居た。額の廣い從兄は白飛白の單衣に無雜作な帶のぐる〳〵捲き、髪も短く苅つて、日頃の海の泳ぎに顔は黒く、月も白くは見せなんだ、其れでも刻んだやうな隆い鼻、引締つた口元、毅然とした眼に男性の雄々しい氣象は見えて、女中達ちの龍之助樣は好男子だと云ひ居る事を小供ながらにも知つて居た。胴の間に上敷きを敷いて從姉と自分は座し、從兄は切際板の上に腰を降して居た。從姉は自分を非常に可愛がつて呉て弟も及ばぬ迄に世話し、夜も一つ床の中に眠つたものである。

船の中には灯を點さず、月の光に透して互の姿を見て語り合ふた、上敷きの上には乾菓子、桃蜜、其れに半月形のバナヽ、菓子、小兒の自分が一番能く口を動かす。從姉も從兄も兎に角自分を話對手にして二人で談話するのを避ける態に見えた。岸打つ浪の音にも遠ざかつて大分船が沖に出た頃、從兄はキツト顔を擧げて從姉の方を見たが、其の眼には一種の力が籠つて、顔は輝き渡らんばかり何か云はうとして、躊躇ふ態であつたが、遂に口を切る。

『絹さん。』從姉の名前は大河原絹子と云ふのである。

『はい。』

私への蜜桃を剝く掌を止めて絹子は其方へ向いたが、輪廓の正しい、面長で腮が細く、女性の優婉とか典雅とか云ふよりは寧ろ才氣の迸つて居る容貌には輕薄な媚が浮んだ限り、眞實の情が動いた痕は見えなかつた。眉は奇麗で、小さい口元は可愛く、眼は大きく

て人を魅する力を持つて居た。

『貴女私が此間送つた手紙讀んで下すつて？。』

『はい。讀みました。』従姉の口調はきつぱりして居た。

『御讀みになつた？ 其れぢや何故御返辭を下さらないです。』詰り氣味である。

『御返事を上げやうかしらとも思つたのですが、其れよりか御目に懸つて申上げる方がいゝと思ひましたから……。』

『然う……。』

と従兄は落付いて云つて従姉の次ぎの言葉を只管に待つ。が、従姉は直ぐとは言葉を續かさず事も無げな風情で兩手を上げて沖の風に亂るゝ後れ毛を掻き上げた後、眼を回して月に輝く海の面を眺つたが、恰度自分が材木座の方を見渡して。

『従姉さん、ほら彼方材木座の方に見ゆる三つ目の灯は渡邊の叔父さん許の灯だらう……。』

指差して云つたので、輕く頷き、

『あゝ、然うかも知れないのね、光さん渡邊の叔父さん嗜好き？。』思ひを紛らはさん爲めに云つたのであらう。

『渡邊の叔父さん、あんまり嗜好ぢやないね、腭の髯を長く延ばして置きながら、時折僕が嫌だと云ふのに無理に抱くんだもの、顏に髯が懸つて氣味が悪いつてありやしない。』熟成た口を利くので従姉は思はず頰に笑みを寄せた、自分は猶言葉を續けて。

『其れでも姉さん許へ遊びに來る渡邊の新さんは嗜好きよ。いつでも僕に種々な物品呉るんだもの。然う／＼従姉さんに云ふのを忘れて居たつけ、先刻僕が一人海岸に遊んで居たら新さん通つて、従姉さんに宜ろしく云つて下さいと云つてたよ。』

『新さんと云ふのは、其りや何なの？。』従兄は突如として語を挿んだ。

『渡邊の髯爺さんの息子だね、ねえ従姉さん來年大學を卒業する、テニスの撰手だつて、龍従兄さん知らないの？。』

從兄は河内龍之助と云ふのである。自分の此の言葉に默言つて了つた。初めは大學に這入らうとしたんだが、高等學校の關門で一度失敗すると不充ないと云つて學業を放擲つて朝鮮へ行き、實業に從事し、若い身空でありながら可なりの財産を拵へたが父母の願ひに寄つて新に都で事業を初める可く歸つて來た身の上である。絹子とは三つの年上でありながら落附いた身の態度は卅歳を越えたかとも見えて、意志の强固な、感情の烈しい、執着心の强さうな、用事の外は餘り無駄口を利かない性質であつた。係うと思つた事は何としても貫通さゝねば、自分で自身に謀叛をしたと感じ自信力を薄うしたとも感じ、自分を侮蔑した行爲を爲續けて居るとも感ずるだらうと、此の頃になつて私は思ひ當るのであつた。

『龍さん、あのね……。』　從姉の言葉には不尠周章てる氣味が見えた。

『テニスの撰手なら渡邊新太郎と云ふんだらう。英法の三年生、僕も聞いて居る、秀才だ。』　何かしら從兄は無念さうに云つた。

『其れでね、龍さん……。』

『お待ちなさい。其の渡邊とは朝鮮へも手を出して居る捕鯨會社の社長でしやう？。』

『えゝ。』　絹子は詮事なしに返辭を爲る。

『奈何して其れが此處へ遊びに來るんです。』

『家の御父さんの御友達なんだもの。だが新さんは從姉さんが東京からの御友達なんですね。』

『絹子さんの東京からの友達……。』

龍之助は後を續けやうとしたが、嫉妬よりも寧ろ恐怖心に擊たれたらしく口を閉ぢて了つたが、眼は限りない悲痛の色に燃えて居る。絹子の父は古典に悉しい文學博士で、我が祖父の家の緩やかな家庭に育つた母親が何と云はうとも、うら若い男と自由に交際さすなどの事は許さないのを龍之助は知つて居るのである。絹子は面羞げな色を爲すと思ひの外、格別意にも止めぬ態で、左手の中指に飾した指輪の寶石を月光に翳し、右手で亂れた衿を掻き合した。舷に當つて立つ浪は玉

の碎けて散るやう、沖は白銀を敷き詰めたとも見え、七彩の漕ぐ艪の痕は溶けた琥珀の流れ、自分達は其の中に浮んで居るのである。月光の燦かぬ暗碧の海原の上には絶えず美くしい幻影が彷徨つて居て、時々其處此處に立つ波は白い花とも見えた。

『龍さんも從姉さんも奈何したの？。』

二人とも急に默言つて了つて物寂しく感ぜられたので自分は思はず訊いた。すると從兄は自分に返辭しやうとはせずに從姉の方を向いて。

『絹さん、其の……新さんとは舊く御馴染みなのですか？。』

『え〵、舊いと云ふんでもないんですが……。』

言葉の末は濁る。

『奈何して知合つたのです。矢張此の別墅へ親爺さんが遊びに來るからですか。』

『はい……、い〵え、小學校の同窓會で、あの方も私が卒業した小學校の出身なのですから……貴方何だつて麼那に御聞きなさるんです？。』不愉快さうな色を見せた。

『些と訊ねて見たのさ。絹さん其の人は貴女の胸に描いて居る方ぢやないのですか……。』

折しも大きな波の一狂り、艪の加減でもあつたらう小舟の急に右に傾いたので、絹子は『あ〵れ……。』とばかり聲を立て〵小兒の私に縋り附き、龍從兄さんへの返辭は爲なかつた。龍從兄さんは重ねて聞かうとはせずに凝と物凄い、冷笑ふやうな眼で從姉を睨つて居たが、急に横を向き、海面へとぺつとばかり唾を吐き附けてから。

『絹さん、僕等は血族同士、絹さんとは襁褓の中から知合つて、一族の祝事や不吉な時には父母共に顏を合し、やれ御祭だの、墓參りだのと、兄妹の樣に袖を連ねたんだが、暫時見ない中に絹さんの心は違ふ樣になりましたね。』

『何がです龍さん……。』從姉の口振りは頗る冷やかであつた。

『美くしい婦人は血族の間にも傲る特權があるものと

見える、然うだ、せい〳〵立派な衣裳を着け、紅白粉で化粧して若い男の胸を波立たゝすがいゝ。」静に云つたが従兄の言葉には確に激昂した影が見えた。

「龍さん、貴方そりや何を仰有るの、私に仰有つたの？失禮ぢやありませんか……。」

「失禮？何が失禮なことがあるものか、當り前だ。絹さん、此の間上げた手紙は返却して下さい。」

「返却せと仰有れば返却しも爲ますが、私未だ何とも御返辭をしないぢやありませんか。」

「もう、よろしい、人間には直覺と云ふものがある。貴女は人生の大事を玩弄にして居る。危險な、他を玩弄んで居ると思ふ間に、實は自分が弄ばれて居るんだ。貴女は嬋女でしやう、節操は一つしかない掛變へのないものですよ。」

「貴方の仰有る事は私には解りませんわ。」例の大きな眼を一杯に擴げて従兄を見たが、何かしら危む色は明に見えた。

「解らなけりや解らないでよろしい、御愼みなさい。」

「私龍さんに那麼事云はれる覺えありませんわ。」

「覺えがない、眞伽な事云ふな、僕達ちは従兄妹同士ぢやないですか、貴女の誤ちを凝と見て居る譯には往かない。」

云ふ従兄の眼には涙が見えたが、従姉の眼は少しも潤まずに、寧ろ腹立しい影が見えた。何處か意地惡るらしい傲慢つたとこも見えて自分は今迄に這麼従姉の態度を見た事がない。

「私誤ちがあつても父も母もありますから龍さんに云つて貰はなくつてもいゝんです。貴方は私が貴方の御嫁にならないからつて其れで酷めるんでしやう。」

「僕の御嫁にならないからつて其れで酷める？絹さん、貴女は情け無い事を云ふね。従兄を那麼卑劣な人間にして貴女は嬉れしいんですが、龍之助はいくら心の零落したものだつて未だ其れ程にもなりません。絹さん能くお聞きなさい。私は成程貴女に戀して居る。僕が貴方に戀して居るのは何も今に初まつた譯ぢやない、朝鮮へ行かない以前、學校を失敗つた時からも戀

して居る。僕が朝鮮で勞働いて居る時でも少しだつて貴女を忘れた事はない。初めは單に妹を持たない僕は血族の愛だと思つた。其れが然うぢやないと知つたのは二年前、朝鮮で東京から來た友人に、貴女が若い男と連立つて日比谷の公園を歩いて居たと聞かされて烈しい嫉妬心に惱まされ、初めて血族の愛でなくて、戀情であると知つたのです。

絹さん、僕は自分の戀情を戀の對手に打明ける事が出來ない程の弱いものぢやないですから、少しも隱さずに明白に云ふんです。些しだつて僞りは無いんですから能く聽いて下さい、其れと知つてから勿體ない事ですが、父や母にも増して貴女の事を餘計に考えたのです、雨に附け、風につけ、私が朝鮮から貴女に盡した眞心は貴女も認めて呉たでしやう。最初未だ他所の番頭をして居る頃の貧しい中からも貴女への贈物は決して缺した事は無かつたのです。其の代りに貴女の優しい禮手紙を貰ひ、其れを自分の活動の生命として居たんですから決して恩がましくは思つて居ないんです……。』

一語は一語より切實に肺腑を吐露して來るので從姉は俯目になつた限り、何とも云はなかつた、私は小兒の他愛ない心に從兄の言葉を聞いて居る限りで、別に心を動かさなかつた。從兄は猶も言葉を繼いで。

『絹さん、僕の心は解つたでしやう、僕は愛して居つても……いやもう云ふまい。結局結婚を望んだんだから、己が心の勞力に對して報酬を望む賤しい心と見られても爲方が無いんだ。然し神樣は互に愛せよと仰有られても愛すなとは仰有らないんだから、僕が絹さんを愛したと云つて何も罪にはなるまい。戀愛が罪でない限り、絹さんに結婚を申込んだと云つて何も賤しい仕業とも云はれるにも當るまい。然し愛の無い人を、強いて己れの所有物に爲樣と懸るのは酷な所業だとは知つて居るです、那麽非道な事を行ふ龍之助ぢやないですから御安心なさい。

絹さん私は釣られたなどゝは少しも思ひません、貴女の從兄に對する美くしい愛情を、私一個の心で戀情

と誤解したんですから、罪は私にあるんです。云つて置きたいのは血族同士で、私の身體に流れて居る同じ血は、貴女の身體にも流れて居るんですから、私の苦痛の影響を、貴女も幾分かは受けなきやならないでしやう。今迄貴女の身持に就いて私は何れ丈け苦しんだかは御存知なからう、劇場の中で若い男と調戯けて居たの、櫻時に荒川堤を大學生と手を曳合つて居たのと、一つは貴女の美しい姿が云はせるのでしやうが、愛する者は嫉妬の血を盛つた器ですから、聞く度に戰慄ひもしたし、泣きもしたです、此地へ歸つてからも耳にしたですが、何が何であらうとも、總て私の強い愛情の炎で淨めて了ふと決心したつたのですが……あゝ其れも駄目……おい七藏爺、もう歸りたいから船を濱の方へ漕ぎな。」

此の月の良夜船を沖へ出した時の相談は、小坪の濱迄も、ならうならば逗子の灯が見えて、若い人達の中に名高い浪切り不動堂の側の松影を見やうとの事であつたのに、何事ぞ漸つと材木座の外れ、飯島の漁師の家が月影の下に黑く鮮かに見られた限りで船を歸へるうとは。遙に江の島の灯のみは見えた。

「龍從兄さん、何だつて歸るの。逗子迄行かないの?。」

「あゝ、もう遲いから……。」

云つて從兄は俯目になり兩手で頭をしつかと抱えて居たが、其の眼からは奈何やら涙が溢れて居たらしい。

從姉は少しも心を動かしたさまはなく、眼を釣り上げ、唇を堅く結び、無言で從兄の態度を瞶つて居たが、七藏爺が艫先をくるりと變へた時暫く口を開いて、

「龍さん、何ですつて、貴方餘りですね……。」

「何が餘まりですか。」從兄は靜に顏を擧げて云ふ。

「私が若い男と連立つて歩いたの、大學生と調戯けたのと、貴方御覽になつたのですか、何が證據があつて仰有るのです、あんまりぢやありませんか……。」如何にも腹立ちさう聲は顫へて居る。

「貴女を今夜此の美くしい月の晩、靜な海の上で怒らさうと思つて、先刻あの海岸を船出はせなかつたのです、快い返辭、行末懸けての約束の言葉を聞かうと思

つて、聰と耳の遠い船頭迄撰んだのでしたが、貴女の心の底が了然了解せられて、つい恨みたくもなつて愚痴な事も云ひました。腹が立つたら許宥して下さい。」

「いゝえ、許宥しません。」

「何？許宥さない。」従兄の聲も激して來た。

「はい。斷じて許宥す事は出來ません。纖弱い女を這麽海上へ連出して强迫なさるんです。卑怯です、男の恥づ可き所業ぢやありませんか。」

「絹さん、いくら思ひ上つた心になつたつて少しは氣を附けて言語を仰有い。貴女と僕は何です？。」

「何であらうが、强迫なさつたのは事實ですから、私は一切の事を父母に申告げます。」

「其れは貴女の御勝手に、私の母と貴方の母とは姉妹ですから、總てをいゝ樣に了解して呉ましやう。」

「母と母とは姉妹にしろ、私と貴方は別物です。」

「何ですつて……。」

憤りに堪えない眼で、従兄は従姉の顏を睨み附けたが、漸く思ひ直したらしく。

「絹さん、兄弟の中で女一人で可愛がられて育つたのは兎角勝手な事を云ひたがるものです、少しは世間を知つて、自分の品性を低うする樣な言葉は御愼みなさい。」男の威勢を示して叱した。

「龍従兄さんも、従姉さんも喧嘩するのはいや、家へ歸つたら云ひ告けますよ。」氣の弱い自分は漸くの事之丈け云ふのであつたが、二人は聞かばこそ、最早弓は絞られて矢は放たれねば濟まない。

「貴女こそ御愼みなさい。」従姉は直ぐ従兄にと口を廻す。

「鐘は叩いて見ねば、眞個の價値は知れるものぢやないと云ふ。絹さんの胸に這麽恐ろしい毒口が潛んで居やうとは夢にも知らなかつた。美くしい花には刺や毒があるとは聞いては居たが……。」

「何とでも仰有い、貴方が云ふ樣な事なんか何とも思つてや爲ない。」

「何ですて、もう一遍仰有い、僕はもう堪忍がならん。」

仕切りの板に腰下して居た身を急に突立たせ、身體

をよる〳〵に顫はして叫んだ。
『私知りませんわ……。』とばかり、從姉は少しく身を引き、恐怖を抱いた眼の色で從兄の態を眺め、半ば嬌羞を帶びた態度をして見せ、今となつて男の心を和らげやうと謀らんだ。恐らく胸は浪立つて居たらう。
今一言で男の面目を立てやうと懸つた從兄は流石に手を下しかね凝と無念さうな眼で見下して居たが、
『絹さん、いくら僕は戀情に盲目になつて居ても、總ての智力や理性を放擲らうとはしませんから、忠告と強迫、諫言と侮辱との境界線は心得て居るです。從妹だと思ひ、婦人だと思つて許宥して置けば……。』
『私 龍さんに、婦人だと思はれるのは迷惑です。從兄だとも思つて居りません。』那樣に恐れながら我儘な氣性は、つい口が滑つた。悪い事だと小兒心にも思つたが、
『何を……。』
一言云つて龍之助は一歩前に出たが、其の意氣込みの凄まじいのに驚いたらしく、絹子は私の側を離れて突と立ち上つたが、早や一突き突かれたらしく蹣々として舷に手を觸れたと見ると、身體は船の外に、月に輝く海は黒い口を開いて從姉の身體を呑んで了つた。
『アヽア、從姉さんが……。』
自分は思はず突立ち上つて叫んだが船の動搖れ回しを受けて、再び下にぺつたり尻持ち、船頭の七藏は漸く氣附いたらしく艪を漕ぐ手を止めて愕然して海の面を覗き込んだが、ぶく〳〵と泡は立ち上るのみで從姉の姿は見えず、沈んだ後の浪がきら〳〵と輝くのみ。
從兄は宛ら刻んだ石像のやう物凄い面で、泡の立つ邊りを凝視めたが、咄嗟帶を解き、衣裳をかなぐり捨てて海へ飛び込まうと準備した。
『御待ちなせえ、俺が……。』
と、云つて七藏爺は再び海を覗き込んだが、浪の狂りで最早泡の影は見えず、と躊躇ふ恐ろしの一瞬時、船から五間程離れた處へ黒い姿が浮び上り、自分の胸を挽ぎ取つて了ひさうに感ぜられる苦しい叫び聲が聞かれた。從兄の身體は直ぐに船から離れて、自分は飛

沫を頭から受けたが、七歳は艪を一捻り、船は其方へと寄るのである。白い腕が黒い海の面に動くのが見えたが、其の邊り大輪に波紋を描かれて泡は一層烈しく立ち、浪は騒いで、二人の姿は又も見えなくなつて了つた。恐怖は幼心の骨に迄も喰ひ込んで戰慄せしめ、涙も出ずに、

『龍從兄さん……絹從姉さん?!……。』

思はずも叫んだ聲は、海の只中に直ぐ搔き消えて了つて返辭のあらう樣は無い。月の影は白く、星の色は蒼く海の上に落ちて居る。浪の輝きは蛇の鱗甲と見え、黒い海面は魔の住所と見えた、何として神の御名を呼ばずに居られやう。と、船の艫先の凝結つた樣な海面が碎け、月の影は漂つて、烈しく水を打つ物音、從兄は小脇にしかと黒い物を抱えて居る。七歳爺は艪を放して身體を曲めたが、二人は無事船の上に、此の世の空氣を思ふ限り呼吸ひ得た。恐らく二人の胸には危難から逃れ得た樂しい感念より外何も無かつたに違ひない。

絹子は寢かされて靜に胴の間に置かれたが其の大きい瞳を時々洞然開けて從兄を恨めしさうに眺めるきり、一言も口を利かない。隨分水を呑んだものらしく、時々烈しい咳をして水を吐き出す。髪は亂れ、衣物はしほたれて見るも憐な態で疲勞し切つて居た。軈て船は岸に到着いて、從兄は從姉を助けて上陸しやうとしたが、烈しく手を振つて拒み、幼い自分と、七歳爺の肩に縋つて船を離れ濱の砂路を危い足取りで歩み出して初めて頰に男に負けた口惜しさの涙を流したのであつた。

あゝ恐ろしい其の夜の人生の演劇から、早や十五年の星霜を經たが、登場役者の順番は自分にと廻つて來た。年月は總てのものを滅亡し、又生かし、調和もするものであると云ふ事がつく〲と感じられる。彼の夜船の中での從兄の苦痛は、眼で見て解らなかつたのが、次第に解されて來た。異性を慕ひ、愛すると云ふ事は罪なのであらうか、罪でなくば何故神は恁る苦痛を供はしめたのであらう。男と女と別箇に地上の花と

拵へ、世界に一つしか無い容貌を人間一人に與へた以上、愛情の影をも一つと定めて、此方で慕へば直ちに彼方で感應して、直ぐに手を取り合つて、麗はしい愛の花園に降つて行かれる樣に序の力を其處迄何故延ばさなかつたのであらう。之れは確に創造者の手落ちである。

其の後從姉は思ふ通りに其の慕つてた人と結婚したが何故か一人子を產みながら離緣となり、再び他に緣附いたものゝ其處でも都合能く行かず、三度目の廿七歲で嫁入つた先方で二人の母親となつたが不幸は何處迄も附纏はつて良人に死に別れ、今は其の子供を傳れて父母の家に寄食人となつて居る。從兄は心の傷の爲であつたらう、卅二歲迄は何と云はれても結婚せずに暮らして居たが、親族や友人の執怯く勸めるのに拒み切れず遂に親戚内から夫人を迎へたが、夫婦中は至つて睦ましく、間に出來た三人の子供は家庭を一層光りあるものとして、平和な生涯に入つて居るんだ。恐らく其の心の中には自己の方が人世の競爭での勝者であつたのを密に嬉んで居るに違ひなからう。實際恁る場合、女よりも男の方が篤實で、正しい考えを持つて居るものである。其後二人は顏を合した事がないのも事實だ。

（完）

田中鐐子女史

二十二年の長日月逆境に在りし良人を扶けて一家の整理と女子の教育とをつとめたる女子教育家田中鐐子女史（四十二）の事を記さんに女史は舊旗本池田松男氏の長女にて舊藩藩士族田中信良氏に嫁し二人の間に長女いさ子、長男繁、次男信雄をまうけいさ子は嫁して河崎步兵大尉の夫人たり繁は第四中學校に學び信雄は幼年學校豫科第三年生なるが良人信良氏は明治六年頃陸軍會計監督を勤め彼の有名なる山城屋和助事件に嫌疑を被りて讒憤を表すると四年竟に裁判の結果は氏のみ無罪となりて身の潔白は立ちしも其後感ずる所ありて退職歸鄉し越男其他の忠告により再び出京して内務省へ奉職一年にして眼病を發し爲めに退職の止むなきに至りしより女史は幼少の頃より習ひ覺えし茶の湯生花、詩歌書畫の技を復習し又一方には英國宣教師ヷアル夫人に就きてミシン裁縫より編物全般の事どもを學び明治十七年中自宅教授を開始して家計を立て良人をして心置きなく治療せしめ信良氏の眼病は九年の長きに亘りて漸く治療せしも爾來健康舊に復せず加之家運を挽回せんとの焦慮より手慣れぬ新聞事業や煙草製造に從事せしめ失敗又失敗愈々逆境に陷りしも女史は不撓不屈良人を勵まして一家の事は萬端身一つにて整理し然かる間にも子女の教育は怠らず信良氏は去三十五年中六十六歲を一期として不歸の客となりしも女史は私塾及び女子文藝學舍鐘紡工女學校等の教鞭を把りて益々良妻賢母の養成に努め二十餘年の久しき今に其熱心衰へず其薰陶を受けたる人々の中には秋山定輔氏夫人、松井茂氏母堂姉妹、船越男爵令孃、桂伯爵令孃等ありと。

十二月號記事豫告（十二月五日發行）

每月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內（定刊數……十二冊
　（增刊四回…一、四、七、十月價格同一

郵稅　一冊　二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十圓	割引 四十圓
一等	五十八錢	十七圓	割引 三十三圓
二等	五十錢	十四圓五十錢	割引 二十八圓
三等	四十二錢	十二圓	割引 二十三圓

▲等級の位置ノ切日等御照會次第御報可致候

註文規署

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅九年十一月五日發行　第六卷第拾五號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番
　　　千十八番
本局　二千六百二十番
　　　三千二百二十九番

女（後付の一）

松みどり香油



松みどり香油は原料を吟味し製法を注意いたし候者にて優雅高尚なる香氣を長く有ち頭髮の光澤を增す特効ありて世に有り觸れたる香油とは大に趣きを異にいたし居候へば貴夫人令孃方には缺くべからざる逸品に御座候御試用の上御高評願上候

定價　○大壜　四十五錢　○中壜　二十錢　○小壜　十二錢　○一合　三十五錢

製造本舗　東京上野廣小路　山崎屋油店　電話下谷一七三五番

◉販賣所は各化粧品店にあり

東京書籍商組合

圖書總目錄

本書は東京書籍組合同業者の出版したる圖書の本年九月に至るまでの間の刊行したるものは新舊を問はず細大漏さず其書名、著者、定價、發行所等を左の方法に依り分類し幾十萬の發行圖書も掌を反す間に已の欲するものを索出し得る樣編纂したるものなれば書籍販賣を業とせらるゝ諸君は勿論苟も讀書研學に從ふ士は必ず一本を備ふるの要あり

一書名いろは分
一發行所別
一圖書種類分

發賣元　東京本町　博文館

脊皮クロース製菊判美裝
紙數約壹千九百餘頁
正價金參圓五拾錢
小包料參拾錢

豫約

十一月二十日迄前金拂込者に限り
特價金貳圓五拾錢
外に送料を要す

DIARY 1907

英學新報社編纂

歳暮、クリスマス、新年等の贈遺に適す

明治四十年 英文當用日記

四六判舶來紙 特製總布表裝
體裁頗優美
定價金五拾錢
郵送料八錢

本社英文懷中日記を發刊するや茲に年あり、昨冬世は本社を促して更に當用日記を發刊せしめたり、而して其如何に歡迎せられたるかは、旬日を出でずして初版數千部を賣り盡したるを以て知るべし、今や愛用諸君子の恩顧に酬ひんが爲め、內容體裁大に改良を加へ面目を一新せり、而して卷頭卷末の附錄に至りては日用必須の事項を網羅し、他の日記に求むべからさる者少からず、恰も日記にして百科全書を兼たるの觀ありと云ふも可なり、小形の懷中日記と自ら其用を異にせり、紙質裝釘共に遺憾なからんとす、乞ふ倍舊の愛顧を垂れ給はんことを。

明治四十年 英文懷中日記

細小形舶來紙 特製總布表裝
優美携帶至便
定價金三拾錢
郵送料四錢

數年前本社率先して英文日記を發刊するや、或は最美の日記と、或は完全に近しと賞賛せられたり。爾來年每に改良を加へ、愛用諸君子の恩顧に酬ひしは今更贅言を俟たざる所なり、今や百尺竿頭更に一步を進めて、挿箝せる偉人の肖像其數を倍加し、金言玉句最精撰せられ、卷末附する所の實用和英辭彙亦大に增補せられたり、用紙印刷裝釘の美は他に其類を求むべからず、願くは倍舊の愛顧を賜はらんことを。

賣捌所は全國到る所の書林雜誌店に有り

發兌元 東京本町 博文館 東京神田 東京堂

水彩 習画帖

描法 自在

三宅克己 丸山晚霞 大下藤次郎 執筆

一輯二輯三輯四輯マデ既成發賣

原畫六枚線畫六枚石版極彩色精巧無比

習畫の良師出でたり

本文數十頁 釉珍羅紗紙 表裝頗美本

一冊卅五錢郵税二錢 六冊御引郵税共貳圓

中村不折新著 既刊發賣

画道一斑

不折氏が如何に畫道に堪能にして特技の筆を有するかは世人の既に知らる丶所なり、此書は實に先生が多年の經驗より得し繪畫の定義、實地の解說及先生が蘊蓄せる所の畫道の學理、研究の要點とを述べられたるを以て、畫道に志す人は勿論、苟も繪畫の何たるを知らんと欲せば須らく本書一本を繙くべし、『繪畫の、性質、學理と流派、畫道の眞意、描法の秘訣に至るまで悉く究知し得べければなり

洋裝總クロース本文三百五十頁寫眞版數十葉入

定價八十五錢 郵税八錢

發賣元 東京本町 博文館

發行元 東京小石川 日本葉書會

ハガキ文學

一册 十錢 八册七十五錢

入會 規定郵券二錢

投書歡迎

第參卷第拾參號

十一月一日發行

- 秋の思 相馬御風
- 村角力 橋元春郊
- 木犀の家 河村湘山
- 女子と俳句 山本杉外
- 名書苦心談 和田垣謙三
- じやがたら文 岡部精一
- 趣味敎育 三輪田元道
- 團欒 フヰリップ(寫眞版)
- 閨房 ゲツドール(同)
- 行く秋(木版彩色) 佐藤生巢
- 殉敎者 龍丘生
- 秋風吹不盡錄 海若
- 愛の花 草の人
- 藝術と國民性 大町桂月
- 惡情集 橫山健堂
- 草津溫泉誌の卷首 久保天隨
- 亂行の爵 セガンチニー
- 悲しめる心 ダンカン
- 夜(石版彩色) 佐藤生巢
- 木版挿繪數葉

懸賞 川柳 俳句 和歌 小說 普通文 お伽 新體詩

東京小石川 日本葉書會 (振替貯金貳八參八番)

賣捌 東京堂 東海堂 全國書林

女(後付の三)

女學世界 第六巻第十四號 定期増刊

女智恵袋

燈下親しむべきの好季節を以て發行せる本誌の定期増刊は、題して『女智恵袋』といふ、是れ必ずしも現今家庭に必要なる婦人の智料を悉く此一篇に嚢括したりといふにあらずされど奇抜なる觀察と趣味ある文字によつて、家庭生活上に多くの學問と便益とを供給すべく十二分の用意を盡したるものと信ず目次下の如し。

既成發行

全一册洋裝大判
正價金貳拾錢
郵税貳錢

目次概要

▲貧世帯の修養
▲逆境の快樂
▲着道樂の祟り
▲食道樂の祟り
▲和漢名媛佳話
▲熟語相訓集
▲西洋金言心解
▲美人の復讐
▲醜婦の福音
▲運命早わかり
▲家の品格を保つ法
▲かつさい袋

▲人物觀相法
▲心理晴雨計
▲急救藥函
▲煩悶解決法
▲名將年齡しらべ
▲模範的世帯女房
▲臺所智恵袋
▲結婚の條件開示
▲塵塚物かたり
▲活花秘傳
▲秋の名所案内
▲吾家の小使帳

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

(後付の四)

文藝倶樂部 第貳拾卷第拾四號 定期增刊

既成發行

全一冊 正價貳拾五錢 郵稅貳錢五厘



秋の夜の寂しさを慰むるもの、肩の張らぬ面白き書を讀むに如かじとて、こゝに此の一卷を公けにす。今の代に名高き講談師と落語家とを選び、おのゝゝ得意の辯を揮ひしを其の儘速記す。しかも其の話題を古今の美人に採り、諸名家か競ひに競ひて其の特技を發揮す。世の才子佳人は必ず一本を購ひ求むべき稀代の珍書なり。左に目次の概畧を記し置くべければ、賣切れざる内愛讀の榮を賜へとこそ祈る！

目次概要

東京 博文館 本町

（後付の五）

醫學博士井上通泰先生監修

家庭衛生叢書

全部十二冊洋裝菊判美本○正價一冊貳拾錢郵稅六錢宛

第壹編

口繪　北里、長與、金杉、土肥の四博士、(肖像)

▲傳染病の話……北里博士

▲胃の攝生法……長與博士

▲眼科衛生談(第一)井上博士

▲血族結婚と聾啞との關係…金杉博士

▲淋疾と家庭……土肥博士

　患者を生じたる時の注意(第一次)

雜錄

第貳編

口繪　宮本學士、木下博士(肖像)

▲膓窒扶斯に就て…宮本學士

▲婦人の衛生一般…木下博士

▲婦人及小兒の眼の衛生……桐淵博士

▲眼科衛生談……井上博士

雜錄……七項

第參編

口繪　三輪、井上、緒方、富士川四博士(肖像)

▲室内空氣に就て…緒方博士

▲眼科衛生談……井上博士

▲小兒科一般……三輪博士

▲小兒の衛生に就て……弘田博士

▲遺尿症に就て……朝倉博士

雜錄……六項

第四編

口繪　朝倉博士、井上博士(肖像)

▲膓胃の話…井上博士

▲耳の攝生…岡田博士

▲乳兒の衛生に就て…緒方博士

▲狐憑とヒステリーと の關係…吳博士

▲眼鏡の話…井上博士

雜錄……六項

第五編

口繪　三輪博士、岡村博士(肖像)

▲創傷の話…三輪博士

▲神經の攝生に就て…吳博士

▲ヂフテリアの話…宮本學士

▲皮膚の衛生に就て…岡村博士

雜錄＝肺結核豫防法……二件

第六編

口繪　大澤博士、三島博士(肖像)

▲ペストの話宮本學士

▲身心の養生大澤博士

▲家庭に於て注意すべき二三の學校衛生…三島博士

▲産時の創傷傳染…木下博士

雜錄＝肺結核雜話……十五件

第七編

口繪　遠山博士、筒井學士(肖像)

▲黴毒に關する家庭の注意…筒井學士

▲家庭と黴菌…遠山博士

▲姙娠中の攝生…緒方博士

▲便秘の話…井上博士

雜錄＝花柳病の雜話…十八件

第八編

口繪　木村博士、緒方博士(肖像)

▲婦人姙孕力の話…伊庭博士

▲肝臓の話……木村博士

▲分娩時の攝生……緒方博士

▲色盲の話……井上博士

▲小兒の身體上の監視井に懲

▲胃の話……瀨川博士

雜錄＝(人工滋養品の話)

第九編

口繪　瀨川博士、伊庭博士(肖像)

▲肺癆の話……井上博士

▲婦人姙孕力の話(第二)完…伊庭學士

▲小兒の虫及疳の話……瀨川博士

▲産後の攝生……緒方博士

雜錄……五項

第十編

口繪　林博士(肖像)

▲飲酒血族の退化…林博士

▲不姙症の話……伊庭博士

▲生殖の話……大澤博士

▲消毒法の大意……遠山博士

雜錄……三項

東京　博文館　本町

(後付の六)

女（後付の七）

學習院女子部長下田歌子女史編

家庭文庫

▲全部拾貳冊 大判和裝美本 紙數壹冊貳百五拾頁以上

正價 ●壹冊金參拾五錢 ●六冊壹圓九拾錢 ●全部拾貳冊參圓七拾錢 ▲郵稅壹冊八錢宛

- ●第一編 女子書簡文
- ●第二編 女子普通禮式
- ●第三編 詠歌の栞
- ●第四編 料理手引草
- ●第五編 婦女家庭訓
- ●第六編 母親の心得
- ●第七編 家事要訣
- ●第八編 女子手藝要訣
- ●第九編 女子普通文典
- ●第十編 女子作文の栞
- ●第十一編 女子遊戲の栞
- ●第十二編 奉四所見 家庭敎育

山田興松君著
實用造花術指南
（大判一〇〇頁）正價貳拾五錢 郵稅四錢

吉田調子君著
裁縫と編物
（大判二六二頁）正價貳拾五錢 郵稅六錢

曾我部純一君著
最新家計簿記
（大判一三四頁）正價貳拾五錢 郵稅六錢

博文館編輯局編纂
衣服と流行
（大判二三六頁）正價貳拾五錢 郵稅六錢

濱本義顯君著 婦女敎育
明治姬鏡
（大判木版一六五頁）正價六拾錢 郵稅八錢

學習院女子部長下田歌子女史著全二冊
家政學
（大判四三〇頁）正價一冊參拾錢 郵稅一冊六錢

岸上操君著
家政案内
（大判二五六頁）正價貳拾五錢 郵稅六錢

近藤正一君 新撰
家事問答
（小判二六六頁）正價貳拾錢 郵稅四錢

飯田呉服店裁縫部小岩井主任 窪田副主任合著
實用裁縫全書
（大判二六六頁）正價五拾錢 郵稅八錢

刺繡術專門 嶽村大次郎君著
實用刺繡學
（大判一二四頁）正價貳拾五錢 郵稅四錢

學習院女子部長下田歌子女史編

庭訓 少女文庫

▲全部六冊 大判和裝美本 紙數壹冊貳百五拾頁以上

正價 ●壹冊金參拾五錢 ●參冊壹圓 ●全部六冊壹圓九拾錢 ▲郵稅壹冊六錢宛

- ●第一編 お伽噺敎草……山中古洞君畫
- ●第二編 庭訓お伽噺……水野年方君畫
- ●第三編 內國少女鑑……山中古洞君畫
- ●第四編 外國少女鑑……鈴木華邨君畫
- ●第五編 家庭の心得……梶田半古君畫
- ●第六編 學校の心得……島崎柳塢君畫

女（綴付の八）

販賣用電話 本局二千六百廿番

東京博文館

振替貯金口座 第二百四十番

女學世界
（明治卅九年十一月五日發行 每月二回五日發行）第六卷第拾五號（明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可）

（定價金弐拾錢）